埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第293集

熊　谷　市

北 島 遺 跡 Ⅸ

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告
－Ⅰ－2－
<第2分冊>

2004

埼　　　　　玉　　　　　県
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

〈第１分冊〉
口絵
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要……………………………1
　1．発掘調査に至る経過……………………1
　2．発掘調査・報告書作成の経過…………2
　3．発掘調査、整理・報告書刊行の組織…4
Ⅱ　遺跡の立地と環境…………………………5
Ⅲ　遺跡の概要…………………………………10
Ⅳ　遺構と遺物…………………………………11
（1）古代…………………………………………11
　8．道路跡………………………………………12
　9．河川跡………………………………………19
　10．集石遺構……………………………………32
　11．土器集中出土地点…………………………37
　12．井戸枠 ……………………………………123
　13．グリッド・表採 …………………………163
　　i．土師器・須恵器 ………………………164
　　ii．灰釉陶器 ………………………………205
　　iii．緑釉陶器 ………………………………218
　　iv．土製品 …………………………………235
　　v．石製品 …………………………………260
　　vi．金属製品 ………………………………266
〈第２分冊〉
　14．墨書土器 …………………………………273
　15．木簡 ………………………………………356
　16．木製品 ……………………………………360
（2）中世 ………………………………………365
　1．遺構 ………………………………………366
　　i．掘立柱建物跡 …………………………366
　　ii．井戸跡 …………………………………367
　　iii．溝跡 ……………………………………367
　　iv　山吹双鳥鏡出土土壙墓 ………………367
　2．遺物 ………………………………………370
　　i．中世陶器 ………………………………370
　　ii．青磁・白磁 ……………………………371
　　iii．かわらけ ………………………………379
　　iv．硯 ………………………………………379
　　v．獣脚 ……………………………………381
　　vi．板碑 ……………………………………381
　　vii．木製品 …………………………………385
（3）近世 ………………………………………393
　1．遺構 ………………………………………394
　2．遺物 ………………………………………399
　　i．近世陶磁器 ……………………………399
　　ii．土管 ……………………………………401
　　iii．瓦 ………………………………………401
　　iv．古銭 ……………………………………401
　　v．木製品 …………………………………403
　　vi．木札 ……………………………………409
（4）自然遺物 …………………………………415
Ⅴ　結語 …………………………………………427
1．北島遺跡の変遷と周辺集落の動態 ……427
2．井戸構造の変遷と構築について ………440
3．上川上村水路構造物遺構について ……448

写真図版

挿図目次

第190図　墨書文字の種類……274
第191図　墨書の位置と方向……274
第192図　「網」の記載部位……275
第193図　「網」の底部外面記載方法……275
第194図　「網」の変遷……276
第195図　遺構出土の「網」の分布……278
第196図　グリッド出土の「網」の分布……279
第197図　「土万」の記載部位……281
第198図　「土万」の底部外面記載方法……281
第199図　「土万」の変遷……282
第200図　「土万」の分布……283
第201図　「第成」の記載部位……285
第202図　「第成」の底部外面記載方法……285
第203図　「第成」の変遷……286
第204図　「第成」の分布……287
第205図　「中」の記載部位……288
第206図　「中」の底部外面記載方法……288
第207図　「中」の変遷……289
第208図　「中」の分布……290
第209図　「丸人」の変遷……291
第210図　「丸人」の分布……292
第211図　「我」の変遷……293
第212図　「我」の分布……293
第213図　「益」の変遷……294
第214図　「益」の分布……294
第215図　古代幡羅郡の郡郷……295
第216図　「西」の変遷……296
第217図　「西」の分布……296
第218図　「井」の変遷……297
第219図　「少君」の変遷……298
第220図　「少君」の分布……299
第221図　「下」の変遷……299
第222図　「家」の変遷……300
第223図　「家」の分布……300
第224図　「主」の変遷……301
第225図　「主」の分布……301
第226図　「金」の変遷……302
第227図　「金」の分布……302
第228図　「十」の変遷……303
第229図　「十」の分布……303
第230図　「日上」の変遷……304
第231図　「千万」の変遷……304
第232図　「千万」の分布……304
第233図　「文」の変遷……305
第234図　「文」の分布……305
第235図　「太」の変遷……306
第236図　「太」の分布……306
第237図　「兵」の変遷……307
第238図　「龍」の変遷……307
第239図　「龍」の分布……307
第240図　武蔵国内の郡別墨書土器出土遺跡……319
第241図　武蔵国内の郡別墨書土器の出土点数…319
第242図　墨書文字の変遷……319
第243図　墨書の記載部位と時期の関係……320
第244図　全墨書土器の記載部位……320
第245図　北島遺跡出土墨書土器（１）……321
第246図　北島遺跡出土墨書土器（２）……322
第247図　北島遺跡出土墨書土器（３）……323
第248図　北島遺跡出土墨書土器（４）……324
第249図　北島遺跡出土墨書土器（５）……325
第250図　北島遺跡出土墨書土器（６）……326
第251図　北島遺跡出土墨書土器（７）……327
第252図　北島遺跡出土墨書土器（８）……328
第253図　北島遺跡出土墨書土器（９）……329
第254図　北島遺跡出土墨書土器（10）……330
第255図　北島遺跡出土墨書土器（11）……331
第256図　北島遺跡出土墨書土器（12）……332
第257図　北島遺跡出土墨書土器（13）……333
第258図　北島遺跡出土墨書土器（14）……334
第259図　北島遺跡出土墨書土器（15）……335

第260図　北島遺跡出土墨書土器（16）…………336
第261図　北島遺跡出土墨書土器（17）…………337
第262図　北島遺跡出土墨書土器（18）…………338
第263図　北島遺跡出土墨書土器（19）…………339
第264図　北島遺跡出土墨書土器（20）…………340
第265図　北島遺跡出土墨書土器（21）…………341
第266図　北島遺跡出土墨書土器（22）…………342
第267図　第42号井戸出土木簡……………………357
第268図　木簡記載文字拡大（１）………………358
第269図　木簡記載文字拡大（２）………………359
第270図　古代の木製品（１）……………………361
第271図　古代の木製品（２）……………………362
第272図　木製品の各部名称・計測位置…………363
第273図　中世の遺構全体図………………………365
第274図　北島遺跡全体図と井戸跡………………366
第275図　山吹双鳥鏡出土土壙墓…………………368
第276図　中世遺物の等密分布……………………372
第277図　中世の出土遺物（１）中世陶器（１）373
第278図　中世の出土遺物（２）中世陶器（２）374
第279図　中世の出土遺物（３）中世陶器（３）375
第280図　中世の出土遺物（４）中世陶器（４）376
第281図　中世の出土遺物（５）中世陶器（５）377
第282図　中世の出土遺物（６）中世陶器（６）378
第283図　中世の出土遺物（７）青磁・白磁……379
第284図　中世の出土遺物（８）かわらけ皿……380
第285図　中世の出土遺物（９）板碑……………381
第286図　木製品の各部名称・計測位置…………385
第287図　中世の木製品（１）……………………386
第288図　中世の木製品（２）……………………387
第289図　中世の木製品（３）……………………388
第290図　中世の木製品（４）……………………389
第291図　中世の木製品（５）……………………390
第292図　近世遺構全体図…………………………393
第293図　迅速図と１／10000都市計画図と
　　　　　北島遺跡の調査区………………………394
第294図　圦樋（１）………………………………396
第295図　圦樋（２）………………………………397
第296図　圦樋（３）………………………………398
第297図　圦樋（４）………………………………399
第298図　近世陶磁器（１）………………………400
第299図　近世陶磁器（２）………………………401
第300図　土管・瓦…………………………………402
第301図　古銭………………………………………403
第302図　近世の木製品（１）……………………405
第303図　近世の木製品（２）……………………406
第304図　近世の木製品（３）……………………407
第305図　木製品の各部名称・計測位置…………407
第306図　護摩札（１）……………………………409
第307図　護摩札（２）……………………………410
第308図　第85号井戸跡出土鹿角…………………416
第309図　獣骨の種類別割合と出土遺構別資料数416
第310図　獣骨分布図（１）………………………417
第311図　獣骨分布図（２）………………………418
第312図　獣骨分布図（３）………………………419
第313図　第239号溝獣骨出土状態 ………………420
第314図　北島遺跡の竪穴住居跡数の変化………427
第315図　第Ⅰ期の竪穴住居跡の分布……………429
第316図　第Ⅱ期の竪穴住居跡の分布……………430
第317図　第Ⅲ期の竪穴住居跡の分布……………434
第318図　北島遺跡出土の陶硯……………………435
第319図　人名墨書土器のグループ………………435
第320図　第Ⅳ期の竪穴住居跡の分布……………438
第321図　第Ⅴ期の竪穴住居跡の分布……………439
第322図　埼玉県内の主な井戸枠の出土した遺跡441
第323図　埼玉県内の井戸構造の変遷模式図……442
第324図　立地と水溜の規模………………………443
第325図　立地と開口部の規模……………………443
第326図　北島遺跡の井戸枠に用いられた転用材445
第327図　木器分析試料（１）……………………461
第328図　木器分析試料（２）……………………462
第329図　木器分析試料（３）……………………463

図版目次

図版１　道路跡・河川跡
図版２　河川跡・集石遺構
図版３　集石遺構・土器集中出土地点
図版４　土器集中出土地点出土状況
図版５　井戸跡出土遺物（１）
図版６　井戸跡出土遺物（２）
図版７　井戸跡出土遺物（３）
図版８　井戸跡出土遺物（４）・木札・双鳥鏡・骨出土状態
図版９　圦樋跡及び遺物出土状態
図版10　圦樋跡の構造（１）
図版11　圦樋跡の構造（２）・出土遺物
図版12　竪穴住居跡出土土器（１）
図版13　竪穴住居跡出土土器（２）
図版14　竪穴住居跡出土土器（３）
図版15　竪穴住居跡出土土器（４）
図版16　竪穴住居跡出土土器（５）
図版17　竪穴住居跡出土土器（６）
図版18　竪穴住居跡出土土器（７）
図版19　竪穴住居跡出土土器（８）
図版20　竪穴住居跡出土土器（９）
図版21　竪穴住居跡出土土器（10）
図版22　竪穴住居跡出土土器（11）
図版23　竪穴住居跡出土土器（12）
図版24　竪穴住居跡出土土器（13）・掘立柱建物跡出土土器・井戸跡出土土器（１）
図版25　井戸跡出土土器（２）
図版26　井戸跡出土土器（３）
図版27　井戸跡出土土器（４）
図版28　井戸跡出土土器（５）・土壙出土土器（１）
図版29　土壙出土土器（２）
図版30　土壙出土土器（３）
図版31　土壙出土土器（４）
図版32　土壙出土土器（５）
図版33　土壙出土土器（６）
図版34　土壙出土土器（７）
図版35　土壙出土土器（８）
図版36　土壙出土土器（９）・溝跡出土土器（１）
図版37　溝跡出土土器（２）
図版38　溝跡出土土器（３）
図版39　溝跡出土土器（４）
図版40　溝跡出土土器（５）
図版41　溝跡出土土器（６）
図版42　溝跡出土土器（７）
図版43　溝跡出土土器（８）
図版44　溝跡出土土器（９）
図版45　溝跡出土土器（10）
図版46　溝跡出土土器（11）
図版47　溝跡出土土器（12）
図版48　溝跡出土土器（13）・小穴出土土器（１）
図版49　小穴出土土器（２）
図版50　小穴出土土器（３）
図版51　小穴出土土器（４）
図版52　小穴出土土器（５）・地鎮跡出土土器・河川跡出土土器（１）
図版53　河川跡出土土器（２）・土器集中出土地点出土土器（１）
図版54　土器集中出土地点出土土器（２）
図版55　土器集中出土地点出土土器（３）
図版56　土器集中出土地点出土土器（４）
図版57　土器集中出土地点出土土器（５）
図版58　土器集中出土地点出土土器（６）
図版59　土器集中出土地点出土土器（７）
図版60　土器集中出土地点出土土器（８）
図版61　土器集中出土地点出土土器（９）
図版62　土器集中出土地点出土土器（10）
図版63　土器集中出土地点出土土器（11）
図版64　土器集中出土地点出土土器（12）・遺物堆積層出土土器（１）
図版65　遺物堆積層出土土器（２）

図版66　遺物堆積層出土土器（3）・墨書土器（1）
図版67　墨書土器（2）
図版68　墨書土器（3）
図版69　墨書土器（4）
図版70　墨書土器（5）
図版71　墨書土器（6）
図版72　墨書土器（7）
図版73　墨書土器（8）
図版74　墨書土器（9）
図版75　墨書土器（10）
図版76　墨書土器（11）
図版77　墨書土器（12）
図版78　墨書土器（13）
図版79　墨書土器（14）
図版80　墨書土器（15）・井戸枠材（1）
図版81　井戸枠材（2）
図版82　井戸枠材（3）
図版83　井戸枠材（4）
図版84　井戸枠材（5）
図版85　井戸枠材（6）
図版86　井戸枠材（7）
図版87　井戸枠材（8）
図版88　井戸枠材（9）
図版89　井戸枠材（10）
図版90　井戸枠材（11）・土錘（1）
図版91　土錘（2）・玉類・灰釉陶器（1）
図版92　灰釉陶器（2）
図版93　灰釉陶器（3）
図版94　灰釉陶器（4）
図版95　灰釉陶器（5）
図版96　紡錘車
図版97　漆付着土器・瓦（1）
図版98　瓦（2）
図版99　砥石（1）
図版100　砥石（2）
図版101　砥石（3）
図版102　青磁・白磁、中世陶器（1）
図版103　中世陶器（2）
図版104　中世陶器（3）
図版105　中世陶器（4）・かわらけ（1）
図版106　かわらけ（2）・板碑・土管
図版107　かわらけ（3）・擂鉢
図版108　近世陶器
図版109　近世瓦・古銭
図版110　中近世木器（1）
図版111　中近世木器（2）
図版112　中近世木器（3）
図版113　中近世木器（4）
図版114　中近世木器（5）
図版115　中近世木器（6）・鉄製品（1）
図版116　鉄製品（2）
図版117　鉄製品（3）・銅製品
図版118　中世第1号墓出土遺物・獣骨（1）
図版119　獣骨（2）
図版120　獣骨（3）
図版121　獣骨（4）
図版122　獣骨（5）
図版123　獣骨（6）
図版124　自然科学分析資料
図版125　第106号土壙出土山吹双鳥鏡X線透過写真

14. 墨書土器

北島遺跡では、今回の調査を含め、これまで622点の墨書土器が出土した。出土点数・文字種とも県下最大の出土量となり、北島遺跡は、東国有数の墨書土器を出土する遺跡となった。

そこで北島遺跡を特徴づける墨書土器について、文字種のみならず、運筆の分析をすることで記載された墨書文字の類型化を試みた。

(1) 検討方法

以下の手順で墨書を分析し、資料化を進めた。

①墨書部分をデジタルカメラ(オリンパス社のウルトラズーム)で垂直撮影した。

②画像データをグラフィックソフト(Adobe 社の Photoshop 6.0)で画像を拡大し、字形や運筆が判別するように色調や露出・トーンカーブ等を調整した。

③画像をインクジェットカラープリンター(EPSON 社 PM7000 MAX－ART)でプリントアウトし、文字の字形や筆の入り・留め・払いなどの筆の動きと書き順(切り合い関係)に注意して文字の外形を朱線でなぞった。このとき実物と画面を比べ、場所によって色調や明暗・コントラストなどを更に変更しながらプリントに細い朱線を加筆した。

④プリントの朱線をトレーシングフィルム(KOKUYO ケミカルマット)で写し取り、文字の大きさが、実物の2倍になるようにデジタルコピー機で調整した。

⑤字種ごとにまとめ、類型化を検討した。この類型ごとにレイアウトを行い、二倍版に版組を行った。この版下をスキャニングし、画像データとした。

⑥この画像データをグラフィックソフト(Adobe 社の Illustrator 10.0)上で浄書を行って、電子版下(AI ファイル)とした。このとき書き順ごとにパスを変え、墨の溜まる位置や留めの部分に調整を行った。また筆の動きに沿って「墨20パーセント」で重ねることで筆の動きを表現した。また書き順を数字で現わした。墨一色で表現されてきた墨書土器の表現について、新たな工夫を加えることに努めた。

(2) 文字の記載比率

記載された文字には、同一文字が多い。同一文字を一つのくくり(文字種)として検討することとする。北島遺跡では以下の文字種を確認することができた。

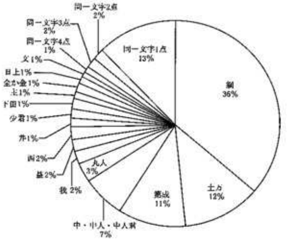
まず同一文字が、5点以上の文字種は、「綱」188点、「上万」64点、「第成」63点、「中・中人・中人君」37点、「丸人」17点、「我」11点、「益」12点、「西」10点、「井」8点、「少君」10点、「下田」8点、「主」7点、「全か金」7点、「日上」6点、「文」5点である。

次に同一文字が、4点の文字種は、「十」・「龍」・「南(南家)」・「兵」である。

また同一文字が、3点の文字種は、「レ」・「息」・「大」又は「太」・「蘇」・「良」・「春山」・「麦」・「成」・「千」である。

さらに同一文字が、2点の文字種は、「家」・「国」・「冬」・「子」・「卅」・「風内」・「千万」・「田」・「道」である。

そして同一文字のない文字種は、「貞」・「仕」・「念」・「六石」・「本」・「収」・「氏か長」・「林家」・「榛か泰」・「後家」・「黒」・「奥」(集か兵か)・「宇」・「可」(苛か)・「西蓁」・「天」・「万」(百か)・「千万」(寺方か)・「武」(式か弋)・「苗田」・「我我我我の上に夫母」・「寺か」・「佐」・「鬼」・「術」・「萩」・「茌」・「口」・「鞘田」・「石」・「関か国」・「□単」・「宿か」・「○」・「□弟」・「人万か」・「所か」・「楊井」・「国万」・「念」(命か)・「介」(芥か)・「世」・「横見郡」・「陽」・「人君」・「大□(女)」・「有」・「家刀自」・「木」・「美」・「荒男」・「太不西」・「向」・「司」・「浄成」・「畠」・「集」・「佃万」・「玉」・「吉」・「太」・「大」・「朋知」・「腐」・「見官」・「一」である。



第190図　墨書文字の種類

なお、この他に文字を判読することができない土器が、42点ある。文字種の構成比率は、第190図に示したように「網」が36%と最も多く、次いで「土万」が12%、「第成」が11%、「中」あるいは「中人」・「中人君」が7%、「丸人」3%、「我」、「益」、「西」が2%、以下は1%未満となる。

(3) 文字種ごとの検討

各墨書文字ごとに墨書内容・墨書位置・土器の年代・記載文字の筆跡分類等の細かな検討を加えることとする。

①「墨書の内容」は、墨書の文字が、奈良・平安時代にどのような使われ方をしたか、通説的に記す。

②「墨書の位置」は、第191図に示した模式図に則ってデータ化し、土器の年代ごとの傾向を探る。一覧表では、「外底」・「内口」と略して表現したが、これは、土器の「外面の底部」・「内面の口縁部」に文字が記されていたことを示す。また「文字記載方法」は、記載された文字が、土器の底部や口縁部などのキャンバスのどこにどの方向で書かれたかを明確にした。

なお底部の記載方法では、①～⑤は、文字が五分割された部位に書かれた場合、⑥は、底部の全面に書かれた場合、⑦～⑩は、文字が四分割された部位に書かれた場合を示す。また二つの部位にまたがる場合は、⑨+⑩などと表現した。

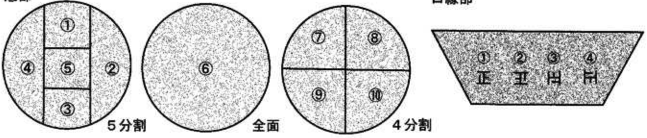
さらに口縁部側面に記載された場合は、文字の向きによって①～④とした。

③「土器の年代」は、できる限り四半世紀ごとに土器を分類し、変遷図上に描いて、その傾向を探る。

④「筆跡の特徴」は、筆を施文原体と同義と考え、筆の入りや止め、払い、折れ、跳ね上げなどを墨書痕跡から観察した。

共通する筆の使い方、つまり字画の構成、バランス、書き順、かすれなどから分類した。安易に同筆を求めるのではなく、共通した筆使いをまとめる(分類する)ことに心がけた。

それは安易に稚拙な文字について習書や文字を知らない者が、真似て書いたとか、文字を書いた者を特定する筆跡鑑定的な分類ではなく、北島遺跡の中で同一の文字に対して、時代を超えていくつのグループが関与したかを明らかにするためである。



第191図　墨書の位置と方向

⑤「文字の分布」では、同一文字が、北島遺跡とくに第19地点のどの場所に集中するかについて、分布図を用いて記す。

まず出土点数が最も多い「綱」から記すこととしたい。

綱（第245図1～第251図188）

①墨書内容　1～188は、全て「綱」と判断した。「綱」は、「綱丁」や「綱領」などの税や物資を運搬する者にかかわる職掌か、名前の一部、例えば「綱麻呂」などを示す。

ところで「綱」と書かれた墨書土器は、全国的にも類例に乏しく、僅かに次の五例のみある。まず千葉県市原市上総国分僧寺では、寺の運営にかかわった役僧である三綱の施設と考えられる「綱所」が見られる（宮本1994）。

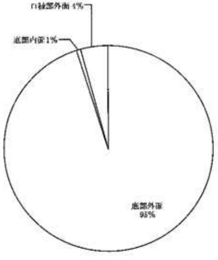
また同県香取郡小見川町御座ノ内遺跡では、「山□（綱）」が出土している（宮崎1992）。この遺跡の周辺では、山武郡大網白里町砂田中台遺跡の「山邊家」や東金市山田水呑遺跡の「山口館」「山邊」などが出土しており、下総国山邊郡山口郷にかかわる墨書土器と見られている。

さらに石川県能美郡辰口町辰口西部遺跡群では、胴部に「江沼□（臣）専當□（綱）長勝□（缶）」と線刻された平瓶が出土している（平川1988）。在地豪族の江沼（臣）勝（缶）が、税や物品の運搬責任者であったことを示す資料である。

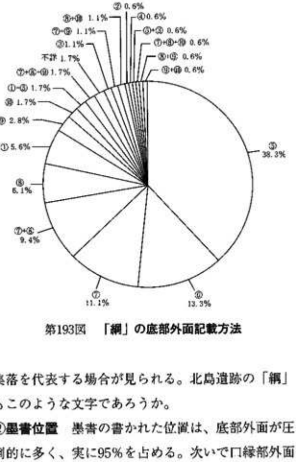
なお平城宮跡からも「千□（綱）」と書かれた墨書土器が出土している（奈良国立文化財研究所1983）。

これらは寺の施設、地域支配の末端、税の運搬者などの意味を持つが、全て単品で出土しており、北島遺跡のように当該遺跡を代表する文字ではない。この点は、後述する「土万」や「第成」と同様、「綱」が示す文字の意味以外に人名や家号をを示すか、北島遺跡の集落を代表する文字とも考えられよう。

ちなみに東国の集落遺跡では、しばしば同一の文字（一文字が多い）が、長年に亘り土器に墨書され、集落を代表する場合が見られる。北島遺跡の「綱」もこのような文字であろうか。



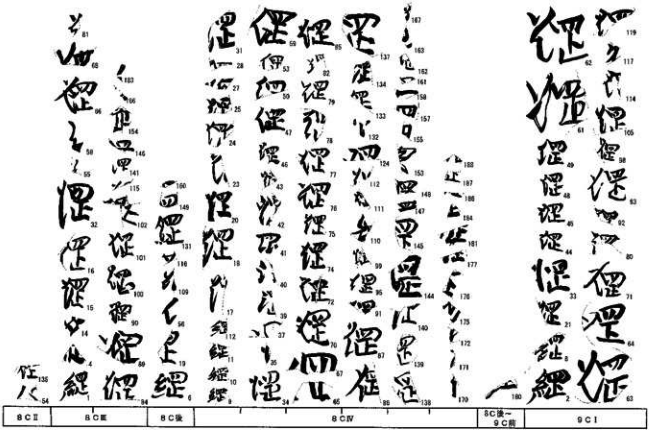
第192図　**「綱」の記載部位**



第193図　**「綱」の底部外面記載方法**

②墨書位置　墨書の書かれた位置は、底部外面が圧倒的に多く、実に95%を占める。次いで口縁部外面4％、そして底部内面が僅かに1％でなる。

さらに底部外面のどの場所に書かれたかをグラフで示す（第193図）と、中央⑤が38.8%、全体⑥が13.3%と、底部中央から全体にかけて書かれた墨書



第194図　**「綱」の変遷**

が、5割を超えることとなる。

これに次ぐのが、左上⑦の11.1%、あるいは上部⑦+⑧の9.4%、右上⑧の6.1%、上中央①の5.6%である。これらは、全て「綱」という文字が、上部に片寄って書かれていたことを示し、合わせると32.2%にも上る。

つまり多くは、中央から上部にかけて「綱」という文字を書いたわけである。

また僅か8点であるが、口縁部外面に書かれた土器があり、①が4点、④が4点である。

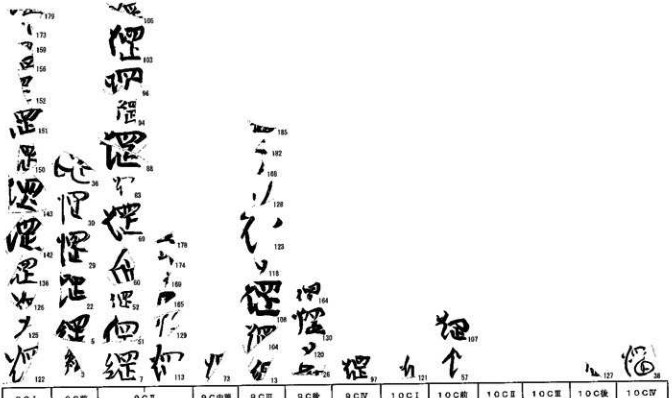
③土器の年代　「綱」の書かれた墨書土器は、8世紀第Ⅱ四半期より登場し、10世紀第Ⅳ四半期まで存続する。ただし38と127は、10世紀後半の文字であることや「綱」と素直に判読できるか疑問が残る。ここでは、57・107・121が書かれた10世紀前半まで北島遺跡では「綱」が用いられたと考えておきたい。

いずれにせよ北島遺跡では、墨書土器が書かれた大半の時期に「綱」が見られたこととなる。ところで「綱」が、ピークとなる時期は、8世紀第Ⅳ四半期（77点）である。その前後の8世紀第Ⅲ四半期が23点、9世紀第Ⅰ四半期が34点であることを考慮すると、二倍から三倍にも及ぶ土器に文字が記されていたこととなる。

文字の大きさを、大・中・小の三段階に分けるならば、小字は、僅かに8世紀第Ⅱ四半期に1点（135）見られるだけである。大字の初現は、67が8世紀第Ⅳ四半期に見られるが、9世紀代には、僅かに6～7点が見られる程度である。「綱」は、圧倒的に中字が多く、大形化はしない。

なお、9世紀第Ⅱ四半期には17点、第Ⅲ四半期には9点と徐々に少なくなり、10世紀前半には、消滅に向かう。

④筆跡の特徴　綱は、糸偏が変化に富み、様々な筆跡を確認することができる。しかし旁の岡は、四と



正を合成した異体字で変化に乏しい。全体にバランスが悪く、草書的に崩した墨書が多い。全体を19群（25類）に分類した。

〔第1群〕1～14は、糸偏の上部を丁寧に楷書で書く一群である。

（第1類）1～3は、糸偏の下部も三画で書く。とくに第4画が、右斜め下に筆を入れた後、大きく右下に払う点が共通する。しかし1は、第5画・第6画が、右に跳ねるのに対して、2・3は、左にはねる。さらに旁の第14画と第15画は、足の第6画と第7画のように書く。旁をこのように書くのは、188点中1と4の2点だけである。2・3は、同筆かもしれない。

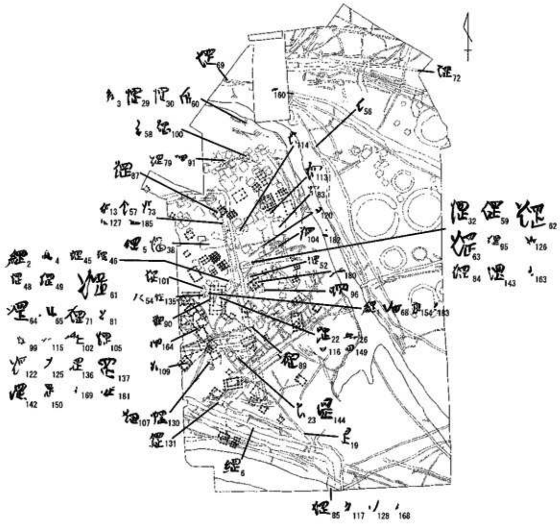
（第2類）6～12は、糸偏の下部を右上へ跳ね上げ、三画分を省略する。5も文字の下半が欠失するが、共通点が多い。9～12は、綱の中で最も小さく書かれた一群である。8と11は、旁の「正」を「止」と書くが、他は、「正」と書く。6と9は、文字のバランスが共通する。5と11は、最終画が止まらず払われている。

13・14も糸偏が、1～12と共通するが、文字の左上以外が欠失し、全体像は分からない。

〔第2群〕15～28は、糸偏の第1画が、左上から右下に短く引き止めて、右上に跳ね上げられた後、残りの画を人偏状に書く一群である。15・18・20・22・24・25・26の第3画と16の第2画、17・21・23の第4画が縦に長く引かれ、足偏状になる。最後は、旁の第1画に向かって長く跳ね上げる。旁の「罔」は、「四」が小さく、その下に続く「止」・「正」が長い。

（第1類）15～17は、旁の下部が、「正」となる。「正」の長さは、「四」の二倍ほどとなる。全体に縦長の字となり、同筆の可能性が高い。

（第2類）18～21は、旁の下部が、止となる。「止」



第195図　**遺構出土の「綱」の分布**

の長さは、「四」の1.5倍ほどとなる。偏に比べて旁が短かい。20は、「止」が「上」とさらに省略される。

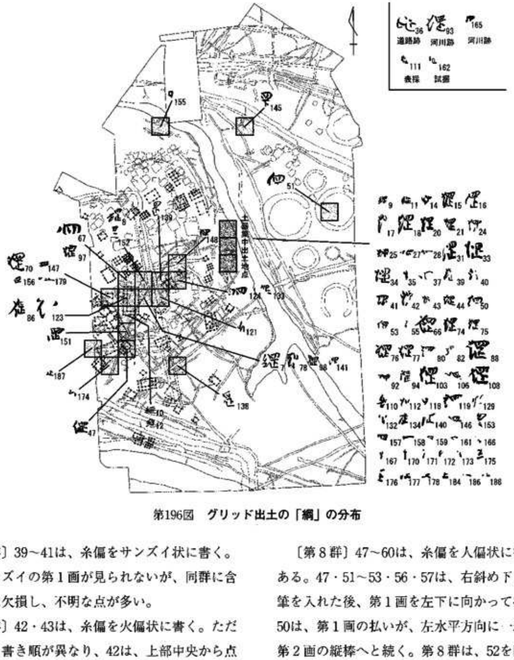
（第３類）22・26は、第２画が、横に伸びてから左下に払われる。より足偏に近い。また第２画が、一端右に進んでから斜め左下に払われる。第３画が長く、第３類に含めた。23・24・25・27・28も残画のみだが、同類であろう。

〔第３群〕29～35は、糸偏を簡略化し、旁の「四」の第１画とともにリッシン偏状となる一群である。第１画は、比較的上方に書かれ、第２画が縦に長く書かれる。

（第１類）29・30は、旁の四を丸みをもって書く。土師器坏に書かれた点も共通するが、31は、墨痕がやや薄い。31は、糸偏残画のみだが共通する。とくに29・30は、同筆の可能性が高い。

（第２類）33と34は、文字のバランスが近い。しかし旁の「正」の書き方がまったく異なる。34では、第９画の、左上から入った点が、左下に向かって大きくカーブを描きながら第10画に向かう。第10画は、「乙」状に書く。第10画を乙字状に書くのは、36と共通する。

〔第４群〕36～38は、細く草書的または崩し字的に書く一群である。38は、とくに崩されている。細い筆使いで丸みをもち、流れるように書く。全て別筆であろう。



第196図　グリッド出土の「綱」の分布

〔第５群〕39～41は、糸偏をサンズイ状に書く。41は、サンズイの第１画が見られないが、同群に含めた。旁は欠損し、不明な点が多い。

〔第６群〕42・43は、糸偏を火偏状に書く。ただし２点とも書き順が異なり、42は、上部中央から点を打ち、第２画が、下から跳ね上げているが、43は、第１画が、下から跳ね上げ、第２画に続き、第３画が下に向かう。別筆である。

〔第７群〕44～46は、糸偏を人偏に一画加えたように表現し、「岡」の「正」を「止」と書く。最終画は、一端止めた後、水平に払われる。44と45は、偏と旁のバランスがよく似る。しかし46は、旁がやや下がっている。

〔第８群〕47～60は、糸偏を人偏状に書く一群である。47・51～53・56・57は、右斜め下に向かって筆を入れた後、第１画を左下に向かって払う。48～50は、第１画の払いが、左水平方向に一端止まり、第２画の縦棒へと続く。第８群は、52を除き、旁の下部を「正」に作る。やや横長に書く傾向が強い。54～58は、糸偏の残画のみだが、第８群とした。

とくに59・60は、文字も大きく、旁の最終画が乙字状となる。第３群の第２類と共通する。しかし60は、残画が少なく不明な点が多い。

〔第９群〕61～68は、糸偏の第１画と第２画を大きく書く一群である。ひらがなの「そ」に近い。全てが、須恵器坏の底部全体に書かれたため、大きな

文字となっている。

（第１類）61・62は、旁の「正」を「止」と書く。とくに61は、第10画から第11画にかけてを連続して書き、下から第12画に向かうが、62は、第９画が上に跳ね上げられ、第10画に向かう。

（第２類）63・64・66・69は、旁の「正」を「正」と書くが、64のみ「正」の第４画を書かない。

65・67・68は、残画のみだが同群に含めた。

〔第10群〕69～73は、糸偏の第３画が、大きく斜め右下に向かって伸び、旁の第１画に向かって跳ね上げられる一群である。旁の位置がどれもばらばらで、「四」と「正」の大きさも揃わない。70・71は、「正」の最終画が払われている。

〔第11群〕74～83は、楷書の糸偏の第３画が、第２画から連続して水平、または斜め右上に伸びる一群である。

（第１類）74と75は、偏の最終画が、縦にまっすぐ伸びた後、内側へ跳ね上げられる。旁の「罔」も「四」と「正」のバランスが共通しており、文字全体の縦横比も共通する。ただし最終画とその前画の交わり方がやや異なる。両者は、同筆かもしれない。

（第２類）第11群の中で76と77は、旁の「罔」を「四＋止」とつくる。76が、糸偏を大きく回り込んで書くのに対して、77は、小さくまとめており、同筆とはいえない。

79は、74・75と同様に旁を「正」に書くが、他は、墨痕が薄かったり、破損しているため判断できない。糸偏のみだが、同筆といえるほどの共通性はない。

〔第12群〕84～99は、楷書の糸偏の第２画が、横に伸びず、縦または、やや斜め下に伸びる一群。旁の「罔」は、「四＋正」とつくる。文字のバランスは、全体に横長となる。

〔第13群〕100～108の糸偏は、第12群と共通するが、旁の「罔」が、「四＋止」と書く一群。ただし旁は、文字のバランス、筆の使い方とも共通しない。

〔第14群〕109～126は、糸偏の第１画が、小さく点を打った後、右上に大きく跳ね上げる。ただし旁の形状は、欠損等で明らかにできなかった。

〔第15群〕128～132は、特殊な糸偏を書く一群を一括した。128・129は、破損部が大きく全体が分からないが、糸偏を点と払いの二画で構成する。

130は、火偏の第４画が抜けたように書く。131は、第１群のように糸偏上部を書くが、糸偏下部の三画は、きわめて軽く書く。132は、リッシン偏の第一画を短く書いた形である。第２画が、左に跳ねるため旁の一部ではない。

〔第16群〕133～135は、偏の形状が明らかではないが、旁の「罔」が、「四＋止」となる一群。ただし135は、さらに一画欠けて「上」となる。

〔第17群〕136～139は、偏の形状が明らかではないが、旁を「四＋正」と書き、第一画と第二画を連続し、縦折れとして書く。138・139は、文字を細く滑らかに書き、共通する。旁の「四」を丸みをもって素速く書く点は、第３群第１類と共通するかもしれない。

〔第18群〕140～157は、偏の形状が明らかではないが、旁の「罔」が、「四＋正」となる一群。とくに146～149、155～157は、欠損が激しく、旁の「四」のみしか残っていない。

〔第19群〕158～188は、欠損が激しいか、墨痕が薄いため、偏・旁の大部分を明らかにすることはできないが、墨書の文字を「網」と判断した一群である。

⑤文字の分布　「網」の墨書土器は、北島遺跡第19地点の調査区全域から出土しているが、とくに西側台地の南半や土器集中出土地点に集中する。188点中土器集中出土地点では、67点の出土が見られる。また土器集中出土地点より南西の遺物堆積層中からの出土も多い。この「網」の出土したグリッドでは、８世紀から９世紀にかけては、掘立柱建物跡が集中して建てられたことから、建物に付帯した遺物の可能性がある。

またこのエリアには、廃棄土壙が形成され、「網」の墨書土器が出土した。点数は、第200号土壙（9

点)、第223号土壙（1点)、第240号土壙（23点)、第269号土壙（4点)、第279号土壙（4点)、第285号土壙（1点)、などである。

さらに井桁が精巧に組まれた第42号井戸（4点)、第85号井戸（2点）など、第31号掘立柱建物跡（1点)、第55号掘立柱建物跡（1点）や第145号住居跡などの居住空間からの出土が確認できる。

また第91号溝（5点)、第133号溝（2点)、第233号溝（1点)、第237号溝（2点)、第183号溝（1点）などの区画溝から「網」の墨書土器が、それぞれ出土した。この他、第82号井戸（1点)、第168号土壙（1点）などから出土した。

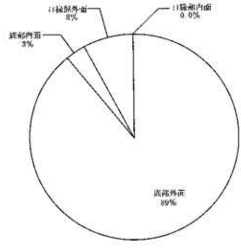
この範囲の北には、やはり廃棄土壙の第160号土壙（2点)、第13号掘立柱建物跡（1点）などもみられる。しかし最大の特徴は、「網」の墨書土器が出土した竪穴住居跡が、9世紀の区画溝の東側に分布することである。

すなわち第145号住居跡（1点)、第121号住居跡（1点)、第117号住居跡（1点)、第110号住居跡（1点)、第36号住居跡（2点)、第43号住居跡（2点）などの住居跡に見られる。

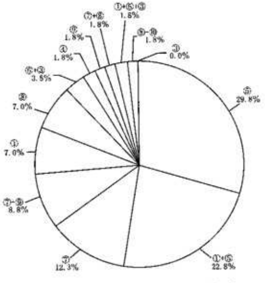
この西側台地の北端には、旧河川跡に向かう第51号溝（4点）やこのグリッドから出土がある。また道路跡の側溝にあたる第325号溝（4点)、第316号溝（1点)、第319号溝（1点）からの出土も見られる。

東側台地に目を向けると、北側から第24号溝（1点）第29号溝（1点）第160号溝（1点）第47号溝（1点）などの溝跡から僅かな出土がある。また第5号墳の墳丘上にあたるグリッドからも出土したが、きわめて少ない。

以上をまとめると、「網」の出土は、調査区全体から出土するとはいえ、西側台地の中央に限定的な出土であり、他の調査地点から全く出土がないことを踏まえると、北島遺跡第19地点の奈良・平安時代を特徴付ける墨書土器といえよう。



第197図　「土万」の記載部位

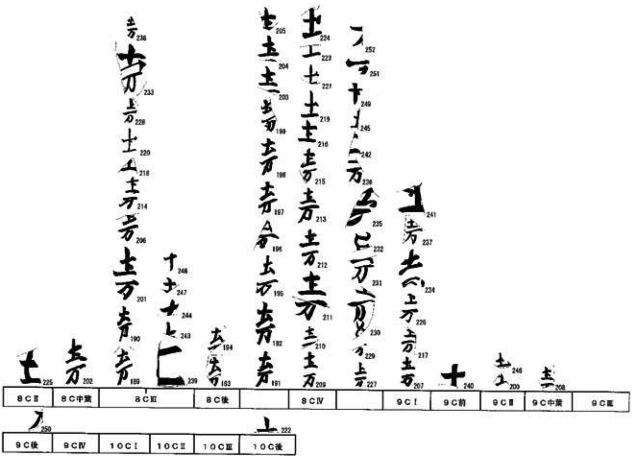


第198図　「土万」の底部外面記載方法

土万、土万呂（第251図189～第253図252)

①墨書内容　189～252は、「土万」か「土万呂」と判断した一群である。人名の「土万呂（つちまろ)」と考えたい。

ちなみに「土万」と書かれた墨書土器は、全国的にも石川県羽咋市四柳白山下遺跡（(財）石川県埋蔵文化財センター1990)や岩手県遠野市高瀬Ⅰ遺跡(遠野市1992）にみられるに過ぎない。四柳白山下遺跡では、北島遺跡のように「土万」と「土万呂」がともに出土し、人名を記した墨書土器も豊富である。



第199図　「土万」の変遷

しかし高瀬Ⅰ遺跡では、「十万」・「千万」・「上万」などとともに出土しており、こちらは人名とはいえない。

②墨書位置　墨書は、底部外面に書かれた場合が、圧倒的に多く89%を占める。次いで口縁部外面が8%、そして底部内面が3%である。

最も多い底部外面をさらに分析すると、中央⑤が、29.8%と三割近くを占める。ついで上部から中央の①+⑤が22.8%、左上の⑦12.3%、左側の⑦+⑨が8.8%となる。つまり左寄りから中央にかけて書かれた文字が、73.7%に上るのである。

これに対して底部全体に書かれた文字は、1点もなく、また左よりの②や左下の⑩もないことが分かる。これは「綱」とは異なり、須恵器坏の底径が小形化して以降は、文字が書かれなかったこと、左寄りや中央に書かれやすかったことを示していよう。

また口縁部外面には、③が1点と④が4点見られる。僅かな例だが、正位と逆位には書かれなかった点は、注意しておきたい。なお③は、242の例であり、④には、230・232の「土万呂」が含まれている。「上万」のグループの中でも特殊である。

③土器の年代　北島遺跡では、「土万」にかかわる墨書土器が、8世紀第Ⅱ四半期から10世紀後半にかけてみられる。ただし225は、須恵器坏の側面に大きく太く書かれている。しかしきわめて薄く、あるいは器表の汚れかもしれない。そこで「土万」は、202以降と判断したい。

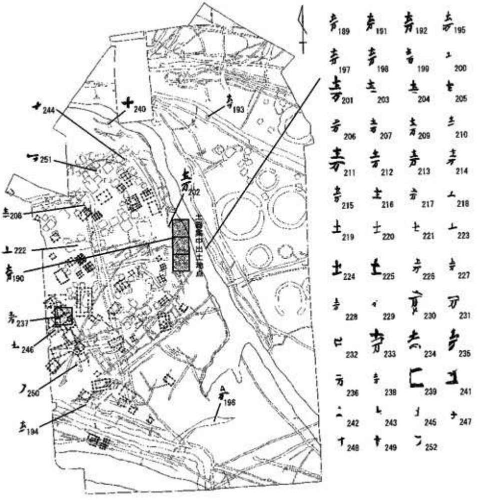
また終末については、9世紀後半の250は、「万」のみ、222は、残画のみで、「十」やその他である可能性が高い。よって「土万」は、208の9世紀中

葉を最終としたい。

「土万」は、8世紀第Ⅲ四半期に15点、第Ⅳ四半期に33点とピークになるが、9世紀第Ⅰ四半期には、6点と急速に減少する。8世紀第Ⅳ四半期が、その前後の二～三倍の出土量であることは、「綱」と共通した傾向を示す。

文字の大きさは、中字が主体である。小字と大字が、僅かに加わる。

④筆跡の特徴



第200図　**「土万」の分布**

「土」は変化に富み、第3画または第4画に点を加えて構成される。また「万」は、個体間の差が少ない。「土」を中心とした分類とする。全体を11群（17類）に分類した。

〔第1群〕189～200は、「土」の第2画が左下に向かって払われ、第3画が、弓なりに斜め右上に向かう。その最終点に第4画が、重なるように左上から右下に向かって点を打つ。

（第1類）189・190は、「土」の第3画が、弓なりに書かれ、右斜め上で確実に止まる。また「万」の第1画は、極度の右肩上がりに書く。

（第2類）191・192の、「土」は、第1類と共通するが、「万」の第2画が明瞭に折れる。また第1類ほど右肩上がりとならない。

（第3類）193・194は、「土」が第1類と共通するが、第2画と第3画の間は広く開いており、第3画の止めもやや不明瞭である。ただし「万」の第1画が、極端に右肩上がりとなる。

（第4類）195・196は、「土」の第3画を右に払い、縦に近く第4画を打つ点で共通する。また「万」の第1画を長く引き、最後を右下にやや垂れる。

（第5類）197～200は、「土」の第3画を右に払う。「万」が小さくまとまる点も共通する。

第1群の内、第1類と第4類、及び第5類の197・198は、それぞれ同筆の可能性が高い。。

〔第2群〕201～218は、「土」の第4画が、第2画の中央から書き始める一群である。

（第1類）201～210は、第4画が、中央から斜め下に垂れながら打たれる。第1画と第3画は、次第に開いていく。

（第２類）211～218は、第４画が、中央から水平に伸びる。第３画は、弓なりとなり、中心より右が短く、第１画と同じかやや長い程度である。

「万」に特色は少ないが、202は、極度な右上がりである。

〔第３群〕219～223は、第１画が、第２画を大きく突き出る。また第１画と第３画が、ほぼ同じか第１画がやや長く書かれ、「士」のように表現される。第１画の点画は、様々な位置がある。

（第１類）219～223は、筆を立てて細く書く。

（第２類）224～225は、太くやや大きく書く。

〔第４群〕226～228は、「土」の第１画、または第２画が省略され、「上」のように表現される。227・228は、「万」の第２画が、第１画から離れ、第３画も第１・２画と離れて始まる。229も共通する。

〔第５群〕230～233は、230の「□万呂」と共通する「土万」や「呂」である。全体に流れるように書かれ、とくに「万」は、第２画と第３画が、第１画から離れて始まるが、両者は大きく離れる。同筆の可能性が高い。

〔第６群〕234・235は、極端な右肩上がりの書き方で、筆の動きも素速い。

〔第７群〕236は、「土万」と表記されるが、他に類似する書き方がない。

〔第８群〕237は、「土万」の中心軸が、極端に左にある。

〔第９群〕238は、「土」の第１画を山形に書き、「出」に近く表す。文字の大きさも小さく、最小の表記である。

〔第10群〕239～249は、「土万」とは特定できないが、残画から「土」と判断した一群。

〔第11群〕250～252は、やはり土万と特定できないが、残画から「万」と判断した一群。

⑤文字の分布　64点中土器集中出土地点からの出土が、51点と最も多い。この土器集中出土地点に隣接した第148号土壙や第16号井戸からも出土が見られる。

竪穴住居跡では、第181号住居跡（246）や第40号住居跡（251）が見られるに過ぎない。なお、第181号住居跡の北N14グリッドからも出土した。

井戸では、第16号井戸の他に第４号井戸・第85号井戸から見られる。第91号溝から出土した208は、廃棄土壙の第200号土壙とかかわるのであろう。

調査区南端道路跡と平行する第319号溝からも出土した。また西側台地の北側斜面にあたる第51号溝からも出土した。離れた地点では、東側台地の北側、第17号土壙からの出土がある。

なお第336号溝から出土した196は、近世の溝に混入した遺物である。また第160号土壙から出土した222は、10世紀の土壙であるため、前述のように「土」ではないかもしれない。

第成（第253図253～第255図315）

①墨書内容　ここでは、「成」が共通する文字を一括した。253～275、277～280、282～287、289～293、298～310、313～315は「第成」と判断した。276は「浄成」、281は「安成」か、288は「□成」（「第成」ではない）である。311（「□成」）、312（「□□」）は「第成」と読める可能性は低い。294～297は、「成」の一画である。

さてここにまとめたのは、「第成」や「浄成」、「安成」など「成」を共有する墨書である。（財）埼玉県埋蔵文化財事業団　第81集『北島遺跡』で報告した「浄成」については、「ジョウセイ」と読み、深谷市城西遺跡の「願恵」とともに僧侶の人名と判断したこともあるが、第19地点の調査によって「第成」が出土したことによって、「キヨナリ」と読むべきと判断した。

また当初は、「第成」の「第」について竹冠が、草冠状に書かれていたことから「弟」と判断し、（財）埼玉県埋蔵文化財事業団　第278集『北島遺跡　Ⅴ』では、「弟成」または「弟」と報告したが、「第」が正しいので訂正しておきたい。なお、「第成」は、

「タダナリ」と読んでおきたい。

ちなみに「第」と記された墨書土器は、きわめて少なく、福岡県糸島郡前原町上鑵子遺跡(「第□」)(栗原1977)、佐賀県神埼郡神埼町吉野ヶ里遺跡四の坪地区(「第君」)(七田他1992)、山梨県東八代郡一宮町大原遺跡(「第」)、(平野1990)静岡県袋井市坂尻遺跡(「第刀」)(原1983)などが見られるに過ぎない。

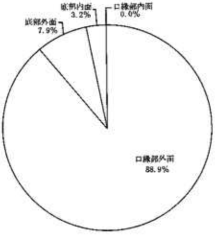
北島遺跡の「第成」が、タダナリならば、吉野ヶ里遺跡の「第君」は「タダキミ」、大原遺跡の「第刀」は、「自」を補い、「ダダトジ」という女性名であろう。

ところで「第」は、しばしば都城に集住した通貴以上の邸宅の呼称として用いられた。『日本書紀』では、五位以上の人々の邸宅は、「家」と表現されたが、『続日本紀』になると「第」と表現されるようになる。例えば藤原仲麻呂の「田村第」や長屋王の「佐保第」などである。

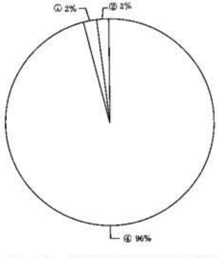
これは「第」が、「殿」とともに尊称であることと、藤原京以降、彼らが、本貫を離れて都城に住み、本貫や別業に「家」や「宅」をもっていたからに他ならない。「地名+第」や「職掌+第」等で表現され、奈良時代以降、官人が都市に集住するようになると通貴以上の邸宅に対して、「家」に変わり「邸」とともに用いられたようである。

また「成」を一部にもつ墨書土器は、枚挙に暇がないほど豊富であるが、武蔵国内の出土は少なく、僅か五例に過ぎない。東京都東村山市下宅部遺跡(「家成」4点)(千葉1999)、北区中里遺跡(「別成」)(峰沢1989)、埼玉県比企郡滑川町大沼遺跡(「真成」:石製の権に刻字)(福田1993)、同郡鳩山町小谷A遺跡(「石成」:長頸壺に刻字)(渡辺1989)、入間郡大井町東台遺跡(「資成」)(坪田1987)、などが見られるだけである。

②墨書位置 墨書の書かれた位置は、口縁部側面が圧倒的に多く88.9%を占める。次いで底部外面の7.9%、そして底部内面の3.2%である。



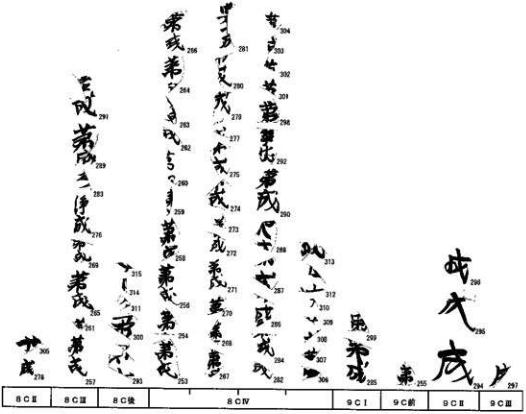
第201図 **「第成」の記載部位**



第202図 **「第成」の底部外面記載方法**

最も多い口縁部外面についてさらに細かくみると、④が96%と圧倒的に多く、①・②の正位・逆位は、ごく僅かである。①・②は、297・315の「成」一文字であり「第成」とは直接かかわらない。そのため「第成」のほとんどは、口縁部外面に④の状態で書かれたこととなる。

ところで須恵器や土師器の坏は、口縁部が底部から大きく開くため、口縁部の外面に④の状態で文字を書くには、土器を手に持ち固定する必要がある。おそらく④は、右利きの者が、土器の口唇部を左手で大きくつかみ、手を机などに固定させて、土器を回転させながら書いていた。左利きの場合は、口縁部の内側を鷲つかみにして手を固定し、書いたはず



第203図　「第成」の変遷

である。

④と対となる③は、左利きと右利きでは逆となる。全てとはいえないが、おそらく「第成」は、前述のように右利きの者が書いたのであろう。

③土器の年代　8世紀第Ⅱ四半期の土器に「成」(278)、「□（草冠）」(305) の墨書が見られるが、確実な「第成」の墨書は、第Ⅲ四半期からである。またその終末は、9世紀第Ⅰ四半期、または9世紀前半とした255・285・299である。この3点は、欠損するが、「第成」と判断して良いであろう。

なお、前記したように294～297は、「成」一字とし、「第成」とは別の字種と考えたい。9世紀第Ⅱ・Ⅲ四半期である。

さて「第成」は、8世紀第Ⅲ四半期に8点で登場し、第Ⅳ四半期には、41点と急成長するが、9世紀第Ⅰ四半期には、僅か2点となってしまう。この点も前の「土万」と共通していよう。

④筆跡の特徴　「第成」の特徴は、「第」の竹冠を「艹」と書くことである。全体を13群（16類）に分類した。

〔第1群〕253～263は、成の楷書の第2画が、斜め右下に向かって書かれる。そのため「氏」に近い。

（第1類）253・254は、「第」の第6画が、弓なりに長く書かれる。第8画も第6画と第7画の交点から始まる。同筆の可能性が高い。

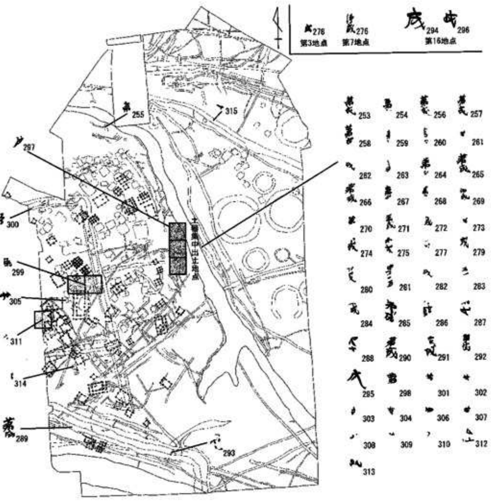
（第2類）255～257は、第5画の後に第6画を斜めに入れる。第7画は、第1類に比べ短くまとまる。第9画は、第7画と第8画の交点から始まり第1類と同様である。

（第3類）258は、第9画が第8画の起点から、259は、第7画が、第6画の起点から始まり、縦に長く引かれる。

（第4類）260～263は、第1類～第3類と共通するが、残画のみのため分類不可能な一群である。

〔第2群〕264～266は、「第」・「成」ともに極度の右上がりである。「成」の楷書の第2画が、縦

に伸びて左下向きに強く止まる。また「第」の第8画(264・266)、第9画(265)が、第4画と第7画(264・266)、第8画(265)の交点から出発し、45度斜め左下へ向かって伸びる。さらに「第」と「成」の二字が、弧を描くように書かれる。三点とも良く共通し、同筆の可能性が高い。



第204図　**「第成」の分布**

〔第3群〕267～270は、「第」の第8画(267・268・270)、第5画(269)が、第5画(267・268・270)、第2画(269)と第7画(267・268・270)、第4画(269)の交点から始まる。

また第6画(267・268・270)、第3画(269)が、きついS字状となる。「第」の第3画が、第2画よりも突き出る。第8画(267・268・270)、第5画(269)が全体に短く、文字が縦長である。

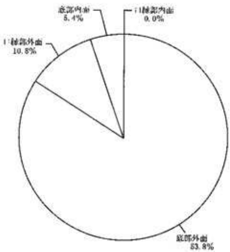
〔第4群〕271～273は、271・273の「第」と、271・272の「成」が共通する。前者は、第の草冠が、第3画を突き抜けず、「弟」のように書く。後者は、成の第2・3画と第4画が大きく開いている。また三点とも大きさが共通する。同筆の可能性がある。

〔第5群〕274～277は、楷書の「成」の第6画と第5画が、点→払いの順に書かれる。また楷書の「成」の第6画の点が、第1画の上に打たれる。276は、「浄成」だが、「成」が共通するためにここにあげた。

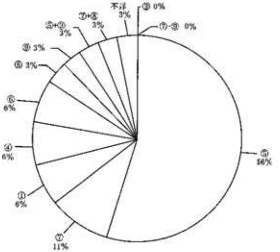
〔第6群〕278は、「成」のみだが、第4画が立ち気味に書かれ、極端に短いため、中心軸が左側によっている。

〔第7群〕279～284は、楷書の「成」の第6画と第5画が、第5群と共通する。また楷書の「成」の第1画が、右斜め上に向かって伸び、第2画より左に突き出る。281は、第1字が判読できないが、「第成」ではない。

〔第8群〕285～289は、筆の圧力が強く、太く書かれる。楷書の「成」の第5画が短く、全体にバランスが悪い。また全体に右下がりである。さらに楷



第205図　**「中」の記載部位**



第206図　**「中」の底部外面記載方法**

書の「成」の第６・５画は、点画→払画の順である。そのため「成」が全体に四角くなる。288は、第１字が判読できないが、「第成」ではない。

〔第９群〕290～293は、筆跡の共通する文字のない一群である。

290は、「第」が全体に右に傾き菱形となる。また「成」は大きく書かれ、全体のバランスがよい。第６画が、第１画の真横に打たれるのは異例である。

291・292・293は、第１字が、「第」の可能性は低い。三点とも判読できないが、北島遺跡の中では、これまでの「第成」に比較的近い。

〔第10群〕294～297は、「成」のみの一群である。全体に大振りで第６画を書かない。また294・296は、同一土器の内外面に書いた文字である。

〔第11群〕298～310は、「第成」の「第」の残画と判断した一群である。これまでの分類と共通しない。残画で判断しにくい。

〔第12群〕311・312は、「第」の下部と「成」の上部が残存した一群である。ただし両者が「第成」である可能性は低い。

〔第13群〕313～315は、「成」の残画である。分類に当てはまらない一群。

⑤文字の分布　63点中土器集中出土地点からの出土が、49点と最も多い。この土器集中出土地点に隣接した第145号土壙からも出土が見られる。

竪穴住居跡からの出土はなく、第269号土壙や第85号井戸からの出土がある。また道路跡の南側溝の第325号溝や西側台地の北側斜面にあたる第51号溝からも出土があった。

またL15やN13グリッドからも出土した。しかし土器集中出土地点以外は、出土が散漫でまとまりにやや欠ける。

なお、第37号溝から出土した315は、「成」ではなく、別の文字である可能性も考えておくべきであろう。

中・中人・中人君（第255図316～第256図352）

①墨書内容　316、317、319～344、346～352は、「中」または、「中人」と判断した。318は「中人君」、345は「田」かもしれない。

「中」と書かれた墨書土器を出土した遺跡は意外と少ない。武蔵国内では、埼玉県行田市池上遺跡・（中島他1984）小敷山遺跡（吉田1996）・鶴ヶ島市一天狗遺跡（西川他1981）・鴻巣市新屋敷遺跡（昼間1998）・本庄市将監塚・古井戸遺跡（赤熊1988）・東京都葛飾区本郷遺跡（谷口他1989）・日野市落川遺跡（福田1996）・神奈川県横浜市古梅谷遺跡（小宮1995）などで出土しているに過ぎない。

第207図　「中」の変遷

各遺跡とも8世紀から9世紀前半にかけて展開した地域の核となる集落である。小規模な集落遺跡からは、「中」が出土していない点は、注目すべきである。

なお、池上遺跡では、8世紀末から9世紀後半にかけて11点の出土が見られ、北島遺跡に次いで多い。また東京都北区中里遺跡では、8世紀末から9世紀後半にかけて、「中」の墨書土器が5点出土した。なお他の遺跡では、1点のみの出土である。

このことから北島遺跡の「中」は、池上遺跡や中里遺跡の「中」に近い。「中」は、地域内の当該集落の位置、集落内の宅や家の位置などを示すと考えたい。

ここで問題となるのが、北島遺跡で出土した「中人」や「中人君」であり、これは、人名か職掌、つまり「仲人」と同義であろう。後述の第1・2群と他群が大きく異なることからも分かる。

ちなみに「仲人」は、全国的な類例は乏しいが、千葉県佐倉市江原台遺跡・東金市滝台遺跡・茨城県石岡市鹿の子C遺跡などで出土している。とくに江原台遺跡では、「中人」の他に「中村」「中村家」「子中」「中」「仲」などの墨書土器がみられる。

墨書土器の分析から江原台遺跡は、「中村」と呼ばれ、「中村家」という紐帯を通じて結束していたらしい。

②墨書位置　墨書は、底部外面が圧倒的に多く、83.8％を占める。次いで口縁部外面の10.8％、そして底部内面が5.4％である。

最も多い底部外面は、底部中央の⑤が56％と圧倒的に多く、次いで左上の⑦、上中の①、左よりの④、底部全面の⑥となる。つまり底部の左上から中央、あるいは底部の全面に書かれたこととなり、右寄りや下寄りに書かれた文字はない。この点は、「綱」や「土万」と共通する。

③土器の年代　墨書土器「中」は、8世紀第Ⅰ四半期から9世紀第Ⅳ四半期におよぶ。とくに8世紀第Ⅰ・Ⅱ四半期の「中」は、極小さく「中人」「中」、あるいは「中人君」と書かれる。

中字の「中」は、8世紀前半から見られるが、8世紀第Ⅲ・Ⅳ四半期に急速に上昇し、9世紀に入ると急速に少なくなる。9世紀第Ⅰ四半期からは、大字の「中」が登場し、9世紀第Ⅳ四半期まで続く。

また9世紀第Ⅱ四半期までは、第2画の縦画を忠実に書くが、9世紀第Ⅰ四半期から第2画と第3画を続けて書くようになる。

④筆跡の特徴　「中」には特徴が少ないが、第1画と第2画の書き方に特徴が見られ、全体を8群（11

第208図　**「中」の分布**

類）に分類できた。なお、343・344と346・347のように同一の土器に記載されていることから確実に同筆といえる墨書以外に同筆はない。

〔第1群〕316・317は、小さく「中」または「中人」と書く一群である。細い穂先の筆を用い、筆を立てて書いたようである。「人」は、ひらがなの「ん」に近く表現される。

〔第2群〕318は、「中人君」と書かれた墨書土器である。第1画が、右斜め下に向かい、第2画の折れた跡が、内側に向かう。最大の特徴は、第3画の横棒が、長く書かれ、「央」に近い。同様の例は、319である。「人」・「君」ともに右払いが、太くまとまる。

〔第3群〕320～329は、第1・2画の縦画が、垂直に伸びる一群である。第4画によって等分された四角が、正方形に近い。

（第1類）320～324は、第4画の伸びが短かい。

（第2類）325～327は、第4画が、長く伸びる。

（第3類）328・329は、大きく書かれた「中」である。

〔第4群〕330～332は、第1画、第2画ともに縦画が斜めとなり、台形状となる一群である。

〔第5群〕333～342・348は、第1画を縦に書き、第2画が、一端折れた後、斜めに入る一群である。333～337は、小さく書かれた一群である。

338は、「中」を中央に書いた後、土器を90°回転して横に再び「中」と書く。348も共通するが、348は、土器を回転させて二字目を書いたようである。339～342は、中字の墨書である。

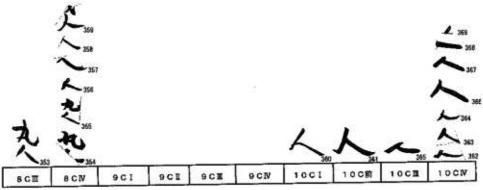
〔第6群〕343・344は、同一の土器の内外面に書いた文字である。第1画は、第2・3画と離れ、第3画より大きく突き出る。第2画と第3画は、連続して書く。

〔第7群〕345～347は、底部に大きく書いた文字である。

（第1類）345は、第1画と第2画を円形に表現

する。筆の勢いが強く、掠れて書く。「中」ではなく、「十」を○で囲んだのか、「田」かもしれない。

（第２類）346・347は、同一の土器の内外面に書いた文字である。やや太めの穂先で力強く書き、第２画は、左下に払うように書く。



第209図　「丸人」の変遷

〔第８群〕349～352は、残画から「中」と判断した一群である。

⑤文字の分布　37点中土器集中出土地点から26点出土した。

遺構からは、調査区の南側に集中し、第236号溝（336）と第372号土壙（352）、そして道路跡の北側側溝（316）が出土した。またM16グリッドからも出土した。

この他、第２地点（４点）や第14地点（３点）からも出土した。

丸人・人（第257図353～369）

①墨書内容　353～358、360～369は、「丸人」・「人」と判断した。359は、「成人」と判断できよう。「丸人」と「成人」は、人名かもしれない。「成人」は、しばしば各地の墨書土器に見られるが、「丸人」は、これまで墨書土器として記載例がない。

また「人」一字は、「我」とともに10世紀を象徴する墨書土器で、願文と考えたい。

②墨書位置　底部外面が４点、口縁部外面が７点、口縁部内面が６点と、墨書の書かれ方に相違がある。しかし「丸人」（353～359）（「口人」を含む）と「人」（360～369）を分けて考えると、「丸人」は、356の１点のみが、底部外面に書かれ、他の６点は、口縁部外面に書かれた。また書かれ方は、③（２点）または④（４点）であり、「第成」の書かれ方と近い。

ところが「人」は、口縁部外面と口縁部内面、さらに底部外面に書く。口縁部の内外面に書く場合は、後述する「我」や「龍」が共通する。文字の方向は、全て①である。底部外面に書かれた「人」は、２点とも灰釉陶器である。

③土器の年代　「丸人」・「成人」は、８世紀第Ⅲ・Ⅳ四半期のみに見られる。８世紀第Ⅳ四半期が最も多い。

それに比べ「人」は、10世紀第Ⅰ四半期からみられ、第Ⅳ四半期にピークとなる。「我」と共通するが、同一の土器に「我」と書かれた事例はない。

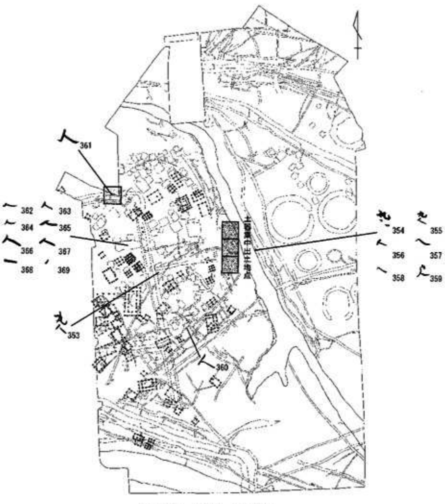
④筆跡の特徴　「丸人」が３点、「人」が10点、「□（成）人」が４点みられた。「人」を中心に分析する。ここでは、全体を６群（７類）に分類した。

〔第１群〕353～358は、「人」の第１画が短く、第２画が長い。第２画が、45°に近く入る一群である。

（第１類）353～355は、「丸人」と書かれた一群である。「丸」は、三者三様であり、とくに線の太さ、文字の大きさが、異なる。353～354は、「丸」の第３画が、第１画と第２画にかかる。

（第２類）356～358は、欠損状態から「□人」である可能性が高い一群である。

〔第２群〕359は、「□人」だが、欠損部位から



第210図　**「丸人」の分布**

「成人」と判断できよう。ただし人は、第1画と第2画のバランスがとれており、第1群とは異なる。

〔第3群〕360は、第2画を「之」の払いのように書き、ひらがなの「ん」に近い。

〔第4群〕361は、穂先を太く使い、とくに第1画が、左下に払われるが、一端止まり左上に跳ねている。

〔第5群〕362～367は、第1画を短く、全体を扁平に書く一群である。

〔第6群〕368～369は、残画から「人」と判断した一群である。

⑤文字の分布　8世紀の「人」と10世紀の「人」を分けて考える。8世紀は、土器集中出土地点から6点出土し、残りは、僅か1点（353）が、廃棄土壙の第200号土壙から出土した。

10世紀は、調査区中央の第160号土壙から8点出土し、残りは、第217号溝やG14グリッドから各1点出土した。

我（第257図370～380）

①墨書内容　370～380は、「我」と判断した。ただし377～380の4点は、残画の判断であるため「我」以外の可能性も考える必要があろう。

「我」は、「人」と対をなす墨書土器である。墨書土器「我」の出土例は少ない。秋田県秋田市秋田城跡（秋田城跡調査事務所2000）、岩手県水沢市林前1遺跡（高橋他1997）、京都府相楽郡木津町上津遺跡（木津町教委1980）、岡山県赤磐郡山陽町馬屋遺跡（伊藤1995）、鹿児島県河内市薩摩国分寺跡（中島1985）などからの報告がある。

また平城宮（京）からは、長文の願文を記した墨書土器の中に「我念」や「我願」などの字句がある。

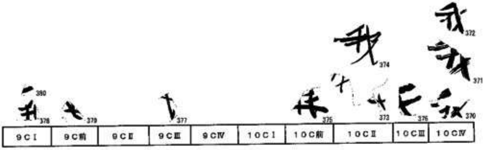
②墨書位置　底部に書かれず、口縁部外面が8点、口縁部内面が3点である。

「人」と同様、内外面に書かれる例があり、正位が圧倒的に多く、僅か一例が逆位である。

③土器の年代　377～380を除くと10世紀前半から10世紀第Ⅳ四半期にまとまる。この点は「人」と共通する。

④**筆跡の特徴**

「我」については、明瞭な相違点が見られないが、筆の使い方から全体を3群に分類した。全て大文字である。



第211図　「我」の変遷

〔第1群〕370～372は、全体に四角くまとまる。右画が小さい。筆が弾け毛羽立つ。370と371は、同一の土器の内外面に書かれた文字である。筆先が最初からまとまらず、とても毛羽立っている。

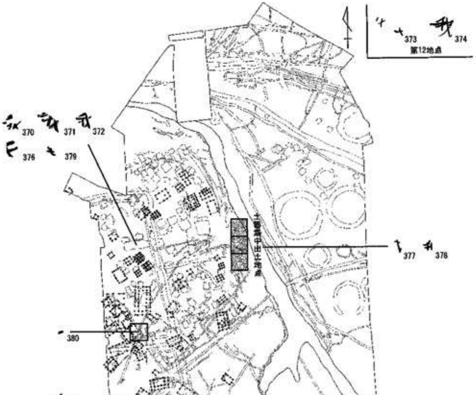
〔第2群〕373・374は、細い筆使いで書かれた文字である。373は、「我□」かもしれない。やはり同一土器の内外面に書かれる。

〔第3群〕375～380は、欠損部位が大きいが、「我」と判断した一群である。

⑤**文字の分布**

「我」は、10世紀代の「人」と共通し、10点中5点が、第160号土壙からの出土である。土器集中出土地点からも2点（377・378）出土した。また道路跡の北側溝（375）やO15グリッドからも出土した。

また373・374は、第19地点の西に隣接した第12地点から出土した。



第212図　「我」の分布

益（第258図381～392）

①**墨書内容**　381～392は、「益」と判断した。「益」にかかわる墨書土器は、北島遺跡を除いて全国で106点の出土がみられる。墨書土器の「益」には、宮

城県多賀城市山王遺跡の「継益」（吉野2000）、滋賀県守山市服部遺跡の「鳥益」（守山市教委1980）、などの人名がみられる。

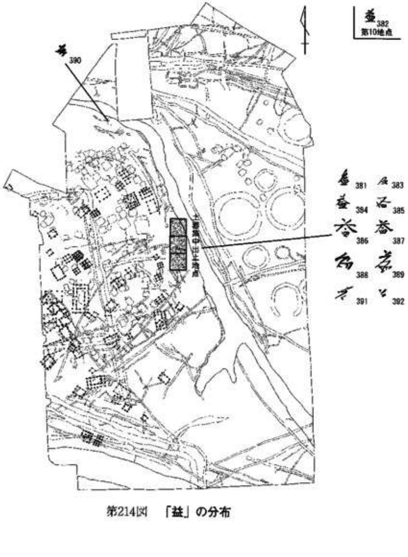
地名としては、駿河国益頭郡にかかわる「益大」「益尉」などが、静岡県藤枝市郡遺跡（八木1986）・御子ヶ谷遺跡（八木他1981）・鍬影遺跡（八木1986）などから出土している。

また「益」一字のみは、埼玉県鶴ヶ島市一天狗遺跡（西川1981）、山梨県東八代郡一宮町大原遺跡（平野1990）、滋賀県大津市穴太遺跡（岡本1989）他でみられるが、北島遺跡のように複数個みられる例は少ない。

ちなみに千葉県千葉市谷津遺跡では、「上益」23点（村田他1984）、同県八千代市白幡前遺跡では「益」

第213図　**「益」の変遷**

6点（大野1991）、東京都八王子市多摩ニュータウンNo107遺跡（福田1999）では、「益」8点が出土した。



第214図　**「益」の分布**

北島遺跡では、「益」の前後に連続する文字がないことから、これら三遺跡と共通した字句と判断した。

②墨書位置　全て底部外面に書かれる。12点の内6点が、土器の中央⑤に書かれ、他は中央を中心にやや離れた状態で書かれる。「綱」に近い。

③土器の年代　8世紀第Ⅱ四半期から9世紀第Ⅱ四半期にかけてみられる。8世紀第Ⅳ四半期には、ピークを迎える。文字の大きさは、中字と大字である。8世紀第Ⅳ四半期に大字が登場し、9世紀第Ⅱ四半期までみられる。

④筆跡の特徴　「益」は、上部の第1画から第5画までと、下の「皿」の書き方について、全体を三群に分類した。

〔第1群〕381～383は、第1

画から第4画までを流れるように書いて、楷書の第5画を水平に書き、左側に跳ねる書き方をする。「皿」は、楷書の第6画と第7画の下部が極端にすぼまる。

381と383は、楷書の第10画が、上部と同じ長さで書かれ、同筆の可能性が高い。382は、楷書の第10画がやや長く書かれ、「皿」の上に一画書かない。

〔第2群〕384～387は、第5画が右に力強く払われる。385を除き「皿」の上に一画入る。386と387は、「皿」の第5画が短く、「四」に近い。両者は、同筆の可能性が高い。また382と384も文字の全体のバランスが共通し、同筆かもしれない。

〔第3群〕388～392は、文字を大きく書く一群である。392を除き、楷書の第5画を第1群のように左側に跳ねる。389と391は、細字で書かれ、他は、太く力強い。

⑤文字の分布　「益」は、12点あるが、第19地点の南の第10地点にも1点みられる。他は、全て土器集中出土地点から出土した。

西、西秦（第258図393～第259図404）

①墨書内容　393は「西秦」、394は「榛」又は「秦」か。395～404は「西」と判断した。

393・394の「秦」は、『和名類聚抄』武蔵国幡羅郡条にみる「上秦郷」と「下秦郷」と関連しよう。諸本とも訓を欠くが、「かみつはた」「しもつはた」と読むらしい。

『日本地理志料』によると上秦郷は、妻沼町葛和田を中心とした地域、下秦郷は、熊谷市下奈良・上中条を中心とした一帯とある。また『大日本地名辞書』は、上秦郷を熊谷市上中条の一帯とした。

いずれにせよ上中条から奈良にかけての地域には、上と下に分かれた秦郷がかつて存在したわけである。しかし393の「西秦」は、秦を東西に分割する呼び方であり、「西秦」に対する「東秦」の存在を示唆する。

ところで近年、平川南氏によって、郡家からの意思伝達の順序が、『和名類聚抄』の郷名の記載順序と一致することが明らかになった（平川1995）。これによれば武蔵国幡羅郡は、上秦郷－下秦郷－広沢郷－荏原郷－幡羅郷－那珂郷－霜見郷の順に送られたこととなる。

仮に『大日本地理志料』や『大日本地名辞書』に従い、第215図のように復元すると、一筆書きで郡内を回ることができる。

広沢郷－妻沼町福川沿岸（『大日本地名辞書』）

荏原郷－深谷市江原付近（『大日本地理志料』等）

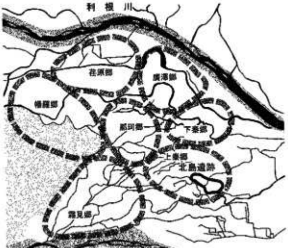
幡羅郷－深谷市原郷付近（『大日本地理志料』等）

那珂郷－熊谷市上奈良・下奈良付近（『大日本地理志料』等）

霜見郷－熊谷市三ヶ尻付近（『大日本地名辞書』）

ところで幡羅郡家正倉群と考えられる深谷市幡羅遺跡で大形の掘立柱建物跡群が、確認された。幡羅遺跡周辺を郡家所在郷として、幡羅郷または那珂郷とすると、その東に上秦郷・下秦郷が、存在したこととなり、上秦郷を上奈良・下奈良付近、下秦郷を中条から葛和田付近とすることができる。

つまり上秦郷と下秦郷が、東西に並ぶこととなり、あるいは、秦の西と東が、それぞれ上・下に分かれたのかもしれない。なお、『和名類聚抄』の成立が、



第215図　**古代幡羅郡の郡郷**

第216図　「西」の変遷

10世紀であることを考えると、元来、秦または秦郷と呼ばれた地域が、戸口の増加等によって東西に分割され、秦の西地区（西秦）を上秦、東地区（東秦）を下秦と呼ぶようになったと考えたい。

そこでこの土器が、8世紀前半であることから「西秦」の墨書は、上秦・下秦郷の登場する以前の地域呼称と考えたい。

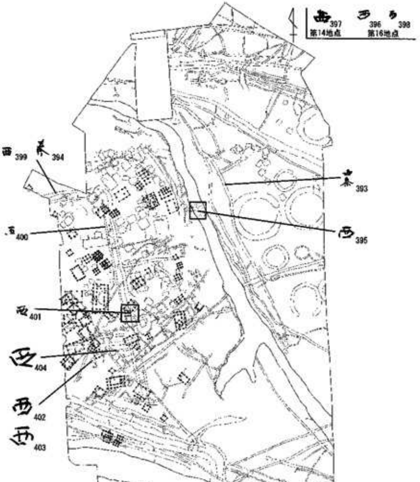
②墨書位置　393「西秦」のみ底部外面の上部から中央（①+⑤）にかけて書く。ほかは、底部外面3点、底部内面5点、口縁部外面4点である。口縁部外面は、正位の①である。

③土器の年代　「西秦」のみ8世紀前半である。「榛」あるいは「秦」は、9世紀前半。「西」は、9世紀第Ⅰ四半期から登場し、10世紀前半までみられる。9世紀後半がピークとなる。文字は中字が多いが、9世紀後半から大字がみられる。

④筆跡の特徴　「西」は、第2～5画の縦画の書き方に大きな特徴がある。ここでは、全体を四群に分類した。

〔第1群〕393は、「西秦」と記した土器である。「西」の第1画が、点画のように短く打たれ、第2画は大きく弓なりに湾曲して右上がりに書かれる。第1画と第3画は、右上がりだが、第6画は、水平に書かれる。ちなみに「秦」と比較するため394を上げた。394は、「榛」の可能性もある。

〔第2群〕395～397は、や



第217図　「西」の分布

や大きめに書かれた文字である。とくに395と396は、第4・5画が、第6画から大きく離れる。同筆の可能性もある。

〔第3群〕398～401は、中字の一群である。とくに399・400は、第1画が長く、「四」の両側面まで長さがある。同筆かもしれない。また401は、筆使いに強弱があり、第6画が右下に垂れる。

〔第4群〕402～404は、極端に大きく太く書かれた一群である。402と403は、同一土器の内外面に書かれた文字である。401・404は、第2画が小さく横画が、極端な右肩上がりの書である。

⑤文字の分布　「西秦」は、東台地の西端を走る第47号溝から出土した。

「西」は、土器集中出土地点からの出土していない。隣接するH21グリッドから1点（395）出土した。しかし「西」は、9世紀の区画溝に伴う遺構からの出土が多く、第87号溝394・399、第91溝400、第270号溝404など区画溝、井桁状の井戸枠が存在した第85号井戸からも出土（402・402）した。

灰釉陶器にも「西」が、書かれたことを考慮すると、土器集中出土地点の形成以降、区画溝が巡らされた施設や集団に方位の「西」が付けられたと考えたい。

この他に第19地点の南側、第14地点から1点、第16地点から2点出土した。

井、井、楊井（第259図405～412）

①墨書内容　405は「楊井」、406は「井」、407～412は、「井（イゲタ）」と判断した。

「楊井」は、『和名類聚抄』武蔵国大里郡条にある「楊井郷」のことであろう。同書の東急本や元和古活字本には、「也木井」の訓がある。また東京国立博物館蔵九条家本の『延喜式』裏文書「武蔵国大里郡坪付」にある「楊井里拾壱町参佰参拾肆歩」とも関連しよう。

楊井郷の比定地については、『大日本地名辞書』では、熊谷市大麻生周辺、『日本地理志料』では、熊谷市から江南町にわたる地域とする。なお、熊谷市楊井は、明治初年にできた地名である。

また「武蔵国大里郡坪付」を詳細に分析された原島礼二氏は、「楊井里」を熊谷市佐谷田東方に比定し、郡家里に東接する里と解釈された（原島1978）。一方、森田悌氏（森田1988）は、坪付け自体の方向を東西に長いと解釈し、郡家里の南に楊井里を比定した。

なお、大里郡は、『和名類聚抄』高山寺本に見られない郡家郷を含め、楊井・市田・余部の四郷で構成されていた。市田郷を大里郡大里町小泉周辺、郡家郷を熊谷市久下周辺とすると楊井郷は、大里郡の東半ということになる。

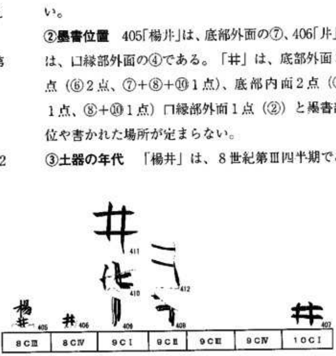
次に「井」である。「井」と「井（イゲタ）」は異なる。井戸を意味する「井」、井桁を意味する「井」であり、平川南氏の論考に詳しい。両者は、書き順が明確に異なる。「井」は、ヨコ→タテ→ヨコ→タテであり、「井」は、ヨコ→ヨコ→タテ→タテと書く。

「井」や「井」の類例は大変多い。

なお、「井」・「井」と「楊井」は、直接関係ない。

②墨書位置　405「楊井」は、底部外面の⑦、406「井」は、口縁部外面の④である。「井」は、底部外面3点（⑥2点、⑦+⑧+⑩1点）、底部内面2点（⑥1点、⑧+⑩1点）口縁部外面1点（②）と墨書部位や書かれた場所が定まらない。

③土器の年代　「楊井」は、8世紀第Ⅲ四半期であ



第218図　「井」の変遷

る。「井」は、8世紀第Ⅳ四半期から見られるが、9世紀第Ⅰ四半期にピークがあり、断続的ながら10世紀第Ⅰ四半期まで認められる。

8世紀第Ⅳ四半期の406のみが小字である。他は大字である。

④筆跡の特徴　「井」は、文字の大きさ、筆の使い方から四群に分類できる。

〔第1群〕405・406は、穂先を細く立てて書かれた文字で比較的小さい。とくに405は、「楊」の第1画が長く、全体に右上がりのバランスのとれた書である。

〔第2群〕407は、縦に詰まった書き方である。横画が、右から入り強く止まるのが特徴である。

〔第3群〕408～410は、筆が縦に二つに分かれながら書かれ、各画が太い。筆が、三点とも共通した割れ方であることから、同一の筆を用いて書かれた可能性が高い。

〔第4群〕411・412は、各画が、細く滑らかに書かれ、終筆は止まらず滑らかに書かれる。

⑤文字の分布　「楊井」と「井」の2点が、土器集中出土地点から出土した。他の「井」は、第16地点

第219図　**「少君」の変遷**

（5点）、第14地点（1点）から出土であり、第19地点からは、ほとんど出土がない。

人君・少君・小君・君（第259図413～422）

①墨書内容　413・414は「人君」、415・416は「少君」、417・418は「小君」、419～422は、「君」と判断した。ともに人名の一部であろう。

「少君」または「小君」は、同一人物か近い人物であろう。読み方については、『万葉集』巻20第444首の助丁秩父郡大伴部少歳が、「おとせ」「おとし」「わかとし」とされており(『吉田町史』(小林1982) 等)、「少君」・「小君」を、「おきみ」と読んでおきたい。

なお、419～422の「君」は、「□君」か「君□」のように前後に文字が続く可能性がある。これも人名と考えておきたい。

人名と考えられる墨書土器で「君」を含む事例は、意外と少なく、全国的にも8例しか見られない。「君手」・「君政」・「第君」・「君万呂」・「廣君」などである。北島遺跡と同様の「小君」は、熊本県熊本市大江遺跡（熊本市1996）や同市渡鹿遺跡（上田1975）にみられる。

なお、「君手」は、滋賀県高島郡今津町日置前遺跡（畑中1995)、「君政」は、三重県上野市高賀遺跡（穂積1991)、「第君」は、佐賀県神埼郡神埼町志波屋遺跡（四の坪地区）（七田他1993)、「(君) 万呂」は、石川県金沢市上荒屋遺跡（小西1993)、「君麻呂」は、富山県富山市水橋二杉遺跡（堀沢1997)、「廣君」は、福井県福井市上莇生田遺跡(山口1982)から出土した。

②墨書位置　口縁部外面が8点と圧倒的に多い。残りは、底部外面である。口縁部外面に書かれた文字は、④が7点と圧倒的に多く、1点のみ③である。この点は、「第成」の傾向に近い。

なお、底部外面の2点は、「君」のみである。

③土器の年代　「人君」・「少君」・「小君」ともに8世紀第Ⅳ四半期である。「君」の一部が、9世

紀前半に見られるが、その後は続かない。

④筆跡の特徴　「君」にかかわる文字を分類した。文字の構成、筆の使い方から４群５類に分類した。

〔第１群〕413・414は、「人君」である。文字の大きさ、バランスともに共通し、同筆の可能性が高い。「君」の楷書の第４画が、第１画を突き出ない点は、第３・４群と共通する。

〔第２群〕415・416は、「少君」である。「少」は、第４画（払い）の後、右下に第５画の点をやや長く打つ。また「君」は、第４画が、第１画を突き出る。また「君」の第３画が長い。「書」に近い。同筆であろう。

〔第３群〕417・418は「小君」である。君の楷書の第２画が、払いのように書かれる。

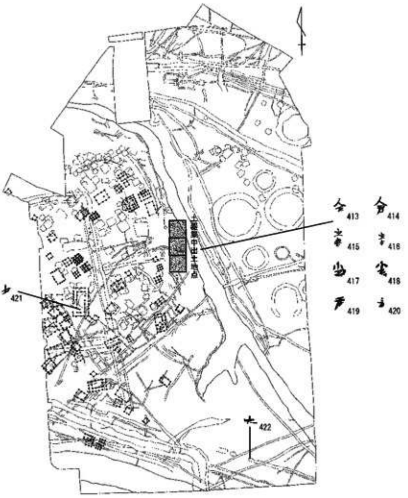
〔第４群〕419～422は、「君」と判断した。欠損部が大きく、連続する文字を確認できなかった。「君」の下に文字が続く可能性がある。

（第１類）419・420は、第１・３群と同様、君の楷書の第４画が、第１画を突き出ない。

（第２類）421・422は、第２群と同様、「君」の楷書の第４画が、第１画を突き出る。

なお、417～422は、413～416に比べ大きな文字である。

⑤文字の分布　８世紀第Ⅳ四半期の「小君」「人君」は、全て土器集中出土地点からの出土である。これに対して「君」土器は、９世紀の区画溝内の中心的施設である第36号掘立柱建物跡と、道路跡の北側溝の第386号溝から出土した。

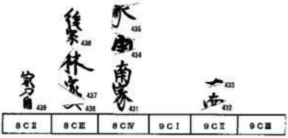


第220図　**小君の分布**

第221図　**「下」の変遷**

下内・下（第259図423～430）

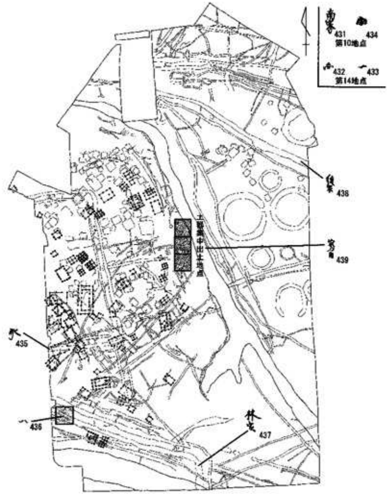
①墨書内容　423・424は「下内」、425～430は「下」と判断した。



第222図　**「家」の変遷**

「下」は、位置名称であるから対応する「上」が、存在するはずであるが、北島遺跡では、後述する「日上」の「上」だけで「上内」はない。

②墨書位置　底部外面が7点と圧倒的に多く、残りは、口縁部外面1点である。底部外面に書かれた位置は定まらない。



第223図　**「家」の分布**

③土器の年代　8世紀第Ⅲ四半期にピークがあり、9世紀第Ⅱ四半期まで見られる。423のみ小字であり、他は、中字である。

④筆跡の特徴　「下」を分類した。文字の構成、筆の使い方から4群に分類した。

〔第1群〕423は、小字である。しかし「下」の第1画が太く、筆の入りは30°近くに入る。

〔第2群〕424は、「下」の第1画が、極端に右上がりの文字である。「内」は、「田」や「由」とも読める。縦画・横画が、共通した太さで書かれ、ゴチック状である。

〔第3群〕425〜428は、第1画に比較すると第2画が極端に長い。さらに第3画が、45°右下に向かってやや長く引かれる。

〔第4群〕429・430は、第1画と第2画の長さが共通する。第3画の入りや位置などは、全く異なる。

⑤文字の分布　8点全てが、土器集出土地点からの出土である。

南家・南・林家・後家・家刀自

（第260図431〜439）

①墨書内容　431は「南家」、432〜434は「南」、435・436は「家」、437は「林家」、438は「後家」、439は「家刀自」と判断した。

「南家」・「後家」・「林家」などは、「家」という集団の呼称（家号）である。「家」は、集落の中心的施設などを方位や前後左右などの位置名称、特徴的景観や職掌などで表現される。

おそらく「南家」に対応する東家や西家・北家、あるいは「後家」に対応する前家や上家・下家なども推定できよう。さらに「林家」

は、林という景観名称の他に労働を「はやす」意味があり、協業を推進した先導者という職掌の家号も考えられよう。

また435・436の「家」は、上部を欠損していることから「□家」となり、共通した「家」の可能性が高い。

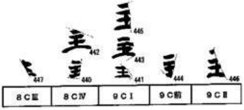
また「南」は、位置名称であり、下部が欠損することから一応、「南家」かその省略形であろう。

一方「家刀自」は、人名である。美濃国半布里戸籍の例を挙げるまでもなく、女性の人名である。『日本霊異記』では、「家長（いえぎみ）」に対応する「家室（いえとじ）」が、家の実権を握っていたことが分かるが、ここに記された「家刀自」も同様の存在と考えておきたい。

なお、武蔵国内から出土した墨書土器の「家」では、「南家」（埼玉県草加市西地総田遺跡：高橋1983）、「大家」（埼玉県本庄市将監塚・古井戸遺跡：赤熊1988、埼玉県大里郡江南町寺内廃寺：新井他1993、東京都北区中里遺跡：峰沢1989）、「下家」（埼玉県狭山市宮地遺跡：石塚1997）、「加家」（東京都国立市仮屋上遺跡：国士舘大学1970）などがある。

②墨書位置　底部外面が7点、底部内面が1点、口縁部外面が1点である。底部外面上の位置は、まとまらない。「家」として括った墨書土器が、異なった対照を指すためであろうか。

③土器の年代　「家刀自」のみが先行して8世紀第Ⅱ四半期である。他の文字は、8世紀第Ⅲ四半期から9世紀第Ⅱ四半期までみられる。とくに8世紀第Ⅲ四半期から第Ⅳ四半期に集中する。

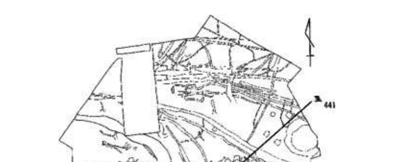


第224図　**「主」の変遷**

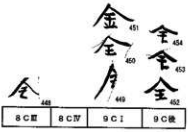
④筆跡の特徴　「家刀自」のみ小字であり、他は中字である。大字は、見られない。

「南」または、「家」にかかわる文字を3群に分類した。

〔第1群〕431～433の「南」、及び435・436の「家」は、全体に縦長の文字で縦画が、次第に細くなって



第225図　**「主」の分布**



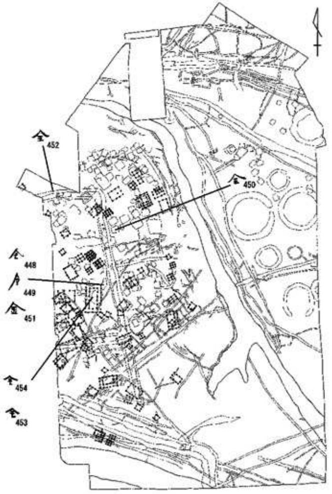
第226図　「金」の変遷

いく。筆の穂先の入りが細く、30°に近い。

〔第2群〕434は、肉太で横長の文字である。

〔第3群〕437～439の「家」は、楷書の第9画の右払いが短く止まり、第4画が短い。

⑤文字の分布　家にかかわる墨書土器は、出土の傾向が大きく異なる。



第227図　「金」の分布

まず人名の「家刀自」は、土器集中出土地点から出土したが、家号的な墨書土器は、大きな溝からの出土である。「林家」(437) は、「(□) 家」(436) とともに道路跡の南側溝第325号溝、9世紀の区画溝の第206号溝から「(□) 家」、そして9世紀後半に古墳群を貫く大形用水路の第37号溝から「後家」が出土した。

なお、第19地点の南の第10地点から「南家」(431)「南 (□)」(434)、第14地点から、「南 (□)」が2点 (432・433) 出土した。第10・14地点が南家ならば、北北東の方角である第19地点は、北家か後家にあたる。

主（第260図440～447）

①墨書内容　全て「主」の一字である。「主」の墨書土器は、全国各地で出土している。ここでは「主」を人名や職掌の一部と考えず、一字の「主」と考えたい。

②墨書位置　底部外面が7点、口縁部外面が1点である。底部外面のとくに中央上の①に4点が集中する。他は左よりの⑦・⑨である。底部外面は、正位①である。

③土器の年代　8世紀第Ⅲ四半期から9世紀第Ⅱ四半期まで見られる。9世紀第Ⅰ四半期に集中する。

④筆跡の特徴　第1画の点画が、横に長く引かれるのが特徴である。全て中字である。3群に分類した。

〔第1群〕440・441は、細字で小さく書かれた文字である。

〔第2群〕442は、第5画が、極端に長く全体に横広がりである。

〔第3群〕443～444は、太い運筆で全体に縦長に書かれる。443・444は、筆の入りが60°に近く、445・446は、30°に近い。両者は、それぞれ同筆かもしれない。

⑤文字の分布　8点の内6点が、土器集中出土

地点からの出土である。他は、9世紀の区画溝の第87号溝、東台地の第44号土壙からの出土した。

全・金（第260図448～454）

①墨書内容　448～450、452～453は「全」、451のみ「金」と判断した。墨書土器の「全」または「金」は、全国各地で出土する。

②墨書位置　底部外面が5点、底部内面が1点、口縁部外面が1点である。文字を書く位置に集中性がない。

③土器の年代　8世紀第Ⅲ四半期に448があるが、9世紀第Ⅰ四半期、9世紀後半に集中的に出土する。

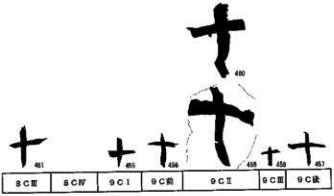
④筆跡の特徴　第1・2画と最終画に特徴がある。中字のみである。3群に分類した。

〔第1群〕448・449は、細字で流れるように書かれる。とくに第5画から第6画は、一筆で書かれる。第1・2画が、「人」に近い。

〔第2群〕450～452は、第2画を長く書く特徴がある。「人」の第1画と第2画も交叉する。とくに450と451は共通し、同筆かもしれない。

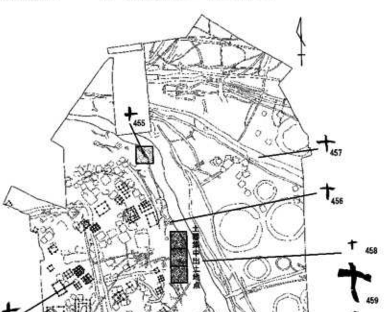
〔第3群〕453・454は、第5画が止まった後に跳ね、右に止まる。「令」に近い。

⑤文字の分布　「金」は、土器集中出土地点から出土がない。その一方で、区画溝の第87号溝（452)、廃棄土壙の第240号土壙（448・449・451)、第42号井戸（453・454)、そして第117号竪穴住居跡から出土し、廃棄土壙の形成や大形井戸の埋設、区画施設の設置にかかわる土器である。

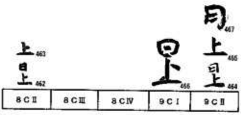


第228図　**「十」の変遷**

十（第260図455～第261図461）



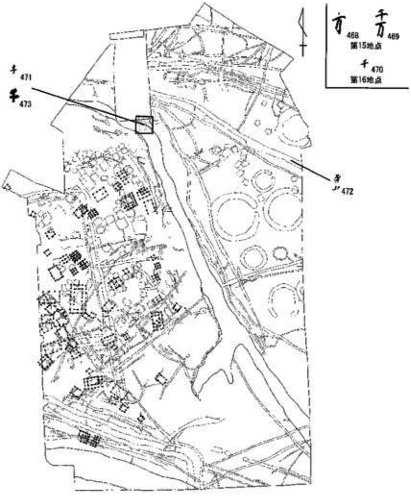
第229図　**「十」の分布**



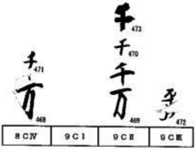
第230図　**「日上」の変遷**

①墨書内容　全て「十」と判断した。「十」は、数詞であるが北島遺跡では、「九」や「三」など他の数字の記載例はない。「十」は、全国各地から出土する。

②墨書位置　底部外面が3点、底部内面が1点、口縁部外面が3点である。文字の書く位置に集中性はない。



第232図　**「千万」の分布**



第231図　**「千万」の変遷**

③土器の年代　461が、8世紀第Ⅲ四半期にあるが、主体は、9世紀第Ⅰ四半期から9世紀後半である。459・460は大字だが、他は中字である。

④筆跡の特徴　文字の特徴が乏しいが、大きさから三群に分類した。

〔第1群〕455～457・461は、中間の大きさで筆を斜めに入れ、滑らかに書く。

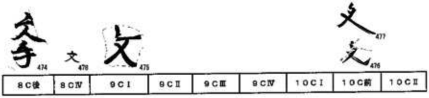
〔第2群〕458は、小文字で第2画が止まる。

〔第3群〕459・460は、同一土器の内外面に太く大きく書かれた文字である。底部の大きさを超えている。

⑤文字の分布　8世紀第Ⅲ四半期の461のみが、西台地中央の第134号住居跡から出土した。9世紀前半の455・456・458・459・460は、土器集中出土地点や第106号溝、D19グリッドなど中央部の低地帯に分布する。また9世紀後半の大形用水路である第37号溝から457が出土した。

日上（第261図462～467）

①墨書内容　462・464・466は「日上」、463・465は「上」、



第233図　「文」の変遷

467は「日」と判断した。「日上」は、二字の熟語と考えた。日が昇るという意味であるが、なぜこれが墨書されたか分からない。

②墨書位置　底部外面が2点、底部内面が4点である。内外面に書かれた土器が2点ある。つまり「日上」または「上」は、内面に必ず書かれたこととなる。部位は、底部の中央⑤とその周辺である。

③土器の年代　8世紀第Ⅱ四半期にみられるが、その後、8世紀後半には見られなくなり、9世紀第Ⅰ・Ⅱ四半期に再び見られる。

④筆跡の特徴　文字の大きさと「上」の第3画の状況から三群に分類した。

〔第1群〕462・463は、小字である。「上」の第3画が下向きに入った後、左上に向かい止まる。

〔第2群〕464・465は、やや大きな文字で「上」の第3画が、右上に向かって止まる。

〔第3群〕466・467は、大きく太く書かれた文字で「日」に近い。

⑤文字の分布　第19地点からの出土はない。第14・15地点から出土した。

万・千（第261図468～473）

①墨書内容　468・469・472は「千万」、他は「千」と判断した。

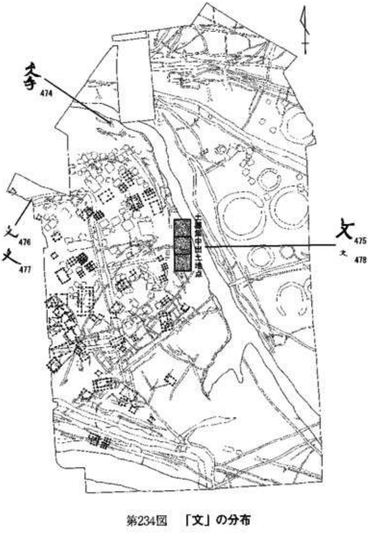
「千万」は、「一万」「十万」などとともに出土することがあり、万燈会とのかかわりを述べる場合がしばしばある。また「土万」との関連から人名の可能性も考えたい。

②墨書位置　底部内面が3点、口縁部外面が3点である。底部外面には見られない。口縁部外面は、正位と逆位である。

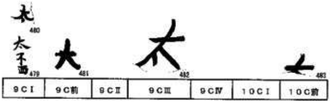
③土器の年代　8世紀第Ⅳ四半期に登場し、9世紀第Ⅱ・Ⅲ四半期に集中する。

④筆跡の特徴　文字の大きさと「千」の第2画の長さから3群に分類した。

〔第1群〕468・469は、大文字である。「万」の第2画と第3画が接近し、狭く平行する。



第234図　「文」の分布



第235図　**「太」の変遷**

〔第2群〕470～472は、小文字である。472の「千」は、「千」ではなく、「手」または「寺」の可能性もある。

〔第3群〕473は太く書かれ、第2画が短い。

⑤文字の分布　「千万」・「千」は、9世紀後半の大形用水路の第37号溝（472）、低地帯北端のC19グリッド（471・473）が出土した。

また第15・16地点から3点の出土がある。

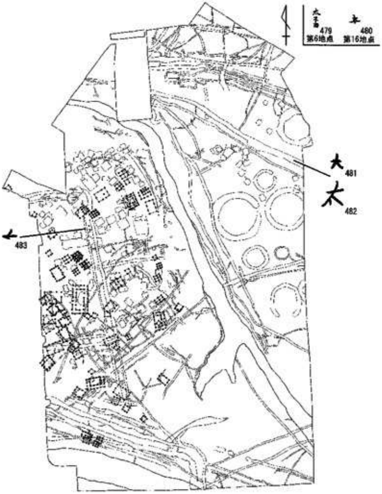
文手・文（第261図474～第262図478）

①墨書内容　474は「文手」、他は「文」と判断した。「文手」は、人名の一部であろう。「ふみて」または「あやて」と読むのであろう。

なお、一文字の「文」は、人名や氏族名の可能性を考えたが、ここでは保留しておく。

②墨書位置　底部外面が3点、中央⑤付近に書かれ、口縁部外面と内面が、1点ずつある。

③土器の年代　8世紀後半に集中する。2点のみ10世紀前半である。476は、「文」よりも「叉」に近く、別字かもしれない。



第236図　**「太」の分布**

前者でも478は、小字で8世紀第Ⅳ四半期に書かれた。他は、中字である。

④筆跡の特徴　文字の大きさと「文」の第1画の入り方から4群に分類した。

〔第1群〕474は、大文字で第1画は、第2画と連続して書く。左右のバランスが良く、整った文字である。

〔第2群〕475は、やはり大文字で、全体に右に片寄っており、「文」ではないかもしれない。全体に太く書く。

〔第3群〕476・477は、同一土器の内外面に書いた文字である。第1画と第2画は連続して書く。第4画は、低い位置から始まる。第4画で筆が二つに割れる。文ではなく、「事」あるいは「叉」か。

〔第4群〕478は小文字である。左右対称の整った文字である。

⑤文字の分布　「文手」は、中央河

川跡の北端、第51号溝から出土した。「文」は、土器集中出土地点と区画溝の第87号溝から２点ずつ出土した。

太不西・太・大（第262図479～483）

①墨書内容　479は「太不西」、481は「大」、483は「大」か「太」か判断できないが、他は「太」と判断した。

第237図　**「兵」の変遷**

「太不西」は、意味不詳。「太不ゝ西」か、「太不の西」か、「太不西」で一つの熟語か判断できない。「大」または「太」の墨書土器は、太田部とのかかわりを指摘される場合がしばしばある。北島遺跡では、「太田」の墨書土器はない。

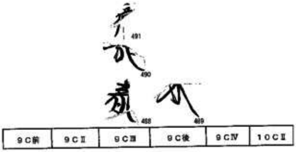
②墨書位置　底部外面が１点、底部内面１点、口縁部側面３点である。

③土器の年代　９世紀第Ⅰ四半期に「太不西」が見られ、その後10世紀前半にかけて僅かながら見られる。479・480は小字、482・483は大字である。

④筆跡の特徴　文字の大きさと第１画の入り方から四群に分類した。

〔第１群〕479は、小文字で線に強弱がある。「西」は、第４・５画が、縦二本線で表現される。

〔第２群〕480は、第１画と第２画が大きく外に外反し、「本」と近い文字と

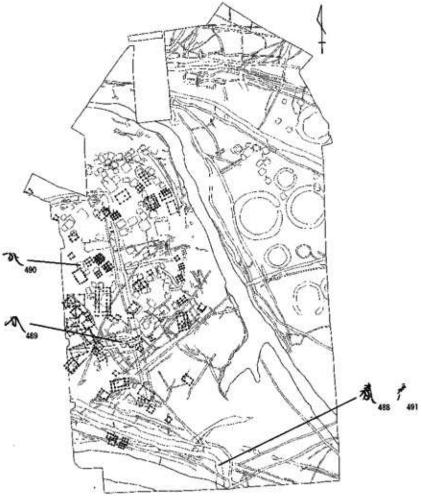


第238図　**「龍」の変遷**

なる。太い文字である。

〔第３群〕481は、やや小さな文字であるが、太く書かれる。

〔第４群〕482・483は、太く大きく書いた文字で第１画が大きく斜めに傾く。



第239図　**「龍」の分布**

⑤文字の分布　「太」・「大」は、9世紀後半の大形用水路の第37号溝から481・482が出上し、区画溝から483が出土した。なお、第6地点から「太不西」、第16地点から「太」が出土した。

兲（第262図484～487）

①墨書内容　484～487は「兲」である。読みは不詳。

②墨書位置　底部外面が3点、口縁部側面が1点である。

③土器の年代　9世紀第Ⅰ四半期から第Ⅱ四半期にかけてみられる。中字である。

④筆跡の特徴　兲の足にあたる「八」と「正」との関係で二つに分類した。

〔第1群〕484・485は、八が、正から離れる。太く書かれる。

〔第2群〕486・487は、八が、正と付く。

⑤文字の分布　第19地点から出土がない。第2・3・8地点から出土した。

龍（第262図488～491）

①墨書内容　488～491は「龍」と判断した。

「龍」は、全国的に見ても少なく、僅かに7遺跡15例を知るに過ぎない。山形県川西町道伝遺跡「龍麻」（藤田1984）、福島県西白河郡東村谷地前C遺跡「龍」（阿部1980）、静岡県浜松市伊場遺跡「□(龍)」（向坂19）、愛知県岡崎市矢作川河床遺跡「龍・上」（岡崎市1983）、大阪府吹田市五反島遺跡「龍」（西本他1996）、大阪府八尾市萱振遺跡「龍」（井西他1992）、奈良県奈良市平城宮跡「龍□」（奈良国立文化財研究所1983）などがある。

道伝遺跡「龍麻」、平城宮跡「龍□」などは、人名の一部と考えられるが、谷地前C遺跡では、「龍」と書かれた墨書土器が、7点出土しており、北島遺跡の事例に近い。

②墨書位置　底部外面が3点、口縁部側面1点である。

③土器の年代　9世紀第Ⅲ四半期に集中している。

④筆跡の特徴　筆使いに強弱があり、比較的素速く書かれる。残画のみの破片が多い。文字を「龍」と特定するに止まる。

⑤文字の分布　「龍」は、9世紀後半の竪穴住居跡である第129号住居跡、第79号井戸、そして、道路跡の南側溝である第325号溝から出土した。

春山（第262図492～494）

①墨書内容　492・493は「春山」、494は「山」である。

「春山」は、「春の山」、「春山」という地名などとは別に人名の可能性も指摘しておきたい。宮瀧交二氏が指摘するように、高麗郡にかかわる人物が、武蔵介高麗朝臣大山や肖名広山など、「山」を名前の一字にもつことを踏まえ、埼玉県坂戸市・鶴ヶ島市若葉台遺跡から出土した「時山」・「高山」も人名の一部と考えられるからである（宮瀧2002）。

若葉台遺跡が、高麗郡や高麗郡とかかわる遺跡であることから「時山」「高山」が、高麗氏との関係を指摘できたとしても、北島遺跡の「春山」に高麗氏とのかかわりは指摘できない。しかし人名としての可能性を指摘することは可能であろう。

ちなみに「山」の付く墨書土器は豊富で、この他に千葉県印旛郡印旛村油作第2遺跡の「秋山」（村上1985）、同県佐倉市高岡大山遺跡の「有山」（高橋1993）、埼玉県狭山市小山ノ上遺跡の「小山」（中村1988）などを見ることができる。

②墨書位置　492・494は底部外面、493は、口縁部外面に墨書がある。

③土器の年代　492・493は8世紀第Ⅳ四半期、494は9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　492・493と494では、「山」の文字全体の傾きが異なる。

〔第1群〕492・493は、極端な右肩上がりの文字である。文字の大きさも小さい。同一の土器の内外面に書かれた文字である。

〔第2群〕494は、やや右に傾く文字である。筆

使いは細い。

⑤文字の分布　「春山」・「山」は、第14地点から出土した。

国・国万（第262図495～497）

①墨書内容　495・496は「国」、497は「国万」である。496は、国構えの中は、「玉」または「王」ではなく、別字かもしれない。

「国」は、「国玉」・「国神」などの熟語とともに出土する場合が多い。また「国万」は、「土万」「千万」などと同様、人名の一部と考えると、「国万呂」の省略か。

②墨書位置　496・497は底部外面、495は、底部内面に墨書されている。

③土器の年代　495は9世紀第Ⅲ四半期、496は10世紀前半でともに大字である。しかし497は、8世紀第Ⅳ四半期と離れている。しかも中字である。

④筆跡の特徴　国構えの書き方で二分する。

〔第1群〕495・496は、国構えを円形に書き表す。太く大きな文字である。

〔第2群〕497は、国構えを四角く書き、右肩上がりの文字である。やや右に傾く文字である。筆使いは細い。

⑤文字の分布　495の「国」は第1地点、496の「国」は第316号溝、497の「国万」は土器集中出土地点からの出土である。

麦（第263図498～500）

①墨書内容　498～500は、「麦」（麦の異体字）である。

古代の麦には、大麦と小麦があり、佐々木義則氏によると、9世紀以降に生産が盛んになるという（佐々木　2003）。備荒救急のために国家が、麦生産の奨励政策を行ったことで、急速に展開したという。

墨書土器の「麦」が、大麦か小麦かは分からないが、北島遺跡で「麦」という食物を認識し、土器に墨書した行為のあったことは確かである。

②墨書位置　498・499・500は口縁部外面に墨書されている。

③土器の年代　498は、8世紀第Ⅳ四半期、499は、9世紀第Ⅱ四半期、500は、9世紀第Ⅱ四半期である。

④筆跡の特徴　大きな文字で筆使いも荒く、強弱がはっきりしている。分類不可能。

⑤文字の分布　498の「麦」は第16地点の第30号溝、499の「麦」は第9地点の第6号溝からの出土である。

蘇（第263図501～503）

①墨書内容　501～503は、残画から「蘇」と判断した。

「蘇」は、乳製品の一種でクリームやコンデンスミルク、バターに近い。『延喜式』等にその製法が述べられているが、牛乳を熱処理して作る方法と、発酵させて「酪」を作り、その酪を加工して「蘇」とする方法がある。

また「蘇」は、日本全国で作られていたようである。『延喜民部省式』には、年ごとに「蘇」を貢納する国々が上げられている。

ちなみに武蔵国は、第二番として寅と申の年に伊賀国、安房国、下総国、上総国、常陸国とともに納めることとなっていた。その負担量は、大一升の壺七口、小一升の壺十三口、合わせて二十壺であった。この負担量は、下総国、常陸国と並んで全国で最も多い。

②墨書位置　501・502は口縁部外面、503は底部外面に墨書している。

③土器の年代　501は9世紀前半、502は9世紀第Ⅰ四半期、503は9世紀後半である。

④筆跡の特徴　「蘇」の草冠の下に書かれた禾と魚が、左右入れ替わる。断片のみのため分類不可能。

⑤文字の分布　501・503の「蘇」は第87号溝、502の「蘇」は第240号土壙から出土した。

良（第263図504～506）
①墨書内容　504～506は、残画から「良」と判断した。
②墨書位置　504・505・506は、底部外面に墨書している。
③土器の年代　504は8世紀第Ⅲ四半期、505は8世紀第Ⅳ四半期、506は9世紀第Ⅰ四半期である。
④筆跡の特徴　「良」の上部が大きく、下部が小さい。「艮」や「昆」に字形が近い。肉太にゆっくりと書いたようである。
⑤文字の分布　504・505は、第16地点の第30号溝、506は、第16地点のグリッドから出土した。

息（第263図507～509）
①墨書内容　507は、残画から「息」と判断した。508・509は、部分のみだが、息の心に近い。
②墨書位置　507は口縁部内面、508・509は口縁部外面に墨書されている。
③土器の年代　507・508は10世紀第Ⅲ四半期、509は10世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　507は、筆のしなりが強く滑らかに大きく書かれ、筆の使いが素速い。
⑤文字の分布　507～509の「息」は、第60号土壙から出土した。

レ（第263図510～512）
①墨書内容　510～512は、チェック記号の「レ」と判断した。
②墨書位置　510は底部外面、511・512は口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　510は10世紀第Ⅲ四半期、511は9世紀前半、512は11世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　三点とも太く大きく書かれた文字でである。筆も素速く動く。とくに510と512は、同一の土器に書かれた文字である。
⑤文字の分布　510・512の「レ」は河川跡、511の「レ」は第51号溝から出土した。

風内（第263図513・514）
①墨書内容　513・514は、「風内」と判断した。
②墨書位置　513・514は底部内面の墨書である。
③土器の年代　513・514は9世紀第Ⅱ四半期である。
④筆跡の特徴　文字の大きさは、513がやや小さいが、「虫」の流れるような筆の使い方や「内」の第1画が第2画より極端に短く右上がりであることなどから、同筆の可能性が高い。
⑤文字の分布　513の「風内」は、第14地点の第19号溝、514の「風内」は、第14地点の第5号井戸から出土した。

道（第263図515・516）
①墨書内容　515・516は、「道」と判断した。516は、別字の可能性もある。
②墨書位置　515は底部内面、516は底部外面の墨書である。
③土器の年代　515・516は、9世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　515は、「首」が大きく、シンニョウが小さい。全体にやや太く書かれる。
⑤文字の分布　515・516の「道」は、第10地点の第22号溝から出土した。

卅（第263図517・518）
①墨書内容　517・518は、「卅」（三十）と判断した。物品の管理に記された文字と考えた。
②墨書位置　517・518は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　517・518は、9世紀後半である。
④筆跡の特徴　517は、縦三本を払いながら書くが、518は、確実に止めている。別筆でる。
⑤文字の分布　517・518の「卅」は、第37号溝から出土した。

冬（第263図519・520）
①墨書内容　519・520は、「冬」と判断した。
②墨書位置　519は口縁部外面、520は底部外面の墨

書である。
③土器の年代　519は10世紀第Ⅰ四半期、520は10世紀前半である。
④筆跡の特徴　両者は、ともにやや大きめに書かれた文字で太い筆使いである。文字のバランスは共通し、同筆であるかもしれない。
⑤文字の分布　519の「冬」は、第206号溝から出土した。

子（第263図521・522）
①墨書内容　521・522は、「子」と判断した。方位や干支、子供(「子家」)、鼠などを示す。おそらく方位や干支であろう。
②墨書位置　521・522は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　521・522は、10世紀前半である。
④筆跡の特徴　「子」は、太い筆使いでやや右下がりに書かれる。
⑤文字の分布　521・522の「子」は、第316号溝から出土した。

田（第264図523・524）
①墨書内容　523・524は、「田」と判断した。
②墨書位置　523は底部内面、524は口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　523は10世紀第Ⅱ四半期、524は９世紀第Ⅰ四半期である。
④筆跡の特徴　523は、土器の内面いっぱいに書いた墨書である。このような書き方は、北島遺跡では、他に類例がない。筆はかすれ、荒々しく書かれる。524は、小さな文字だが、肉太に書かれた文字である。
⑤文字の分布　523の「田」は、第10地点の第17号溝、524の「田」は第15地点の第２号住居跡から出土した。

念（第264図525）
①墨書内容　「念」の上部と判断した。
②墨書位置　525は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　525は、８世紀第Ⅱ四半期である。
④筆跡の特徴　太くゆっくりとした筆使いである。
⑤文字の分布　「念」は、土器集中出土地点から出土した。

朋知（第264図526）
①墨書内容　「朋知」、または破損部に冠があるとすると「崩知」などかもしれない。趣意不詳。
②墨書位置　526は底部外面に墨書されている。
③土器の年代　526は８世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　細い筆使いで「朋」の「月」の横画が低く書かれる。「知」は、横長で右上がりである。
⑤文字の分布　「朋知」は、第15地点の第３号住居跡から出土した。

向（第264図527）
①墨書内容　「向」または「衙」などか。
②墨書位置　527は底部外面の墨書である。
③土器の年代　527は、８世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　第１画が大きく書かれ、縦画と横画の強弱が見られる。
⑤文字の分布　「向」は、第３地点の７号溝からの出土した。

大□（第264図528）
①墨書内容　「大□」。□は、「女」か別字。
②墨書位置　528は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　528は、８世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　細い筆で弱々しく書かれ、右上がり気味に書く。
⑤文字の分布　「大□」は、土器集中出土地点からの出土である。

苗田（第264図529）
①墨書内容　文字は、縦半分であるが「苗田」と判断した。

②墨書位置　529は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　529は、8世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　右上がり気味に書かれた文字で、細く滑らかに書かれる。「田」は、「十」を「×」のように書く。
⑤文字の分布　「苗田」は、第189号土壙からの出土である。

宇（第264図530）
①墨書内容　「宇」と判断した。
②墨書位置　530は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　530は、8世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　「ウ」冠と「干」が接近し、「中」または「申」のように書く。小さいが、やや太く書く。
⑤文字の分布　「宇」は、第37号溝から出土した。

儿（第264図531）
①墨書内容　「儿」と判断した。「じん」・「にん」と読む。「人」と同義。
②墨書位置　531は底部外面の墨書である。
③土器の年代　531は、8世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　太く大きく書かれた文字で、筆の動きも素速い。
⑤文字の分布　「儿」は、第37号溝から出土した。

鞘□（田）（第264図532）
①墨書内容　第1字は、「鞘」と読める。第2字は、残画から「田」と判断し、「鞘田」と考えた。

「鞘田」が、「佐谷田」に通じるとすると、建久2（1191）年の熊谷蓮生譲状(『長門熊谷家文書』)に「田弐拾町佐谷田ノ境ニ付テ」と登場すると一致し、この佐谷田は、「佐谷田」現在の熊谷市佐谷田に相当するという（原島　1978)。

ただし「佐谷田」は、前の「武蔵国大里郡坪付」には登場しない地名であり、これまで中世初頭の成立とされていた。しかしこの墨書土器の出土によって、大里郡の佐谷田がさらに遡る可能性も出てきた。

また佐谷田が、鞘田＝細長い田を意味する一般名称ならば、幡羅郡内や北島遺跡の周辺に存在したと仮定しても良いであろう。
②墨書位置　532は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　532は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　小さな断片に大きく書かれた文字である。横画が太く、文字全体のバランスは悪い。
⑤文字の分布　「鞘□（田)」は、第36号住居跡から出土した。

陽（第264図533）
①墨書内容　旁がやや曖昧である。「陽」と読めるか疑問が残る。
②墨書位置　533は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　533は8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　やや大きな文字で第8画を、太く書く。素速い筆の動きで書かれた文字である。
⑤文字の分布　「陽」は、土器集中出土地点から出土した。

荒男（第264図534）
①墨書内容　墨痕がやや薄いが、「荒男」と判断した。人名「あらお」であろう。
②墨書位置　534は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　534は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　盞の外面いっぱいに書いた文字である。筆使いは、ゆっくりとしており、太く大きく書かれている。「男」の「力」が小さく、文字のバランスがやや悪い。
⑤文字の分布　「荒男」は、W−21グリッドから出土した。

六丂（第264図535）
①墨書内容　墨痕は明瞭で「六丂」と読めるが、第二字の解読ができない。意味不詳。
②墨書位置　535は、底部内面の墨書である。

③土器の年代　535は、8世紀後半である。

④筆跡の特徴　太く毛羽立った文字である。筆の動きもゆっくりしている。第二字は、「一」に「ら」を組み合わせた文字である。

⑤文字の分布　「六ら」は第336号溝から出土した。

介（第264図536）

①墨書内容　残画から「介」と判断したが、「芥」や「我」などの可能性もある。「介」ならば国司の第二等官を連想するが、ここでは保留しておきたい。

②墨書位置　536は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　536は、8世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　太くゆっくりと書かれる。

⑤文字の分布　「介」は、土器集中出土地点から出土した。

百（第264図537）

①墨書内容　欠損が多いが、「百」の上部と判断した。「千」や「万」などと同様の数詞か。

②墨書位置　537は口縁部外面に墨書されている。

③土器の年代　537は8世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　太くゆっくりとしたテンポで書く。

⑤文字の分布　「百」は、第37号溝から出土した。

横見郡（第264図538）

①墨書内容　残存部位に「横見郡」と書かれていた。郡の下にさらに文字が続くか不明。

横見郡は、『延喜式』民部省式武蔵国条の十二番目の郡としてみえる郡である。

近年、平川南氏によって『延喜式』の郡名記載順が、令制国内の伝達経路の順、あるいは国司の部内巡行の順に巡っているとの指摘がある（平川1995・2000）。これに従うと横見郡の前後は、「入間－高麗－比企－横見－埼玉－大里」の順で記されており、南から北に向かっていたことが分かる。

横見郡は、比企郡吉見町全域と東松山市・鴻巣市・比企郡川島町・北足立郡吹上町の一部を含んだ地域を郡域としていた。郡家は、吉見町御所の横見神社付近とされている。『和名類聚抄』の諸本には、高生・御坂・余部の三郷が記される。

ちなみに高生（たけふ）郷は、『延喜式』神祇官式の条にある神名高負比古（たけふひこ）神社に比定される高負彦根（たかおいひこね）神社のある吉見町田甲周辺とされる。また御坂郷は、大里郡大里町南部から東松山市北部に比定される。余部郷は吉見町南部。

なお『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月条に登場する「横渟屯倉」については、従来、この横見郡の前身とする説が、原島礼二氏（原島1978）をはじめとして有力であった。

しかし鈴木靖民氏は、植田孟縉氏や松田次郎氏の説を受け、多摩横山または横野説をとり、南武蔵に倉樹屯倉（久良郡：川崎市）・橘花屯倉（橘樹郡：横浜市）・多氷屯倉（多摩郡：東京都西部）とともに武蔵国南部に集中的に設置された（鈴木2003）とし、横見郡の前身とする説を退けた。

ところで横見郡の前身となった横見評については、奈良県高市郡明日香村の伝板蓋宮遺跡（飛鳥浄御原宮）から出土した木簡に「□□□」とあり、これを横見評と読む説が有力である。しかし文字の右半が欠損し釈文は確実ではないとも言われている。

だが、少なくとも8世紀第Ⅳ四半期の武蔵国内資料によって、「横見郡」を確認できた意義は大きく、正倉院調庸布に見る「横見郡御坂郷」の記載とともに、同時代資料として高く評価すべきである。

②墨書位置　538は、口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　538は、8世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　文字は小さく書かれ、右上がりである。筆もやや細く、一画ごとに丁寧に書く。右上がりが顕著で、「横」は、「墳」に近い。

⑤文字の分布　「横見郡」は、土器集中出土地点からの出土である。

佃万（第264図539）

①墨書内容　第一字は、欠損部が大きいが、「佃」と判断した。「土万」や「千万」とともに人名と考えると、「佃万呂」であろうか。

②墨書位置　539は口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　539は８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　細くシャープに書かれ、右上がりの文字である。万の第二画と第三画は、第一画に付く。

⑤文字の分布　「佃万」は第12地点の107−53グリッドからの出土である。

奈（第264図540）

①墨書内容　大と卌を組み合わせた文字で、「奈」か「秦」と判断した。「西秦」を参照。

②墨書位置　540は、口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　540は、８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　筆の入りがにぶい角度のため全体的に太い。縦長の文字である。

⑤文字の分布　「奈」は、土器集中出土地点からの出土した。

奥（第264図541）

①墨書内容　「奥」と判断した。

②墨書位置　541は、底部外面に墨書されている。

③土器の年代　541は、８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　上部が小さく雑に書かれているため、奥ではないかもしれない。「兵」に近い。墨痕がやや不鮮明である。

⑤文字の分布　「奥」は、第149号土壙から出土した。

世（第264図542）

①墨書内容　「世」と判断した。「卌」とは異なる。

②墨書位置　542は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　542は、８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　第２・３画が短く、第４画がこれを大きく囲んでいることから卌(三十)ではなく、「世」と判断した。横画を、細く水平に書く。

⑤文字の分布　「世」は土器集中出土地点からの出土である。

所（第264図543）

①墨書内容　左半分のみだが、「所」と判断した。「所」は、地方官衙や寺院などで職掌ごとの集まり、またはその建物などを指す。

②墨書位置　543は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　543は、８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　細く滑らかに書かれた文字で線の強弱が見える。

⑤文字の分布　「所」は、土器集中出土地点から出土した。

宿（第264図544）

①墨書内容　残画のみで判断した。「宿」か。

②墨書位置　544は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　544は、８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　細い文字だが、連続的に滑らかに書く。

⑤文字の分布　「宿」は、土器集中出土地点から出土した。

口（第264図545）

①墨書内容　「口」と判断した。チェック記号か。

②墨書位置　545は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　545は、８世紀後半である。

④筆跡の特徴　やや太く漆で書かれた文字である。

⑤文字の分布　「口」は、第85号井戸から出土である。

□□（第264図546）

①墨書内容　明瞭に判断できない。第１字は「分」、第２字は「第」と読み、人名「わけただ」か。

②墨書位置　546は、口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　546は８世紀第Ⅳ四半期である。

④筆跡の特徴　残存部位が小さな上、文字を良く解釈できない。
⑤文字の分布　「□□」は、土器集中出土地点から出土した。

卍（第264図547）
①墨書内容　「卍」の鏡字と判断した。あるいは「田」か。
②墨書位置　547は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　547は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　文字の向き、上下、書き順が、判明しない。図では、便宜的に振っておいた。
⑤文字の分布　「卍」は、第1地点の第20号土壙から出土した。

○（第264図548）
①墨書内容　チェック記号の「○」と判断した。
②墨書位置　548は、口縁部内面の墨書である。
③土器の年代　548は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　2画で書かれるが、向きは判然としない。細い筆使いである。
⑤文字の分布　「○」は、土器集中出土地点から出土した。

苛（第264図549）
①墨書内容　「苛」または「可」と判断した。
②墨書位置　549は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　549は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　墨痕が薄く判断できない部分も多い。ここでは比較的太字の右上がりの文字と判断した。
⑤文字の分布　「苛」は、第95号溝から出土した。

武（第265図550）
①墨書内容　「武」や「式」などの矛の旁または弍構えと判断した。
②墨書位置　550は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　550は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　太く滑らかに書かれる。
⑤文字の分布　「武」は、第37号溝から出土した。

大（第265図551）
①墨書内容　「大」と判断した。
②墨書位置　551は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　551は、8世紀第Ⅳ四半期である。
④筆跡の特徴　細く小さく書かれた文字で、第3画が止まる。
⑤文字の分布　「大」は、第14地点の第51号住居跡から出土した。

木（第265図552）
①墨書内容　残画のみで「木」と判断したが、他の文字の可能性も高い。「木」は「しげ」とし、繁栄を意味するが、熊谷市諏訪木遺跡や妻沼町飯塚北遺跡では、大量に出土した。
②墨書位置　552は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　552は、9世紀第Ⅱ四半期である。
④筆跡の特徴　細く小さく書かれた文字である。
⑤文字の分布　「木」は、D−25グリッドから出土した。

麿（第265図553）
①墨書内容　上部は欠損するが、「麻」と「呂」を組み合わせた「麿」と判断した。人名か。
②墨書位置　553は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　553は、9世紀第Ⅰ四半期である。
④筆跡の特徴　筆の穂先が割れ、二重になりながら最後をまとめている。
⑤文字の分布　「麿」は、第16地点の第104号溝から出土した。

畠（第265図554）
①墨書内容　上部は、「白」または「百」とも読め、下部は、「田」または「図」または「岡」とも読める。ここでは、組み合わせて「畠」と判断しておき

たい。

なお「畠」の上には、焼成前に「大」と刻書された。「大畠」と読むのであろうか。

②墨書位置　554は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　554は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　小さな文字で横画を細く明瞭に書く。

⑤文字の分布　「畠」は、第10地点の第3号溝からの出土した。

美（第265図555）

①墨書内容　「羊」の下に「文」を置いた書き方で書いた「美」である。

②墨書位置　555は、口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　555は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　筆の穂先を細くまとめ、ゆっくりと丁寧に書かれた文字である。

⑤文字の分布　「美」は、C－19グリッドから出土した。

石（第265図556）

①墨書内容　「石」と判断した。

②墨書位置　556は、底部内面の墨書である。

③土器の年代　556は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　細く丁寧に書かれた文字である。第1画が短く口が大きい。

⑤文字の分布　「石」は、第43号住居跡から出土した。

□（第265図557）

①墨書内容　墨書の残存状態が悪く判読できない。「國」、などの国構えの文字か。

②墨書位置　557は、口縁部外面に墨書されている。

③土器の年代　557は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　墨痕の残存が悪い。

⑤文字の分布　「□」は、第114号住居跡から出土した。

本（第265図558）

①墨書内容　「本」と判断した。

②墨書位置　558は、底部内面の墨書である。

③土器の年代　558は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　「大」に「十」を組み合わせた文字である。太くゆっくり書かれている。

⑤文字の分布　「本」は、第410号溝から出土した。

□騨（第265図559）

①墨書内容　文字の左部は、墨痕が薄く判断しにくいが、「□騨」と判断した。

②墨書位置　559は、口縁部内面に墨書されている。

③土器の年代　559は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　細く縦長に書かれている。

⑤文字の分布　「□騨」は、土器集中出土地点から出土した。

貞（第265図560）

①墨書内容　「貞」と判断した。

②墨書位置　560は、底部外面の墨書である。

③土器の年代　560は、9世紀第Ⅰ四半期である。

④筆跡の特徴　墨痕は、明瞭で右肩の上がりが強く、縦長に書かれた文字である。

⑤文字の分布　「貞」は、第325号溝から出土した。

見□（第265図561）

①墨書内容　墨痕が薄く判断しにくいが、「見□」と判断した。□は、「官」の可能性が高い。

②墨書位置　561は、底部内面の墨書である。

③土器の年代　561は、9世紀第Ⅱ四半期である。

④筆跡の特徴　細く縦長に書かれている。

⑤文字の分布　「見□」は、第16地点の第15号溝から出土した。

□（第265図562）

①墨書内容　残画のみでは判断できない。

②墨書位置　562は、口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　562は、9世紀前半である。
④筆跡の特徴　横画では、筆を水平に入れている。
⑤文字の分布　「□」は、第37号溝から出土した。

佐（第265図563）
①墨書内容　「佐」と判断した。「すけ」か。
②墨書位置　563は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　563は、9世紀前半である。
④筆跡の特徴　肉太の筆使いで滑らかに書く。
⑤文字の分布　「佐」は、第240号土壙から出土した。

弼（第265図564）
①墨書内容　「弼」または、「術」・「粥」と判断した。
②墨書位置　564は底部外面の墨書である。
③土器の年代　564は、9世紀第Ⅱ四半期である。
④筆跡の特徴　筆の使い方は太く、滑らかに書く。
⑤文字の分布　「弼」は第37号溝から出土した。

有（第265図565）
①墨書内容　「有」と判断した。
②墨書位置　565は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　565は、9世紀第Ⅱ四半期である。
④筆跡の特徴　やや大きな文字で縦長に書かれる。第1画が、第2画よりも上に出ない。
⑤文字の分布　「有」は、土器集中出土地点から出土した。

□（第265図566）
①墨書内容　「我」を二行二列書いた上に、「夫母」を縦に書く。呪文か。
②墨書位置　566は口縁部外面に墨書されている。
③土器の年代　566は9世紀前半である。
④筆跡の特徴　「我」は、筆の穂先を立てて細く書かれ、墨痕の残りが悪い。「夫母」は、穂先が潰れたように太く書く。
⑤文字の分布　「□」は、第51号溝から出土した。

仕（第265図567）
①墨書内容　「仕」と判断した。「仕丁」の意味か。
②墨書位置　567は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　567は、9世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　小さくまとまった文字である。旁の横画と第3画が、極端な右上がりである。縦画が細く、横画が太い。
⑤文字の分布　「仕」は、第325号溝から出土した。

吉（第265図568）
①墨書内容　「吉」と判断した。
②墨書位置　568は、底部内面の墨書である。
③土器の年代　568は、9世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　底部いっぱいに大きく書かれた文字である。細い文字である。第3画が、第1画よりも長く、口が極端に小さい。
⑤文字の分布　「吉」は、第14地点の第1号溝から出土した。

氏（第265図569）
①墨書内容　第4・5画が、「エ」に近いが、「氏」と判断した。
②墨書位置　569は、口縁部外面に墨書されている。
③土器の年代　569は9世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　土器の側面に大きく書かれた文字だが、細く書かれる。第6画が、極端に長い。
⑤文字の分布　「氏」は、第325号溝から出土した。

天（第265図570）
①墨書内容　「天」を○で囲んだ文字と判断した。
②墨書位置　570は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　570は、9世紀後半である。
④筆跡の特徴　太く大きく書かれた文字である。第3画の最終を第1画に向かって円く跳ね上げ、また右が欠損するが、第4画の最終も第1画の起筆に向

かって丸く跳ね上げる。その結果、天を丸で囲った文字となる。
⑤文字の分布　「天」は、第37号溝から出土した。

玉（第265図571）
①墨書内容　「玉」と判断した。
②墨書位置　571は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　571は、９世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　やや小さな文字だが、肉太に書かれた文字でである。横画が水平である。とくに第３画が最も長く、その右端に大きく点を打つ。
⑤文字の分布　「玉」は、第16地点の第80号溝から出土した。

黒（第265図572）
①墨書内容　左に片寄ってレンガを打つが、「黒」と判断した。
②墨書位置　572は、底部外面の墨書である。
③土器の年代　572は、９世紀後半である。
④筆跡の特徴　縦画が太く、横画の細い文字である右肩上がりである。全体に左に傾いている。
⑤文字の分布　「黒」は第37号溝からの出土である。

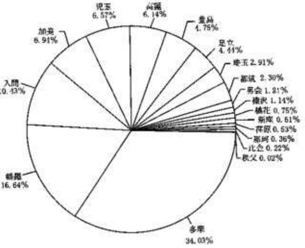
鬼（第265図573）
①墨書内容　「鬼」と判断した。
②墨書位置　573は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　573は、９世紀前半である。
④筆跡の特徴　全体に細く丁寧に書かれた文字である。上部を小さく下部を右寄りに書いている。「ム」を「○」のように書く。
⑤文字の分布　「鬼」は、第51号溝から出土した。

萩（第265図574）
①墨書内容　「萩」と判断した。植物の名称を書くのは稀れである。
②墨書位置　574は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　574は、９世紀前半である。
④筆跡の特徴　四角くまとまった文字で草冠が大きい。第９・10画にあたる「火」の左右の画は、太く連続して書かれる。
⑤文字の分布　「萩」は、P−15グリッドから出土した。

集（第265図575）
①墨書内容　「集」と判断した。
②墨書位置　575は、底部内面の墨書である。
③土器の年代　575は、９世紀第Ⅱ四半期である。
④筆跡の特徴　「隹」を糸偏と「艮」とで表現する。筆の穂先がきわめて細く、縦画も細い。右上がりの文字だが、第12画などは、弓なりに書く。左右のバランスがとれた文字である。
⑤文字の分布　「集」は、第10地点の第22号溝から出土した。

百（第265図576）
①墨書内容　「百」か「万」と判断した。
②墨書位置　576は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　576は、９世紀第Ⅲ四半期である。
④筆跡の特徴　「百」か「万」の上部である。太く大きく書かれた文字である。筆の穂先が、起筆から割れている。
⑤文字の分布　「百」は、第145号土壙から出土した。

庚（第266図577）
①墨書内容　「庚」か「収」と判断した。
②墨書位置　577は、口縁部外面の墨書である。
③土器の年代　577は、10世紀第Ⅰ四半期である。
④筆跡の特徴　上部が、欠損しているため文字を正確に判読できない。筆の穂先を細くし、全体を横長に書く。
⑤文字の分布　「庚」は、第225−１号溝から出土した。



第240図　**武蔵国内の郡別墨書土器出土遺跡**

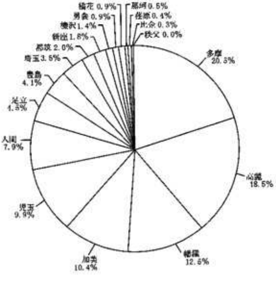
荏（第266図578）

①墨書内容　左が欠損するが、「荏」と判断した。「荘」の可能性もある。『倭名類聚抄』には、幡羅郡内に荏原郷がある。現在の妻沼町江原周辺。

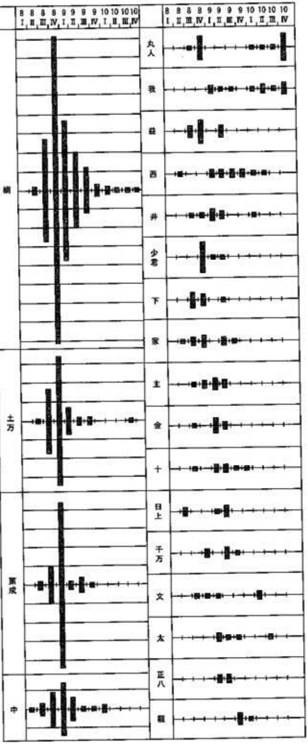
②墨書位置　578は、口縁部外面の墨書である。

③土器の年代　578は、9世紀後半から10世紀である。

④筆跡の特徴　全体にやや太い筆使いで草冠の縦画



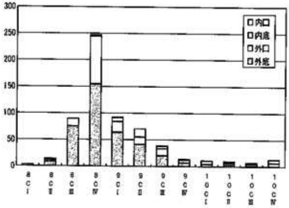
第241図　**武蔵国内の郡別墨書土器の出土点数**



第242図　**墨書文字の変遷**

が短い。また「任」も筆が割れ、太く書かれ明瞭ではない。

⑤文字の分布　「荏」は、第36号掘立柱建物跡から出土した。



第243図　**墨書の記載部位と時期の関係**

□（第266図579）

①墨書内容　墨痕は鮮やかだが、該当する文字を検索できない。衣偏に草冠、そして「喚」の旁に似た文字である。「膜」「模」「襖」などを考えた。

②墨書位置　579、底部外面の墨書である。

③土器の年代　579は、10世紀後半である。

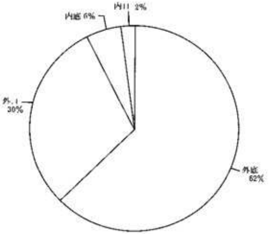
④筆跡の特徴　文字は全体に細く、縦画と横画が同じ太さで書かれる。やや右上がりに書く。

⑤文字の分布　「□」は、土器集中出土地点から出土した。

念（第266図580）

①墨書内容　上部が欠損するが、「念」と判断した。

②墨書位置　580は、口縁部外面の墨書である。



第244図　**全墨書土器の記載部位**

③土器の年代　580は、10世紀前半である。

④筆跡の特徴　やや太い文字で筆の穂先が割れる。

⑤文字の分布　「念」は、第316号溝から出土した。

以上の他、第266図581～622は、墨痕が不鮮明や、残存部が少なかったり、墨痕が明瞭でも文字を判読できない墨書土器である。ちなみに589は「門」、590は「宝」などかもしれない。また613は、飛鳥の戯画かもしれない。581～622は、筆跡の特徴等についてとくに述べない。

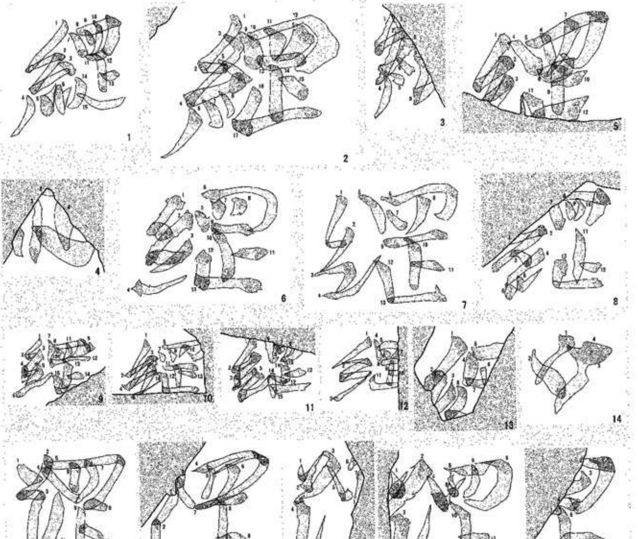
ところで　北島遺跡の墨書土器は、その出土数の多さを特徴の一つに上げることができる。北島遺跡では、これまでに622点の墨書土器が出土したが、この数値は、驚異的な数値である。武蔵国内では、並ぶ遺跡がない。府中市武蔵国府関連遺跡（294点）や日野市落川遺跡（381点）、清瀬市下宿内山遺跡（206点）などを大きく凌駕する。

ちなみに墨書土器が、20点以上出土した武蔵国内の遺跡は、33遺跡あるが、100点以上の遺跡は、前記遺跡の他、児玉郡神川町皂樹原・檜下遺跡（107点）、同郡上里町中堀遺跡（158点）、鶴ヶ島市一天狗遺跡（127点）、東京都多摩市多摩ニュータウン107遺跡（141点）、東京都国分寺市武蔵台・武蔵台東遺跡（139点）、東京都北区中里遺跡（102点）の6遺跡に過ぎない。

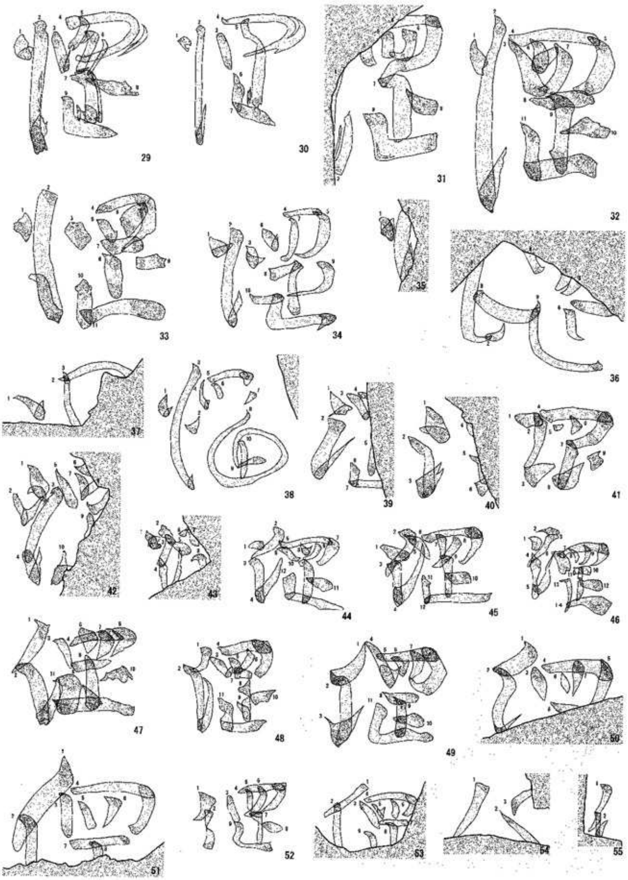
出土数の多かった21種の墨書文字について検討する。

まず墨書文字の消長を第242図から検討する。第242図は、四半世紀ごとに各文字種の出土点数を棒グラフで表現した。北島遺跡の墨書土器は、三つの消長に分類できる。

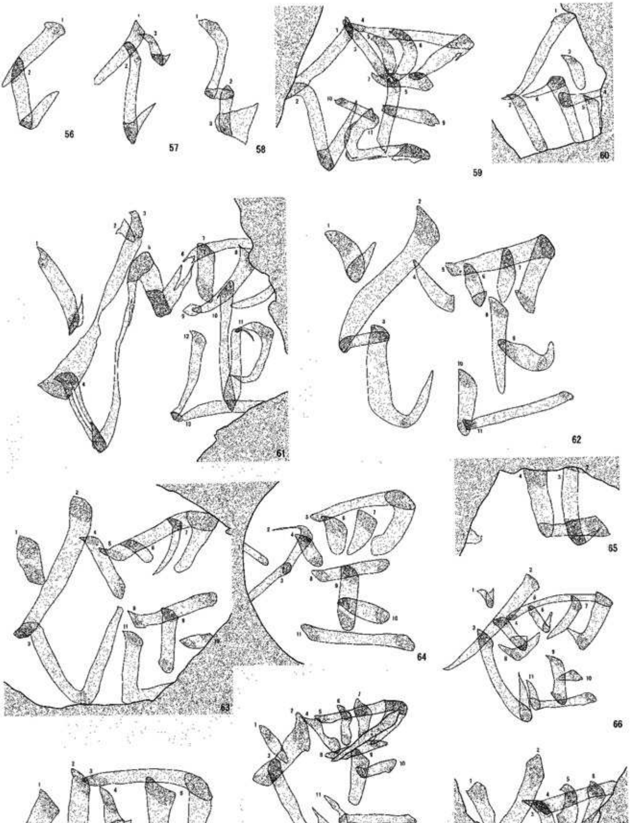
まず8世紀第Ⅱ四半期に登場し、8世紀第Ⅳ四半期にピークとなり、9世紀第Ⅱ四半期に消滅する一群である。「綱」、「上万」、「第成」、「中」の前半、「丸人」などがこれにあたり、「益」「井」「少君」「卜」「家」「主」「文」なども同種の傾向がある。これを「8世紀型墨書土器」と仮称する。



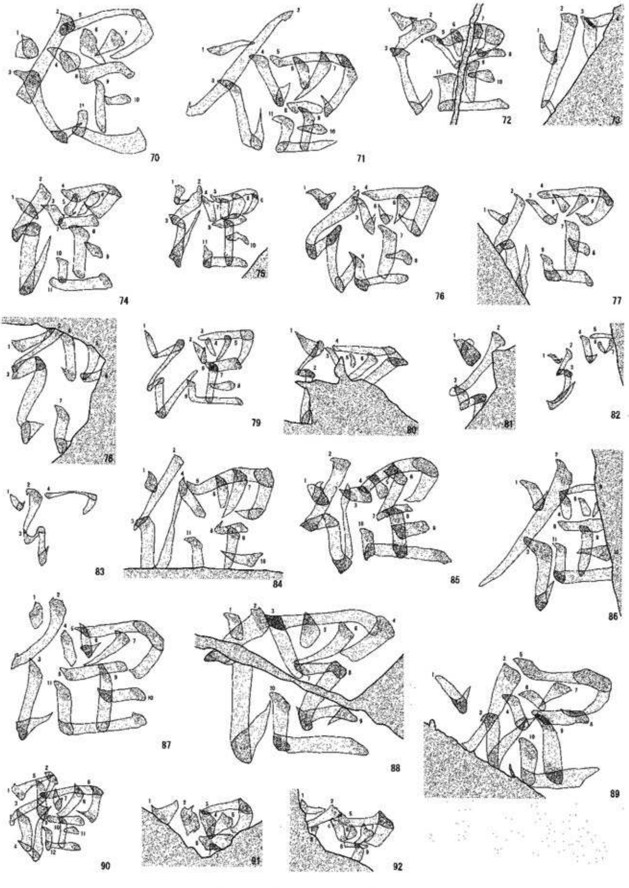
第245図　北島遺跡出土墨書土器（1）



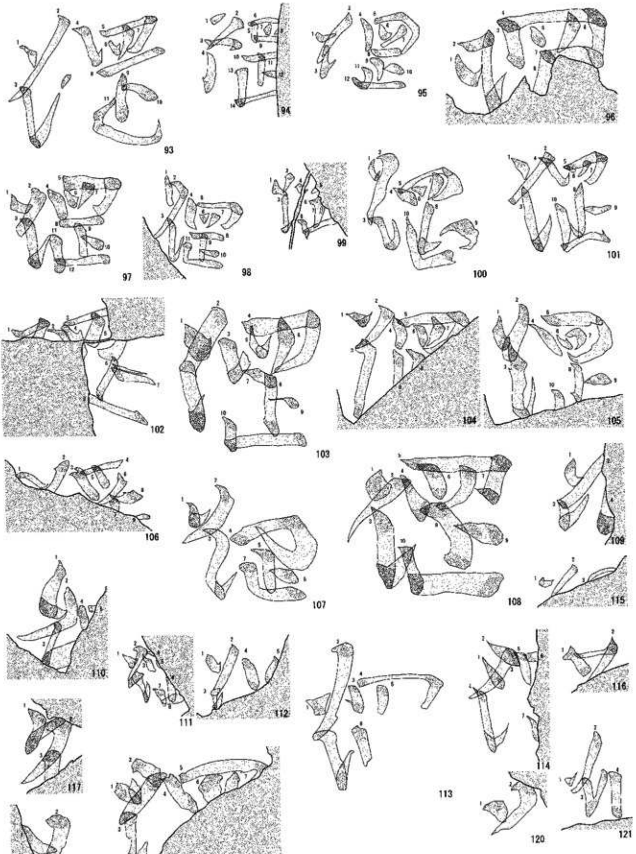
第246図　**北島遺跡出土墨書土器（2）**



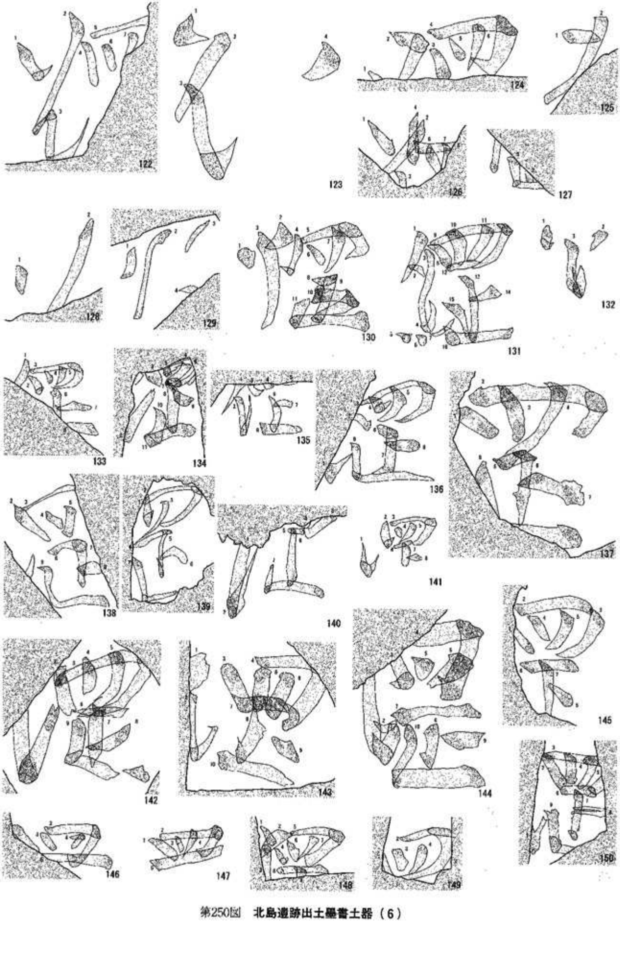
第247図　**北島遺跡出土墨書土器（3）**



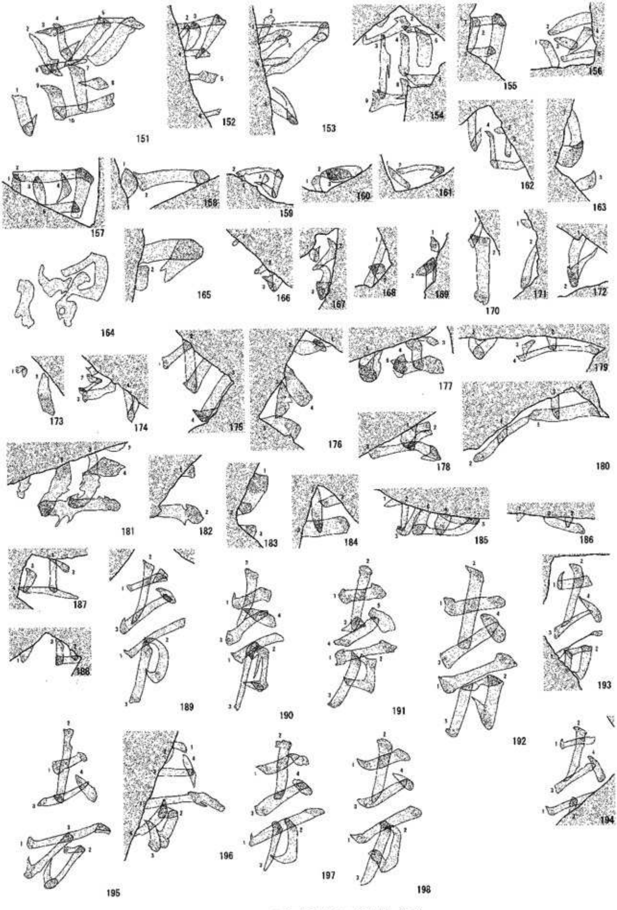
第248図　北島遺跡出土墨書土器（4）



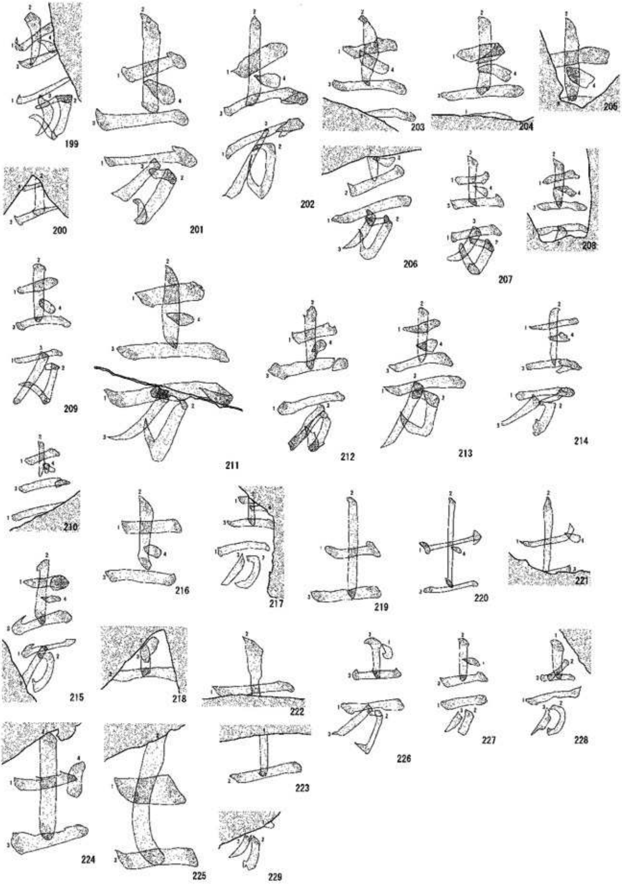
第249図　**北島遺跡出土墨書土器（5）**



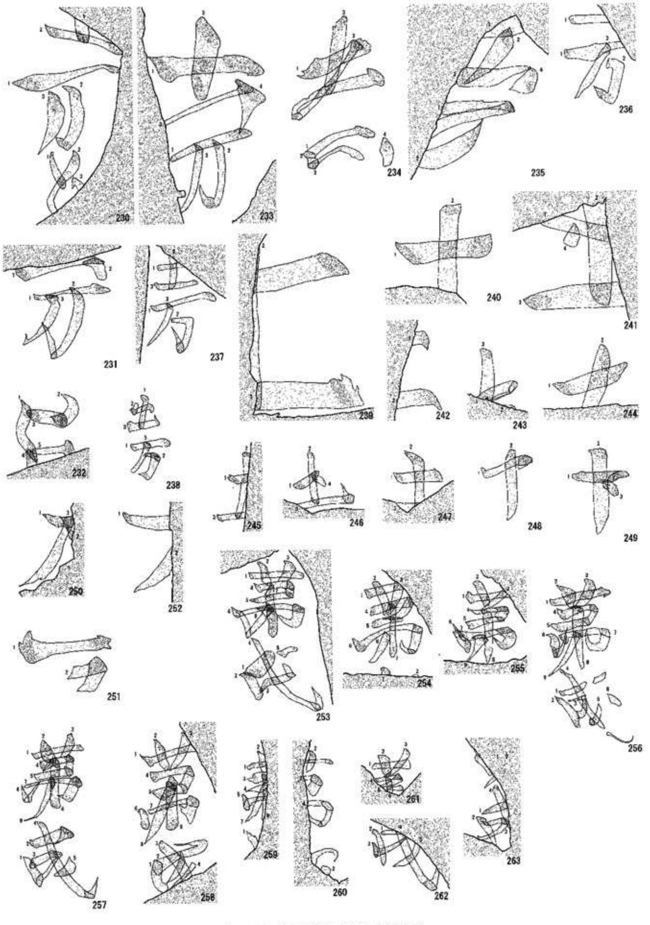
第250図　**北島遺跡出土墨書土器（6）**



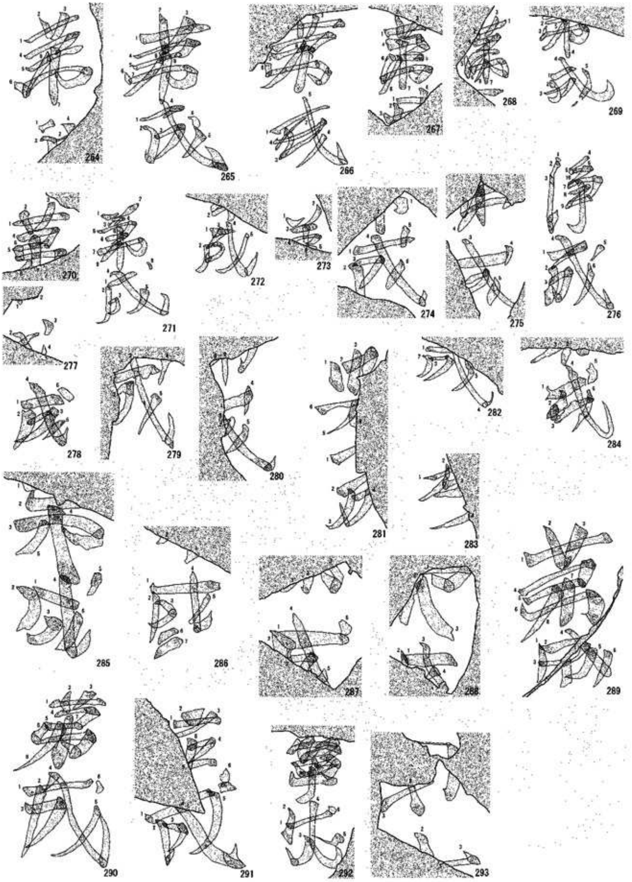
第251図　北島遺跡出土墨書土器（7）



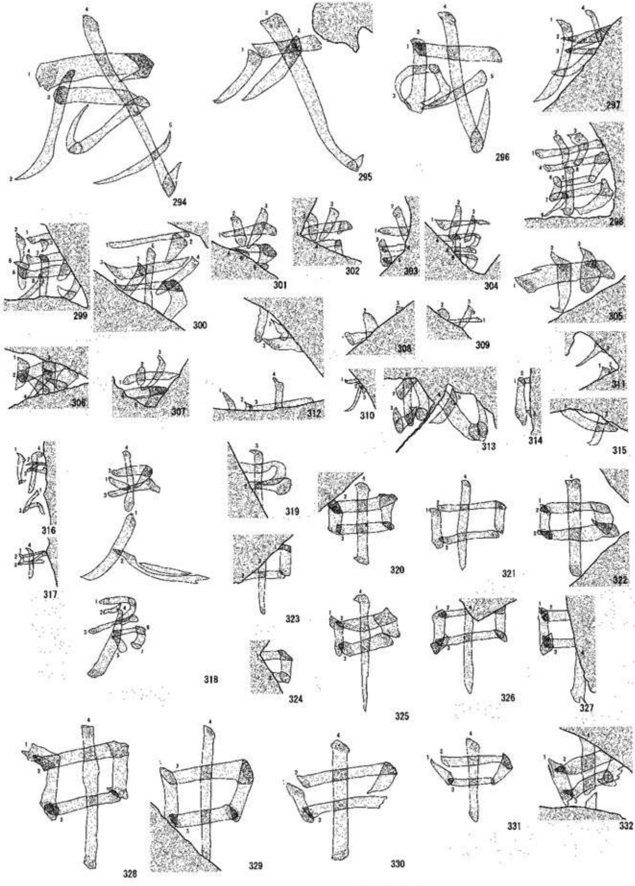
第252図　北島遺跡出土墨書土器（8）



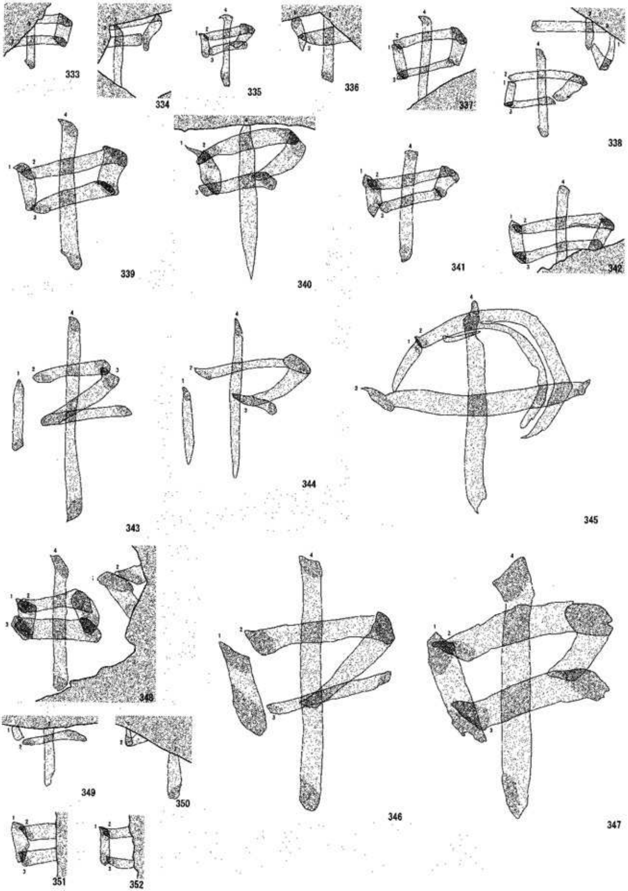
第253図　北島遺跡出土墨書土器（9）



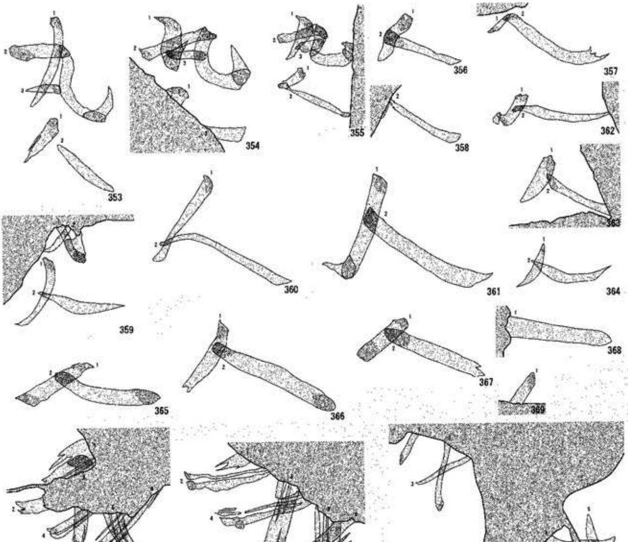
第254図　**北島遺跡出土墨書土器（10）**



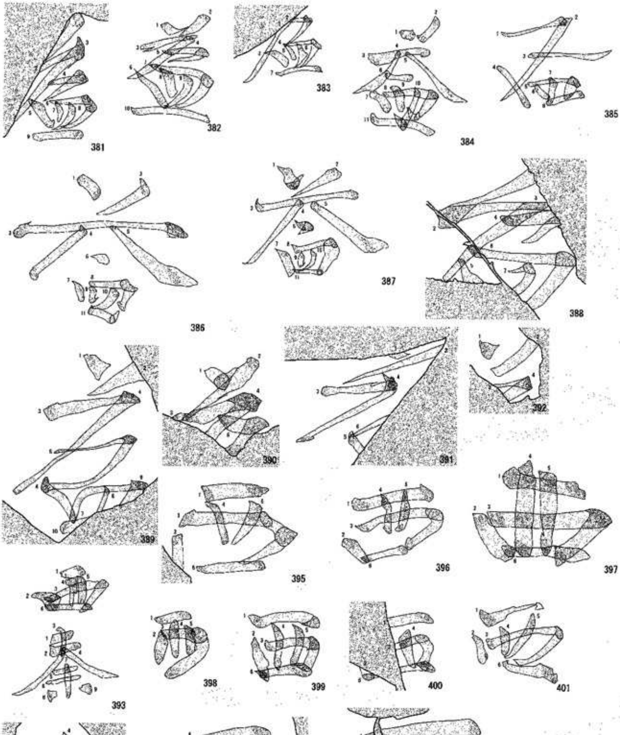
第255図　**北島遺跡出土墨書土器（11）**



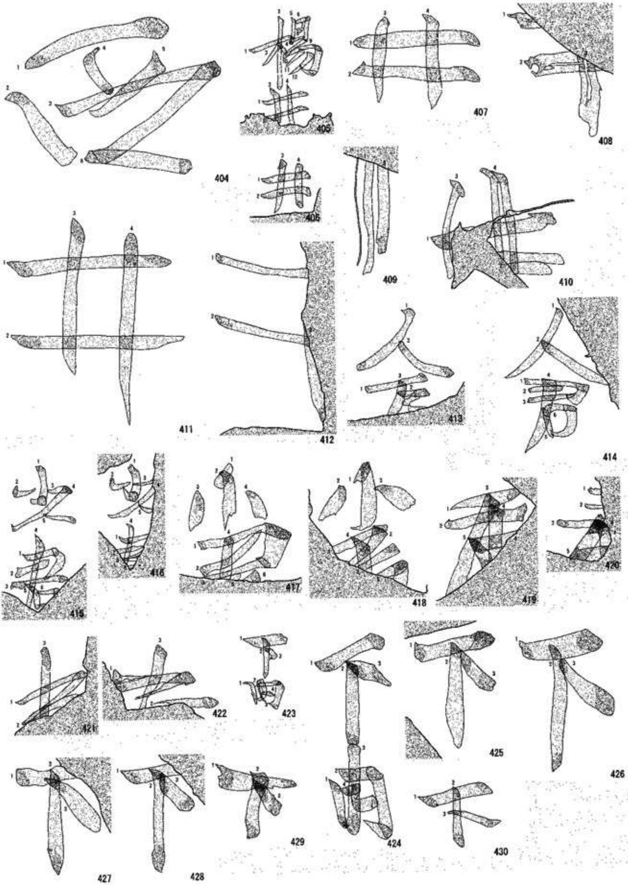
第256図　**北島遺跡出土墨書土器（12）**



第257図　**北島遺跡出土墨書土器（13）**

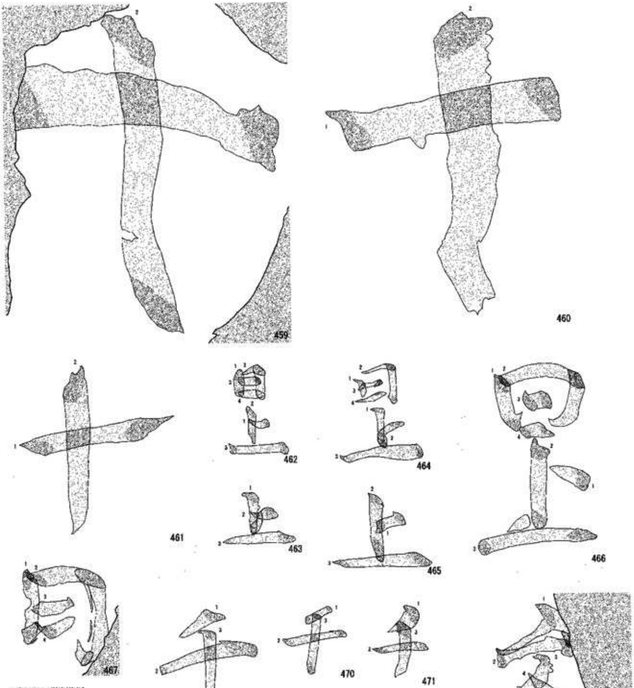


第258図　**北島遺跡出土墨書土器（14）**

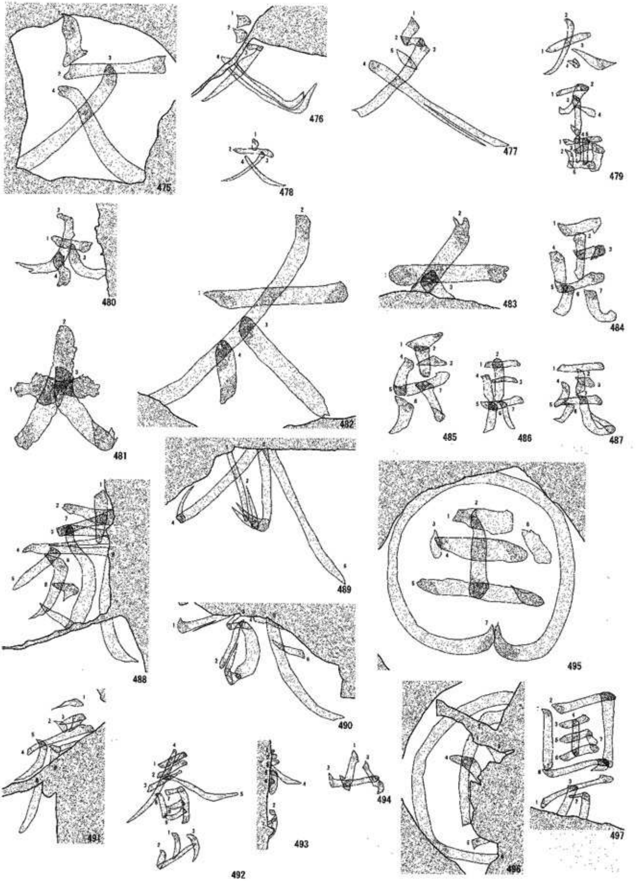


第259図　**北島遺跡出土墨書土器（15）**

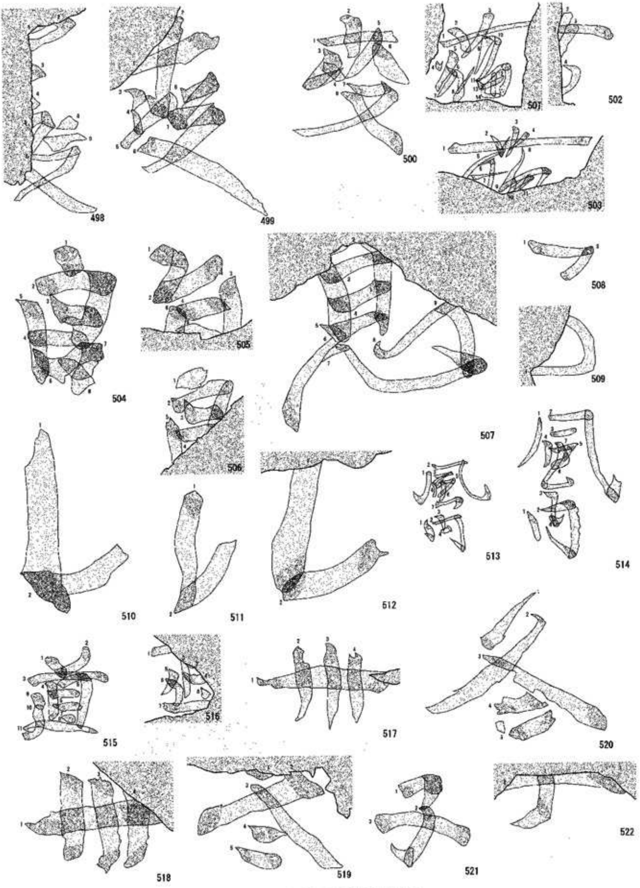
第260図　北島遺跡出土墨書土器（16）



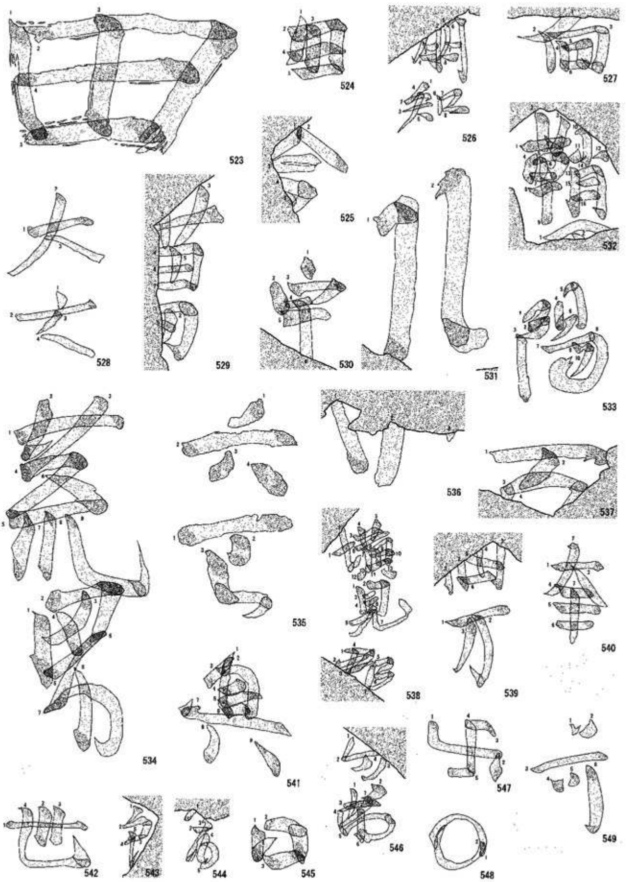
第261図　北島遺跡出土墨書土器（17）



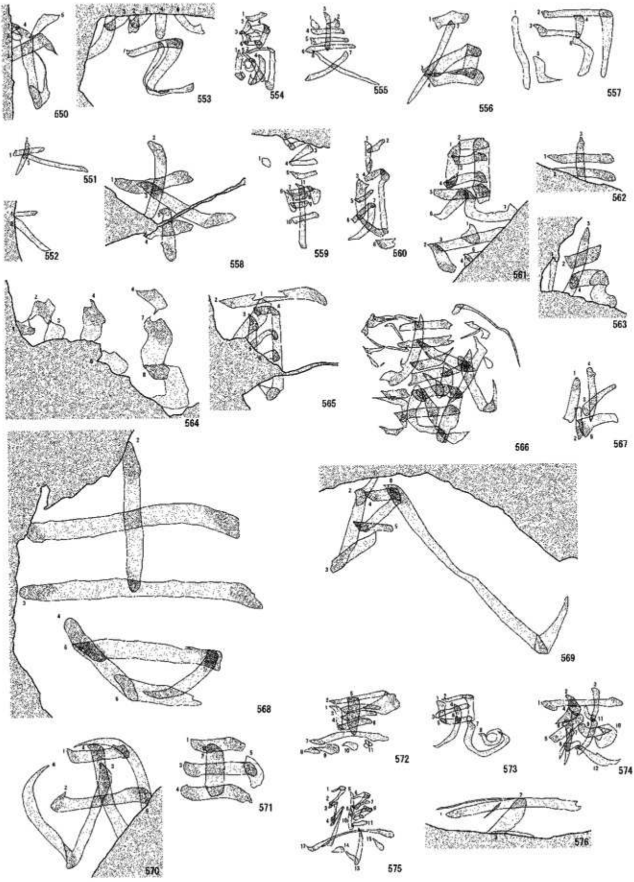
第262図　**北島遺跡出土墨書土器（18）**



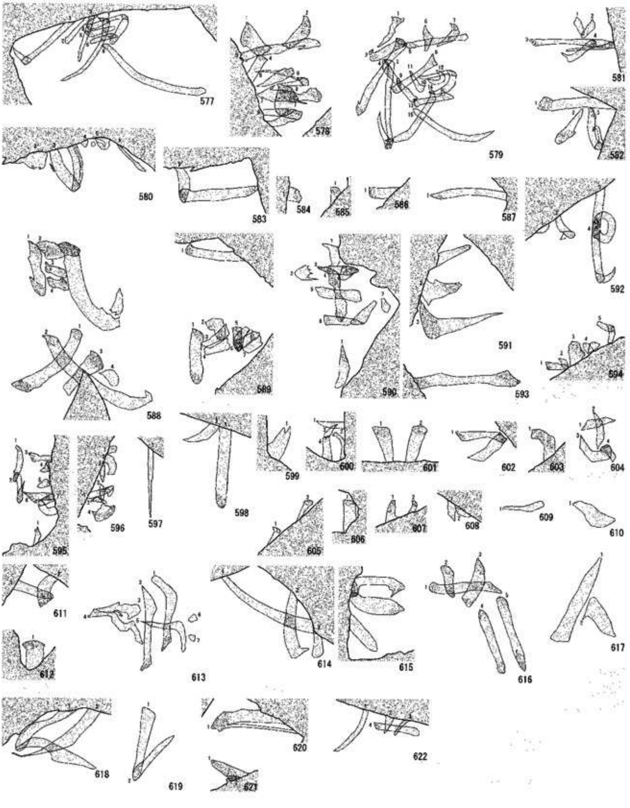
第263図　**北島遺跡出土墨書土器（19）**



第264図　北島遺跡出土墨書土器（20）



第265図　北島遺跡出土墨書土器（21）



第266図　北島遺跡出土墨書土器（22）

第76表　**墨書土器（1）**

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリッド・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第245図	1	278	591	28	⑦+⑧	第19地点	SK279	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第245図	2	278	589	6	⑦	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	
第245図	3	278	678	9	⑨	第19地点	SD51	綱	須恵器坏	外底	9C前半	南比企	
第245図	4	278	587	29	⑤	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第245図	5	278	573	16	⑦+⑧	第19地点	SK160	綱	須恵器坏	外底	9C前半	利根川	
第245図	6	278	722	11	⑩	第19地点	SD316	綱	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第245図	7	293	140	5	⑥	第19地点	M－16d	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅱ	南比企	
第245図	8	293	140	23	⑦+⑨	第19地点	L－16	綱	土師器坏A	外底	9C Ⅰ	利根川	
第245図	9	293	71	4	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	10	293	139	11	⑦	第19地点	SK46	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	11	293	64	17	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	12	293	137	14	⑦	第19地点	N－15d	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	13	278	690	21	④	第19地点	SD91	綱	須恵器坏	外口	9C Ⅲ	末野	
第245図	14	293	67	5	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第245図	15	293	66	5	⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第245図	16	293	65	8	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第245図	17	293	67	13	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	18	293	70	10	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	19	278	705	1	①+⑤	第19地点	SD183	綱	須恵器高台付埦	外底	8C後半	南比企	
第245図	20	293	69	3	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	21	293	65	23	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	
第245図	22	278	466	38	⑦+⑥+⑨	第19地点	SE42	綱	須恵器坏	外底	9C前半	南比企	
第245図	23	278	719	17	⑤+③	第19地点	SD237	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	末野	
第245図	24	293	71	17	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	25	293	66	2	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	26	278	467	5	④	第19地点	SE42	綱	須恵器坏	外口	9C後半	末野	
第245図	27	293	71	7	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第245図	28	293	71	1	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	29	278	678	2	⑦	第19地点	SD51	綱	須恵器坏	外底	9C前半	末野	
第246図	30	278	678	1	⑦+⑧	第19地点	SD51	綱	須恵器坏	外底	9C前半	末野	
第246図	31	293	71	8	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	32	278	583	21	⑥	第19地点	SK200	綱	須恵器高台付埦	外底	8C Ⅲ	南比企	
第246図	33	293	72	16	⑥	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	末野	
第246図	34	293	70	14	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	末野	
第246図	35	293	75	13	⑨	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	36	278	731	9	⑥	第19地点	道路跡	綱	須恵器坏	外底	9C前半	南比企	
第246図	37	293	71	21	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	38	278	576	4	①	第19地点	SK160	綱	土師器高台付埦	外口	10C Ⅳ	利根川	
第246図	39	293	71	20	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	40	293	69	24	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	41	293	71	14	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	42	293	71	2	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	43	293	70	25	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第246図	44	293	73	19	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	
第246図	45	278	587	34	⑦	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	
第246図	46	278	589	17	⑤	第19地点	SK240	綱	須恵器高台付埦	外底	8C Ⅳ	末野	
第246図	47	278	778	5	⑤	第19地点	P15G(SK226)	綱	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	末野	
第246図	48	278	588	10	⑦+⑧	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	

第77表　墨書土器（2）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第246図	49	278	588	23	⑧	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第246図	50	293	71	11	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第246図	51	293	140	6	⑥	第19地点	H−27	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第246図	52	278	344	37	⑦	第19地点	SJ145	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	南比企	
第246図	53	293	71	25	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第246図	54	278	591	11	⑤	第19地点	SK269	綱	土師器坏	外底	8CⅡ	利根川	
第246図	55	293	75	1	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第247図	56	278	677	15	⑥	第19地点	SD47	綱	須恵器高台付埦	外底	8C後半	南比企	
第247図	57	278	693	26	⑥	第19地点	SD91	綱	灰釉陶器埦	外底	10C前半	東濃	
第247図	58	278	329	21	⑦	第19地点	SJ43	綱	須恵器高台付埦	外底	8CⅢ	末野	
第247図	59	278	583	13	⑥	第19地点	SK200	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	末野	
第247図	60	278	679	11	⑤	第19地点	SD87	綱	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第247図	61	278	587	5	⑥	第19地点	SK240	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第247図	62	278	582	26	⑥	第19地点	SK200	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第247図	63	278	582	27	⑥	第19地点	SK200	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第247図	64	278	588	18	⑥	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第247図	65	278	587	14	⑧	第19地点	SK240	綱	須恵器蓋	外口	8CⅣ	末野	
第247図	66	293	66	24	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第247図	67	293	138	8	⑥	第19地点	L−15a	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第247図	68	278	591	31	⑤	第19地点	SK279	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第247図	69	278	669	18	⑥	第19地点	SD29	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第248図	70	278	774	8	⑧	第19地点	M14GP12	綱	土師器坏	外底	8CⅣ	ローム土	
第248図	71	278	588	9	⑦+⑧+⑩	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第248図	72	278	668	31	⑤	第19地点	SD24	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	末野	
第248図	73	278	689	44	⑦+⑧	第19地点	SD91	綱	須恵器坏	外底	9C中葉	南比企	
第248図	74	293	65	24	⑥	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	75	293	71	12	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	76	293	68	27	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	77	293	65	16	⑧+⑩	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	78	293	136	14	①	第19地点	M−16	綱	須恵器坏蓋	外口	8CⅣ	末野	
第248図	79	278	328	8	①	第19地点	SJ36	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	80	293	73	9	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第248図	81	278	587	26	⑤	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第248図	82	293	68	5	⑨	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	83	278	341	24	⑦+⑧	第19地点	SJ121	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	南比企	
第248図	84	278	583	8	⑤	第19地点	SK200	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第248図	85	278	727	22	⑦+⑧	第19地点	SD325	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	86	293	138	13	⑤	第19地点	M−15b	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	87	278	422	33	⑧	第19地点	SB13	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	88	293	49	3	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第248図	89	278	717	10	⑤	第19地点	SD233	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第248図	90	278	592	9	⑤	第19地点	SK285	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第248図	91	278	328	7	⑤	第19地点	SJ36	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第248図	92	293	73	21	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第249図	93	293	19	3	⑦+⑧	第19地点	河川内C−19	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第249図	94	293	49	10	小破片	第19地点	土器集中出土地点	綱	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第249図	95	278	583	3	⑦+⑧	第19地点	SK200	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第249図	96	278	348	26	⑦+⑧	第19地点	SJ163	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	南比企	

第78表　墨書土器（3）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第249図	97	293	142	8	⑧+⑩	第19地点	L－15c	綱	須恵器高台付埦	外底	9CⅣ	末野	
第249図	98	293	139	21	⑧	第19地点	M－16c	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	末野	
第249図	99	278	587	31	⑤	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	末野	
第249図	100	278	329	19	⑧	第19地点	SJ43	綱	須恵器高台付埦	外底	8CⅢ	末野	
第249図	101	278	586	8	⑤	第19地点	SK223	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第249図	102	278	587	19	⑧	第19地点	SK240	綱	須恵器蓋	外口	8CⅢ	南比企	
第249図	103	293	73	24	⑥	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	南比企	
第249図	104	278	700	7	①	第19地点	SD133	綱	須恵器坏	外底	9CⅢ	南比企	
第249図	105	278	587	7	⑦	第19地点	SK240	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第249図	106	293	72	18	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第249図	107	278	470	22	⑦+⑧	第19地点	SE85	綱	須恵器坏	外底	10C前半	新治	
第249図	108	293	79	7	⑥	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器高台付埦	外底	9CⅢ	末野	
第249図	109	278	470	5	⑨	第19地点	SE82	綱	須恵器高台付埦	外底	8C後半	末野	
第249図	110	293	68	18	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第249図	111	293	139	3	⑤	第19地点	表採	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第249図	112	293	71	24	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第249図	113	278	339	1	⑦+⑧+⑨	第19地点	SJ110	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第249図	114	278	340	18	⑦+⑧+⑨	第19地点	SJ117	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第249図	115	278	587	9	⑦+⑨	第19地点	SK240	綱	土師器坏A	外底	8CⅢ	利根川	
第249図	116	278	466	26	⑤	第19地点	SE42	綱	土師器坏A	外底	8C後半	利根川	
第249図	117	278	727	25	⑤	第19地点	SD325	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第249図	118	293	79	3	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器高台付埦	外底	9CⅢ	末野	綱カ
第249図	119	293	73	8	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第249図	120	278	581	6	⑤	第19地点	SK168	綱	須恵器坏	外底	9C後半	末野	
第249図	121	293	142	3	⑤	第19地点	M－17d	綱	須恵器高台付埦	外底	10CⅠ	末野	
第250図	122	278	588	20	⑥	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第250図	123	293	140	7	⑥	第19地点	M－15G P－4	綱	須恵器坏	外底	9CⅢ	末野	
第250図	124	293	138	17	⑥	第19地点	L－18a	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	125	278	586	36	⑦	第19地点	SK240	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第250図	126	278	582	39	⑩	第19地点	SK200	綱	須恵器蓋	外口	9CⅠ	末野	
第250図	127	278	696	5	⑤	第19地点	SD91	綱	灰釉陶器皿	外底	10C後半	浜北	
第250図	128	278	727	27	⑥	第19地点	SD325	綱	須恵器坏	外底	9CⅢ	南比企	
第250図	129	293	49	7	小破片	第19地点	土器集中出土地点	綱	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第250図	130	278	470	16	⑤	第19地点	SE85	綱	須恵器坏	外底	9C後半	末野	
第250図	131	278	726	7	⑦	第19地点	SD319	綱	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第250図	132	293	67	16	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	133	293	137	15	⑤	第19地点	SD327	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	134	293	74	67	④	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第250図	135	278	591	12	⑤	第19地点	SK269	綱	土師器坏	外底	8CⅡ	利根川	
第250図	136	278	587	6	⑦	第19地点	SK240	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第250図	137	278	587	30	⑥	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	138	293	139	10	⑤	第19地点	SK315	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	139	293	136	19	④	第19地点	L－17c	綱	須恵器坏蓋	外口	8CⅣ	南比企	
第250図	140	293	69	17	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	141	293	138	10	⑤	第19地点	M－16d	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第250図	142	278	587	8	⑧+⑨	第19地点	SK240	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第250図	143	278	582	28	⑧	第19地点	SK200	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	利根川	
第250図	144	278	719	16	⑤	第19地点	SD237	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	

第79表　**墨書土器（4）**

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第250図	145	293	139	12	⑥	第19地点	SJ388	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	146	293	64	13	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第250図	147	293	139	1	③	第19地点	M−14b	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	益カ
第250図	148	293	137	22	⑤	第19地点	K−18	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第250図	149	278	466	24	不詳	第19地点	SE42	綱	土師器坏A	外底	8C後半	利根川	
第250図	150	278	589	14	①	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	末野	
第251図	151	293	140	20	①	第19地点	O−15d	綱	須恵器坏	外口	9CⅠ	末野	
第251図	152	293	139	22	⑤	第19地点	L−16	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	末野	
第251図	153	293	67	9	⑨+⑩	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	154	278	591	29	⑨	第19地点	SK279	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第251図	155	293	139	7	⑦	第19地点	SK747	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	156	293	139	20	⑤	第19地点	M−14c	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第251図	157	293	75	11	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	158	293	68	19	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	159	293	74	38	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外口	9CⅠ	南比企	
第251図	160	278	671	28	⑩	第19地点	SD37	綱	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第251図	161	293	69	22	③	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	162	293	137	18	⑤	第19地点	試掘7	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	163	278	583	9	②	第19地点	SK200	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	164	278	426	5	⑧	第19地点	SB55	綱	須恵器坏	外底	9C後半	南比企	
第251図	165	195	426	6	④	第16地点	101−92G谷部	綱	須恵器坏	外口	9CⅡ	末野	綱カ
第251図	166	293	74	33	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第251図	167	293	70	6	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	168	278	727	11	⑤	第19地点	SD325	綱	土師器坏A	外底	9CⅢ	利根川	
第251図	169	278	589	1	⑦+⑧	第19地点	SK240	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	南比企	
第251図	170	293	66	15	⑦	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	171	293	75	8	①	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	172	293	69	21	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	173	293	72	5	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第251図	174	293	140	3	⑤	第19地点	Q−14c	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第251図	175	293	75	10	③	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	土万カ
第251図	176	293	75	14	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	177	293	75	2	⑧	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	178	293	73	22	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	綱カ
第251図	179	293	140	24	⑤	第19地点	M−14c	綱	土師器坏A	外底	9CⅠ	ローム上	
第251図	180	278	423	32	⑦	第19地点	SB32	綱	須恵器坏	外底	[illegible]	南比企	
第251図	181	278	589	21	⑤	第19地点	SK240	綱	須恵器高台付埦	外底	8CⅣ	末野	
第251図	182	278	700	6	⑥	第19地点	SD133	綱	須恵器坏	外底	9CⅢ	南比企	
第251図	183	278	591	30	⑤	第19地点	SK279	綱	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第251図	184	293	71	5	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	185	278	693	23	⑤	第19地点	SD91	綱	灰釉陶器埦	外底	9CⅢ	東濃	
第251図	186	293	73	3	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	187	293	140	26	⑤	第19地点	P−13d	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	188	293	71	18	⑤	第19地点	土器集中出土地点	綱	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	189	293	71	6	⑧	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第251図	190	278	463	29	⑦	第19地点	SE16	土万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第251図	191	293	65	15	⑧+⑩	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	192	293	67	15	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	

第80表　墨書土器（5）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリッド・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第251図	193	278	774	15	⑧	第19地点	M15G(SK17)	土万	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第251図	194	278	726	6	①+⑥	第19地点	SD319－1	十万	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第251図	195	293	67	1	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	196	278	730	5	①+⑤	第19地点	SD336	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	197	293	65	17	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第251図	198	293	65	13	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	199	293	66	4	⑨	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	200	293	72	24	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	内底	9CⅡ	南比企	
第252図	201	293	67	21	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第252図	202	278	572	5	①+⑤+③	第19地点	SK148	十万	須恵器坏	外底	8C中葉	南比企	
第252図	203	293	69	13	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	204	293	71	13	⑦	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	土万カ
第252図	205	293	73	5	①	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	206	293	64	11	⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第252図	207	293	71	27	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	9CⅠ	末野	
第252図	208	278	689	40	⑤	第19地点	SD91	土万	須恵器坏	外底	9C中葉	南比企	
第252図	209	293	68	8	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	210	293	68	14	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	211	293	65	6	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	212	293	65	3	⑦+⑨	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	213	293	69	11	⑧	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	214	293	65	7	⑦+⑨	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第252図	215	293	65	21	④	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	216	293	66	20	①	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅣ	末野	
第252図	217	293	69	25	⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第252図	218	293	64	22	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第252図	219	293	65	9	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	220	293	70	2	⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第252図	221	293	69	16	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	土万カ
第252図	222	278	577	12	⑤	第19地点	SK160	土	灰釉陶器埦	外底	10C後半	東遠江	十カ
第252図	223	293	75	3	⑧	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	224	293	68	9	⑤	第19地点	土器集中出土地点	十	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	225	293	64	2	④	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外口	8CⅡ	南比企	
第252図	226	293	70	18	⑦	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第252図	227	293	70	13	⑦	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第252図	228	293	68	11	⑦	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第252図	229	293	71	23	⑤	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第253図	230	293	74	7	④	第19地点	土器集中出土地点	土万呂	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	231	293	65	20	⑤+③	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第253図	232	293	74	9	④	第19地点	土器集中出土地点	呂	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	呂カ
第253図	233	293	75	6	⑦+⑨	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第253図	234	293	71	30	⑦+⑨	第19地点	土器集中出土地点	十万	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第253図	235	293	65	2	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第253図	236	293	70	3	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第253図	237	293	140	25	⑤	第19地点	N－14c－①	土万	土師器坏A	外底	9CⅠ	ローム土	
第253図	238	293	68	13	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土万	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第253図	239	293	68	15	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第253図	240	278	678	12	⑦	第19地点	SD51	十	須恵器坏	内底	9C前半	南比企	十万

第81表　墨書土器（6）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第253図	241	293	73	4	⑤+③	第19地点	土器集中出土地点	十	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	十万カ
第253図	242	293	74	3	③	第19地点	土器集中出土地点	上	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	成カ
第253図	243	293	66	16	⑦+⑨	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第253図	244	278	463	7	①	第19地点	SE4	土	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	土万カ
第253図	245	293	65	12	①	第19地点	土器集中出土地点	十	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第253図	246	278	350	17	⑦	第19地点	SJ181	上	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	土万カ
第253図	247	293	68	3	⑤	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第253図	248	293	68	16	⑦	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第253図	249	293	74	31	④	第19地点	土器集中出土地点	土	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	十カ
第253図	250	278	470	19	⑤	第19地点	SE85	万	須恵器坏	外底	9C後半	末野	万カ
第253図	251	278	328	29	①+⑤	第19地点	SJ40	万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	上万カ
第253図	252	293	68	17	⑤	第19地点	土器集中出土地点	万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第253図	253	293	74	26	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	254	293	74	44	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	255	278	678	11	④	第19地点	SD51	第	須恵器坏	外口	9C前半	南比企	第成か
第253図	256	293	69	5	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	257	293	74	24	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第253図	258	293	74	23	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	259	293	74	47	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	260	293	137	9	④	第19地点	牧場西一括③	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第253図	261	293	74	53	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	第成カ
第253図	262	293	74	6	④	第19地点	土器集中出土地点	成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成カ
第253図	263	293	74	45	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	264	293	74	17	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	265	293	70	16	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第254図	266	293	74	30	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	267	293	74	42	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	268	293	74	55	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	269	293	74	40	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第254図	270	293	74	4	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	271	293	74	21	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	272	293	74	2	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	273	293	74	49	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	274	293	74	56	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	275	293	74	64	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	276	81	542	18	①+⑤	第7地点	62−64−g	浄成	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第254図	277	293	74	66	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	278	81	233	6	④	第3地点	SD7	成	須恵器坏	外口	8CⅡ	南比企	
第254図	279	293	74	29	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	280	293	68	7	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	281	293	73	30	④	第19地点	土器集中出土地点	□成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	安成カ
第254図	282	293	74	15	④	第19地点	土器集中出土地点	□成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成カ
第254図	283	293	64	12	⑨	第19地点	土器集中出土地点	成	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	網カ
第254図	284	293	72	20	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	285	293	72	4	⑤+③	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第254図	286	293	73	31	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	287	293	74	69	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	288	293	74	63	④	第19地点	土器集中出土地点	□成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成ではない

第82表　墨書土器（7）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリッド・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第254図	289	278	727	17	④	第19地点	SD325	第成	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第254図	290	293	71	33	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第254図	291	293	67	3	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第254図	292	293	74	20	④	第19地点	土器集中出土地点	第成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成カ
第254図	293	278	730	25	④	第19地点	SD400	第成	須恵器坏	外口	8C後半	南比企	
第255図	294	195	421	9	⑥	第16地点	SD104	成	須恵器坏	内底	9CⅡ		
第255図	295	293	73	20	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	戌	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	戌カ大
第255図	296	195	421	9	①	第16地点	SD104	成	須恵器坏	外底	9CⅡ		
第255図	297	278	571	34	②	第19地点	SK145	成	須恵器坏	外口	9CⅢ	末野	
第255図	298	293	74	37	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	299	293	140	22	④	第19地点	L－15・16	第	須恵器坏	外口	9CⅠ	南比企	
第255図	300	278	689	2	④	第19地点	SD90	第	須恵器坏	外口	8C後半	末野	第成カ
第255図	301	293	74	65	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	302	293	74	71	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	303	293	74	36	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	304	293	74	61	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成カ
第255図	305	278	591	10	⑨	第19地点	SK269	第	土師器坏	内底	8CⅡ	利根川	第成カ
第255図	306	293	74	48	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	307	293	74	72	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成
第255図	308	293	74	1	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	第成か
第255図	309	293	74	35	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	310	293	74	51	④	第19地点	土器集中出土地点	第	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	311	278	774	23	④	第19地点	N13GP6	□成	須恵器坏	外口	8C後半	南比企	
第255図	312	293	74	43	④	第19地点	土器集中出土地点	□□	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	313	293	74	41	④	第19地点	土器集中出土地点	成	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第255図	314	278	470	15	④	第19地点	SE85	成	須恵器坏	外口	8C後半	南比企	第成カ
第255図	315	278	673	32	①	第19地点	SD37	成	須恵器高台付埦	外口	9C後半	末野	
第255図	316	293	76	2	⑨	第19地点	土器集中出土地点	仲人	須恵器高台付埦	外底	8CⅠ	南比企	中人カ仲人
第255図	317	293	63	7	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅡ	南比企	
第255図	318	293	66	11	⑦	第19地点	土器集中出土地点	中人君	須恵器坏	外底	8CⅡ	南比企	
第255図	319	293	75	7	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	320	293	64	19	⑧	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	321	293	66	3	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	322	293	140	27	④	第19地点	M－16c	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	323	293	70	23	③	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	324	293	75	15	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	325	293	64	16	④	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第255図	326	293	67	18	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	327	293	68	2	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	9CⅢ	南比企	
第255図	328	293	69	2	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第255図	329	293	70	1	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	330	293	70	12	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第255図	331	293	66	14	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第255図	332	81	93	3	⑦	第2地点	SB1	中	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第256図	333	293	71	19	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第256図	334	293	74	73	④	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	中カ
第256図	335	293	70	9	⑥	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第256図	336	278	719	12	⑤	第19地点	SD236	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	

第83表　墨書土器（8）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第256図	337	81	114	3	①	第2地点	SK13	中	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第256図	338	293	68	20	⑤+③	第19地点	土器集中出土地点	中中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第256図	339	293	64	8	①	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第256図	340	195	62	5	④	第14地点	SJ31	中	須恵器坏	外口	9CⅠ	南比企	
第256図	341	278	722	9	⑤	第19地点	SD316	中	須恵器坏	外底	8C前半	南比企	
第256図	342	293	64	14	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第256図	343	81	116	1	⑦+⑨	第2地点	SD9	中	須恵器高台付埦	内底	9CⅣ	末野	
第256図	344	81	116	1	①	第2地点	SD9	中	須恵器高台付埦	外口	9CⅣ	末野	
第256図	345	293	72	3	⑥	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	田カ
第256図	346	195	194	4	⑥	第14地点	SE5	中	須恵器坏	内底	9CⅠ		
第256図	347	195	194	4	⑥	第14地点	SE5	中	須恵器坏	外底	9CⅠ		
第256図	348	293	66	1	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	中中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第256図	349	293	75	9	⑤	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第256図	350	293	67	2	③	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第256図	351	293	75	4	⑦	第19地点	土器集中出土地点	中	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第256図	352	278	593	25	不詳	第19地点	SK372	中	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第257図	353	278	583	5	④	第19地点	SK200	丸人	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	
第257図	354	293	70	17	④	第19地点	土器集中出土地点	丸人	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第257図	355	293	74	22	④	第19地点	土器集中出土地点	丸人	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第257図	356	293	71	10	③	第19地点	土器集中出土地点	□人	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第257図	357	293	72	22	⑨	第19地点	土器集中出土地点	□人	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	丸人カ
第257図	358	293	71	15	①	第19地点	土器集中出土地点	□人	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	丸人カ
第257図	359	293	74	54	④	第19地点	土器集中出土地点	□人	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	成人カ
第257図	360	278	712	9	⑥	第19地点	SD06	人	灰釉陶器高台付皿	外底	10CⅠ	東濃	
第257図	361	278	769	19	⑦+⑧	第19地点	G14GP3	人	灰釉陶器埦	外底	10C前半	東遠江	
第257図	362	278	574	21	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	内口	10CⅣ	利根川	
第257図	363	278	574	24	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	内口	10CⅣ	利根川	
第257図	364	278	574	32	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	内口	10CⅣ	利根川	
第257図	365	278	575	20	①	第19地点	SK160	人	土師質土器高台付埦	内口	10CⅢ	利根川	
第257図	366	278	574	20	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	外口	10CⅣ	利根川	
第257図	367	278	574	18	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	内口	10CⅣ	利根川	
第257図	368	278	574	20	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	内口	10CⅣ	利根川	
第257図	369	278	574	25	①	第19地点	SK160	人	土師質土器坏	外口	10CⅣ	利根川	
第257図	370	278	574	19	①	第19地点	SK160	我	土師質土器坏	外口	10CⅣ	利根川	
第257図	371	278	574	19	①	第19地点	SK160	我	土師質土器坏	内口	10CⅣ	利根川	
第257図	372	278	576	17	①	第19地点	SK160	我	土師質土器埦	外口	10CⅣ	利根川	
第257図	373	103	47	3	①	第12地点	SD1	我□	須恵器高台付埦	外口	10CⅡ		
第257図	374	103	47	3	①	第12地点	SD1	我	須恵器高台付埦	内口	10CⅡ		
第257図	375	278	725	1	①	第19地点	SD316	我	須恵器高台付埦	外口	10C前半	利根川	
第257図	376	278	573	28	①	第19地点	SK160	我	須恵器坏	外口	10CⅢ	末野	
第257図	377	293	74	59	①	第19地点	土器集中出土地点	弋	須恵器坏	内口	9CⅢ	末野	我カ
第257図	378	293	74	58	①	第19地点	土器集中出土地点	我	須恵器坏	外口	9CⅠ	末野	我カ
第257図	379	278	573	17	②	第19地点	SK160	我	須恵器坏	外口	9C前半	利根川	我カ
第257図	380	293	140	21	①	第19地点	O−15d	我	須恵器坏	外口	9CⅠ	末野	我カ
第258図	381	293	69	20	⑤	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第258図	382	88	67	16	⑤	第10地点	SD3	益	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第258図	383	293	68	6	⑤	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第258図	384	293	70	8	①	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	

第84表　**墨書土器（9）**

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリッド・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第258図	385	293	67	7	③	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第258図	386	293	70	11	⑥	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第258図	387	293	71	22	⑦+⑧	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第258図	388	293	49	4	③	第19地点	土器集中出土地点	益	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第258図	389	293	49	6	⑤	第19地点	土器集中出土地点	益	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第258図	390	278	677	27	⑤	第19地点	SD51	益	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第258図	391	293	65	22	⑧+⑨+⑩	第19地点	土器集中出土地点	益	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第258図	392	293	49	9	小破片	第19地点	土器集中出土地点	益	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第258図	393	278	677	26	①+⑤	第19地点	SD51	西奏	須恵器坏	外底	8C前半	南比企	
第258図	394	278	682	24	①	第19地点	SD87	榛か奏	須恵器高台付埦	外口	9C前半	末野	
第258図	395	293	139	19	⑤	第19地点	H－21	西	須恵器坏	内底	9CⅠ	末野	
第258図	396	195	426	9	⑤	第16地点	101－93G	西	須恵器坏	内底	9CⅡ	南比企	
第258図	397	195	241	5	⑤	第14地点	SD54	西	須恵器坏	内底	9CⅡ		
第258図	398	195	421	4	⑤	第16地点	SD80	西	須恵器坏	内底	9CⅠ		
第258図	399	278	686	3	⑦	第19地点	SD87	西	灰釉陶器埦	外底	9C後半	東濃	
第258図	400	278	693	23	①	第19地点	SD91	西	灰釉陶器埦	外口	9CⅢ	東濃	
第258図	401	293	152	24	①	第19地点	N－17	西	灰釉陶器埦	外底	9C後半	東濃	
第258図	402	278	470	21	①	第19地点	SE85	西	須恵器坏	外口	10C前半	末野	
第258図	403	278	470	21	⑦+⑧	第19地点	SE85	西	須恵器坏	内底	10C前半	末野	
第259図	404	278	719	38	①	第19地点	SD270	西	須恵器高台付埦	外口	9C後半	末野	
第259図	405	293	69	23	⑦	第19地点	土器集中出土地点	揚井	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第259図	406	293	74	39	④	第19地点	土器集中出土地点	井	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	407	195	418	1	②	第16地点	SD39	井	須恵器坏	外口	10CⅠ		
第259図	408	195	421	4	⑥	第16地点	SD104	井	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	
第259図	409	195	421	1	⑧+⑩	第16地点	SD81	井	須恵器坏	内底	9CⅠ	南比企	
第259図	410	195	422	15	⑦+⑧+⑩	第16地点	SD111	井	須恵器坏	外底	9CⅠ	末野	
第259図	411	195	58	1	⑥	第14地点	SJ28	井	須恵器坏	外底	9CⅠ		
第259図	412	195	421	4	⑥	第16地点	SD104	井	須恵器坏	内底	9CⅡ	末野	
第259図	413	293	74	14	④	第19地点	土器集中出土地点	人君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	人口カ
第259図	414	293	73	29	④	第19地点	土器集中出土地点	人君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	415	293	74	10	④	第19地点	土器集中出土地点	少君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	416	293	74	68	④	第19地点	土器集中出土地点	少君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	417	293	74	16	④	第19地点	土器集中出土地点	小君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	418	293	74	13	④	第19地点	土器集中出土地点	小君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	419	293	74	34	④	第19地点	土器集中出土地点	君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	420	293	74	70	③	第19地点	土器集中出土地点	君	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	421	278	730	18	⑦+⑨	第19地点	SD386	君	須恵器皿	外底	9C前半	末野	
第259図	422	278	424	6	⑥	第19地点	SB36	君	須恵器坏	外底	9C前半	末野	
第259図	423	293	70	7	④	第19地点	土器集中出土地点	下内	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第259図	424	293	68	4	④	第19地点	土器集中出土地点	下内	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	下田カ下山
第259図	425	293	75	5	⑤	第19地点	土器集中出土地点	下	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第259図	426	293	64	4	②	第19地点	土器集中出土地点	下	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第259図	427	293	64	18	⑨	第19地点	土器集中出土地点	下	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第259図	428	293	70	4	②	第19地点	土器集中出土地点	下	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第259図	429	293	74	11	①	第19地点	土器集中出土地点	下	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第259図	430	293	79	20	①	第19地点	土器集中出土地点	下	須恵器耳皿	外底	9CⅡ	南比企	
第260図	431	88	41	7	①+⑤+③	第10地点	SJ1	南家	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第260図	432	195	239	16	⑤	第14地点	SD19	南	須恵器坏	内底	9CⅡ	末野	

第85表　**墨書土器（10）**

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリッド・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第260図	433	195	239	16	⑤	第14地点	SD19	南	須恵器坏	外底	9ＣⅡ	末野	
第260図	434	88	61	5	①	第10地点	Pit6 90−104G	南	須恵器坏	外口	8ＣⅣ	南比企	
第260図	435	278	709	21	⑤	第19地点	SD206	家	須恵器坏	外底	8ＣⅣ	南比企	
第260図	436	293	136	13	⑨	第19地点	T−14	家	須恵器坏蓋	外口	8ＣⅢ	南比企	
第260図	437	278	727	18	①+⑤	第19地点	SD325	林家	須恵器坏	外底	8ＣⅢ	南比企	
第260図	438	278	672	21	⑧+⑩	第19地点	SD37	後家	須恵器坏	外底	8Ｃ後半	南比企	
第260図	439	293	63	8	①	第19地点	土器集中出土地点	家刀自	須恵器坏	外底	8ＣⅡ	南比企	
第260図	440	293	67	23	⑤	第19地点	土器集中出土地点	主	須恵器坏	外底	8ＣⅣ	南比企	
第260図	441	278	569	14	⑨	第19地点	SK44	主	須恵器坏	外底	9ＣⅠ	南比企	千カ王カ卅
第260図	442	293	68	12	⑤	第19地点	土器集中出土地点	主	須恵器坏	外底	8ＣⅣ	南比企	主カ
第260図	443	293	72	21	⑦	第19地点	土器集中出土地点	主	須恵器坏	外底	9ＣⅠ	南比企	
第260図	444	278	682	22	①	第19地点	SD87	主	須恵器高台付埦	外口	9Ｃ前半	末野	
第260図	445	293	73	2	⑦+⑨	第19地点	土器集中出土地点	主	須恵器坏	外底	9ＣⅠ	末野	
第260図	446	293	76	16	⑤	第19地点	土器集中出土地点	主	須恵器高台付埦	外底	9ＣⅡ	末野	
第260図	447	293	75	16	③	第19地点	土器集中出土地点	主	須恵器坏	外底	8ＣⅢ	南比企	
第260図	448	278	587	18	②	第19地点	SK240	余	須恵器蓋	外口	8ＣⅢ	南比企	
第260図	449	278	586	33	①+⑤+③	第19地点	SK240	全	土師器坏Ａ	外底	9ＣⅠ	ローム土	
第260図	450	278	340	24	⑦+⑨	第19地点	SJ117	全	須恵器坏	外底	9ＣⅠ	南比企	
第260図	451	278	586	32	⑤	第19地点	SK240	金	土師器坏Ａ	外底	9ＣⅠ	利根川	
第260図	452	278	683	25	⑤	第19地点	SD87	余	須恵器高台付埦	外底	9Ｃ後半	末野	
第260図	453	278	467	4	①	第19地点	SE42	余	須恵器坏	外口	9Ｃ後半	南比企	
第260図	454	278	467	4	③	第19地点	SE42	全	須恵器坏	内底	9Ｃ後半	南比企	
第260図	455	293	19	2	①	第19地点	河川跡Ｄ−19	十	須恵器坏	外口	9ＣⅠ	末野	
第260図	456	278	697	26	⑦+⑧	第19地点	SD106	十	土師器坏	外底	9Ｃ前半	南比企	
第260図	457	278	672	12	①	第19地点	SD37	十	須恵器坏	外口	9Ｃ後半	南比企	
第260図	458	293	73	12	②	第19地点	土器集中出土地点	十	須恵器坏	外口	9ＣⅢ	南比企	
第261図	459	293	72	19	⑥	第19地点	土器集中出土地点	十	須恵器坏	内底	9ＣⅡ	南比企	
第261図	460	293	72	19	⑥	第19地点	土器集中出土地点	十	須恵器坏	外底	9ＣⅡ	南比企	
第261図	461	278	344	6	①+⑤	第19地点	SJ134	十	須恵器坏	外底	8ＣⅢ	南比企	
第261図	462	195	239	20	⑨	第14地点	SD19	日上	須恵器高台付坏	内底	8ＣⅡ	南比企	
第261図	463	195	239	20	③	第14地点	SD19	上	須恵器高台付坏	外底	8ＣⅡ	南比企	
第261図	464	195	239	19	⑤	第14地点	SD19	日上	須恵器坏	内底	9ＣⅡ	南比企	
第261図	465	195	239	19	⑤	第14地点	SD19	上	須恵器坏	外底	9ＣⅡ	南比企	
第261図	466	195	239	18	⑤+③	第14地点	SD19	日上	須恵器坏	内底	9ＣⅠ	南比企	
第261図	467	195	256	3	⑦+⑧	第15地点	SJ 5	日	須恵器坏	内底	9ＣⅡ		
第261図	468	195	336	3	①+⑤+③	第15地点	SD15	千万	須恵器埦	内底	8ＣⅣ	南比企	
第261図	469	195	292	3	①+⑤+③	第15地点	SJ23	千万	須恵器坏	内底	9ＣⅡ		
第261図	470	195	423	4	⑦	第16地点	SD112	千	須恵器坏	内底	9ＣⅡ	南比企	
第261図	471	293	19	13	②	第19地点	河川跡Ｃ−19	千	須恵器坏	外口	8ＣⅣ	南比企	
第261図	472	278	674	6	①	第19地点	SD37	千万	須恵器高台付埦	外口	9ＣⅢ	末野	千カ手カ寺
第261図	473	293	19	11	①	第19地点	河川跡Ｃ−19	千	須恵器坏	外口	9ＣⅡ	南比企	
第261図	474	278	677	30	①+⑤	第19地点	SD51	文子	須恵器坏	外底	8Ｃ後半	南比企	
第262図	475	293	73	7	①+⑤	第19地点	土器集中出土地点	文	須恵器坏	外底	9ＣⅠ	末野	
第262図	476	278	682	25	②	第19地点	SD87	文	須恵器高台付埦	外口	10Ｃ前半	末野	事カ又カ叉
第262図	477	278	682	25	①	第19地点	SD87	文	須恵器高台付埦	内口	10Ｃ前半	末野	事カ又カ叉
第262図	478	293	70	15	⑤	第19地点	土器集中出土地点	文	須恵器坏	外底	8ＣⅣ	南比企	
第262図	479	81	513	22	③	第６地点	SJ 4	太不酉	須恵器坏	外口	9ＣⅠ	東金子	
第262図	480	195	414	24	⑩	第16地点	SD 5	太	須恵器坏	外底	9ＣⅠ	南比企	

第86表　**墨書土器（11）**

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第262図	481	278	671	33	④	第19地点	SD37	大	須恵器坏	外口	9C前半	南比企	
第262図	482	278	674	7	⑥	第19地点	SD37	太	須恵器高台付埦	内底	9CⅢ	末野	
第262図	483	278	691	22	②	第19地点	SD91	大	須恵器高台付埦	外口	10C前半	末野	大カ太
第262図	484	81	91	23	⑤	第2地点	SJ9	兵	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	
第262図	485	81	118	1	③	第2地点	G68−36	兵	須恵器坏	外口	9CⅠ	末野	
第262図	486	81	126	4	⑤	第3地点	SJ3	兵	須恵器坏	外底	9CⅡ	南比企	
第262図	487	81	125	1	④	第3地点	SJ1	兵	須恵器坏	外口	9CⅡ	末野	
第262図	488	278	727	13	⑨	第19地点	SD325	龍	土師器坏B	外底	9CⅢ	ローム土	
第262図	489	278	469	21	①	第19地点	SE79	龍	須恵器坏	外底	9C後半	末野	林カ龍
第262図	490	278	342	25	⑥	第19地点	SJ129	龍	土師器高台付埦	外底	9CⅢ	利根川	
第262図	491	278	727	12	⑨	第19地点	SD325	龍	土師器坏B	外口	9CⅢ	ローム土	
第262図	492	195	102	2	⑤	第14地点	SJ55	春山	須恵器埦	外底	8CⅣ	南比企	
第262図	493	195	102	2	④	第14地点	SJ55	春山	須恵器埦	外口	8CⅣ	南比企	
第262図	494	195	194	1	⑤	第14地点	SE10	山	土師器坏	外底	9CⅠ	利根川	山カ
第262図	495	81	60	6	⑥	第1地点	SE1	国	須恵器坏	内底	9CⅢ	末野	
第262図	496	278	725	6	⑥	第19地点	SD316	国	灰釉陶器埦	外底	10C前半	東濃	
第262図	497	293	68	10	⑦	第19地点	土器集中出土地点	国万	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第263図	498	195	417	4	④	第16地点	SD30	麦	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	□麦
第263図	499	88	21	11	④	第9地点	SK6	麦	須恵器坏	外口	9CⅡ	南比企	(麦の異体字)
第263図	500	88	21	5	④	第9地点	SK6	麦	土師器埦	外口	9CⅡ		(麦の異体字)
第263図	501	278	682	23	①	第19地点	SD87	蘇	須恵器高台付埦	外口	9C前半	末野	
第263図	502	278	589	15	③	第19地点	SK240	蘇	須恵器皿	外口	9CⅠ	末野	蘊カ 藤カ
第263図	503	278	681	25	⑥	第19地点	SD87	蘇	須恵器高台付埦	外底	9C後半	末野	
第263図	504	195	417	5	⑤	第16地点	SD30	良	須恵器坏	外底	8CⅢ		
第263図	505	195	417	6	①+⑤+③	第16地点	SD30	良	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第263図	506	195	426	26	⑦	第16地点	98−98G	良	須恵器坏	外底	9CⅠ		
第263図	507	278	575	7	①	第19地点	SK160	息	須恵器高台付埦	内口	10CⅢ	末野	
第263図	508	278	575	8	①	第19地点	SK160	息	須恵器高台付埦	外口	10CⅢ	末野	
第263図	509	278	574	22	①	第19地点	SK160	息	土師質土器坏	外口	10CⅣ	利根川	
第263図	510	293	19	16	⑥	第19地点	河川下D−19−③	レ	須恵器高台付埦	外底	10CⅢ	末野	
第263図	511	278	678	3	①	第19地点	SD51	レ	須恵器坏	外口	9C前半	末野	
第263図	512	293	19	16	①	第19地点	河川下D−19−③	レ	須恵器高台付埦	外口	10CⅢ	末野	
第263図	513	195	239	17	③	第14地点	SD19	風内	須恵器坏	内底	9CⅡ	南比企	
第263図	514	195	194	3	⑦+⑨	第14地点	SE5	風内	須恵器坏	内底	9CⅡ	南比企	
第263図	515	88	90	21	⑤	第10地点	SD22	道	須恵器高台付坏	内底	9CⅢ		
第263図	516	88	90	21	①	第10地点	SD22	道	須恵器高台付坏	外口	9CⅢ		道カ
第263図	517	278	672	22	⑤	第19地点	SD37	卅	須恵器坏	外底	9C後半	南比企	三十
第263図	518	278	672	23	⑤	第19地点	SD37	卅	須恵器坏	外底	9C後半	南比企	三十
第263図	519	278	710	22	①	第19地点	SD206	冬	須恵器高台付埦	外口	10CⅠ	末野	
第263図	520	278	725	5	⑥	第19地点	SD316	冬	灰釉陶器埦	外底	10C前半	東濃	
第263図	521	278	722	27	①	第19地点	SD316	子	須恵器高台付埦	外口	10C前半	利根川	
第263図	522	278	722	28	①	第19地点	SD316	子	須恵器高台付埦	外口	10C前半	利根川	
第264図	523	88	88	16	⑥	第10地点	SD17	山	須恵器高台付坏	内底	10CⅡ		
第264図	524	195	248	5	①	第15地点	SJ2	山	須恵器坏	外口	9CⅠ		
第264図	525	293	64	20	④	第19地点	土器集中出土地点	念	須恵器坏	外口	8CⅡ	南比企	
第264図	526	195	250	2	④	第15地点	SJ3	朋知	須恵器坏	外口	8CⅢ	南比企	朋知カ
第264図	527	81	233	5	④	第3地点	SD7	向	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	斎カ
第264図	528	293	64	7	①	第19地点	土器集中出土地点	大□	須恵器坏	外底	8CⅢ	末野	大女カ

第87表　**墨書土器（12）**

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリッド・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第264図	529	278	581	25	⑤	第19地点	SK189	苗田	土師器坏 暗文	外底	8CⅢ	利根川	
第264図	530	278	673	18	⑤	第19地点	SD37	宇	須恵器坏	外底	8CⅢ	南比企	
第264図	531	278	673	24	⑦+⑨	第19地点	SD37	ル	須恵器高台付埦	外底	8CⅢ	末野	
第264図	532	278	328	9	④	第19地点	SJ36	鞘□	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	鞘田カ
第264図	533	293	69	14	①	第19地点	土器集中出土地点	陽	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第264図	534	293	136	15	④	第19地点	W−21	荒男	須恵器坏蓋	外口	8CⅣ	末野	
第264図	535	278	730	4	⑥	第19地点	SD336	六ら	須恵器坏	内底	8C後半	南比企	
第264図	536	293	69	14	⑦	第19地点	土器集中出土地点	介	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	芥カ我
第264図	537	278	674	13	④	第19地点	SD37	百	須恵器高台付埦	外口	8CⅣ	南比企	
第264図	538	293	74	5	③	第19地点	土器集中出土地点	横見郡	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第264図	539	103	55	5	④	第12地点	107−53G	佃万	須恵器蓋	外口	8CⅣ	南比企	佃万呂か
第264図	540	293	65	1	④	第19地点	土器集中出土地点	奈	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	
第264図	541	278	572	15	⑤	第19地点	SK149	典	須恵器坏	外底	8CⅣ	末野	兵カ
第264図	542	293	69	15	⑤	第19地点	土器集中出土地点	世	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第264図	543	293	69	19	⑤	第19地点	土器集中出土地点	所	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	
第264図	544	293	65	10	⑤	第19地点	土器集中出土地点	宿	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	宿カ
第264図	545	278	470	14	⑤	第19地点	SE85	口	須恵器坏	外底	8C後半	南比企	
第264図	546	293	74	32	④	第19地点	土器集中出土地点	□□	須恵器坏	外口	8CⅣ	南比企	分第カ
第264図	547	81	68	3	①	第1地点	SK20	卍	須恵器坏	内口	8CⅣ	南比企	用カ
第264図	548	293	74	25	判断できない	第19地点	土器集中出土地点	○	須恵器坏	内口	8CⅣ	南比企	
第264図	549	278	697	23	⑧	第19地点	SD95	哥	須恵器坏	外底	8CⅣ	南比企	可カ
第265図	550	278	674	12	①	第19地点	SD37	武	須恵器高台付埦	外口	8CⅣ	末野	式カ
第265図	551	195	95	2	①	第14地点	SJ51	大	須恵器蓋	外口	8CⅣ	南比企	
第265図	552	293	140	2	④	第19地点	D−25	木	須恵器坏	外口	9CⅡ	東金子	
第265図	553	195	421	5	②	第16地点	SD104	磨	須恵器坏	外口	9CⅠ	南比企	
第265図	554	88	67	18	③+③	第10地点	SD3	畠	須恵器坏	外底	9CⅠ	南比企	刻書「大」と「大畠」
第265図	555	293	19	14	④	第19地点	河川跡C−19	美	須恵器坏	外口	9CⅠ	末野	
第265図	556	278	333	24	⑤	第19地点	SJ74	石	須恵器坏	内底	9CⅠ	南比企	
第265図	557	278	340	1	①	第19地点	SJ114	□国	須恵器高台付埦	外口	9CⅠ	末野	
第265図	558	278	730	30	⑧+⑩	第19地点	SD410	本	須恵器坏	内底	9CⅠ	南比企	
第265図	559	293	59	10	②	第19地点	土器集中出土地点	□驛	須恵器蓋	内口	9CⅠ	末野	
第265図	560	278	729	18	⑦+⑨	第19地点	SD325	貞	灰釉陶器埦	外底	9CⅠ	猿投	
第265図	561	195	416	1	⑥	第16地点	SD15	見□	須恵器坏	内底	9CⅡ	末野	見官カ
第265図	562	278	673	17	①	第19地点	SD37	□	須恵器坏	外口	9C前半	末野	寺カ
第265図	563	278	589	13	③	第19地点	SK240	佐	土師器坏	外口	9C前半	南比企	
第265図	564	278	672	7	⑨+⑩	第19地点	SD37	弼	須恵器坏	外底	9CⅡ	末野	術カ弼カ
第265図	565	293	49	5	小破片	第19地点	土器集中出土地点	有	土師器坏A	外底	9CⅡ	利根川	
第265図	566	278	678	8	③	第19地点	SD51	我我我我大得	須恵器坏	外口	9C前半	南比企	
第265図	567	278	729	17	⑦+⑨	第19地点	SD325	什	須恵器耳皿	外底	9CⅢ	新治	
第265図	568	195	230	83	⑥	第14地点	SD1	古	須恵器高台付坏	内底	9CⅢ	末野	
第265図	569	278	727	30	①	第19地点	SD325	氏	須恵器皿	外口	9CⅢ	南比企	
第265図	570	278	672	13	②	第19地点	SD37	天	須恵器坏	外口	9C後半	南比企	
第265図	571	195	421	3	④	第16地点	SD80	玉	須恵器坏	外口	9CⅢ	末野	
第265図	572	278	672	20	⑦	第19地点	SD37	黒	須恵器坏	外底	9C後半	南比企	
第265図	573	278	678	10	④	第19地点	SD51	鬼	須恵器坏	外口	9C前半	南比企	
第265図	574	278	777	6	②	第19地点	P15GP6	萩	須恵器坏	外口	9C前半	末野	
第265図	575	88	90	20	⑤	第10地点	SD22	集	須恵器坏	内底	9CⅡ	南比企	
第265図	576	278	571	30	④	第19地点	SK145	百	須恵器坏	外口	9CⅢ	南比企	百カ万カ

第88表　墨書土器（13）

挿図番号	図の番号	集	遺物挿図番号	遺物番号	文字記載方法	地点名	グリット・遺構名	墨書文字	器種	墨書部位	時期	産地	備考
第266図	577	278	715	7	③	第19地点	SD225	庚	須恵器高台付埦	外口	10C I	末野	収カ
第266図	578	278	424	11	①	第19地点	SB36	荏	須恵器高台付埦	外口	[illegible]	末野	荘カ
第266図	579	293	79	23	⑦	第19地点	土器集中出土地点	□	灰釉陶器皿	外底	10C後半	東濃	膜カ模カ換
第266図	580	278	722	25	①	第19地点	SD316	念	須恵器高台付埦	外口	10C前半	末野	
第266図	581	293	138	6	②	第19地点	K−13b	□	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第266図	582	293	66	13	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第266図	583	278	463	5	不詳	第19地点	SE4	□	土師器坏	外底	8C Ⅲ	利根川	
第266図	584	293	69	18	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第266図	585	293	67	22	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第266図	586	278	468	31	⑤	第19地点	SE61	□	須恵器坏	外底	8C Ⅲ	南比企	
第266図	587	293	19	18	判断できない	第19地点	河川跡C−19	□	須恵器皿	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	588	293	66	22	①	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅲ	南比企	
第266図	589	293	74	12	④	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	□門カ
第266図	590	293	137	23	⑥	第19地点	L−17b	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	宝□カ
第266図	591	278	673	16	②	第19地点	SD37	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	592	195	422	6	④	第16地点	SD111	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ		
第266図	593	195	250	3	①	第15地点	SJ3	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ		
第266図	594	293	64	15	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第266図	595	293	74	60	③	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	596	293	74	62	③	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	597	293	74	50	④	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	598	81	203	3	⑦+⑨	第3地点	SJ42	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第266図	599	293	66	21	④	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	600	293	74	52	④	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	601	293	138	3	②	第19地点	I−16d	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第266図	602	293	81	14	①	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器コップ型土器	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	603	293	74	46	④	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	604	81	203	3	①	第3地点	SJ42	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ		
第266図	605	278	466	25	⑩	第19地点	SE42	□	土師器坏A	外底	8C後半	ローム土	
第266図	606	293	66	10	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第266図	607	293	70	5	①	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	8C Ⅳ	南比企	
第266図	608	293	68	26	④	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外口	8C Ⅳ	南比企	
第266図	609	278	353	18	⑤	第19地点	SJ189	□	須恵器坏	外底	8C後半	末野	
第266図	610	293	140	1	⑤	第19地点	I−13d	□	須恵器坏	外底	9C Ⅱ	末野	
第266図	611	293	71	16	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	
第266図	612	293	75	12	⑤	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	9C Ⅰ	南比企	
第266図	613	278	343	15	①	第19地点	SJ131	□	須恵器埦	外口	9C Ⅱ	南比企	鳥の戯画か
第266図	614	278	571	7	①	第19地点	SK104	□	須恵器坏	外口	9C Ⅱ	末野	
第266図	615	293	49	8	小破片	第19地点	土器集中出土地点	□	土師器坏A	外底	9C Ⅱ	利根川	
第266図	616	293	72	9	①+⑤+③	第19地点	土器集中出土地点	□	須恵器坏	外底	9C Ⅱ	末野	
第266図	617	278	678	5	⑦+⑨	第19地点	SD51	□	須恵器坏	外底	9C前半	南比企	
第266図	618	278	673	31	①	第19地点	SD37	□	須恵器高台付埦	外口	9C後半	末野	
第266図	619	293	151	3	⑧	第19地点	M−17	□	灰釉陶器埦	外底	10C後半	東遠江	
第266図	620	278	689	23	⑤	第19地点	SD91	□	土師器坏A	外底	10C前半	ローム土	
第266図	621	278	696	2	不詳	第19地点	SD91	□	灰釉陶器皿	外底	10C前半	東濃	
第266図	622	293	152	15	①	第19地点	N−17	□	灰釉陶器埦	外口	10C後半	東濃	

次に9世紀第Ⅰ四半期に登場して、10世紀第Ⅰ四半期まで続く一群。出土数はそれほど多くはなく、二から三点で推移する。「中」の後半、「我」の前半、「西」、「金」、「十」、「日上」、「千万」、「太」、「正八」、「龍」などである。これを「9世紀型墨書土器」と仮称する。

最後に10世紀第Ⅰ四半期から登場し、10世紀後半に増える一群。「人」、「我」の後半である。これを「10世紀型墨書土器」とする。

ここで同一の文字を前半・後半に分けたのは、同一の文字でも記された内容が、異なると判断したためである。すなわち各文字の文字としての意味、表現された事象によって、採用された文字種の消長が、異なるのである。

個々の文字種ごとに分析したが、8世紀型墨書土器は、端的に述べるならば、人名や職掌、家の名前（家号）などの一部と考えたい。「綱」は、「綱丁」や「綱領」などの税や物資を運搬する者達にかかわる職掌か、名前の一部、例えば「綱麻呂」などを示す。

また「土万」は、別に「土万呂」があり、この省略であろう。さらに「第成」や「丸人」・「少君」などは、人名である。「益」・「家」・「主」・「文」なども、これらも人名の一部であろう。「中」は、「中人」や「中人君」の省略かもしれない。「下」は、「下内」があり、同様であろう。また「井」は、井泉にかかわる文字である。

15. 木簡

第42号井戸から木簡が出土した。木簡は、井戸が1.5mほど埋没した後、8世紀第Ⅳ四半期から9世紀第Ⅰ四半期の土器とともに廃棄されていた。

木簡の大きさは、長さ352㎜×幅35㎜×厚さ5㎜である。上から左側面83㎜、右側面80㎜に刻みが入る。また左下には、左側面から32㎜に一辺3㎜の方形の小穴が穿たれている。

記載された文字が、右側面で揃って欠けていることから、本来の木簡を縦に半截した後、右に刻みを入れて再利用したと考えたい。なお下端の方形の穿孔が、左右の中心に穿たれたとすると、当初は、幅64㎜の木簡であったこととなる。また上下の両端は、水平である。

この木簡には、表面に40字以上、裏面に41字以上の文字が書かれている。表・裏は、便宜的に設定した。

文字の釈文は、第267図左の通りである。木簡は、いわゆる習書木簡で「有」「是」「長」「大」などを書き連ねている。

なかでも表面の10「是」と30「長」は、字形や上下左右のバランスも整い、運筆も滑らかであることから、一連の習書文字の手本と考えたい（第1類）。また裏面の1「大」は、第3画が、右下で止められている。これは、10「是」や30「長」の右払いとは異なるが、手本かもしれない。

しかし表面の1「有」は、バランスも悪く筆使いも粗いため、手本とは考えられない。木簡には、表面の10「是」や30「長」のように丁寧な「有」がないため、断ち割られた別個体に「有」の手本が書かれていたか、すでに削り落とされたのかもしれない。

「有」は、細く「月」を大きく書く表面の1・4・18・21（第1類）と、各画を太く短く書く表面の2・3（第2類）、さらに表面の21・22・23のように第1・2画との「十」と「月」を別々に書く（第3類）に大きく分けることができる。

これらは、おそらく同一の筆者が、習書を重ねた結果である。次第に「有」という文字が、「十月」という文字に近づいてしまったと解釈したい。

また「是」では、表面の8・11・15と次第に大きく雑になっていく。また「長」も表面の35は、手本の30に近いが、表面の24・25・26・38・39と木簡の下へ向かうに従って、次第に大きくなる。

「是」と「長」は、字形がよく似ていることから、繰り返し練習をしたのであろう。裏面の5は、「日」

のみであるが、「是」の上部にあたり、下部は、削り取ってしまったと考えたい。

習書による文字の変化については、第269図に示した。

なお、習書以前に書かれた文字も一部観察できた。表面の31・32・34・36・37、裏面の9・10・30・31である。裏面の30・31を除いて一次的な習書と判断した。裏面の30・31は、習書に使われた以前に書かれた文字である。「□斤」と読むことができ、重さの単位であろうか。

また手本となった「是（10）」と「長（30）」は、木簡の中段から開始されていることから、改めて木簡に手本の文字を書いたのではなく、習書として活用する前に本来の目的で書かれた文字と判断した。なお、第268図では、木簡の削り痕跡を可能な限り復元した。これによって文字の削り落しによる木簡への記載順序も明らかにすることができた。

子供が、文字を練習するとき、だんだんと疲れて

裏

大大大長是□□□□□是十大是□有丈有有有有有有

有是□□有□斤□有有有有□有有有

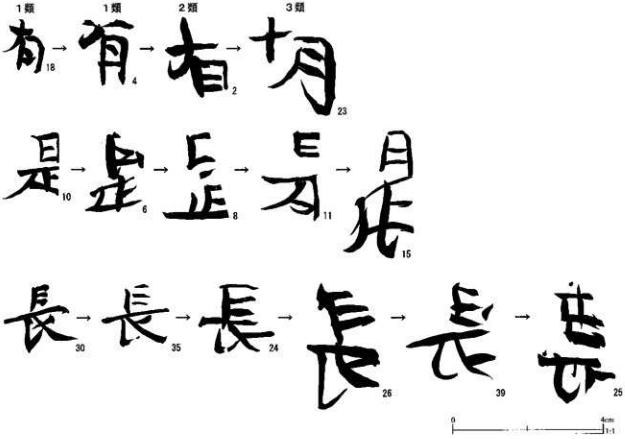
表

有有有有□是□大是是是是大是□□

有有有有□□長長長十十十長□長□長□□長長長十□十十□

第267図　第42号井戸出土木簡

第268図　**木簡記載文字拡大（1）**



第269図　木簡記載文字拡大（2）

くると、偏と旁を別々に連続して書くようになることがしばしばある。この木簡を観察すると、そうした当時の習書の様子をうかがうことができる。

この木簡は、習書を行った後、表面の8と27の部分で二つに割られて、井戸へ廃棄されたようである。

16. 木製品

北島遺跡第19地点から出土した古代の木製品には、曲物・柄杓・木札・糸巻・鎌・建築材・案・下駄・板状加工材がある。

第270図1は、柄杓である。側板は、樹皮紐によって二箇所で綴じられる。一箇所は、「二列前外三段綴じ後内一段綴じ」であり、もう一箇所は、「一列内一段綴じ」である。底板と側板は、四箇所の木釘によって固定されている。綴じ部の近くに一辺20mmの方形の穴、その対面に一辺8mmの方形の穴を穿ち、柄を通す穴とする。内面の綴じ部付近には、ケビキによって2～3mmの間隔に縦の平行線が引かれる。

2～7は、曲物である。曲物は、底板と側板の結合方法で分類した（中山・中鉢1994)。カキイレゾコとクレゾコである。カキイレゾコは、底板の周辺に段をつけて側板を巻き、樹皮紐・木釘で結合する構造である。クレゾコは、底板に段差が作られず、外周に側板を巻き、木釘で結合する構造である。

2・3は、曲物の側板である。2は、樹皮紐により四箇所で綴じられる。綴じの間隔は20～50mmである。内面の綴じ部の近くにケビキによって2～5mm間隔の平行線を縦に引く。3は、側板を「一列外三段綴じ」と、「一列内三段綴じ」の二箇所で留めている。その間隔は40mmである。木釘穴はみられない。ケビキで内面に縦の平行線を引く。

4～7は、曲物の底板である。4・6は、側板を付けるために高さ2mmの段差を作る。カキイレゾコである。4には、側板を留める5mm幅の樹皮紐が残存する。5・7は、周辺に段が作られない。クレゾコである。5は、10mm幅の加工痕が、内外面の全体にみられる。7は、とくに加工痕はみられないが、内外面に長さ10～60mmの刃物痕と、多数の細かな傷が集中的にみられる。側面には、径2mm・長さ8mmの木釘穴が一箇所穿たれている。

2・4～7は、径が200mm以下と小形の曲物であり、3は径が360mmと中型の曲物である。

8は、曲物の蓋である。薄皮の板を用いている。

9は、糸巻きの横木である。相欠きの仕口をもち、両端を細く作る。仕口の形から、枠木が四本の糸巻と考えた。全長は、130mmで中形の横木である。中心には、4mmの方形の穴が穿たれる。

10は、加工痕がみられるが、用途は不明である。先端を削り、三角形に尖らせている。長さ10mm、幅26mm、深さ2mmの切り込みが、二箇所作られる。

11は、木札である。長さ7mm、幅3mmの切り込みが、上部の両側二箇所に入っている。上部は、熱を受け焦げている。

12～15は、板状の加工材である。

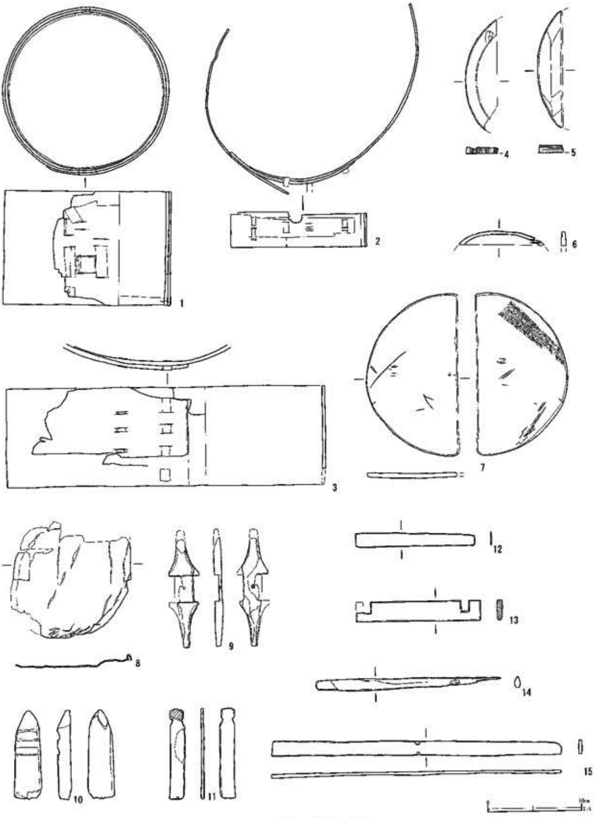
13は、両端に幅10mm、深さ10mmの切り込みが作られる。

第271図1は、鉄製の刃部を装着した鎌である。柄は、屈曲することなく直線的である。柄の端部、腹面には、三角形の突起が作られている。柄の断面は、長さ20mm、幅15mmの楕円形である。刃部は、柄に長さ58mmの切り込みを入れ、装着される。鉄刃の装着部の両面には、焼印が押されている。円形に「ソ」を組み合わせた文字である。私印であろう。

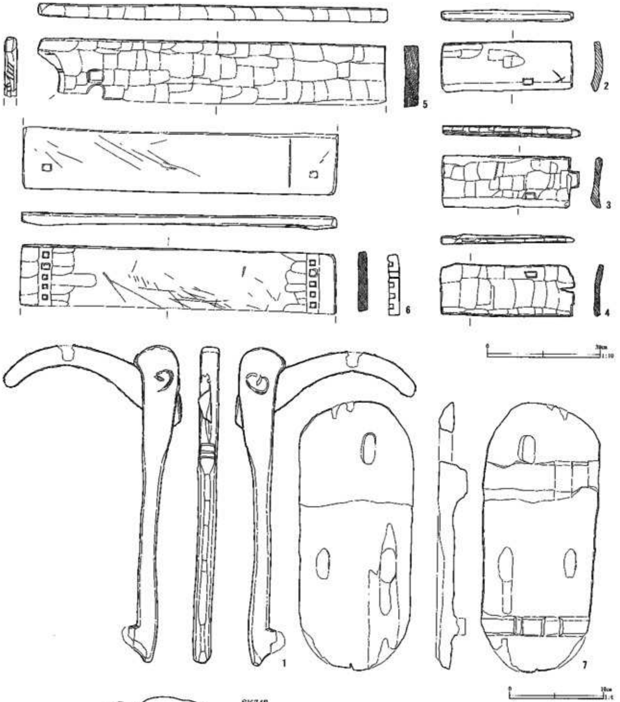
2～4は、縦27mm、横12mmの枘穴が穿たれている板材である。3は、長さ12mm、幅21mmの枘が作られている。三点は長さ・幅が同じで、枘穴の位置にも差がないことから、元は一つの製品だったと考えられる。

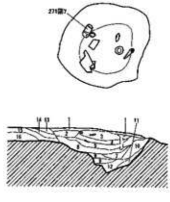
5は、建築材で、蹴放しである。蹴放し材は、扉の軸をうけて支える材である。枘穴は二箇所穿たれている。一箇所は縦22mm、横34mmの方形で柱の枘を入れる部分、もう一箇所は径40mmの円形で両脇の柱を支える部分であろう。

6は、案である。裏面に脚座が削りだされ、一辺11mmの枘穴が15mm間隔で穿たれている。一孔は穴が貫通し、脚が表面に出る。表裏面には、10mmの短い



第270図　**古代の木製品（1）**

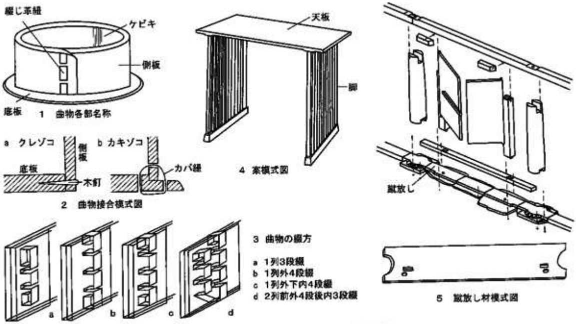




SK748

1	灰色土	炭化物少量
2	灰茶褐色土	細砂主体 灰入り粘土を薄い水平縞状に含む しまりあり
3	暗灰色土	層下面で炭粒子含む 白色土がブロック状に混入
4	灰色土	3層に近似 白色土の混入多量 しまりわるい
5	灰色土	シルト質粘土 炭化物少量 しまりわるい
6	暗灰色土	炭粒子含まず
7	灰色土	砂質 細砂と暗灰色粘土の混合層
8	灰褐色土	砂層 部分的に灰色粘土が縞状に混合
9	青灰色土	砂質 青灰色粘土と細砂との混合層
10	灰白色土	シルト質粘土主体 灰色粘土・細砂が縞状に混合
11	灰褐色土	砂層
12	青灰白色土	青灰色シルト質粘土・灰色粘土の混合層
13	灰色土	しまりあり 炭粒子少量
14	灰色土	灰色粘土 白色粘土を混ず 炭粒子微量
15	灰白色土	砂質土 灰白色粘土・細砂の混合層
16	灰褐色土	砂層

第271図　古代の木製品（2）



第272図　**木製品の各部名称・計測位置**

刃物傷と、100㎜の長い傷が多数残存する。

7は、一木造りの「連歯下駄」である。楕円形を呈す。歯は高さ12㎜である。前歯の前に前緒穴、後歯の前に後緒穴を穿つ。緒穴はいずれも円形である。

なお、第272図は、次の文献から引用し編集した。2は中山・中鉢1994、3は奈良国立文化財研究所1985、4は正倉院事務所1978、5は奈良国立文化財研究所1995である。

第89表　**古代の木製品**

挿図番号	図の番号	遺構番号	器種	径	高さ	厚さ	長さ	幅	備考
第270図	1	SE87	柄杓側板	171	126	3	−	−	
第270図	2	SE42	曲物側板	156	36	2	−	−	
第270図	3	SE85	曲物側板	360	110	3	−	−	
第270図	4	SE42	曲物底板	168	−	7	−	−	
第270図	5	SE42	曲物底板	180	−	11	−	−	
第270図	6	包含層	曲物底板	115	−	6	−	−	
第270図	7	SE12	曲物底板	180	−	5	−	−	
第270図	8	SD87	曲物蓋	131	−	1	−	−	
第270図	9	SD37	糸巻(横木)	−	−	8（3）	130(29)	34（16）	カッコ内は仕口の寸法
第270図	10	SD329	加工材	−	−	13	100	31	
第270図	11	SK160	木札	−	−	2	100	15	
第270図	12	SE42	板状加工材	−	−	1	133	13	
第270図	13	SE42	板状加工材	−	−	6	141	23	
第270図	14	SK160	板状加工材	−	−	7	406	13	
第270図	15	SK160	板状加工材	−	−	4	326	17	
第271図	1	SE42	鎌	−	−	−	−	−	鎌部192、柄長336幅19
第271図	2	SE85	加工材	−	−	20	350	125	
第271図	3	SE85	加工材	−	−	22	366	138	
第271図	4	SE85	加工材	−	−	12	355	131	
第271図	5	SE85	蹴放し	−	−	37	921	164	
第271図	6	SE85	案	−	−	24	835	154	
第271図	7	SK748	連歯下駄	−	30	14	280	121	歯幅（前）27、歯間136、歯幅（後）16、孔位置（前）32、孔位置（後）154、孔間52

(2) 中　世

第273図　**中世の遺構全体図**

1．遺構

ここでは天仁元（1008）年に降灰した浅間山B軽石層、及びB軽石を混入する堆積層を含む遺構、また中世の遺物が出土した遺構について、中世の遺構として取り扱うこととした。

北島遺跡第19地点で確認した中世の遺構は、掘立柱建物跡・井戸跡・土壙・溝跡などが、個々の概要については、すでに当事業団第278集『北島遺跡Ｖ』で詳細を述べたので、本報告書では、全体の概要を述べるにとどめたい。

なお、北島遺跡第19地点では、前述のように現地表から15cm前後で古代の遺物堆積層の上面が姿を現した。そのため中世の遺構構築面（中世の地表）は、すでに失われていたのである。この古代の遺物堆積層を破壊する形で中世の遺構は、構築されていた。

そのため遺物堆積層の色調が黒色で、中世遺構の埋土が黒色のため、確認できた遺構は、大形の井戸に限られた。よって中世の遺構確認は、古代の遺物堆積層を除去して出現した灰白色の安定した層の上面であった。

ｉ．掘立柱建物跡

中世の扉には、無数の小穴の分布を描いた。この小穴は、古代の掘立柱建物跡にかかわる柱穴を除いた小穴の分布である。当然、古代の遺物を出土した小穴も存在し、古代に遡る柱穴も存在するであろう。しかしここでは小穴を一括して掲載した。

第274図　**北島遺跡全体図と井戸跡**

ただし掘立柱建物跡として認識できる小穴の列びは、確認できなかった。

ii．井戸跡

中世の井戸跡は、68基確認した。井戸跡は、西側台地の南部に45基を、集中して確認した。また東側台地の古墳群内には、16基の井戸跡を確認した。第81・140号溝と関連しよう。さらに調査区北側には3基、西側台地の南側には3基の井戸跡を確認した。

とくに西側台地の調査区西側中央から東側台地の古墳群に向かっては、調査区を斜めに横断するように井戸跡の分布を確認できた。井戸跡の分布が、地下水脈の通り道を裏付けていよう。

これまでの発掘調査で北島遺跡や周辺地域について、井戸跡の分布から地下水脈が、第274図のように古代から中世にかけては、通っていたことが明らかとなった。

この水脈は、元荒川以前の旧荒川や利根川が形成した河原などに堆積した礫層が、透水層となって地下を流れていた。なお、本事業開発以前のボーリング調査よると、10メートル前後に礫層が確認されている。

古代から中世の人々は、地形や湧水点の存在から地下の水脈を察知し、この水脈に沿って井戸を掘削したのであろう。その連続が、共通した場所に井戸を掘削するといった行為となったのである。

大形の井戸の集中する西側台地では、中世段階の区画溝は確認することはできない。これに対し東側台地では、古墳群をぬって走る第81・84号溝、第140号溝が、区画溝として機能しており、この区画に付帯した施設として井戸が掘削された。

なお、井戸枠本体は、木製品と一括して述べることとした。

iii．溝跡

第81・84号溝は、第2号墳の周溝北側から掘削が始まり、第4号墳を迂回し、第5号墳の墳丘を貫いて南に下だり、第6号墳の脇で止まる。この溝の掘削当初は、四基の古墳の墳丘が、存在していた可能性が高い。

とくに第2号墳は、墳丘が意識されていたと考えて良い。また第148号溝は、第3・6号墳と第2・5号溝の間に掘削された溝である。東側の端でクランク状に折れ曲がる。ことからこの部分が、入り口と考えたい。

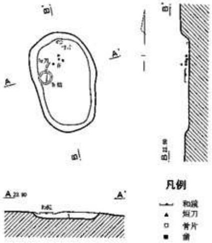
井戸跡は、第2・3・4・6号墳の墳丘内にあたる場所にも掘削されていた。井戸の掘削段階に墳丘は、削平されていなかったと理解したい。すなわち第2号墳では、第14号井戸、第3号墳では第30号井戸、第4号墳では第9号井戸、第6号墳では第33号井戸が、掘削されていたのである。

ただし墳丘が、もともと小形で低位であったため、それほど意識されていたのか疑問であるが、第81・84号溝と第148号溝が、墳丘や周溝を巧みに避けている点を考慮すると、中世後半段階までは、墳丘が目視できる状況であったと考えたい。

iv．山吹双鳥鏡出土土壙墓

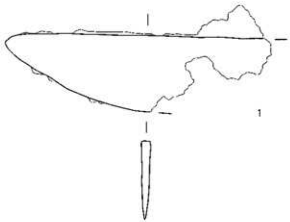
東側台地に位置する古墳群の第2号墳墳丘内から土壙墓（SK106）が検出された。土壙墓は長軸106cm、短軸68cmの楕円形に近い平面形態で、掘り込みは6cm前後と浅く、古墳の墳丘中心からやや北東に寄った位置に単独で営まれていた。墓壙底面の標高は23.7mを測り、墳丘盛土内に構築されている。H−25グリッドのほぼ中央に位置し、主軸方向はN−12°−Wを採る。

墓壙の覆土は骨片と思われる白色微粒子と炭化物を含んだ暗褐色土が主体で、墓壙底面北側からヒトの骨片と歯がまとまって出土した。このことから遺体は頭部を北にした状態で埋葬されたものと推定される。遺物は西壁際から和鏡と短刀片が出土した。和鏡は鏡面を上に向け、底面から僅かに浮き、その下面には直径約15cmの円形の炭化物が検出された。遺存状態が良好でなく判然としないが、本来は鏡箱



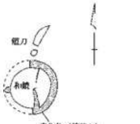
1　暗褐色土　白色微粒子（骨片）微量　炭化物粒子少量
粘性弱い

0　1m　1:40



1

和鏡出土部分拡大図

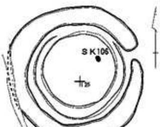


0　25cm　1:10

2

0　3cm　1:1

和鏡出土土壙墓位置図



0　20m　1:800

第275図　山吹双鳥鏡出土土壙墓

などの木製容器に納められていたのであろう。また、鏡に接するように短刀の破片が鋒先を北に向けた状態で出土した。骨片や歯の分布状況からみて、これらの副葬品は遺体の胸部、あるいは頭部の脇に置かれていたものと想定される。なお、出土した歯の同定結果によれば、被葬者は成年男子と鑑定されている（付編参照）。

このように本土壙墓は、後世に古墳の墳丘を利用して造墓されたものと考えることができる。同様に古墳の墳丘を意識して墓壙を営んだ例として、鎌倉時代のものであるが熊谷市万吉下原遺跡で、古墳の墳頂部付近に土壙墓を構築し、熙寧元寳、菊花薄双雀鏡、かわらけ等を伴出した事例が知られる。

短刀（1）　鋒先付近のみを残し、現存長71㎜、身幅20㎜、棟幅2㎜を測る。身部は平棟平造りで、鋒はふくらの枯れた形態である。全体に錆化が進んでいる。重量は9.7gである。

和鏡（2）　周縁が僅かに外傾気味に立ち上がる細縁鏡で、鏡式は「山吹双鳥鏡」である。鏡は半月状に2つ（小片を含め3つ）に割れ、破断面が二次的な変形により、めくれ上がっている。そのため鏡面径を正確に計測することはできないが、おおよそ106㎜に復元される。表面は全体に緑青に覆われ、ザラついた腐食物により鏡背文様の一部が不鮮明となる。色調は銅の色よりも白味の強い褐色を呈する。周縁に接する外区部分に腐食による小孔が2箇所みられるほか、X線透過写真と外観観察から界圏に接した山吹文の2箇所に鋳造後に鋳掛け修理した補修痕を観察することができる。

鏡面はおおむね平坦で、鈍い光沢をおびる。周縁は縁高6.2～6.8㎜、縁幅1.6～1.8㎜を測る。鏡胎の厚みも縁と同様に1㎜前後とひじょうに薄く作られている。重量は86.07gである。鏡背面には直径77㎜の界圏が1条巡る。界圏はやや細めで幅1㎜、高さ1㎜、断面三角形状を呈する。鈕は半円形に小さく作られ、捩菊座をもつ。鈕径7.5㎜、高さ2㎜、鈕座径15㎜を測る。孔は幅4㎜ほどの蒲鉾形で、小孔がかろうじて貫通している。

鏡背の文様構成は捩菊座鈕を中心に配置され、鈕から外側に伸びる2本の山吹の枝とその間に向きをかえて飛翔する2羽の鳥を左右に配する構図である。山吹文は花文を上からみたものと、横からみたものに描き分け、界圏を意識しない構図となっている。基本的には同一の図様を用いているが、鋳型への箆押しのタッチの違いか、あるいは鋳出しの状態が悪かったのか、葉の図様が一部不鮮明となっている。鳥文は両翼を大きく広げ、尾羽根が長く伸び、躍動的表現である。

なお、鏡の成分組成は、銅（Cu）85.6、錫（Sn）8.6、鉛（Pb）2.2、ヒ素（As）0.2wt%を主成分としていることが電子線マイクロアナリシス(EPMA)による定量分析により判明した(住友金属鉱山(株)中央研究所SMNリサーチの分析による)。

本土壙墓から出土した山吹双鳥鏡は、主鋳文となる山吹文と双鳥の鏡背図様は全体に繊細で伸びやかに表現され、細く低い界圏、細縁等の特徴より平安時代後期の12世紀第2～第3四半期の製作と思われる。しかし、本土壙墓からは和鏡以外に造営時期を示すような遺物が出土していないことから、鏡の伝世の問題もあり、和鏡の製作年代をもって土壙墓の造営時期を特定することは難しい。厳密には和鏡の年代は土壙墓の造営時期の上限を示しているにすぎない。そのため土壙墓の造営年代については、和鏡を副葬する土壙墓の流行した平安時代後期から鎌倉時代初期と幅をもたせるのが妥当であろう。

北島遺跡周辺では、平安時代後期を中心に営まれた妻沼町妻沼経塚のうち第2号経塚から山吹双鳥鏡が出土している。また、昭和39年に本遺跡北方の中条光屋敷から土取りに際して鎌倉時代の菊花双雀鏡などの和鏡が出土したことが知られている。今後は北島遺跡における平安時代後期から中世初期段階の遺跡群の動態を把握するとともに、周辺遺跡との関連性について検討し、本土壙墓の被葬者の性格を位置づけていくことが課題である。

2．遺物

北島遺跡第19地点では、西側台地を中心として、中世の遺物が出土した。遺構に伴う遺物は少ない。ほとんどは、古代の遺物堆積層の調査中に出土した遺物が多い。

第276図は、中世の遺物の等密分布図である。同図では、グリッド出土の破片資料について、小グリッドごとに出土点数を網掛けの濃淡で表現した。遺構出土遺物については、遺構の中心グリッドに加算した。なお、小穴は掲載していない。

中世の遺物については、遺構にこだわらず、器種・産地ごとに分類して掲載した。以下、図化した遺物の概要を述べる。

i．中世陶器

第277図1～第279図7は、常滑窯跡群の大甕である。第277図1・2・3は、口縁部から肩部までの資料である。1は、口唇部が薄くなりやや受け口状となる。肩部には、格子目と平行線を組み合わせたタタキ目が残る。

2は、口縁部がやや低く垂れ下がる。肩部には、車の車輪を象ったタタキ目がみられる。十本の輻が見られ、五本の外輪を支えている。外輪は、凸字状に描かれている。自然釉が厚く降灰し、緑色に輝く。

3は、口縁部から頸部の破片である。口縁部は、小さく「N」字状に作られる。やや小さな甕である。5も同様に復元した。さらに小さな甕である。

第277図4～第278図4は、口縁部の破片である。第277図4や8は、口縁部にカエリが無く、口唇部内面に緩い沈線状の窪みが見られる。6は、1と共通した口縁部である。第277図7～第278図4は、口縁部の形態が、徐々に「N」字状になっていくように列べた。

第278図5～10は、肩部の破片である。外面にタタキ目のある破片を掲載した。7は、やや不明瞭であるが、5～9は、格子状のタタキ目がみられる。10の外面には、※印状の斜格子が施されている。

第278図11、第279図1は、胴下半に施されたタタキ目の痕跡である。11は、格子目と平行線を組み合わせたタタキ目である。第277図1と共通することから同一個体と考えたい。第279図1は、格子状のタタキ目が施される。

第279図2～7は、底部の破片である。5・7は、底部外面下端をヘラケズリした痕跡がある。

第279図8は、渥美窯跡群の甕である。頸部と肩部の接合部である。

第279図9～第280図6は、常滑窯跡群の片口鉢である。第279図9～第280図3は、口縁部資料である。第279図9は、片口の部分が、「コ」の字状に突出する。10は口径復元ができたが、他はできなかった。

第280図4～6は、片口鉢の体部から底部の破片である。4・6は、高く内弯する高台の付く片口鉢である。高台端部は細く尖る。5は、やや低い高台で外傾する。体部の下半は、ヘラケズリが顕著である。

第280図7～第281図8は、山茶碗系の片口鉢である。復元個体には、口縁部の資料はなく、胴下半から底部の破片である。第280図7～11は、細く小さな高台が付く。12は、厚く低い高台が付く。

第281図1～5・7は、口縁部の破片資料である。1・2は、片口の部分である。口縁部は、小さく外反するが、全て丸く収まる。

第281図8は、胴部の資料である。6は、底部の資料であるが、破片が小さく全体が分からない。

第281図9～第282図17は、在地産の片口鉢である。第281図9～第282図3は、口径復元ができた。口径は、28cm前後にまとまる。口縁部の形態は、第281図9・12、第282図1・3・7・8・12・13が共通する。内弯しつつ上がり、口唇部を小さくつまみ上げる。第281図10・11、第282図4・5は、口縁部が内側に折り返され、沈線状となる形態である。第281図13、第282図2・9・10・11は、口唇外面が外に厚く肥大し、三角形状となる形態である。

第282図15は、体部の破片である。16・17は、底部の破片である。16には、糸切りがみられる。無台の底部から直線的に伸びる体部が続く。

第282図18・19は、古瀬戸窯跡群の折縁皿である。18は、内弯しつつ強く屈曲する口縁であり、明瞭な折縁である。19は、口縁を欠くが、折縁皿であろう。

ii．青磁・白磁

第283図1～29は、龍泉窯・または同安窯の青磁である。1～12は、外面に鎬蓮弁が陽刻されている。1～9は、口唇部までみられるが、他は体部のみである。1は、蓮弁の幅20mmで、大きく太い。5・7を除く2～9の蓮弁は、1と同様20mm前後と太い。5・7は、13mmと細い。

1は明るい緑白色だが、5・7は青白色、他の2～12は、やや濃い緑色である。5の口縁は外反するが、他は口唇部で小さく外反するか内弯する。5・7の表面は、白色の細かな釉がかかる。青白磁である。

13～15は、内面に流水文（劃花文）が描かれる。とくに13は、口唇部に小さな刻みが施され、輪花となっている。直線的に伸びる口縁である。淡い緑白色である。14は、やや曇った緑色である。15は、内面に花弁が描かれるが、全体像は明らかにできない。

16・17も口縁部資料だが、内・外面に文様はみられない。16は、口縁部を折り返しているが、扁平になっており、単口縁状である。17は、外反する口縁である。

18～21は、体部の資料である。20・21は、体部下端をヘラケズリしている。

22は、底部の中央破片である。圏線が一条見える。

23～27は、底部の資料である。27は不明瞭だが、23～25は、底部の器肉は極端に厚い。削り出しで小さな高台造り出しており、内屈する高台となっている。これに対し26の底部は薄く、中心が高い。高台は小さく高い。22は、内外面に厚く釉が、掛けられる。青白磁である。

23～25の見込みは、底部と体部を圏線で区画する。23・24は、中心に刻印を押している。23は、高台の内面も施釉を行うが、窯道具の釉着によって荒れた仕上がりとなっている。24～27の底部外面には、高台を含めて施釉されていない。25も高台から底部内面は、施釉されない。23は、「金玉満堂」と判読できるが、24は、判読できない。

「金玉満堂」は、金玉の宝物が、家に満ちていることや、才学が人より優れていることである。また俗に吉祥句として用いられるという。（『大漢和辞典』巻11　大修館書店より）青磁の碗に刻印された「金玉満堂」も吉祥句として用いられたのであろう。なお「金玉満堂」の刻印のみられる青磁碗は、福岡県福岡市博多遺跡群でも出土している。

28は、折縁碗か蓋の破片である。内面に稜が巡り、口縁は、内弯しつつ立ち上がる。蓋としたら内面のあたりが、摩耗していないため折縁碗としたい。29は、香炉の蓋である。透彫の一部が確認できる。透の形状はハート形などであろうが、判断できない。ヘラで鋭く切り抜く。全体像は分かりにくい。

第283図30～39は、白磁である。30～37は、白磁の碗である。

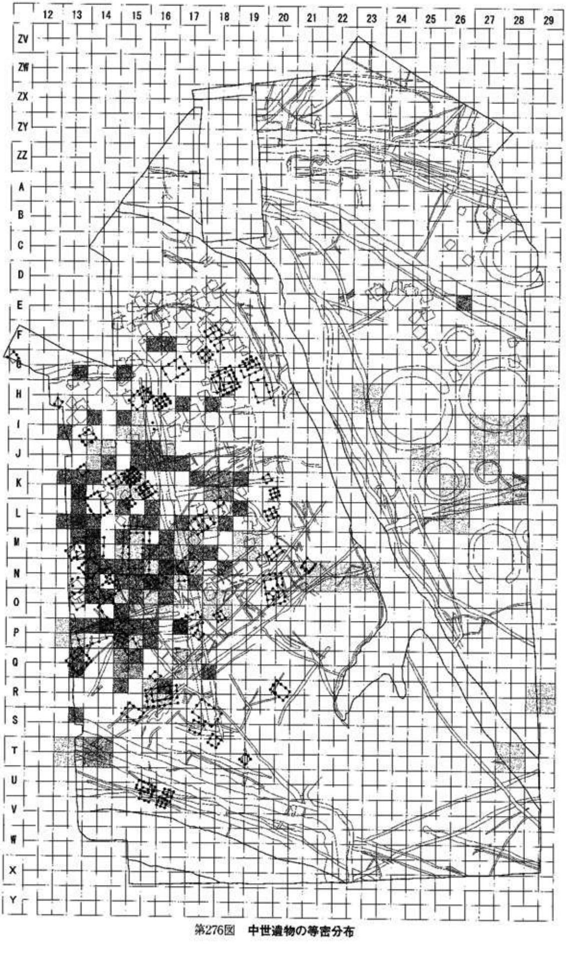
30・31は、口縁部の破片で外反する。30は、内面に圏線がみられる。30・31の口唇部内側は施釉されず、口はげとなってる。

32・33は、体部の破片で比較的器肉が厚い。

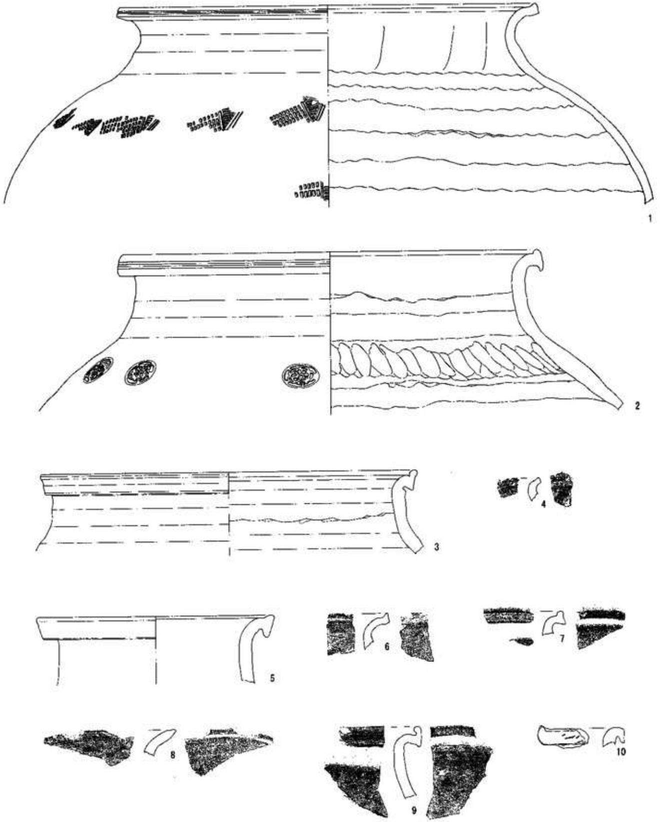
34～37は、底部の破片である。34～36は、底部の削り込みが顕著である。とくに34・35・37は、角高台となっている。34の内面見込みには、圏線がみられる。底部近くは、露胎である。内面の釉は厚い。

35の残存部外面は、露胎である。内面は、重ね焼きによって高台のあたる部分が、露胎となるが、見込みや内面に施釉がされている。

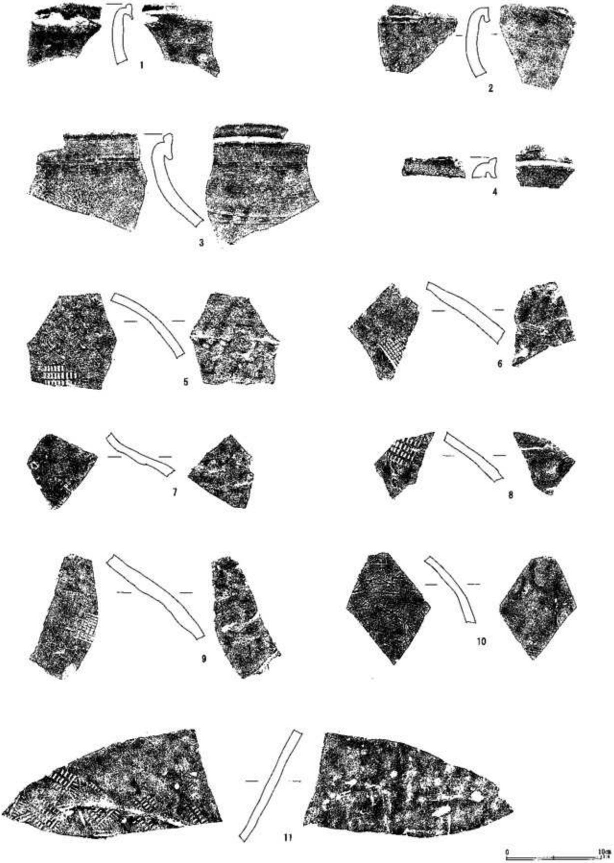
36は、高台の内外面に施釉され、また高台の接地面のみに施釉がみられない。飴色の発色をする。37も見込みに圏線がみられる。高台外面の下半、底部外面は、露胎である。乳白色に発色する。



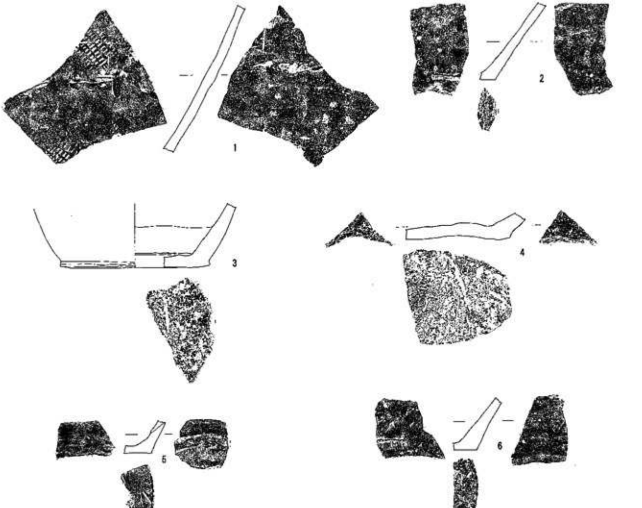
第276図　中世遺物の等密分布



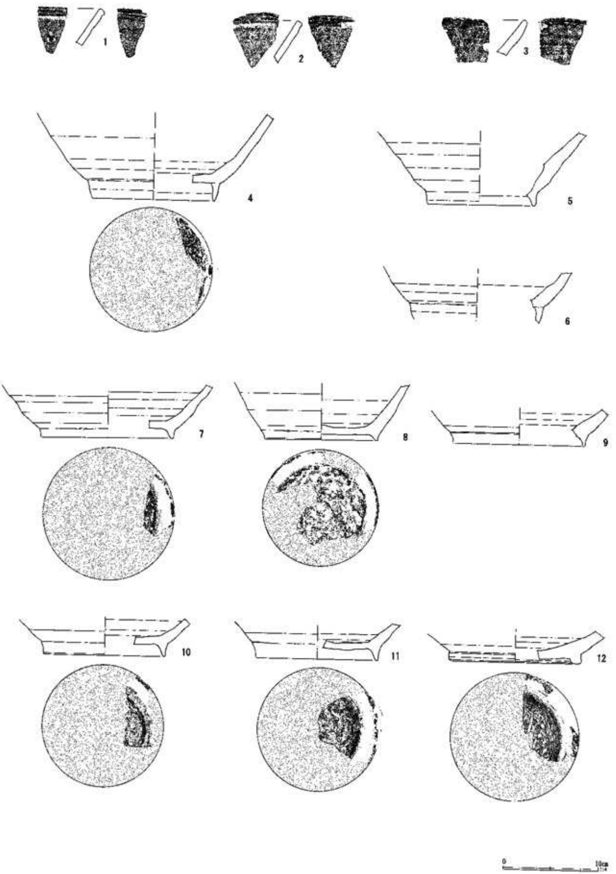
第277図　**中世の出土遺物（1）中世陶器（1）**



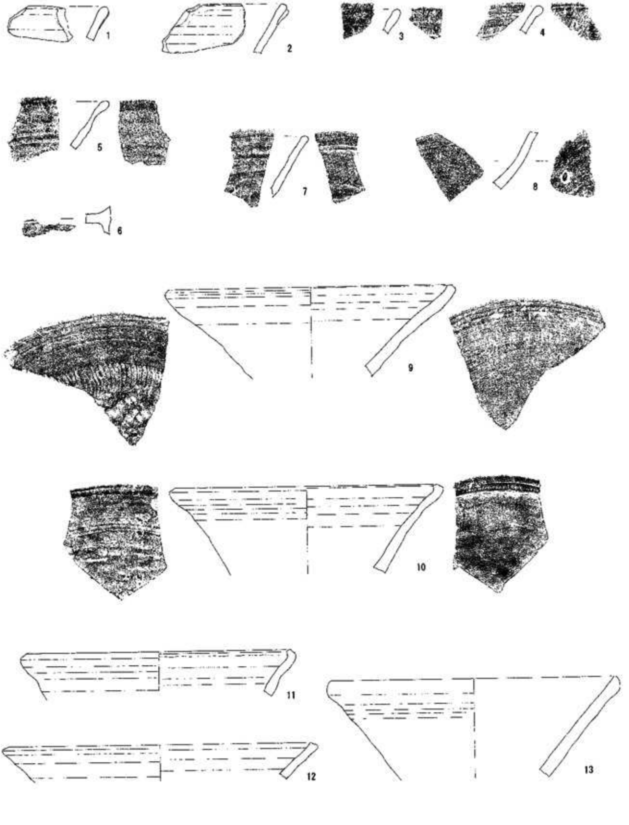
第278図　**中世の出土遺物（2）中世陶器（2）**



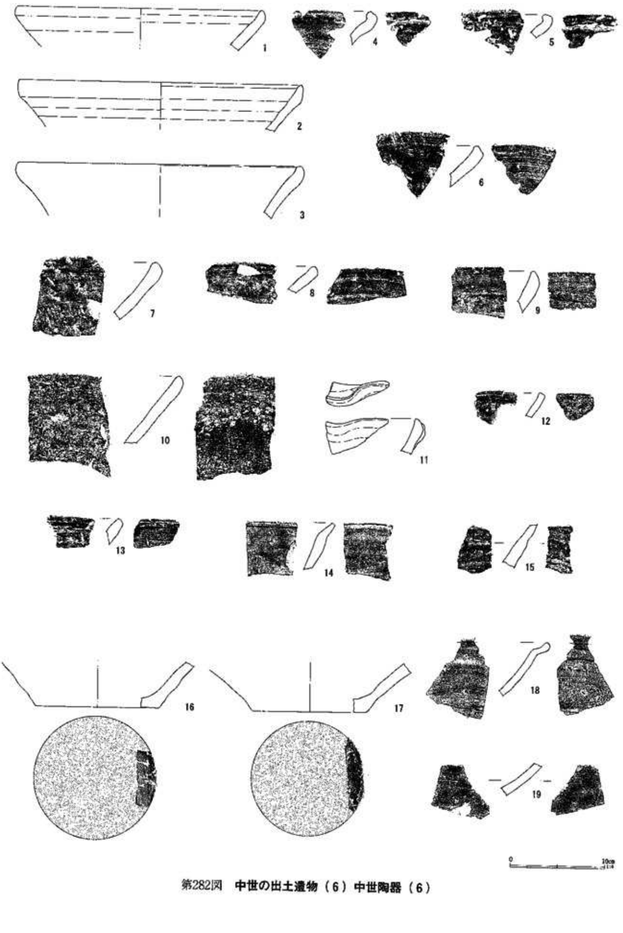
第279図　中世の出土遺物（3）中世陶器（3）



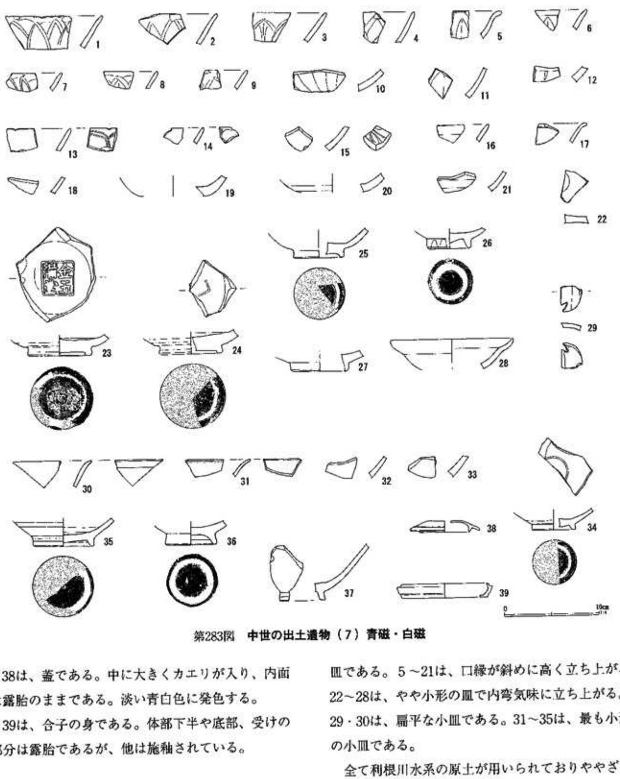
第280図　**中世の出土遺物（4）中世陶器（4）**



第281図　**中世の出土遺物（５）中世陶器（５）**



第282図　中世の出土遺物（6）中世陶器（6）



第283図　**中世の出土遺物（7）青磁・白磁**

38は、蓋である。中に大きくカエリが入り、内面は露胎のままである。淡い青白色に発色する。

39は、合子の身である。体部下半や底部、受けの部分は露胎であるが、他は施釉されている。

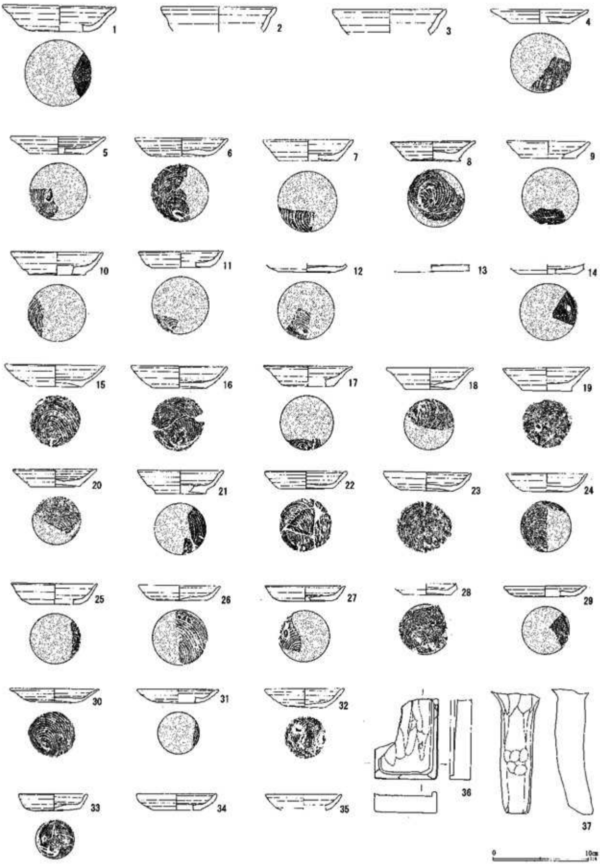
iii．かわらけ

第284図は、土師質の小皿を一括して掲載した。底部は全て糸切りである。1～3は、中でも口径の大きな個体である。口縁部は屈曲して内弯しつつ立ち上がる。4は、小さな底部から大きく開く扁平な皿である。5～21は、口縁が斜めに高く立ち上がる。22～28は、やや小形の皿で内弯気味に立ち上がる。29・30は、扁平な小皿である。31～35は、最も小形の小皿である。

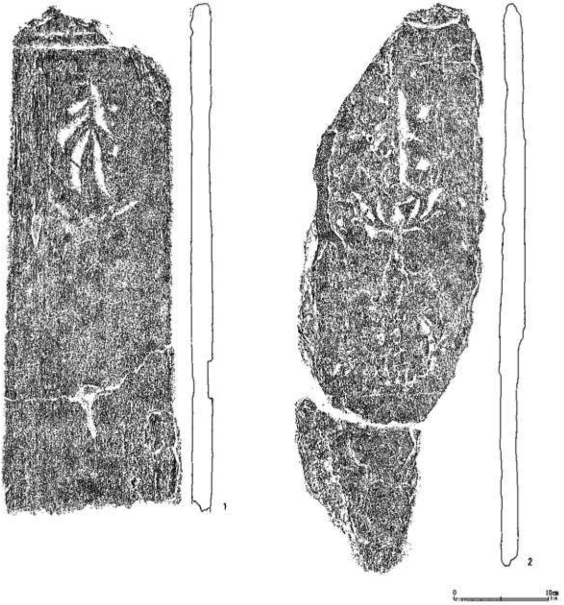
全て利根川水系の原土が用いられておりややざらつきがある。

iv．硯

第284図36は、石製の方形硯である。陸は極端に擦り込まれ、深く窪む。安山岩系の石材が用いられ



第284図　中世の出土遺物（8）かわらけ皿



第285図　**中世の出土遺物（9）板碑**

ている。利根川水系の原土が用いられ砂質である。

v．獣脚

第284図37は、脚付き鍋の脚部である。土師質の比較的硬質な作りである。

vi．板碑

第285図1・2は、板碑である。1・2とも近世の第200号溝の北側に形成された集石とともに出土した。第200号溝の構築以降、付近に散乱していた石材とともに集められたと考えたい。1はN21グリッドから出土した。山形と基部が欠損し、二条線から下が残る。表面の風化が激しく、紀年銘等は判読し難い。種子に「キリーク」（蓮座）を刻み、おそらく三行に亘る銘文が刻まれたであろうが、判断できない。欠損しているため高さは分からないが、幅176㎜、厚さ22㎜の大きさである。緑泥片岩製。

2は、N22グリッドから出土した。山形を欠損し、風化が激しい。枠線は、不明瞭ながら残る。種子に「キリーク」（蓮座）を刻むが、紀年銘等は判読できない。高さは不詳だが、幅200㎜、厚さ16㎜の大きさである。緑泥片岩製である。

第90表　中世の遺物（１）

挿図番号	図の番号	遺構番号	グリッド	種別	器種	口径	底径	器高	色調	産地	備考
第277図	1	SE80		中世陶器	甕	440	－	－	灰白	常滑	
第277図	2	SK210		中世陶器	甕	440	－	－	オリーブ灰	常滑	
第277図	3	SD125		中世陶器	甕	400	－	－	暗灰黄	常滑	
第277図	4	グリッド	L－18d	中世陶器	甕	－	－	－	灰白	常滑	
第277図	5	SD	K－27	中世陶器	甕	250	－	－	灰	常滑	
第277図	6	グリッド	N－15a	中世陶器	甕	－	－	－	明褐灰	常滑	
第277図	7	SK253		中世陶器	甕	－	－	－	暗赤褐	常滑	
第277図	8	グリッド	K－13d	中世陶器	甕	－	－	－	にぶい赤褐	常滑	
第277図	9	SE13	R－14g	中世陶器	甕	－	－	－	灰褐	常滑	
第277図	10	SD225		中世陶器	甕	－	－	－	暗赤褐	常滑	
第278図	1	グリッド	J－16d	中世陶器	甕	－	－	－	灰オリーブ	常滑	
第278図	2	グリッド	K－19a	中世陶器	甕	－	－	－	赤褐	常滑	
第278図	3	グリッド	J－14	中世陶器	甕	－	－	－	灰白	常滑	
第278図	4	グリッド	S－13b	中世陶器	甕	－	－	－	灰白	常滑	
第278図	5	グリッド	P－15	中世陶器	甕	－	－	－	灰白	常滑	
第278図	6	グリッド	M－14a	中世陶器	甕	－	－	－	褐	常滑	
第278図	7	SE50		中世陶器	甕	－	－	－	黒褐	常滑	
第278図	8	SE80		中世陶器	甕	－	－	－	にぶい褐	常滑	
第278図	9	グリッド	N－15	中世陶器	甕	－	－	－	灰黄	常滑	
第278図	10	グリッド	L－14a	中世陶器	甕	－	－	－	灰白	常滑	
第278図	11	SD125		中世陶器	甕	－	－	－	にぶい黄橙	常滑	
第279図	1	SD125		中世陶器	甕	－	－	－	にぶい黄橙	常滑	
第279図	2	SD125		中世陶器	甕	－	－	－	にぶい黄橙	常滑	
第279図	3	SE50		中世陶器	甕	－	158	－	灰白	常滑	
第279図	4	SE77		中世陶器	甕	－	－	－	にぶい橙	常滑	
第279図	5	グリッド	N－16b	中世陶器	甕	－	－	－	褐	常滑	
第279図	6	グリッド	P－14a	中世陶器	甕	－	－	－	黄灰	常滑	
第279図	7	SD125		中世陶器	甕	－	－	－	灰褐	常滑	
第279図	8	SS 2	テラス	中世陶器	甕	－	－	－	灰	渥美	
第279図	9	SE60		中世陶器	片口鉢	251	－	－	にぶい黄橙	常滑	
第279図	10	SJ125		中世陶器	片口鉢	301	－	－	褐	常滑	
第280図	1	SD125	K－15	中世陶器	片口鉢	－	－	－	にぶい赤褐	常滑	
第280図	2	SK120		中世陶器	片口鉢	－	－	－	暗赤褐	常滑	
第280図	3	グリッド	M－14a	中世陶器	片口鉢	－	－	－	灰褐	常滑	
第280図	4	SE18		中世陶器	片口鉢	－	130	－	にぶい赤橙	常滑	
第280図	5	グリッド	Q－15	中世陶器	片口鉢	－	110	－	橙	常滑	
第280図	6	グリッド	J－25	中世陶器	片口鉢	－	－	－	にぶい黄橙	常滑	
第280図	7	グリッド	J－16d	中世陶器	片口鉢	－	140	－	灰白	山茶碗系	
第280図	8	グリッド	N－15a	中世陶器	片口鉢	－	119	－	灰白	山茶碗系	
第280図	9	グリッド	J－27	中世陶器	片口鉢	－	14	－	灰白	山茶碗系	
第280図	10	SK103		中世陶器	片口鉢	－	129	－	灰白	山茶碗系	
第280図	11	SE		中世陶器	片口鉢	－	127	－	灰白	山茶碗系	
第280図	12	SD125		中世陶器	片口鉢	－	137	－	灰	山茶碗系	
第281図	1	グリッド	L－19a	中世陶器	片口鉢	－	－	－	灰白	山茶碗系	
第281図	2	SE72		中世陶器	片口鉢	－	－	－	灰白	山茶碗系	
第281図	3	グリッド	M－14a	中世陶器	片口鉢	－	－	－	灰白	山茶碗系	
第281図	4	SD125	R－15・L－16	中世陶器	片口鉢	－	－	－	灰白	山茶碗系	
第281図	5	SE58		中世陶器	片口鉢	－	－	－	灰	山茶碗系	

第91表　中世の遺物（2）

挿図番号	図の番号	遺構番号	グリッド	種別	器種	口径	底径	器高	色調	産地	備考
第281図	6	SE50		中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰白	山茶碗系	
第281図	7	SS		中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰白	山茶碗系	
第281図	8	SD151	O−16・R−16	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰白	山茶碗系	
第281図	9	SS 2	テラス	中世陶器	片口鉢	296	−	−	灰白	在地	
第281図	10	SD125	L−16	中世陶器	片口鉢	274	−	−	灰	在地	
第281図	11	SD125	M−10	中世陶器	片口鉢	281	−	−	灰	在地	
第281図	12	SE 9		中世陶器	片口鉢	318	−	−	灰	在地	
第281図	13	SE		中世陶器	片口鉢	301	−	−	灰	在地	
第282図	1	SE34		中世陶器	片口鉢	261	−	−	灰白	在地	
第282図	2	グリッド	O−16	中世陶器	片口鉢	302	−	−	灰	在地	
第282図	3	SD125	P−17	中世陶器	片口鉢	302	−	−	灰白	在地	
第282図	4	SE80		中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰白	在地	
第282図	5	グリッド	N−16c	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰白	在地	
第282図	6	グリッド	L−17c	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	7	グリッド	Q−13d	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	8	グリッド	O−16b	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	9	グリッド		中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	10	グリッド	Q−17	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	11	SS		中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	12	グリッド	F−16d	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	13	SD198		中世陶器	片口鉢	−	−	−	橙	在地	
第282図	14	グリッド	N−15d	中世陶器	片口鉢	−	−	−	灰	在地	
第282図	15	グリッド	N−16b	中世陶器	片口鉢	−	−	−	橙	在地	
第282図	16	グリッド	G−13d	中世陶器	片口鉢	−	131	−	灰	在地	
第282図	17	SE		中世陶器	片口鉢	−	120	−	黒	在地	
第282図	18	グリッド	M−16c	中世陶器	折縁皿	−	−	−	灰白	古瀬戸	
第282図	19	グリッド	K−13d	中世陶器	折縁皿	−	−	−	灰白	古瀬戸	
第283図	1	グリッド	M−19	青磁	碗	−	−	−	C50M30Y40	龍泉	
第283図	2	SD225		青磁	碗	−	−	−	BL60Y20	龍泉	
第283図	3	SD		青磁	碗	−	−	−	BL70Y20	龍泉	
第283図	4	グリッド	J−16	青磁	碗	−	−	−	C40M30Y30BL10	龍泉	
第283図	5	SE63		青磁	碗	−	−	−	C40M20Y30	龍泉	
第283図	6	SJ 1		青磁	碗	−	−	−	C50M30Y30BL30	龍泉	
第283図	7	グリッド	N−14c	青磁	碗	−	−	−	C40M20Y30BL20	龍泉	
第283図	8	グリッド	N−16	青磁	碗	−	−	−	C40M20Y30BL30	龍泉	
第283図	9	グリッド	M−15	青磁	碗	−	−	−	C50M40Y50BL10	龍泉	
第283図	10	SD125	58・69	青磁	碗	−	−	−	C50M50Y50BL20	龍泉	
第283図	11	グリッド	M−15a	青磁	碗	−	−	−	C30M30Y50BL30	龍泉	
第283図	12	SE58		青磁	碗	−	−	−	C30M20Y30BL30	龍泉	
第283図	13	SB 5		青磁	碗	−	−	−	C40M30Y30BL20	龍泉	
第283図	14	グリッド	L−14c	青磁	碗	−	−	−	C30M30Y30BL30	龍泉	
第283図	15	グリッド	J−17c	青磁	碗	−	−	−	C40M40Y50BL30	龍泉	
第283図	16	グリッド	N−15	青磁	碗	−	−	−	C40M20Y30BL20	龍泉	
第283図	17	グリッド	M−14a	青磁	碗	−	−	−	C10M20Y50BL30	龍泉	
第283図	18	グリッド	L−15d	青磁	碗	−	−	−	Y50BL10	龍泉	
第283図	19	グリッド	N−16b	青磁	碗	−	−	−	C10M 0 Y10BL30	龍泉	
第283図	20	SE21		青磁	碗	−	−	−	C30M30Y30BL30	龍泉	
第283図	21	SD206		青磁	碗	−	−	−	C30M20Y30BL30	龍泉	

第92表　中世の遺物（3）

挿図番号	図の番号	遺構番号	グリッド	種別	器種	口径	底径	器高	色調	産地	備考
第283図	22	SE14		青磁	碗	−	−	−	C30M10Y30BL30	龍泉	
第283図	23	SE62		青磁	碗	−	67	−	C40M30Y50BL30	龍泉	
第283図	24	グリッド	I−27	青磁	碗	−	69	−	C20M20Y30BL30	龍泉	
第283図	25	SD206		青磁	碗	−	59	−	C40M40Y50BL30	龍泉	
第283図	26	グリッド	R−29	青磁	碗	−	48	−	C20M0Y10BL10	龍泉	
第283図	27	グリッド	Q−13b	青磁	碗	−	57	−	C10M20Y30BL30	龍泉	
第283図	28	SD125		青磁	碗	129	−	−	C30M10Y30BL30	龍泉	
第283図	29	グリッド	L−13b	青磁	香炉蓋	−	−	−	C40M30Y30BL20	龍泉	
第283図	30	グリッド	O−18	白磁	碗	−	−	−	C20M0Y10BL10	龍泉	
第283図	31	SD125		白磁	碗	−	−	−	C0M0Y10BL30	龍泉	
第283図	32	グリッド	H−23	白磁	碗	−	−	−	C5M0Y10BL30	龍泉	
第283図	33	表採		白磁	碗	−	−	−	C10M20Y40	龍泉	
第283図	34	グリッド	K−13d	白磁	碗	−	46	−	C10M0Y10BL10	龍泉	
第283図	35	グリッド	K−15	白磁	碗	−	54	−	C5M0Y10BL20	龍泉	
第283図	36	グリッド	M−17	白磁	碗	−	54	−	C0M10Y30BL10	龍泉	
第283図	37	グリッド	G−15c	白磁	碗	−	−	−	C0M0Y10BL10	龍泉	
第283図	38	グリッド	P−14b	白磁	蓋	74	37	12	C20M0Y10BL10	龍泉	
第283図	39	グリッド	M−13b	白磁	合子	90	91	15	C10M10Y20	龍泉	
第284図	1	SJ14	D−18	かわらけ	皿	100	70	27	浅黄橙	利根川	
第284図	2	SE77		かわらけ	皿	120	−	−	浅黄橙	利根川	
第284図	3	SE77		かわらけ	皿	121	−	−	浅黄橙	利根川	
第284図	4	グリッド	H−17c	かわらけ	皿	105	64	15	にぶい黄橙	利根川	
第284図	5	グリッド	I−13c	かわらけ	皿	102	61	18	浅黄橙	利根川	
第284図	6	グリッド	L−15d	かわらけ	皿	98	61	19	にぶい黄橙	利根川	
第284図	7	グリッド	L−15a	かわらけ	皿	96	63	22	淡赤橙	利根川	
第284図	8	グリッド	J−16a	かわらけ	皿	90	60	20	にぶい橙	利根川	
第284図	9	グリッド	P−16c	かわらけ	皿	88	60	18	淡橙	利根川	
第284図	10	グリッド	O−15c	かわらけ	皿	98	61	24	明褐灰	利根川	
第284図	11	グリッド	P−15c	かわらけ	皿	90	60	17	淡赤橙	利根川	
第284図	12	SK	旧SK774	かわらけ	皿	−	60	−	灰白	利根川	
第284図	13	SE20		かわらけ	皿	−	−	−	にぶい黄橙	利根川	
第284図	14	SE20		かわらけ	皿	−	61	−	浅黄橙	利根川	
第284図	15	グリッド	K−18	かわらけ	皿	105	56	14	橙	利根川	
第284図	16	グリッド	O−15c	かわらけ	皿	102	58	24	淡橙	利根川	
第284図	17	グリッド	P−16a	かわらけ	皿	95	56	22	橙	利根川	
第284図	18	グリッド	F−16c	かわらけ	皿	91	53	23	橙	利根川	
第284図	19	グリッド	O−15	かわらけ	皿	92	52	24	橙	利根川	
第284図	20	グリッド	E−26b	かわらけ	皿	90	53	18	浅黄橙	利根川	
第284図	21	グリッド	P−16c	かわらけ	皿	90	54	25	浅黄橙	利根川	
第284図	22	試掘		かわらけ	皿	86	58	18	浅黄橙	利根川	
第284図	23	グリッド	K−18	かわらけ	皿	91	56	20	浅黄橙	利根川	
第284図	24	グリッド	P−15b	かわらけ	皿	87	53	19	浅黄橙	利根川	
第284図	25	グリッド	H−18c	かわらけ	皿	91	53	21	浅黄橙	利根川	
第284図	26	グリッド	P−15c	かわらけ	皿	87	57	16	淡橙	利根川	
第284図	27	グリッド	P−15c	かわらけ	皿	86	54	16	浅黄橙	利根川	
第284図	28	グリッド	L−14c	かわらけ	皿	−	56	−	灰	利根川	
第284図	29	SJ185		かわらけ	皿	88	49	11	にぶい橙	利根川	
第284図	30	グリッド	N−14b	かわらけ	皿	94	49	14	橙	利根川	

第93表　中世の遺物（4）

挿図番号	図の番号	遺構番号	グリッド	種別	器種	口径	底径	器高	色調	産地	備考
第284図	31	グリッド	N−17a	土器	皿	86	44	14	浅黄橙	利根川	
第284図	32	グリッド	I−15	土器	皿	84	44	20	浅黄橙	利根川	
第284図	33	グリッド	Q−15	土器	皿	71	41	19	淡黄	利根川	
第284図	34	SD225	R−14	土器	皿	85	51	17	淡黄	利根川	
第284図	35	SK160		土器	皿	80	−	−	浅黄橙	利根川	
第284図	36	SD200		石製品	硯	長さ（84）	幅66	厚さ21	灰	不詳	
第284図	37	SD358	T−14	煮沸具	獣脚	長さ（127）	幅31	−	橙	在地	
第285図	1	グリッド	N−21	板碑		長さ（531）	幅191	厚さ23		緑泥石片岩	
第285図	2	グリッド	N−22	板碑		長さ（585）	幅（192）	厚さ27		緑泥石片岩	

vii. 木製品

北島遺跡第19地点から出土した中世の木製品には、曲物、柄杓、漆椀、横槌がある。

第287図1～3は、柄杓の底板である。いずれも木釘穴はみられない。

1は、中心からやや外れた場所に径9㎜の穴が穿たれている。おそらく、つまみをつけるための穴であろう。内外面の全体に、板状に整形するため10～15㎜幅の加工痕がみられる。側面にも長さ8㎜間隔の細かな加工が施される。

2の内面には、13㎜の間隔で直線的な傷が四本みられる。その他、特に加工痕はみられない。

3には、内面に長さ70㎜の刃物による傷が見られる。側面に12～20㎜の間隔で細かい加工が施される。

4・5・7～13は、曲物の底板である。いずれもクレゾコである。

4の内外面には、幅16～30㎜の加工痕がある。側面には、径4㎜、長さ8㎜の木釘穴が192㎜の間隔をあけて、二箇所に穿たれる。

5の内面には、長さ16㎜の刃物による傷が見られる。内外面また側面には加工痕はない。

7～12は、同一個体である。表面に幅14～22㎜の加工痕がある。7・12には、径5㎜の穴が穿たれており、転用された可能性がある。

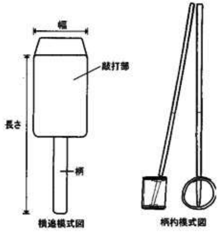
13は、内外面・側面に加工痕がみられず、粗いつくりである。

14は、柄杓の側板である。側板は、樹皮紐で二箇所留めている。「一列外四段綴じ」と「二列前内一段後内一段綴じ」である。柄が斜めに装着される位置で、二箇所の穴が穿たれる。一箇所は、綴じ部分の近くに12㎜の方形の穴、もう一箇所はその対面に8㎜の方形の穴がある。綴じ部分では、側板の上下が削られ、幅が狭くなっている。

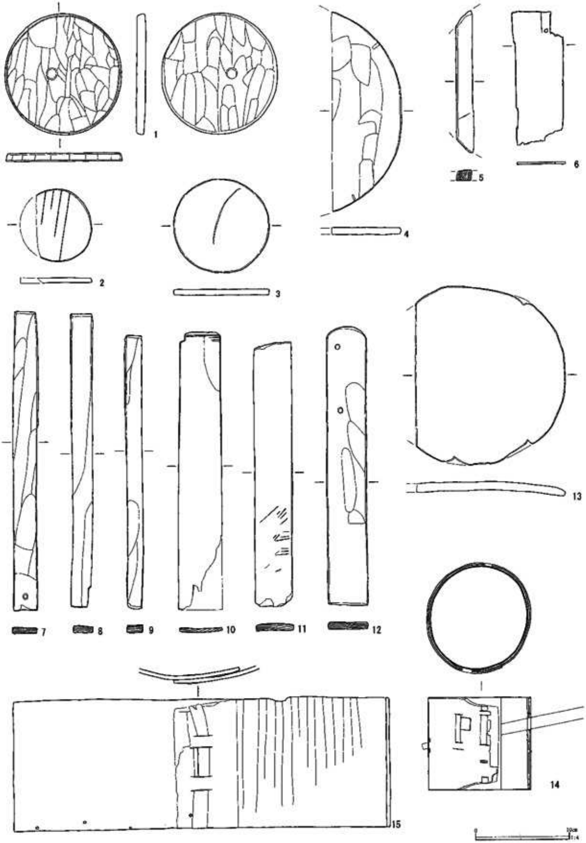
第287図6・15、第288図1～第291図2は、曲物の側板である。

第287図6は、曲物の側板である。ケビキはみられない。

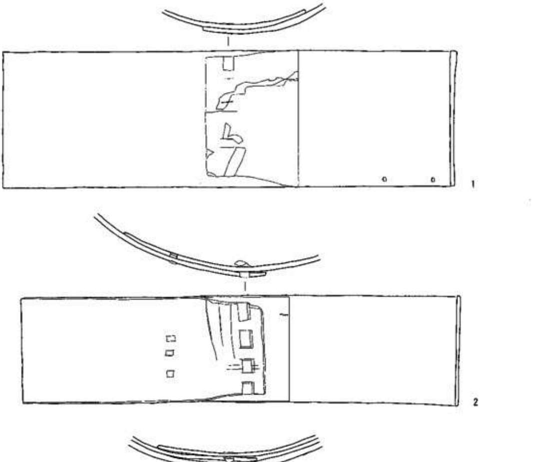
15は、曲物の側板である。樹皮紐により一箇所で綴じられる。綴じ部は「一列外三段綴じ」である。木釘穴は、50～70㎜間隔に穿たれる。内面には、10～15㎜間隔に縦に平行線のケビキが引かれる。



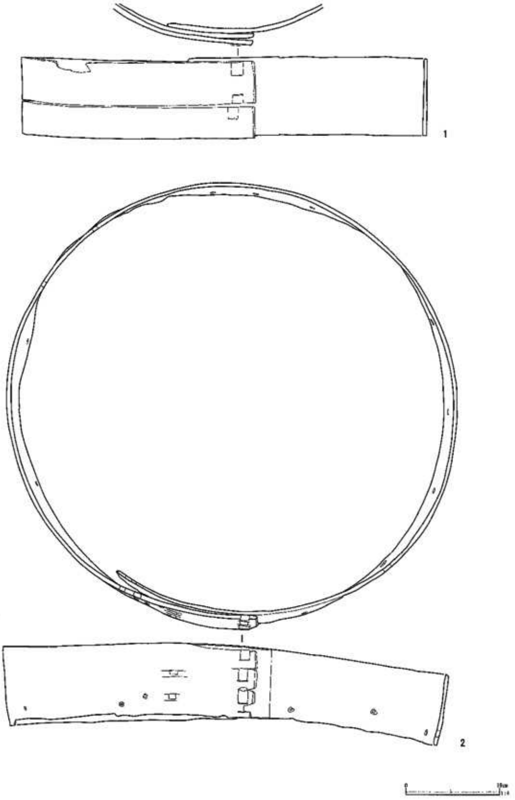
第286図　木製品の各部名称・計測位置



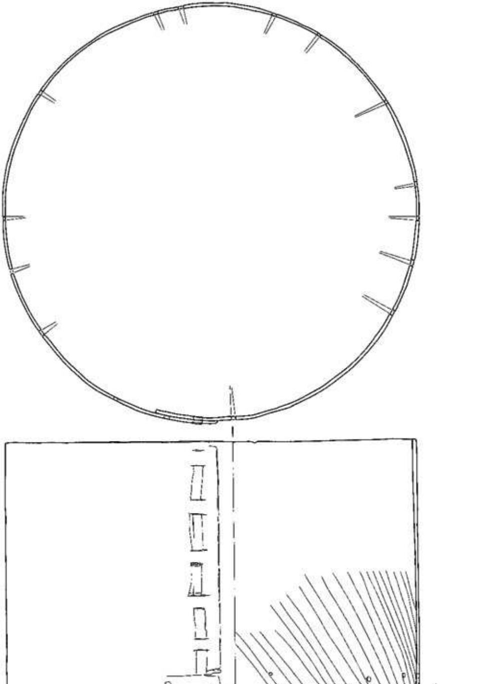
第287図　**中世の木製品（1）**



第288図　**中世の木製品（2）**



第289図　**中世の木製品（3）**

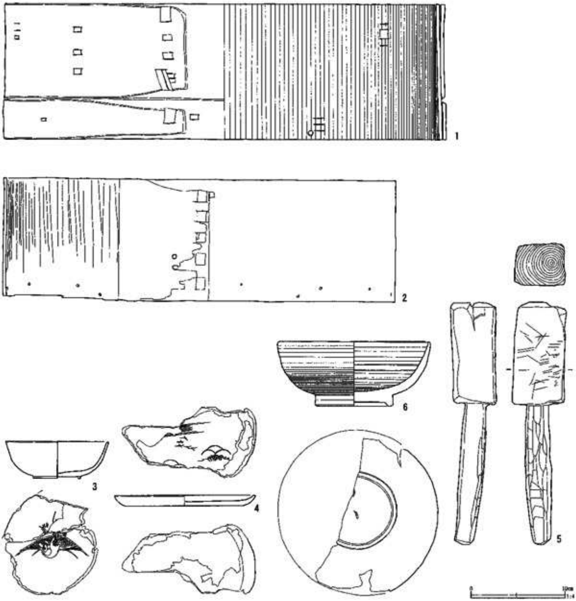


第290図　**中世の木製品（4）**

第288図1は、一箇所の「一列外四段綴じ」によって側板が留められる。木釘穴が穿たれる。

2は、「一列外四段綴じ」と「一列内三段綴じ」の二箇所で側板を留められている。

3は、側板を一箇所で綴じ、上下二枚の箍で補強する。箍は、上下とも二箇所で綴じ合わせる。内面には、100㎜間隔で斜めに平行線のケビキが引かれる。



第291図　**中世の木製品（５）**

第289図１は、側板を一箇所で綴じる。

２は、側板を「一列外四段綴じ」と「一列内二段綴じ」の二箇所で綴じる。木釘穴は、100㎜間隔で12箇所穿たれる。

第290図１は、「一列内五段綴じ」で側板を綴じる。木釘穴は、60～120㎜間隔で十五箇所穿たれる。内面には、下から130㎜まで10～15㎜間隔で斜めに平行線のケビキを引く。

第291図１は、二箇所で側板を綴じる。木釘穴の脇には、底板を固定する樹皮紐の切り込みが入れられる。内面には、４㎜の間隔で縦に平行線のケビキを引く。

２は、側板を一箇所で綴じる。木釘穴は、20～50㎜間隔で穿たれる。内面には、８～16㎜間隔で縦に平行線のケビキが引かれる。

第287図15、第291図２は、側板の上部を斜めに削る。第288図１～３は、側板の上下の綴じ部を斜めに削る。綴じ部を削る曲物は、いずれも樹皮の紐が側板の外側には出ず、削られた部分で内側に入る。

基本的に綴じ部は一箇所だが、側板が底板の外周

に対して長過ぎた場合、補助的にもう一箇所を軽く留めるようである。この九点中、側板の重複部の長さが112㎜までは一箇所で留め、112㎜～180㎜になると、補助的にもう一箇所留めるようである。

直径は、直径400㎜前半と、400㎜後半の大きく二つに分けられる。いずれも大形品である。

高さは、第288図3が323㎜、第290図1が280㎜と特に高い。その他は、86～146㎜である。

第291図3は、椀である。内面には、舞鶴と松の絵画が、朱漆で描かれる。

4は、皿である。外面は黒漆、内面は朱漆塗りである。

5は、横槌である。穀物の脱穀や、藁打ちなどに使用される農具である。敲打部の断面は、円形が多いが、これは方形である。使用面には、長さ6～16㎜の直線的な傷が多数見られる。しかし擦り減った痕跡はない。握り柄は二面のみを削り、断面形は方形となる。使用面の反面に若干反っている。

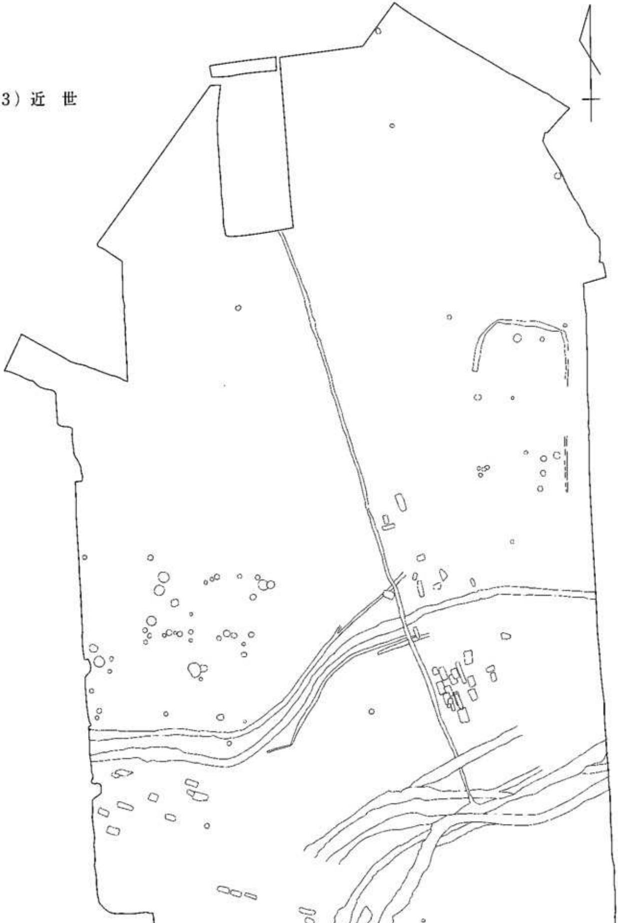
第291図6は、漆椀である。底部外面にはロクロに引っかけた8㎜の爪の痕跡が残存する。内外面にはロクロで挽いた時の線が細かくみられる。黒色漆が施される。

なお、第286図にある柄杓模式図は、穴水町教育委員会1987の図を編集したものである。

第94表　中世の木製品

挿図番号	図の番号	遺構番号	器種	径	高さ	厚さ	長さ	幅	備考
第287図	1	SE74	柄杓底板	136	−	10	−	−	
第287図	2	SE58	柄杓底板	80	−	5	−	−	
第287図	3	SE29	柄杓底板	103	−	6	−	−	
第287図	4	SE69	曲物底板	(223)	−	8	−	−	
第287図	5	SE74	曲物底板	(160)	−	11	−	−	
第287図	6	包含層	曲物側板	−	−	2	148	50	
第287図	7	SE20	曲物底板	−	−	35	332	38	
第287図	8	SE20	曲物底板	−	−	8	325	24	
第287図	9	SE20	曲物底板	−	−	8	302	17	
第287図	10	SE20	曲物底板	−	−	5	309	47	
第287図	11	SE20	曲物底板	−	−	8	294	42	
第287図	12	SE20	曲物底板	−	−	7	308	44	
第287図	13	SE74	曲物底板	200	−	10	−	−	
第287図	14	SE81	柄杓側板	113	103	116	−	−	
第287図	15	SE51	曲物側板	424	146	4	−	−	
第288図	1	SE51	曲物側板	486	144	7	−	−	
第288図	2	SE20	曲物側板	447	116	4	−	−	
第288図	3	SE20	曲物側板	499	323	5	−	−	
第289図	1	SE20	曲物側板	458	85	4	−	−	
第289図	2	SE20	曲物側板	488	86	4	−	−	
第290図	1	SE20	曲物側板	459	280	4	−	−	
第291図	1	SE27	曲物側板	505	106	4	−	−	
第291図	2	SE80	曲物側板	440	135	4	−	−	
第291図	3	SK412	椀	116	42	−	−	−	底径53
第291図	4	包含層	皿	158	12	−	−	−	底径138
第291図	5	SE24	横槌	−	−	46	270	56	
第291図	6	SE61	漆椀	口径160	68	−	−	−	底径76

(3) 近 世



第292図　**近世遺構全体図**

1　遺構

ここでは、江戸時代から明治時代初頭にかけて構築された遺構について述べる。北島遺跡第19地点で確認した近世の遺構は、溝跡・土壙等である。

ところで北島遺跡では、表土を10cmほど掘削すると1～5cmほどの砂層が現れる。この砂層は、天明3年（1783）に降下した浅間山の火山灰、いわゆる浅間山A軽石層である。今回の調査では、浅間山B軽石層まで表土の除去を行ったため、第19地点でも確認することができたが、A軽石層直下の状況は明らかにすることはできなかった。

第293図　迅速図と1／10000都市計画図と北島遺跡の調査区

ⅰ．土壙

調査区中央では、中央河川跡が埋没して平地化した後に近世の土壙がつくられた。埋没した中央河川跡の南支谷と西支谷の直上に22基の深い土壙が作られたのである。長軸が、第55号溝と平行または直行して作られた。出土遺物は全くないが、浅間山A軽石層を切って構築されたことから、18世紀後葉以降と考えておきたい。

常時帯水層である地表下50cmをこえて掘削した土壙もみられたが、馬骨や人骨など出土はなかった。このことから少なくとも墓壙とは考えがたい。

また南河川跡の肩部にも同様の土壙を6基確認した。

ⅱ．溝跡

近世の溝跡は、調査区南半、西側台地と古墳群の南辺をかすめるようにつくられた第200号溝である。この溝に沿って北側には、第225号溝、南側には、第257号溝が掘鑿された。両溝は、中央河川跡付近で途切れ、東側台地までは続かなかった。第200号溝は調査区の西側から東側に向かって流れていたと考えたい。

第200号溝では、後述する圦樋の跡を確認した。この圦樋の下から天保通寳が出土したこと、嘉永三（1850）年の護摩札が出土したことから第200号溝は、19世紀中葉の掘鑿ということがわかる。

またこの溝は、第293図に示したように、旧日本陸軍測地部が作製したいわゆる迅速図の「熊谷駅」に水路として描かれていた小河川である。

また調査区南東寄りには、第200号溝の走行に沿って、数条の溝が掘鑿された。なかでも第322・324号溝などは、掘削深度が深く、覆土中に浅間山A軽石の堆積した層を確認することができた。調査区内で途切れてしまい、南河川跡から取水したか、明らかにできなかった。おそらく同溝は、調査区の南へ続くと考えたい。

第322・324号溝は、蛇行しながら併走する溝で西から東に向かって流れる溝である。第200号溝とともに溝の間は、道路跡として活用されていたと考えたい。第322号溝と第324号溝の間は、幅4ｍ、第200号溝と第225号溝の間も幅4ｍである。ただし波板状圧痕や小砂利などの工作はみられなかった。

なお、前者の道路跡は、迅速図に描かれた上川上村と大塚村をつなぐ街道と考えたい。

この東西方向の溝を切って、南国方向に第55号溝が掘鑿された。この溝は、南から北に向かって流れていたらしい。この溝とＴ字形に交わる溝が、第315号溝である。

西から東に向かって流れる溝である。調査区の南辺、東辺で調査区外となってしまう。両溝跡は、第200号溝の廃絶以降、明治時代の耕地整理によって開鑿された溝と判断したい。

しかし第55号溝と第200号溝は、米軍が昭和21年に撮影した空中写真には確認できず、それ以前の耕地整理され埋没したと判断したい。

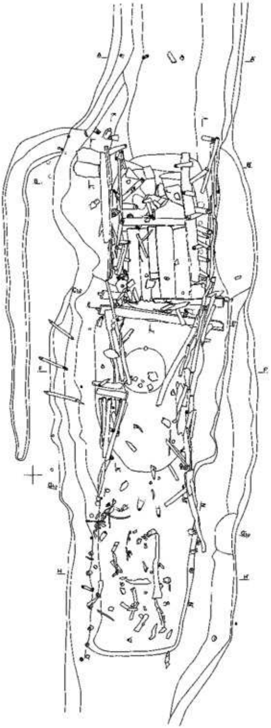
ⅲ．圦樋跡

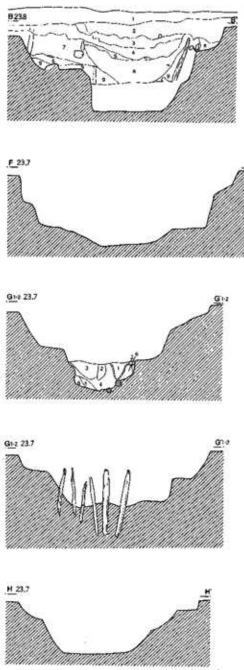
北島遺跡第19地点を代表する近世の遺構は、圦樋の跡である。

第200号溝が、調査区の西端で途切れる付近に確認した。遺構確認の段階では溝の一部が、池状に膨らんだと考えた。しかし両岸に杭列がみられ、杭列とともに貫板状の木材を確認したことから、慎重に埋土の掘鑿を行った。

掘り進めると、大形の板材が横に並んで出土し、また前後に横置きした木材を確認したことから、落ちた橋桁ではないかと考えた。しかし全ての構造材が、地山に密着していたことや、各部材が組み合ったまま出土したことから、用水路に関係した施設と判断した。

その後、調査中に近世の開発史に詳しい黒須茂氏に実見して頂き、用排水路内に設置した「圦樋」であることが明らかとなった。なお黒須氏の観察、及び考察について、「Ⅴ　結語」に掲載さて頂いた。



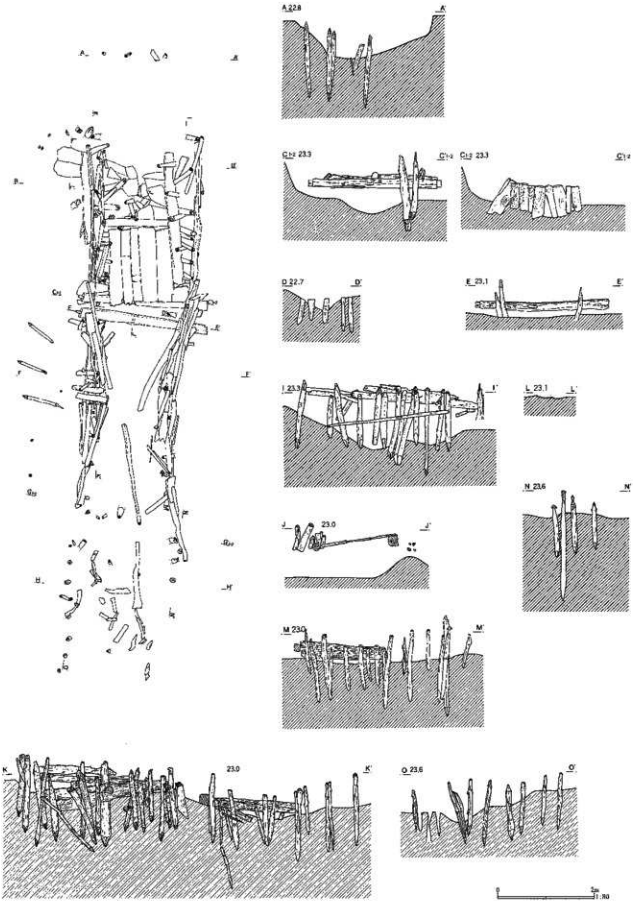


B－B'
1 灰褐色土 耕作土 粘性強く粒子粗い
2 暗灰褐色土 粘性強く粒子粗い A軽石含む
3 黄茶褐色土 粘性強く粒子粗い A軽石含む
4 灰褐色土 粘性強く粒子粗い A軽石含む
5 灰色土 粘性強く粒子細かい
6 灰色土 粘性強く粒子細かい 5層より粒子細かい
7 灰色土 粘性強く粒子細かい 6より暗い
8 暗灰褐色土 粘性強く粒子細かい 粘土
9 暗灰褐色土 粘性強く粒子細かい 8層より暗い

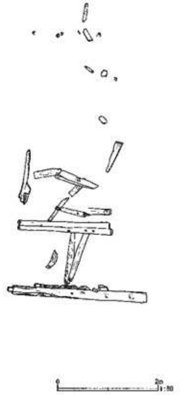
G－G'
1 暗灰黒色土 粘性大変強く粒子細かい
2 茶褐色腐蝕土 土のう状のつつみもの
3 暗灰色土 粘性強く粒子粗い 灰色粘土ブロック含む
4 黒灰色土 粘性大変強く粒子細かい
5 灰色土 炭化物・砂質土含む
6 灰色土 5層より明るい

0 2m 1:80

第294図 圦樋（1）



第295図　圦樋（2）



第296図　圦樋（3）

ここでは、発掘調査の観察のみ記すこととしたい。

圦樋は、東西11m、南北4.8mの東西に長い構造物である。構造の違いから5ブロックに分けて考えたい。①第200号溝を横切る一番西側の杭列から圦樋本体まで、②板材が乱雑に敷かれ、傾斜板を設置した部分、③溝底に構造物はなく、左右から絞り込まれた部分、④溝を横切る二列の杭列まで、⑤護岸の杭列のみの場所である。

このうち①は、導水のゴミなどを除去する部分である。また④は、上部に橋などの構造物があったかもしれない。なお、各材については、詳述を避け、一覧表に掲載するに留めた。ここでは、圦樋の構築順序に沿って、やや詳しく述べておきたい。

圦樋は、幅2m前後の第200号溝の一部を幅4m長さ12mに亘って土壙状に掘鑿し、さらに傾斜板の設置場所をより深く土壙状に掘鑿した。

まず傾斜板下の土壙内に杭を打ち、横木を置く。傾斜板が沈まないための工夫である。傾斜板の設置に、土壙内に「奉修医王□□」の護摩札と天保通寳一枚をともに納めた。圦樋に伴う地鎮祭祀を行ったようである。

次に溝の左右に杭を際に沿って交叉するように打ち込む。幅5cmの床板のような傾斜板6枚を河川方向に沿って、西が低くなるように設置し、東側は、横置き材に架けるように置く。傾斜板の西には、蓋をするように板材が置かれた。また傾斜板の東側は、板材9枚を立て列べて蓋としていた。

さらに杭列に沿って、貫板材を三段ほど立て置きした。用水路の護岸を行うと同時に、中央部で絞ることによって、圦樋の中を流れる水の水圧が高まったと考えたい。

貫板の他にも、粗い繊維で作られた土嚢状の塊が、杭列の外側に置かれていた。土嚢状の塊は、周辺の土と同化し、単位や広がりをつかむことはできなかった。

また傾斜板の西3.3mには、第200号溝を横切るように杭列が打たれていた。おそらく圦樋に侵入するゴミや流木などを遮断することが目的であろう。さらに南側護岸の中央には、3本の長い杭が打たれていた。あるいは、傾斜板を過ぎた場所で漁りをしたのかもしれない。

なお、圦樋の西南の隅には、柳の根株が残っていた。径10cmほどの根株である。圦樋を覆うように柳が植えられていたのかもしれない。

2 遺物

i．近世陶磁器

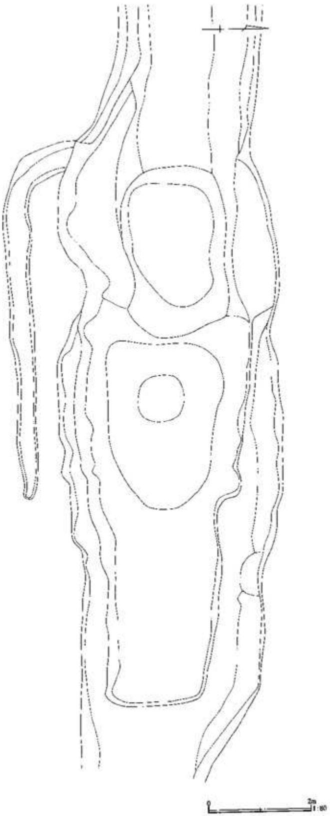
第298・299図は、近世の陶磁器である。近世の陶磁器は、全て第200号溝から出土した。

1は、17世紀代の肥前の製品である。蛇の目高台の皿で高台内は無釉である。2・5は、肥前の蓋である。2は、つまみの内側に海鳥と鳥、外側に島並が描かれる。18世紀代の製品である。5は、薄に月、流れる雲が描かれる。内面には、雷文が描かれる。3は、肥前の皿である。17世紀から18世紀の製品で内面に花鳥文が描かれる。4は、くわらんか手の皿である。内面に「落千乃」がある。6は、18世紀代の肥前陶磁器の猪口である。

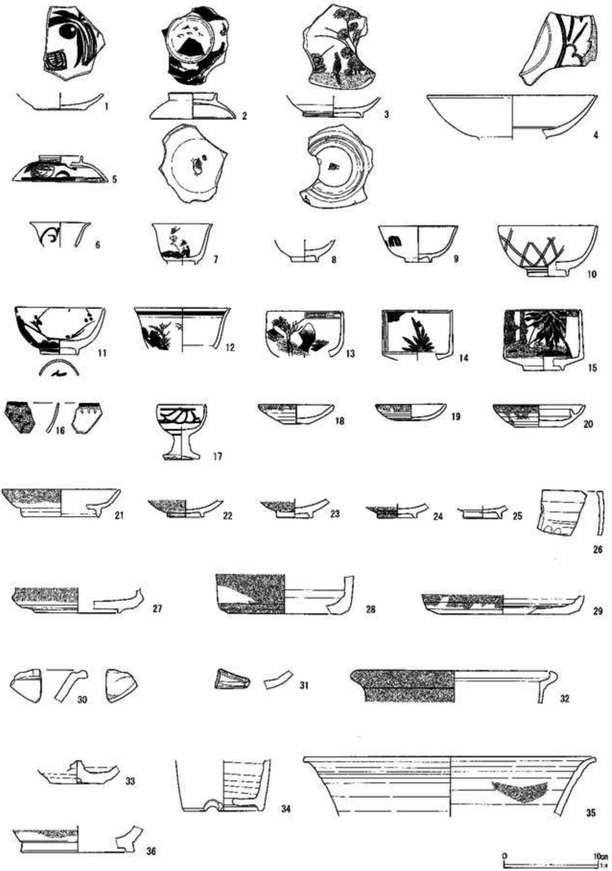
7は、青磁の猪口である。外面の器表を白化まだらにし、長石ちらしとした青磁である。9は、口銹が巡る19世紀以降の瀬戸である。小さな高台が付く碗である。10は、18世紀前半の肥前陶磁器である。外面に二本一対の格子目が描かれた碗である。11は、平戸・波佐見系のくらわんか椀である。18世紀後半の製品である。外面には梅が描かれる。12は、瀬戸の碗である。19世紀以降の製品である。外面に松が描かれる。13は、19世紀前半の肥前陶磁器である。外面に楼閣文が描かれ、内面には雷文が描かれる。19世紀前半の製品である。14は、18世紀後半の肥前の製品である。口縁の内面には、二条の圏線が巡る。碗である。15は、18世紀後半の平戸・波佐見系の碗である。口縁内面に四方襷文を描く。16は、碗である。

17は、外面に半菊文を描いた仏餉器である。高坏形の器形である。18世紀後半の肥前の製品である。18は、口縁部に灰釉の掛かる肥前他の小皿である。19は、鉄釉の掛かる瀬戸美濃系の小皿である。20は、瀬戸美濃系の灯明受皿である。18世紀後半の製品である。

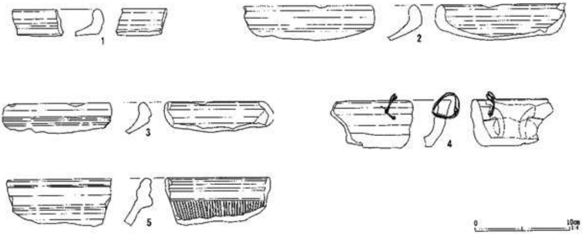
21は、高台の付いた瀬戸美濃系の皿である。18世紀中葉～後半の製品である。22は、瀬戸美濃系の丸碗である。灰釉の掛かる17世紀末から18世紀中葉の



第297図 圦樋（4）



第298図　**近世陶磁器（1）**



第299図　近世陶磁器（2）

製品である。23は、透明釉の掛かる丸碗である。18世紀後半の瀬戸美濃系の製品である。24は、鉄釉が掛け分けられた丸碗である。18世紀後半の瀬戸美濃系の製品である。25は、鉄釉と灰釉の掛かる瀬戸美濃系の皿である。18世紀後半の製品である。26は、半菊文の描かれた18世紀後半の筒形香炉である。瀬戸の製品である。

27は、鉄釉が掛かった瓶類である。瀬戸美濃の製品である。28・29は、鉄釉の掛かる甕か。30は、鉄絵が描かれた折縁皿である。31は、志野釉で描かれた皿である。32は、飴釉の掛かる瀬戸美濃系の壺である。33は、鉄釉の蓋である。34は、在地産の植木鉢である。35は、瀬戸美濃系の鉢である。36は、高台の付いた瀬戸美濃系の瓶類である。外面には、鉄釉が掛かる。

第299図1～3は、浅い焙烙である。4は、内耳部の残る焙烙である。在地の製品である。5は、摺り鉢である。

ⅱ．土管

第300図1～3は、土管である。1は、合わせ口部、2・3は、胴部から下端部である。両者とも内面には、ロクロ目が顕著に残る。下から22cmほどにユビオサエやユビナデの痕跡が残る。

外面には、縦方向のナデの跡がみられる。両者とも欠損しているが、径28cmの土管である。

ⅲ．瓦

第300図4～10は、瓦である。4は、軒瓦である。巴文が型押されている。面径は、7.2cmである。8は、丸瓦である。棟を飾ったのであろう。他は、平瓦である。

全て燻し焼きとなっており、表面は煤が付く。

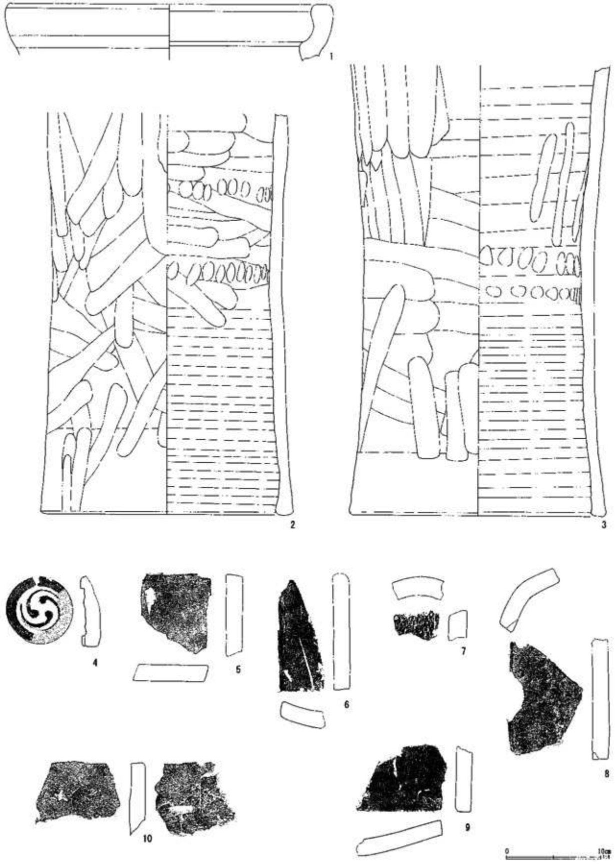
ⅳ．古銭

第301図は、古銭である。1～5は、渡来銭である。中世の遺構とかかわるかもしれない。

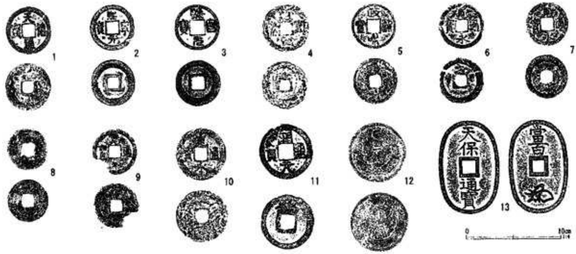
1は、「天禧通寳」である。北宋銭で初鋳年は、1017年である。2・3は、「熙寧元寳」である。2は、真書、3は篆書である。北宋銭で初鋳年は、1068年である。4は、「紹聖元寳」である。北宋銭で初鋳年は、1094年である。篆書である。5は、「政和通寳」である。篆書である。北宋銭で初鋳年は、1111年である。

6～10は、「寛永通寳」である。10の裏面には、十一波が描かれる。

11は、「開元通寳」である。唐銭で初鋳年は、845年である。12は、「一銭銀貨」である。13は、「天保通寳」である。天保通寳の初鋳は、天保6（1835）年である。銭百文に相当する。明治以降も断続的に



第300図　土管・瓦



第301図　**古銭**

作られた。

2は第2号墳、1・3・5～7・10は、グリッドや表土中から出土した。他は、第200号溝から出土した。とくに13は、臥樋の下から出土しており、地鎮的な願いを込めて埋納したのであろう。臥樋の年代を知ることができる。

Ⅴ．木製品

北島遺跡第19地点から出土した近世の木製品は、曲物・桶・下駄・漆椀・板状の加工材がある。以下、種類ごとに述べていく。

第302図1～10・12・13は、桶の底板である。いずれにも整形痕はない。2の表面に長さ60㎜と80㎜の刃物傷がある。

3の外周には、側板をあてるための幅30㎜、深さ2㎜の加工が施されている。

4は、外周の幅4㎜を斜めに切り落とす。

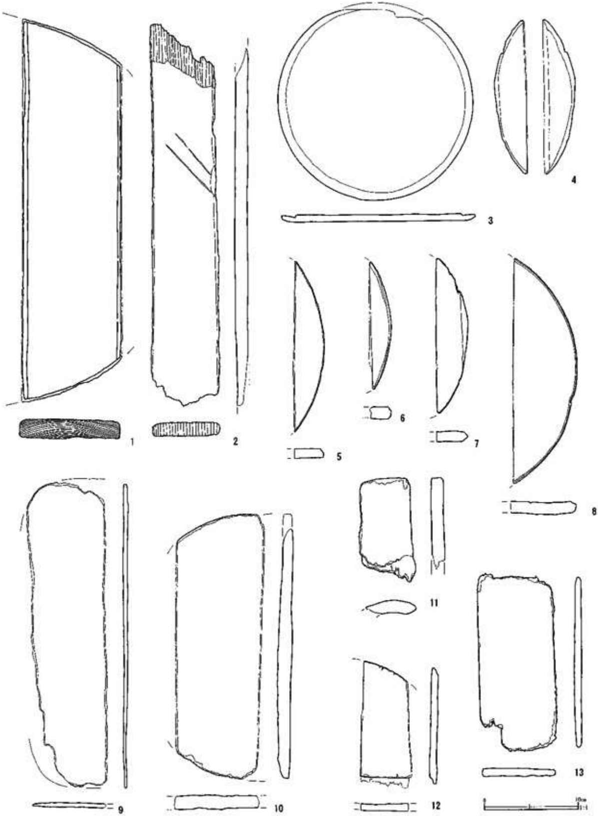
第302図11、第303図1～4は、桶の側板である。

第95表　**近世の遺物（1）**

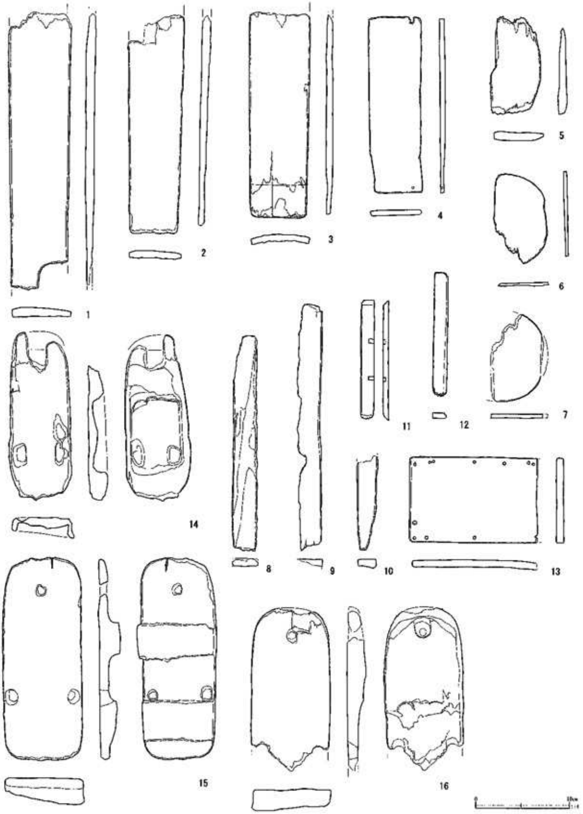
挿図番号	図の番号	遺構種類	新遺構番号	種別	器種	口径	底径	器高	色調	産地	備考
第298図	1	SD	200	陶磁器	高台付皿	53	−	−	明緑灰	肥前	
第298図	2	SD	200	陶磁器	蓋	91	49	27	明緑灰	肥前	
第298図	3	SD	200	陶磁器	皿	−	62	−	明緑灰	肥前	
第298図	4	SD	200	陶磁器	皿	181	−	−	明緑灰		
第298図	5	SD	200	陶磁器	蓋	103	46	27	明緑灰	肥前	
第298図	6	SD	200	陶磁器	猪口	62	−	−	明緑灰	肥前	
第298図	7	SD	200	陶磁器	猪口	63	−	−	明緑灰		
第298図	8	SD	200	陶磁器	猪口	−	27	−	明緑灰		
第298図	9	SD	200	陶磁器	碗	83	26	38	明緑灰		
第298図	10	SD	200	陶磁器	碗	104	40	52	明緑灰	肥前	
第298図	11	SD	200	陶磁器	碗	94	48	48	明緑灰	平戸・波佐見	
第298図	12	SD	200	陶磁器	碗	102	−	−	明緑灰	瀬戸	R−18
第298図	13	SD	200	陶磁器	碗	67	−	−	明緑灰	肥前	
第298図	14	SD	200	陶磁器	碗	72	−	−	明緑灰	肥前	
第298図	15	SD	200	陶磁器	碗	77	40	63	明緑灰	平戸・波佐見	N−23
第298図	16	SD	200	陶磁器	碗	−	−	−	灰白		
第298図	17	SD	200	陶磁器	仏飯器	49	37	57	明緑灰	肥前	

第96表　**近世の遺物（2）**

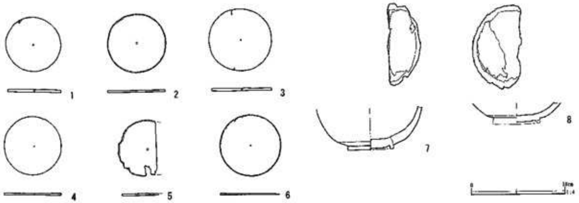
挿図番号	図の番号	遺構種類	新遺構番号	種別	器種	口径	底径	器高	色調	産地	備考
第298図	18	グリッド		陶磁器	小皿	77	27	20	浅黄	肥前	J－13b
第298図	19	SD	200	陶磁器	小皿	98	42	22	暗褐	瀬戸美濃	
第298図	20	SD	200	陶磁器	灯明皿	97	51	24	にぶい赤褐	瀬戸美濃	
第298図	21	SD	200	陶磁器	高台付皿	123	80	38	浅黄	瀬戸美濃	
第298図	22	SD	200	陶磁器	丸碗	－	36	－	明緑灰	瀬戸美濃	
第298図	23	SD	200	陶磁器	丸碗	－	35	－	明緑灰	瀬戸美濃	N－23
第298図	24	グリッド		陶磁器	丸碗	－	40	－	浅黄	瀬戸美濃	J－14a
第298図	25	SD	200	陶磁器	皿	－	37	－	淡黄	瀬戸美濃	
第298図	26	SD	200	陶磁器	筒形香炉	－	－	－	にぶい黄	瀬戸	
第298図	27	SD	200	陶磁器	瓶	－	91	－	暗褐	瀬戸美濃	
第298図	28	SD	200	陶磁器	甕	－	120	－	暗褐		
第298図	29	SD	200	陶磁器	甕	－	141	－	暗褐		
第298図	30	SD	200	陶磁器	折縁皿	－	－	－	明緑灰		
第298図	31	SD	200	陶磁器	皿	－	－	－	灰褐		
第298図	32	グリッド		陶磁器	壺	206	－	－	暗赤褐	瀬戸美濃	J－14a
第298図	33	SD	200	陶磁器	蓋	－	56	－	暗赤褐		
第298図	34	SD	200	陶磁器	植木鉢	－	79	－	黒	在地	
第298図	35	SD	200	陶磁器	鉢	308	－	－	灰白	瀬戸美濃	
第298図	36	SD	200	陶磁器	瓶	－	122	－	灰白	瀬戸美濃	
第299図	1	SD	200	土器	焙烙	－	－	－	明赤灰		
第299図	2	SD	200	土器	焙烙	－	－	－	にぶい赤橙		
第299図	3	SD	200	土器	焙烙	－	－	－	にぶい赤橙		
第299図	4	SD	200	土器	焙烙	－	－	－	黒	在地	
第299図	5	SD	200	土器	擂鉢	－	－	－	灰赤		
第300図	1	SD	200	土管		－	265	－	橙		
第300図	2	SD	200	土管		－	262	－	橙		
第300図	3	SD	200	土管		342	－	－	橙		付近
第300図	4	SD	200	瓦	軒瓦	径68	厚さ21	－	黒		
第300図	5	SD	200	瓦	平瓦	－	厚さ17	－	青黒		
第300図	6	SD	200	瓦	平瓦	－	厚さ18	－	黒		
第300図	7	SD	200	瓦	平瓦	－	厚さ20	－	灰白		
第300図	8	SD	200	瓦	丸瓦	－	厚さ18	－	青黒		
第300図	9	SD	200	瓦	平瓦	－	厚さ18	－	オリーブ黒		
第300図	10	SE	34	瓦	平瓦	－	厚さ17	－	灰		
第301図	1	グリッド		古銭	天禧通寶	径48	－	2.79g			K－17d
第301図	2	SS		古銭	熙寧元寳	径47	－	3.14g			
第301図	3	グリッド		古銭	熙寧元寳	径48	－	3.31g			
第301図	4	SD	200	古銭	紹聖元寶	径48	－	3.90g			R－14
第301図	5	B区		古銭	政和通寶	径47	－	3.36g			
第301図	6	グリッド		古銭	寛永通寶	径48	－	2.12g			I－21
第301図	7	表採		古銭	寛永通寳	径45	－	2.05g			
第301図	8	SD	200	古銭	寛永通寳	径44	－	2.08g			
第301図	9	SD	200	古銭	寛永通寶	径47	－	2.40g			
第301図	10	グリッド		古銭	寛永通寶	径53	－	4.17g			T－13
第301図	11	グリッド		古銭	開元通寶	径23	－	2.4g			N－17d
第301図	12	SD	200	古銭	一銭銀貨	径61	－	13.30g			
第301図	13	SD	200	古銭	天保通寶	縦97	横64	21.64g			



第302図　近世の木製品（1）



第303図　近世の木製品（2）



第304図　近世の木製品（3）

第302図11は、板全体がやや湾曲している。

第303図1～4は、幅58～68㎜、厚さ6㎜～1㎜と、共通する。

5・7は、曲物の底板である。欠損がひどく全体は不詳だが、直径10㎜前後の小さな曲物であろう。

8～13は、板状の加工材である。

8～10・12には目立った加工痕はない。

11には、二箇所の切り込みがある。一箇所は板材の端から35㎜、もう一箇所はそこから35㎜離れる。板材の側面は、幅5㎜を斜めに切り落とす。

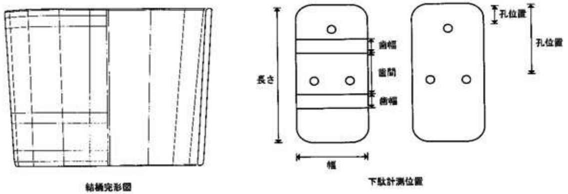
13の板材は、周囲に十二箇所の穴を穿つ。一つの穴の対面にもう一つの穴を穿つ。

14～16は、下駄である。三点とも一木造の「連歯下駄」で、歯の部分を組み合わせる「差歯下駄」は無い。14・15は、前歯の前に前緒穴、後歯の直前に後緒穴を穿つ。16は、欠損のため不詳である。

鼻緒穴の形は、14の方形、15・16の円形、の二種類がある。14の穴は一辺22㎜、15・16の穴は径12㎜である。

前緒穴は、左右に寄らず、3点とも中央に穿つ。前緒穴が、左右どちらかに寄るのが、古墳時代の下駄とされ、中央寄りはそれ以降とされる(『木器集成図録』)。足板の平面形は、いずれも長方形か隅丸長方形である。

第304図1～6は、円形の加工材である。柄杓の底板と考えたが、いずれも板中心部に径2㎜の穴が



第305図　木製品の各部名称・計測位置

穿たれる。中心部の孔に紐を通した祭祀具であろうか。径が62㎜～68㎜、厚さが３㎜と、ほとんど同じ形状である。

７・８は、挽物の漆椀である。７は、内面を朱漆、外面を黒漆で仕上げられる。外面下部に稜を一箇所つくる。高台が作られていたと考えた。８の内面は、黒漆の上に朱漆を塗り、外面は黒漆仕上げである。外面の下方は、一周削っている。高台を持つと考えたい。

なお、第305図は岩崎、望月1996、三浦・本1992の挿図を編集した。

第97表　**近世の木製品**

挿図番号	図の番号	遺構番号	器種	径	高さ	厚さ	長さ	幅	備考
第302図	1	第200号溝	桶底板	－	－	21	428	114	
第302図	2	第200号溝	桶底板	－	－	16	410	77	
第302図	3	第200号溝	桶底板	220	－	7	－	－	
第302図	4	第200号溝	桶底板	(170)	－	4	－	－	
第302図	5	第200号溝	桶底板	(190)	－	10	－	－	
第302図	6	第200号溝	桶底板	(143)	－	13	－	－	
第302図	7	第200号溝	桶底板	(174)	－	11	－	－	
第302図	8	第200号溝	桶底板	(252)	－	12	－	－	
第302図	9	第200号溝	桶底板	－	－	5	338	84	
第302図	10	第200号溝	桶底板	－	－	16	278	97	
第302図	11	第200号溝	桶側板	－	－	14	114	60	
第302図	12	第200号溝	桶底板	－	－	7	134	58	
第302図	13	第200号溝	桶底板	－	－	9	194	85	
第303図	1	第200号溝	桶側板	－	－	10	311	68	
第303図	2	第200号溝	桶側板	－	－	7	245	60	
第303図	3	第200号溝	桶側板	－	－	8	228	67	
第303図	4	第200号溝	桶側板	－	－	6	197	58	
第303図	5	第200号溝	曲物底板	(109)	－	9	－	－	
第303図	6	第200号溝	曲物底板	(94)	－	3	－	－	
第303図	7	第200号溝	曲物底板	(93)	－	5	－	－	
第303図	8	第200号溝	板状加工材	－	－	9	242	27	
第303図	9	第200号溝	板状加工材	－	－	8	270	26	
第303図	10	第200号溝	板状加工材	－	－	10	99	22	
第303図	11	第200号溝	板状加工材	－	－	6	134	15	
第303図	12	第200号溝	板状加工材	－	－	5	138	16	
第303図	13	第200号溝	板状加工材	－	－	8	94	144	
第303図	14	第200号溝	下駄	－	－	21	184	74	歯幅(前)－、歯間90、歯幅(後)、孔位置(前)30　孔位置(後)134　孔間(後)44
第303図	15	第200号溝	下駄	－	－	29	224	88	歯幅(前)35、歯間54、歯幅(後)4、孔位置(前)36、孔位置(後)、152、孔間(後)62
第303図	16	第200号溝	下駄	－	－	23	182	89	孔位置（前）26　孔位置（後）110　孔間（後）60
第304図	1	第200号溝	円形加工材	62	－	3	－	－	
第304図	2	第200号溝	円形加工材	64	－	2	－	－	
第304図	3	第200号溝	円形加工材	68	－	3	－	－	
第304図	4	第200号溝	円形加工材	64	－	2	－	－	
第304図	5	第200号溝	円形加工材	62	－	2	－	－	
第304図	6	第200号溝	円形加工材	68	－	2	－	－	
第304図	7	第200号溝	漆椀	－	42	10	－	－	
第304図	8	第200号溝	漆椀	－	22	7	－	－	

vi．木札

圦樋に関連して、文字の書かれた木札が２点出土した。第306図は、傾斜板の先端中央に下半部を貼り付けた状態で出土した。つまり、札の下半を傾斜版に張りつけ上半が傾斜版より突き出ていた。木札は埋土によって、湾曲し折れた状態で出土した。

この木札は、護摩札である。上部を山形に加工し、下部に向かって次第に細くなる。全長430㎜、上部幅86㎜、下部幅70㎜、厚さ４㎜の大きさである。

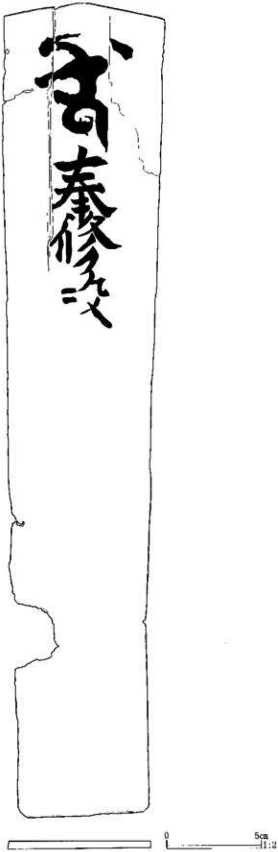
中央に梵字「バイ（薬師如来）」を描き、中央に「奉修醫王薬師護摩□□□全祈收」と文字が記される。出土当初は上記のように判読できたが、すぐに墨痕が薄れ、第306図で示した程度しかみえなくなってしまった。また左右の下部には、「□□山」「□□□」とあり、不鮮明ながら山号と寺号が、書かれていたらしい。

本文中にある「醫王薬師」は、『新編武蔵風土記稿』巻218　埼玉郡20「上川上村」の項の「醫王寺」とかかわるだろう。この寺は、現在、廃寺となっているが、比企郡吉見町の息障院の末寺で川上山新錫院と号していた。医王寺には、薬師堂があり、本尊は、薬師如来でった。

もう１点は、嘉永三年の年号を記す木札である。上部に枘が作られ、別の部材に装着されていたようである。文字の書かれた部分は、均一な幅で作られる。全長722㎜、幅104㎜厚さ24㎜の大きさであった。

中央には、「龍集嘉永三歳□□」とある。嘉永三年は、1850年にあたる。「龍集」は、雨乞いの呪句であろうか。欠字は、判読できない。

圦樋の傾斜板の下から出土しており、この圦樋の構築が、嘉永三年以降であることが分かる。



第306図　護摩札（１）

第307図　**護摩札（2）**

第98表　**第200号溝出土木製品（1）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
1	No179	杭	70	7	―	
2	No258	杭	90	8	―	
3	No216	杭	69	10	―	
4	No114	板材	71	13	5	ヌキ板状
5	No217	板材	66	12	1.5	ヌキ板状
6	No146(2)	用途不明品	87	5	―	
7	No348	板材	54	16	5	
8	No325	板材	―	―	―	
9	No33	木片	20	2	2	
10	No345	板材	61	20	5	ヌキ板状
11	No26	木片	不能	不能	不能	
12	番号なし	用途不明品	―	―	―	
13	No370	杭	83	8	―	
14	No45	板材	32	5.5	1	
15	番号なし	木片	―	―	―	
15	番号なし	木片	―	―	―	
16	No180①	杭	44	6	―	
16	No180②	杭	63	6	―	
17	No43	枝	43	1.5	―	
18	No103	桶底板	42	11.5	2	第302図1
19	No70	枝	63	1.5	―	
20	No112	板材	62	9	1	ヌキ板状
21	No281	杭	105	5	―	
22	No283	杭	42	9	―	半截材
23	No173	杭	65	8	―	
24	No266	杭	108	10	―	
25	No351①	杭	38	6	―	
25	No351②	杭	86	7	―	
26	No248	杭	75	10	―	半截材
27	No252	杭	79	6	―	
28	No124	板材	70	16	2.5	ヌキ板状
29	番号なし	用途不明品	―	―	―	
29	番号なし	木片	―	―	―	
30	番号なし	用途不明品	―	―	―	
30	番号なし	木片	―	―	―	
31	No191	杭	70	4	―	小型杭
32	No380	杭	68	5	―	小型杭
33	No167	板材	48	11	1.5	ヌキ板状
34	No215(1)	杭	22	8	―	
35	No34①	木片	11.5	7.5	3.5	
35	No34②	木片	9	8	4	
36	No332	杭	186	9	―	
37	No317	杭	155	10	―	
38	No316	杭	160	12	―	半截材
39	No326	板材	―	―	―	
40	No168	板材	30.5	10	1.5	
41	No50	桶底板	28	11	1.5	
42	No346	板材	66	14	2.5	ヌキ板状

第99表　**第200号溝出土木製品（2）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
43	No142	板材	61	8	2	
44	No46	板材	22	10	2.5	
45	No360	杭	35	3	−	
46	No130	板材	31	14	6	ヌキ板状
47	No75①	板材	26	6.5	1	
47	No75②	板材	17	5	1	
48	No221①	杭	12.5	3	−	
48	No221②	杭	21	4	−	
49	No226	木片	5	6.5	6	
50	No67	杭	61	8	−	
51	No352	杭	163	9	−	
52	No149	桶底板	7	3	−	第304図3
53	No246	杭	87	5.5	−	
54	No229	板材	29	16	5	
55	番号なし	木片	不能	不能	不能	
56	No247	杭	152	6	−	
57	No314	杭	73	6	−	
58	No324	杭	130.5	8	−	
59	No342	板材	43	11.5	2.5	
60	No331	板材	64	9.5	1.5	ヌキ板状
61	No267	杭	161	8	−	
62	No254	杭	91	7	−	
63	No244	杭	205	8	−	
64	No44	板材	17	9.5	1.2	
65	No313①	板材	101	12	2	ヌキ板状
65	No313②	板材	82	11	1	ヌキ板状
66	No120	杭	71	4	−	
67	No186①	杭	43	5	−	
67	No186②	杭	73	5	−	
68	No362	杭	130	8	−	半截材
69	No228	板材	75	8	4	
70	No347	板材	69	22	5	ヌキ板状
71	No343	板材	54	19	5.5	
72	No320	杭	151	8	−	
73	No225	杭	26	6	−	
74	No51①	木片	33	6	1.5	火をうけ炭化
74	No51②	木片	29	5.5	5	火をうけ炭化
75	No86	板材	41	6.5	2.5	
76	No110	板材	106	11	2	ヌキ板状
77	No81	杭	54	12	−	
78	No318	杭	140	11	−	半截材
79	No286	杭	145	9	−	
80	No280	杭	69	9	−	
81	No335(2)	杭	37	4	−	
82	No302	木片	19	9	1.5	
83	No199	下駄	184	74	21	第303図14
84	No224	桶底板	143	−	13	第302図6
85	番号なし	木片	不能	不能	不能	

第100表　**第200号溝出土木製品（3）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
86	No192	杭	121	6.5	−	
87	No41	木片	50	5	3	
88	No32①	杭	26	5	−	
88	No32②	杭	24	4	−	
88	No32③	杭	16	4	−	
89	No48	木片	33	3	2	
90	No242	下駄	−	−	−	第303図16
91	No165	木片	30	7	1	
92	No20	木片	14	4	1	
93	No236	木片	不能	不能	不能	
94	No22①	枝	25	1.3	−	
94	No22②	枝	21	1	−	
95	No133	枝	59	3	−	
96	No27	木片	不能	不能	不能	
97	番号なし	木片	不能	不能	不能	
98	No166	柄杓底	62	−	3	第304図2
99	番号なし	木片	不能	不能	不能	
100	No136	板材	72	18	4	ヌキ板状
101	No282	杭	123	9	−	
102	No232	板材	161	20	5	
103	No305	杭	116	11	−	
104	No140 2/2	板材	147	11	1	ヌキ板状
105	No319	杭	186	5	−	
106	No126	杭	125	9	−	
107	No263	杭	125	9	−	
108	No264	杭	183	7	−	
109	No245	杭	175	6	−	
110	No268	杭	126	10	−	
111	No275	杭	145	8	−	
112	No128	杭	183	9	−	
113	No333	杭	183.5	11	−	
114	No272	杭	143	10	−	
115	No271	杭	121	11	−	
116	No144	板材	175	15	2	ヌキ板状
117	No223	板材	264	19	3	ヌキ板状か 桁材の転用か
118	No170	板材	182	21	2.5	ヌキ板状
119	No163	板材	125	18.5	3.5	四面加工
120	No260	杭	143	10	−	
121	番号なし	板材等	−	−	−	
122	No66	板材	115	9	1	ヌキ板状
123	No197	杭	121	8	−	
124	No293	板材	60	12	2	ヌキ板状
125	番号なし	板材等	−	−	−	
125	番号なし	木片	−	−	−	
126	No312	杭	137	12	−	半截材
127	No375	杭	50	4	−	小型
128	No18	木片	32	6	1	
129	No214	桶底板	25	7	1.5	第302図8

第101表　第200号溝出土木製品（4）

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
130	No68	板材	42.5	8	1.5	第302図2
131	No374	杭	45	5	−	小型
132	No341②	杭	46	6	−	
132	No341①	杭	36	5	−	
133	No200	板材	59	11	2	タテ割材
134	No369	杭	68	9	−	半截材
135	No265	杭	177	11	−	
136	番号なし	杭	82	3	−	
136	番号なし	杭	74	4	−	
136	番号なし	杭	78	4	−	
137	No23	板材	163	25	5	
138	No181	杭	103	8	−	
139	No157	杭	85	7	−	
140	No323	杭	65	13	−	半截材
141	No195	杭	103	8	−	
142	No185	杭	113	7	−	
143	No19	木片	10	9	3	
144	No29	木片	21	4	1	
145	No188	杭	72	7	−	
146	No235	板材	69	19	5	
147	No356	杭	46	6	−	
148	番号なし	用途不透明	−	−	−	
149	No310	板材	66	14	6	ヌキ板状
150	No 2	杭	88	5	−	
151	No220	板材	185	25	2.5	ヌキ板状
152	No225(2)	杭	145	7	−	
153	No162	板材	75	14	2	
154	No283	杭	80	5	−	
155	No221(2)①	杭	75.5	−	−	
155	No221(2)②	杭	60.5	−	−	
155	No221(2)③	杭	29.4	−	−	
156	No339	杭	79	7.5	−	
159	No106	板材	103	13	3	ヌキ板状
160	No113	板材	188	14	2	ヌキ板状
161	No131	板材	187	18	4	ヌキ板状
162	No109	板材	117	11	3	ヌキ板状
163	No151	板材	233	11.5	3	ヌキ板状
164	No139	板材	215	17	3	ヌキ板状
165	No233	板材	−	−	−	
166	No219	板材	176	19	4	
167	No194	杭	184	10	−	
168	No161	板材	32	24	3	ヌキ板状
169	No47	杭	25	6	−	残欠
170	番号なし	枝	71	3	−	
171	No349	板材	−	−	−	
172	No309	板材	−	−	−	
173	No15(2)	杭	74	10	−	
174	No125	板材	90	16	3	ヌキ板状

第102表　第200号溝出土木製品（5）

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
175	No127	板材	−	−	−	
176	No136	板材	122	18	5	ヌキ板状
177	No285	杭	89	6	−	
178	No132	板材	115	10	1.5	ヌキ板状
179	No155	板材	62	7	2	ヌキ板状
180	No25	木片	36	5	2	
181	No375	杭	37	4	−	
182	No237	板材	76	13	2	ヌキ板状
183	No119	杭	66	5	−	
184	No189	杭	91	4.5	−	
185	No307	板材	−	−	−	
186	No294	杭	150	7.5	−	
187	No278	杭	144	9	−	
188	No294	杭	179	12	−	
189	No146	杭	67	6	−	
190	No273	杭	149	8	−	
191	No366	杭	139	8	−	
192	No262	杭	122	8	−	
193	No28	木片	14	2	1	
194	No154	板材	169	16.5	2	
195	No287	杭	101	10	−	
196	No150	板材	98	8	4.5	ヌキ板状
197	No358	杭	113	5.5	−	
198	No340	杭	69	9	−	
199	No357	杭	66	4.5	−	
200	No138	板材	81	12	4	ヌキ板状
201	No255	杭	109	6	−	
202	No123	板材	67	12	2	ヌキ板状
203	No158	板材	104	9	2	ヌキ板状
204	No323	杭	153	11	−	
205	番号なし	用途不透明	−	−	−	
206	No326	杭	45	12	−	
207	No156	板材	61	9	4	
208	No368	竹片	不能	不能	不能	
209	No218	板材	174	16	3	ヌキ板状
210	No256	杭	117	9	−	
211	No196	杭	222	7	−	
212	No171	板材	189	24	3	ヌキ板状
213	No306	杭	42	8.5	−	
214	No243	杭	143	7	−	
215	No279	杭	91	7	−	
216	No274①	杭	75	7	−	
216	No274②	杭	74	5	−	
217	No376	杭	58	5	−	
218	No143	板材	185	26	2	ヌキ板状
219	No291	杭	128	9	−	
220	No355	杭	71	5	−	
221	No42	木片	20	4	2	

第103表　**第200号溝出土木製品（6）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
222	No121	杭	81	6	—	
223	No129	杭	114	8	—	
225	No250	杭	97	5	—	
226	No372	杭	60	5	—	
227	No290	杭	114	7	—	
228	No184	杭	136	7	—	
229	No107	板材	83	12	3	ヌキ板状
230	No261	杭	160	11	—	
231	No227	杭	266	13	4	
232	No141	板材	209	9	0.5	ヌキ板状
232	No141	板材	29	6.5	1	ヌキ板状
233	No284	杭	132	7	—	
234	No190	杭	98	6	—	
235	No277	杭	102	5	—	
236	No198	杭	99	8	—	
237	No359	板材	77	32.5	6	ヌキ板状
238	No296	杭	46	15	—	
239	No215(2)	杭	94	9.5	—	
240	No269	杭	121	12	—	
241	No153	板材	78.5	10	1	ヌキ板状
242	No299	杭	40	5	—	
243	No193	杭	136	11	—	
244	No222	板材	190	7	2	ヌキ板状
244	No371	杭	66	4	—	
245	No377	板材	71	7.5	5	
246	No251	杭	100	10	—	
247	No378	木片	20.5	1.8	0.8	
248	No344	板材	55.5	9.5	5.5	
250	No338	杭	87	4	—	
251	No354	杭	87	7	—	
252	No292	杭	130	8	—	
253	No365	杭	153	6	—	
254	No363	杭	161	7	—	
255	No159②	板材	63	7	3	ヌキ板状
255	No159①	板材	34	5	2	ヌキ板状
256	No17	木片	20	7.5	1	
257	No52	板材	43	12	1.5	ヌキ板状
258	No49	桶底板	134	58	7	第302図12
259	No16	木片	21.5	5	1	
260	No31	杭	22	3.5	—	
261	No164	板材	—	—	—	
261	No164	木片	—	—	—	
262	No169	杭	110	8	—	
263	No52	柄杓底	6	0.2	—	第304図5
264	No379	杭	146	5	—	
265	番号なし	桶底板	6	0.3	—	第304図1
266	No201	木片	7	8	6.5	
267	No152	下駄	23	9	3	第303図15

第104表　**第200号溝出土木製品（7）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
268	No304	木片	9	7	1	
269	No288	杭	128	9	—	
270	No353	杭	86	7	—	
270	No187①	杭	40	7	—	
271	No187②	杭	54	5	—	
272	No303	板材	26	7	1.5	
273	番号なし	板材	37	5	4.5	
274	No23	木片	5.5	4.5	4	
275	No230	板材	156	32	5	
276	No367	杭	159	8	—	
277	No289	杭	131	9	—	
278	No253	杭	95	8	—	
279	No182	杭	106	8	—	
280	No361	杭	132	11	—	
281	No160	板材	91	9	2.5	ヌキ板状
282	No295	杭	169	6	—	
283	No315	杭	127	9	—	
284	No300	杭	125	6.5	—	
285	番号なし	板材	52	15	5	
286	番号なし	木片	—	—	—	
286	番号なし	板材	94	144	8	第303図13
287	No172	板材	86	15	5	ヌキ板状
288	No301	板材	277.5	23	4.7	
289	No239	桁材	275	17.5	16	
290	No236	柱材	277	20	18	
291	No311	梁材	160	19	14	
292	No308	柱材	188	15	16	転用
430	364	板材	—	—	—	第307図
467	番号なし	用途不明品	—	—	—	
481	番号なし	用途不明品	—	—	—	
501	No134	杭	41	4	—	第303図12
502	No141	木片	19	5.5	0.8	第304図8
503	No135	木片	50	12	1.5	
504	No174	桶側板	41	4	1	
505	番号なし	木片	15	4	4.5	
506	No1	木片	不能	不能	不能	
507	番号なし	木片	不能	不能	不能	
508	No6①	樽板	41	8.5	2.5	
508	No6②	樽板	33	8.5	2.5	
509	番号なし	木片	不能	不能	不能	
557	No137	板材	45	8.5	3	
558	No175	柄杓底	—	—	—	
559	No55	木片	35	6	2	
560	番号なし	木片	38	4.5	1.5	
561	No63	桶側板	26.5	7	1	
562	No62	木片	38.5	6	1	
563	No60	木片	不能	不能	不能	
564	No74	杭	20	5	—	

第105表　**第200号溝出土木製品（８）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
565	No58	木片	11.5	5	0.8	
566	No76	杭	19	7	−	
567	No61	桶底板	−	−	−	
568	No38	木片	21	5	3	
569	No96	木片	18	7	1	
570	No54	木片	14	4.5	0.7	
571	No72	桶底板	−	−	−	
572	No76	木片	18	4.5	1	
573	No95	桶栓	−	−	−	
574	No39	木片	15	3	7	
575	No71	板材	38	7	1	
576	No89	板材	48.5	9	1.5	
577	No35	木片	20	2.5	2	
578	No59	木片	28	7.5	1.5	
579	No53	柄杓底	−	−	−	
580	No37	木片	29	6	1	
581	No115	板材	36	7.5	1	
582	No65	板材	32.5	5.5	2	
583	No108	木片	38	7	1.3	
584	No118	木片	46	7	3.5	
585	No78	木片	38	4	2.5	
586	No101	板材	42	7.5	1.5	ヌキ板状
587	No91	木片	34	9	1	
588	No97	桶側板	311	68	10	第303図１
589	No117①	枝	28	1.7	−	
589	No117②	枝	27	1.7	−	
590	No73	枝	49	1.5	−	
591	No83	桶側板	245	60	7	第303図２
592	No93	木片	19	6.5	3.5	
593	No87	桶側板	228	67	8	第303図３
594	No92②	木片	16.5	8	2.5	
594	No92①	木片	20	7	2	

第106表　**第200号溝出土木製品（９）**

整理番号	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
595	No105	板材	44	12	1.3	ヌキ板状
596	No100	木片	36.5	7.5	5.5	
597	No99	枝	51	1.8	−	
598	No104	板材	53	8.5	1.5	ヌキ板状
599	No116	板材	40.5	11	2.7	ヌキ板状
600	No102	竹片	23	3.5	−	
601	No36	木片	16	4.5	1	
602	No77	木片	24.5	5.5	1.5	
603	No147	竹片	不能	不能	不能	
604	番号なし	桶底板	278	97	16	第302図10
608	番号なし	曲物底板	−	−	−	
609	番号なし	漆椀	−	−	−	
610	番号なし	木片	−	−	−	
611	No30	椀	−	−	10	第304図７
612	No24	曲物	68	−	2	第304図６
613	No80・No88	漆の棒	−	−	−	
644	No88	用途不明品	−	−	−	
645	番号なし	曲物底板	−	−	−	
646	番号なし	桶底板	−	−	1.1	第302図７
646	番号なし	曲物底板	−	−	−	第303図６
646	番号なし	曲物底板	−	−	−	第303図７
650	No297	桶底板	−	−	−	第302図３
651	番号なし	桶底板	−	−	−	第303図５
652	番号なし	桶底板	−	−	−	第303図８
653	No４	加工材	−	−	−	第302図11
654	No５	板材	−	−	−	第303図４
655	No３	板材	−	−	−	第302図
656	番号なし	木片	−	−	−	第302図13
869	番号なし	護摩札	−	−	−	第306図
870	番号なし	用途不明品	−	−	−	第303図11
871	番号なし	用途不明品	−	−	−	第304図４
872	番号なし	護摩札	−	−	−	第307図

（4）自然遺物

北島遺跡第19地点では、獣骨や人骨、貝類、流木などの自然遺物が出土した。ここでは、全体の出土傾向、集中出土地点の状況、種類ごとの出土傾向などについて、記していくこととする。また本書では、古代から近世にかけての獣骨・人骨について扱い、弥生時代・古墳時代前期に属する獣骨・人骨は、別に扱う。

出土した獣骨・人骨等は、一部を除いて作図はせず、出土遺構ごとに一覧表で掲載し、主な獣骨・人骨は、巻末に写真図版を掲載した。なお、エタノールに漬けた状態で保存している遺物については、処理が済んでいないため写真は掲載しなかった。一覧表の「整理番号」は、出土遺構番号ごとの整理番号、「No」は、遺物の取り上げ番号を指す。

なお、獣骨、人骨の種別、及び部位については、鴻巣市立鴻巣西中学校の山川守男氏に分類をお願いした。ちなみにこれまで北島遺跡から出土した牛馬骨については、山川守男氏の「古代牛馬痕跡の一様相」(『増田逸朗追討論文集』所収）に詳しいので参照していただき、ここでは、第19地点から出土した牛馬骨の概要を記すに留めたい。

さて、北島遺跡第19地点から出土した古代から近世の獣骨・人骨は、資料数395点に及ぶ。種別ごとの内訳は、イタチ2点、イノシシ（？）2点、シカかイノシシ5点、ウシ29点、ウシ（？）2点、ウシかウマ15点、ウマ139点、ウマ（？）6点、ウマかシカ1点、シカ17点、シカ（？）2点、ヒト7点、動物の種類を特定できない骨168点である。

396点中、中世・近世の遺構から出土した獣骨・人骨は、僅か12点であり、残り384点は、古代の遺構や遺物堆積層からの出土である。中世・近世の遺構から出土した12点は、中世の溝1点、井戸2点、第1号墓4点、近世の溝跡から出土した5点である。

種類ごとの割合は、ウマの資料数が、70%(36%）と圧倒的に多く、ウシの15%（8%）を大きく引き離す（括弧内は、不詳の資料数を含んだ値)。残るイタチ・イノシシ・シカ・ヒトは、僅か1%前後である。

1．遺構出土の獣骨・人骨

古代の遺構から出土した獣骨・人骨について、次に述べたい。遺構の種類ごとに資料数を示すと、竪穴住居跡15点、掘立柱建物跡10点、井戸跡15点、土壙61点、溝跡140点、グリッドピット20点、道路跡22点、河川跡1点、集石遺構5点、土器集中出土地点3点、グリッド83点、表土中9点である。

遺構ごとの割合では、溝からの出土が圧倒的に多く、36%に上り、次いでグリッドの22%、土壙の16%、グリッドピットの5%、道路跡6%、竪穴住居跡・井戸跡の4%、掘立柱建物跡の3%、その他の遺構となる。

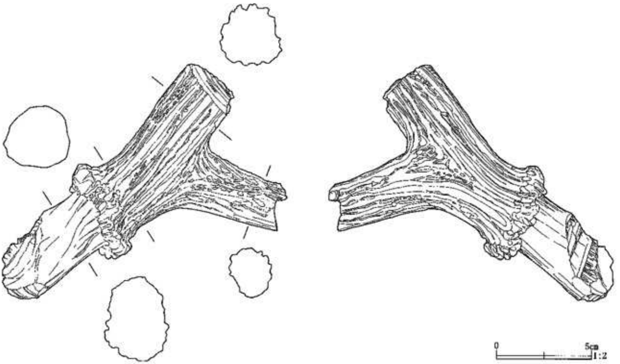
ちなみに覆土の土量が、多い遺構の順に列挙すると、①グリッド・表土層、②溝、③竪穴住居跡・井戸跡、④土壙、⑤掘立柱建物跡・グリッドピットの順となる。覆土の土量が多いからといって、獣骨・人骨の出土が多いとは、必ずしも云えない。

あくまでも出土した遺構の性格と、獣骨や人骨がその遺構に埋没した個々の経緯によって、出土量の多少が生じたと考えたい。そこで各遺構種類ごとに出土獣骨・人骨についての所見を記しておくこととしたい。

（1）竪穴住居跡

まず竪穴住居跡から出土した獣骨・人骨であるが、15点の資料中、種類を明らかにできなかった5点を除き、ウマが8点、シカとウシが1点ずつみられた。シカは歯、ウシも下顎切歯である。ウマは、尺骨、脚部の骨格、歯などがみられた。

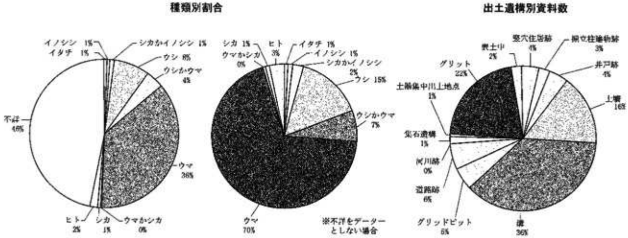
竪穴住居跡からの出土は、11軒15点で6世紀後半から10世紀第Ⅲ四半期まで及ぶ。どの個体も小片が多く、大きな頭部や足の部位などが、竪穴住居跡に残されたのではなく、解体後、小片となった骨片や歯などが、竪穴住居跡に埋没したと考えたい。



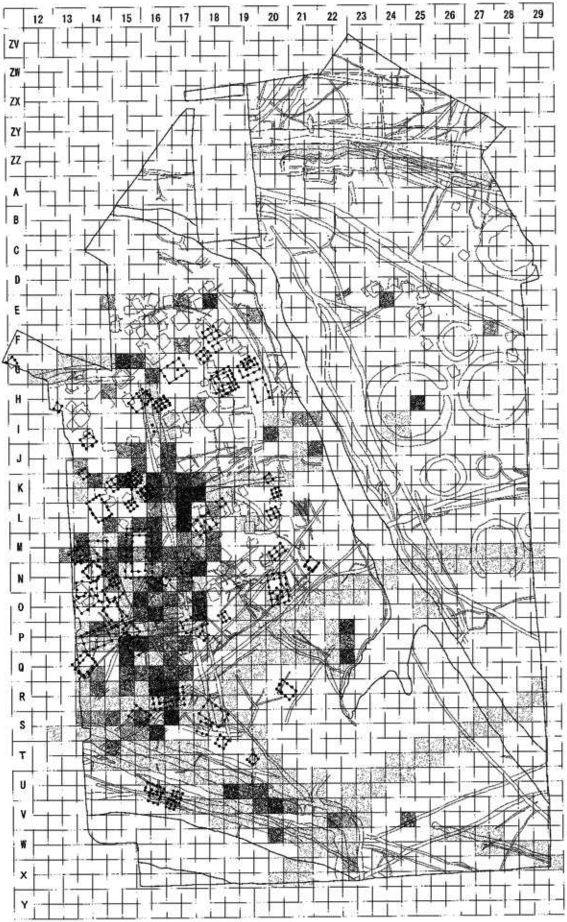
第308図　**第85号井戸跡出土鹿角**

なお11軒の竪穴住居跡の内訳は、6世紀後半が1軒1点、7世紀後半が1軒1点、8世紀前半が1軒1点、8世紀後半が1軒1点、9世紀前半が3軒5点、9世紀後半が2軒4点、10世紀後半が2軒2点となる。資料数が少ないので確実なことは云えないが、9世紀に集中する。

6世紀後半の1点は、竪穴住居跡から須恵器の𤭯が、1点のみ出土しただけであるから疑わしいが、少なくとも7世紀第Ⅳ四半期以降、竪穴住居跡に骨片や歯が、埋没したようである。なお、このうちシカは、9世紀後半、ウシは、8世紀後半である。



第309図　**獣骨の種類別割合と出土遺構別資料数**



第310図　獣骨分布図（1）

（2）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡からの出土は、柱穴内の埋土に限られるため少ない。ほとんどが骨片のみで、種類部位の判明したのは、第57号掘立柱建物跡のみであった。四棟の掘立柱建物跡から10点の骨片が出土した。

掘立柱建物跡と共通する小穴からは、ウマや他の獣骨が出土した。小穴の埋土は少ないが、中足骨を含む脚部の骨や歯などが出土した。各小穴から１点ずつ20点の出土である。

（3）井戸跡

井戸跡では、井戸の廃棄後に獣骨が他の遺物とともに投棄されたようである。６基の井戸跡から15点の獣骨・人骨が出土した。とくに第42号井戸跡と第85号井戸跡からは、人骨が出土しており、前者は、鎖骨かと判断された。さらに第42号井戸跡からは、ウマの歯と骨片が出土した。

一方、第85号井戸跡からは、加工した痕跡の残るシカ角が出土した。頭部に近く二股に分かれる位置で切断されている。二方向以上からノコギリ状の工具で切断されている。井戸跡の底部付近から出土した。角の上部を加工後、不要となった部位を廃棄したらしい。同井戸跡からは、歯冠長の短い老齢となったウマの下顎歯も出土した。

さらに第４号井戸跡・第25号井戸跡からは、ウマの骨や下顎歯が出土した。また中世となる第72号井戸からは、イタチの骨が比較的まとまって出土したことから、この事例は、井戸に入ったイタチが、溺死した可能性もある。

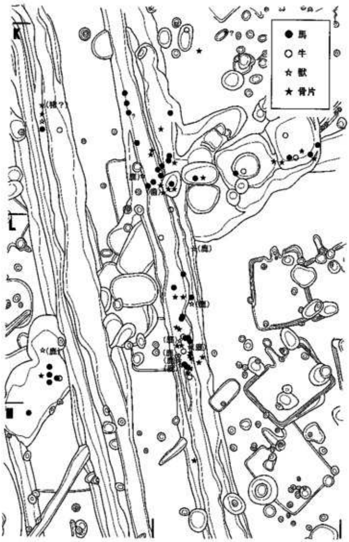
（4）土壙

土壙では、24基の土壙から61点の獣骨・人骨が出土した。なかでも第249号土壙から出土した人骨は、自然科学分析の結果（附編参照）、９点の歯から30歳前後の男性と判明した。また第42号土壙からも人の歯が出土した。

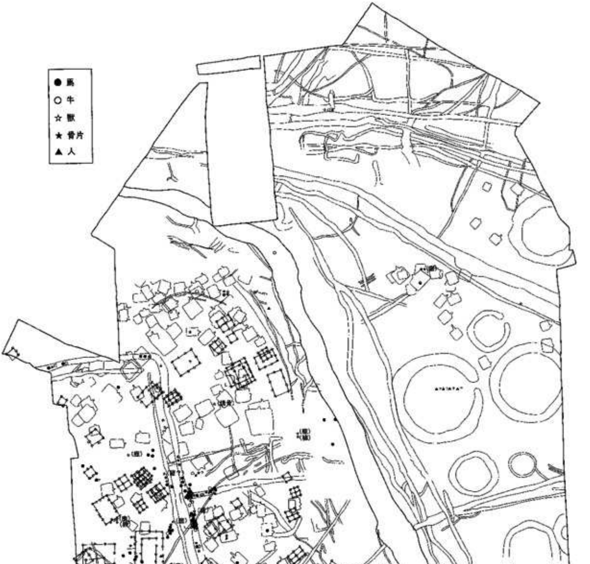
土壙では、多数の獣骨を出土した土壙と、一、二点が出土した土壙に分かれる。前者は、第200・240・160・434号土壙である。また後者は、第269・279・280・285・286・237・307・219・84・191・281・311・332・339・438・447・485号土壙である。ウシまたはウマの骨片が多く、僅かに第219号土壙からイノシシかシカの焼骨が出土した。

そもそも多数の獣骨を出土した第160・200・240・434号土壙は、大形の廃棄土壙であり、様々の遺物を含むことから、多数の獣骨が出土することも理解できる。

第200・240号土壙は、「コ」の字形の区画溝よりも新しく、この区画溝の第87・91号溝の形成される９世紀第Ⅱ四半期以前に埋没し



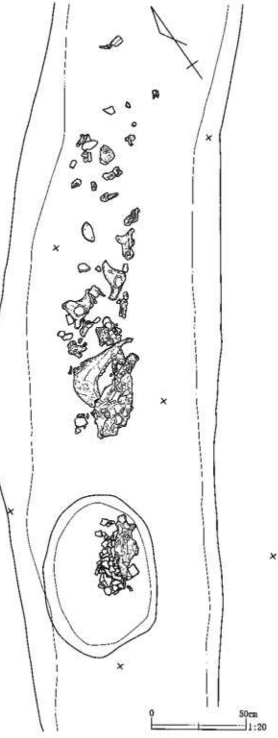
第311図　**獣骨分布図（2）**



第312図　**獣骨分布図（3）**

た廃棄土壙である。両者は、同一の遺構の可能性が高い。8世紀第Ⅲ四半期からの遺物がみられるが、9世紀第Ⅰ四半期の形成と考えたい。

出土した獣骨は、ウマの脚部の骨格4点、上腕骨



第313図　**第239号溝獣骨出土状態**

3点、脛骨1点、大腿骨1点の他、ウシの上顎歯3点、不詳11点がみられた。獣骨の出土した地点を第309図に示した。発掘調査時に分からなかったが、同図をみると獣骨の出土地点が、第200号土壙の中央を斜めに横切る形で分布し、この溝が、「コ」の字形の区画溝と直行する第153号溝につづく。これは、第200号土壙の獣骨が、区画溝形成以降に廃棄された遺物の可能性を示す。

つまり200号土壙の獣骨は、区画溝の形成された9世紀第Ⅱ四半期以降、しかも区画溝が機能を失った10世紀前半に廃棄された可能性が高い。

同様に第160号土壙は、7世紀後半から11世紀前半にかけての遺物がみられるが、区画溝の第125号溝よりも古く、第91号溝よりも新しいことから、北側に設定された「コ」の字形の区画が廃絶し、南にシフトする10世紀後半に形成された遺構である。ここから出土した5点の獣骨もこの段階の遺物と理解したい。ウマの脚部骨格片やシカの角などの出土をみた。

さらに古代の遺構と考えた第434土壙からウシの歯を含む骨片10点が出土した。第434号土壙は、獣骨の大量に出土した第239号溝の至近にみられ、7世紀代の可能性を残す。

（5）溝

溝から出土した獣骨は、140点に上り、遺構種類別にみた割合では36%を占める。この140点のうち幹線水路にあたる溝からの出土は、第25号溝と第37号溝の2条4点に止まる。

最大の出土は、前述の「コ」の字形の区画を構成した溝からの出土である。最も多い溝は、第87号溝の86点、第125号溝の18点である。前述のように第87号溝の埋没の後、第125号溝へシフトしたこと、第87号溝への獣骨の混入が、第200号土壙の獣骨とかかわることから、第87号溝への牛馬骨の混入は、10世紀前半に廃棄されたと考えたい。

また第125号溝への牛馬骨の混入は、中世まで下る可能性を残し、10世紀後半以降としておきたい。

両者とも区画溝であるため通水していた可能性は低く、区画機能が存続していた間は、常に清掃していた可能性がある。異臭の漂う獣骨を主屋の近くに晒していたはずはなく、区画溝は、獣骨廃棄後に埋め戻されたと考えたい。

第87号溝からは、ウシ・ウマ・シカの歯や骨などが出土した。資料数は、ウシ8点、ウマ26点、シカ7点であった。また第125号溝からは、ウマ・イノシシ・シカの歯や骨が出土した。

一棟の掘立柱建物跡群を区画する溝の第218号溝や、大量のウマの骨片を出土した第239号溝は、7世紀第Ⅳ四半期と考えた遺構である。とくに第218号溝は、第311図に示したような出土状態を示していた。

シカの頭骨かと考えられる骨を1点のみ含むが、他は全てウマの各部位である。少なくとも2頭以上の骨を確認できる。覆土の下層からは、同一体と考えられる獣骨の頭部・骨盤などの部位が、同一の高さでまとまって出土した。また同レベルで土器片も確認することができた。頭位の方向は、溝の走行方向と一致し、骨盤は、向かい合った状態で出土した。

また第239号溝の土壙の底部から下顎骨が、土器とともに出土した。やはり頭位方向は、溝の走行方向に沿った状態である。各部位が、ばらばらに出土していることから、いずれも死馬を解体処理後、ばらばらの部位をまとめて埋めたと考えたい。

なお、第239号溝は、ウマ骨の出土範囲以外の南北に長く確認できないことから、この溝は、通水された溝ではなく、ウマを解体処理した後、土器とともに埋納した遺構であるかもしれない。

この他に時期は特定できないが、古代の小規模な溝から獣骨が出土した。第151・153・182・201・241・280・327号溝から、ウマまたはウシの歯や骨が出土した。

なお中近世の溝では、調査区西側台地で確認した中世の区画溝の第81号溝から骨片、近世の水路である第200号溝・第315号溝・第324号溝からウマの歯や大腿骨が出土し、近世の道路跡の側溝と考えた第386号溝・第412号溝からウマの上顎歯2点や骨片が出土した。

(6)道路跡

道路跡では、1号道路跡の側溝や路面下から出土した。道路跡の側溝では、第318号溝・第319号溝からウマや他の骨片が、6点出土した。いずれも小破片である。

また路面を構築した際にいわゆる波板状の小溝が掘られるが、この小溝から小石や土器の小破片とともに獣骨が、敷き詰められた状態で出土した。9条の小溝から11点のウマ・ウシ・シカの歯・骨・角の破片が出土した。

(7)河川跡

中央河川跡のD19グリッドからウシの顎骨が1点出土した。

(8)集石遺構

中央河川跡の南側に形成された集石遺構から4点のウマの歯が出土した。集石内に挟み込まれるように出土した。また骨片も1点みられた。

(9)土器集中出土地点

3点の出土があった。ウマの下顎骨、中足骨と骨片である。土器集中出土地点といって、特別出土量が多いというわけではない。

この他に中世の第1号墓から出土した歯5点が、自然科学分析によって30歳前後の男性と判明した。この墓は、山吹双鳥鏡を副葬した墓である。詳しくは、(2)中世で記述した。

2. 遺物堆積層出土の獣骨・人骨

グリッドおよび表土層中から出土した獣骨・人骨は、資料数92点を数えた。なかでも古代の遺物堆積層中の出土としてとらえた獣骨・人骨は、83点の上る。遺物堆積層の遺物は、本来遺構の地上部、または地表に堆積した土砂中に堆積したと判断し、第308図では、その堆積数をグリッドごとに黒の網で表現した。

なお、調査時に獣骨・人骨は、グリッド（10m×10m）で取り上げた場合と、小グリッド（5m×5m）で取り上げた場合の二者があったため、グリッド扱いの資料は、点数4分の1ずつ各小グリッドに割り振り、合算することとした。

また第308図では、遺構出土の遺物についても帰属する小グリッドに面積比で割り振り、合算することとした。その結果、小グリッドごとの資料の総計を黒網の濃淡で表現することとした。

これによって、遺物堆積層から出土した獣骨・人骨が、西側台地の中央やや西寄りに濃密に分布していたことが分かった。またその他の地点でも、少なからず確認することができた。とくに獣骨の等密分布が激しい地点は、「コ」の字形の区画施設の中央から南側である。10世紀後半以降の区画施設と重なる。

しかし牛馬の解体をこの区画施設内で行っていたとは、考え難い。前述のように区画溝の埋土中からの出土が、圧倒的に多かったことを考えると、廃棄は、区画機能の停止時に行われ、区画内の遺物堆積層中にも及んだのである。

ところでこの区画は、前述のように緑釉陶器、灰釉陶器を比較的豊富に含む遺物堆積層が存在し、五間四面の南北棟が存在するなど、奢侈的な生活が営まれていた空間であり、そうした生活を行っていたときに同一の場所で牛馬の解体処理を行ったとは考え難く、区画施設の機能停止以降、この遮蔽空間を利用して骨片や歯などの部位を廃棄したと考えたい。

なお、遺物堆積層からは、ウマ・ウシ・シカ・イノシシなどの骨・歯などが出土した。

この他に土器集中出土地点や遺物堆積層から、桃の種などの種子が出土したが、ここでは割愛させていただいた。また土器集中出土地点から貝類の出土もあった。

第107表　獣骨他（1）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
1	中央河川跡	D−19	8	ウシ	顎骨（分析試料）
2	1号道路跡	SD42		ウマ	下顎歯1
3	1号道路跡	V−20		ウマ	上顎骨1
4	1号道路跡	SK 4		ウマ	骨片・下顎歯1
5	1号道路跡	V−22pit 4		ウマ	上顎歯1
6	1号道路跡	U−18		ウマ	歯
7	SB−035	M−13		−	骨片
8	SB−057	O−18		−	骨片
9	SB−057	O−18		ウシ	上顎歯1
10	集石遺構	Q−22№19		ウマ	下顎歯1
11	集石遺構	Q−22№8		ウマ	下顎歯1
12	集石遺構	Q−22№9		ウマ	歯
13	集石遺構	−	1	−	骨片
14	集石遺構	P−22	59	ウマ	歯
15	SD−200	Q−19		ウマ	歯1
16	SD−327	W−19		ウマ	下顎骨1（歯冠長=極短：老齢）
17	SD−315	S−28		ウマ	左下顎歯1
18	SD−324	X−22	1	ウマ or ウシ	大腿骨？
19	SD−369	U-18 V-19	1	ウマ	左上顎歯4・右上顎歯5
20	SD−365	U−18		ウマ	左上顎歯1
21	SD−365	U−18		シカ	角

第108表　獣骨他（2）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
22	SD−370	U-19 V-19		−	焼骨
23	SD−374	U-19 V-19		ウマ	左上顎歯1
24	SD−375	U-19 V-19	7	ウシ or ウマ	中足骨
25	SD−375	U-19 V-19		ウマ	中手骨
26	SD−393	P−15		−	歯
27	SD−386	V−24		ウマ	上顎歯2
28	SD−382	U-20 V-20	1	ウマ or ウシ	基接骨 or 中接骨
29	SD−319	S−16	2	ウマ	左上顎歯6・右上顎歯2
30	SD−125	J−15	1	ウマ	腓骨
31	SD−125	O−17		シカ？	歯2
32	SD−125	J−14		ウマ	上顎歯4（歯冠長=短：老齢）
33	SD−125	N−17	7	ウマ？	踵骨
34	SD−125	K−16	1	ウマ or ウシ	基接骨？
35	SD−125	L−16	8	シカ	下顎骨・歯
36	SD−125	K−16	8	ウマ	上顎歯1（歯冠長=短：老齢）
37	SD−125	K−16		イノシシ？	脚部骨格
38	SD−125	K−16		−	骨片
39	SD−125	K−16		獣	骨片
40	SD−125	K−16		ウマ	上顎歯1
41	SK−160	J−15	29	ウマ	脚部骨格片
42	SK−160	J−15	38	ウマ	脚部骨格片

第109表　獣骨他（3）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
43	SK－160	J－15		ウマ	骨片
44	SK－160	pit 1	13	シカ	角
45	SD－151	M－16		イノシシ or シカ	骨片
46	SD－151	M－16		－	骨片
47	SD－087	O－17	1	ウシ	歯・左下顎骨
48	SD－087	M－17	1	ウマ or ウシ	脚部骨格
49	SD－087	G－16	2	－	骨片
50	SD－087	M－17	2	－	骨片
51	SD－087	N－17	4	－	脚部骨格
52	SD－087	N－17	6	－	骨片
53	SD－087	N－17	7	－	脚部骨格
54	SD－087	N－17	17	－	骨片
55	SD－087	－	18	ウマ or ウシ	尺骨
56	SD－087	－	19	ウシ	歯 1
57	SD－087	N－17	19	ウマ？	骨片
58	SD－087	L－16	22	－	骨片
59	SD－087	K－16	24	シカ	歯
60	SD－087	L－17－a	26	ウシ	上顎歯 1・中接骨（歯冠長＝短）
61	SD－087	L－17－a	28	ウシ	歯 2 （歯冠長＝短）
62	SD－087	L－17－a	32	ウマ	脚部骨格
63	SD－087	L－17－a	35	ウマ	骨片
64	SD－087	L－17－a	37	－	骨片
65	SD－087	L－17－a	38	－	骨片
66	SD－087	L－17－a	40	シカ	下顎骨
67	SD－087	K－16－a	43	－	骨片
68	SD－087	K－16－d	44	ウマ	脚部骨格
69	SD－087	K－17－c	47	ウマ	骨片
70	SD－087	K－17－c	48	ウシ	歯 1 （歯冠長＝短）
71	SD－087	K－17－c	49	ウマ	上腕骨
72	SD－087	K－17－c	50	ウマ	骨片
73	SD－087	K－16	51	ウマ	脚部骨格
74	SD－087	K16d・K17c	52	ウマ	中手骨
75	SD－087	L－17－c	53	ウマ	上腕骨
76	SD－087	L－17－a	54	ウマ	完存骨格（部位不明）
77	SD－087	K－17－c	55	－	脚部骨格
78	SD－087	K－17	61	－	骨片
79	SD－087	L－17－c	62	ウマ	焼骨（刃物切痕有）
80	SD－087	L－17－c	62	－	骨片
81	SD－087	L－17－c	63	－	骨片
82	SD－087	L－17－c	63	ウマ	脚部骨格
83	SD－087	M－17	63	－	脚部骨格
84	SD－087	L－17－c	64	シカ	下顎骨
85	SD－087	L－17－c	65	シカ	歯 1
86	SD－087	K－17－c	70	－	骨片
87	SD－087	K－17－c	73	－	歯
88	SD－087	K－17－c	74	－	骨片
89	SD－087	K－17	75	－	骨片
90	SD－087	K－17	76	ウマ	脚部骨格

第110表　獣骨他（4）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
91	SD－087	K－17－c	78	－	骨片
92	SD－087	K－16－d	79	ウマ	踵骨
93	SD－087	K－16－d	80	－	骨片
94	SD－087	L－17	81	ウマ	骨片
95	SD－087	L－17	82	ウマ	基接骨・中接骨
96	SD－087	L－17	83	－	骨片
97	SD－087	L－17	84	－	骨片
98	SD－087	L－17	85	－	骨片
99	SD－087	L－17	86	－	骨片
100	SD－087	L－17	87	ウシ	脛骨
101	SD－087	L－17	88	－	骨片
102	SD－087	L－17	89	ウマ	脊椎骨
103	SD－087	L－17	90	－	骨片
104	SD－087	L－17	91	ウシ	脛骨
105	SD－087	L－17	92	シカ	歯・左下顎骨
106	SD－087	L－17	93	ウマ	踵骨
107	SD－087	L－17	98	ウマ	中接骨
108	SD－087	L－17	99	ウマ or ウシ	腰椎
109	SD－087	L－17	100	－	骨片
110	SD－087	L－17	101	ウマ	骨片
111	SD－087	L－17	102	シカ	左下顎骨
112	SD－087	L－17	104	シカ	左下顎骨
113	SD－087	L－17	111	－	骨片
114	SD－087	G－15		ウマ	上顎歯 1
115	SD－087	G－15		ウマ	頭骨片
116	SD－087	G－15		－	骨片
117	SD－087	J－16		－	骨片
118	SD－087	J－16		－	骨片
119	SD－087	J－16		－	骨片
120	SD－087	K－16		ウマ	下顎歯 1
121	SD－087	L－17－a		シカ	頭骨
122	SD－087	M－17		－	骨片
123	SD－087	G－12		－	骨片
124	SD－206	O－17		ウマ	左下顎骨
125	SD－087	K－16		ウマ	下顎歯 1
126	SD－087	K－16		ウマ？	脚部骨格
127	SD－087	G－12		ウマ	下顎歯 1
128	SD－318	S－14		ウマ	下顎歯 1
129	SD－318	S－14		イノシシ or シカ	骨片
130	SD－319	T－16	2	ウマ	歯 1
131	SD－319	T－16	2	ウマ？	骨片
132	SD－319	T－16		獣	腰椎？
133	SD－025	Z－21		獣	脚部骨格
134	SD－025	Z－21		ウシ	歯 1
135	SD－025	Z－21		－	骨片
136	SD－307	R－17		ウマ	脚部骨格
137	SD－257	P－20		ウマ	上顎歯 1
138	SD－275	W－22		ウマ	上顎歯 1

第111表　獣骨他（5）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
139	SD−241	O−16		ウマ	左上顎歯1
140	SD−239	P−15	1	シカ？	頭骨？
141	SD−239	P−15	2	ウマ	骨片
142	SD−239	P−15	3	ウマ	骨片
143	SD−239	P−15	4	−	骨片
144	SD−239	P−15	5	ウマ	骨片
145	SD−239	P−15	6	ウマ	骨片
146	SD−239	P−15	7	ウマ	骨片
147	SD−239	P−15	8	ウマ	骨片
148	SD−239	P−15	9	ウマ	軸椎？
149	SD−239	P−15	10	ウマ	骨片・下顎歯1
150	SD−239	P−15	11	ウマ	歯3
151	SD−239	P−15	12	ウマ	軸椎？
152	SD−239	P−15		ウマ	頭骨（全骨格埋納状態で出土）
153	SD−183	M−13		獣	骨片
154	SD−280	P−19	46	ウマ	上顎歯数本・中足骨
155	SD−218	N−19.20		−	骨片
156	SD−218	N−19.20		ウマ？	脚部骨格
157	SD−081	F−27		獣	骨片
158	SD−153	K−19		ウシ	歯数本
159	SD−201	N−16		獣	脚部骨格
160	SE−085	Q−15		シカ	角（加工痕）
161	SE−085	Q−15		ウマ	下顎歯1（歯冠長=短：老齢）
162	SE−085	Q−15		ウマ	下顎歯1（歯冠長=短：老齢）
163	SE−085	Q−15		ヒト	骨片（分析試料）
164	SE−042	M−16	35	ヒト	鎖骨？（分析試料）
165	SE−072	O−17		イタチ	
166	SE−072	O−17		イタチ	
167	SK−240	L−16	4	−	骨片 or 粘土塊？
168	SK−240	L−16	5	ウマ	脚部骨格（ヒト？）
169	SK−240	L−16	6	ウマ	脚部骨格（ヒト？）
170	SK−240	L−16	7	ウマ	大腿骨？（ヒト？）
171	SE−004	E−18	1	獣	骨片
172	SE−004	E−18	3	ウマ	骨片
173	SE−004	E−18	4	獣	骨片
174	SE−004	E−18	5	−	骨片
175	SE−025	J−21	31	ウマ	中足骨？（ヒト？）
176	SE−092	S−14		ウマ	下顎歯1
177	SK−240	L−16		ウマ or ウシ	歯
178	SJ−184	O−15.16		ウマ	上顎歯1（歯冠長=短：老齢）
179	SJ−183	O−15		ウマ	左上顎歯1
180	SJ−183	O−15		ウマ	骨片・下顎歯1
181	SJ−183	O−15		シカ	歯
182	SJ−186	P−15.16		ウマ	歯
183	SJ−021	D−24 E−24		ウマ	歯
184	SJ−043	E−17		ウシ	下顎切歯1
185	SJ−065	F−16.17		−	骨片
186	SJ−185	O−16		ウマ	尺骨？

第112表　獣骨他（6）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
187	SJ−164	M−18		ウマ	脚部骨格
188	SJ−151	L−18 M−18		−	骨片
189	SJ−151	L−18 M−18		−	骨片
190	SJ−157	L−19 M−19		ウマ	下顎歯1
191	SK−377	P−16		−	骨片
192	SK−377	P−16		−	骨片
193	SK−279/SK−280	M−14.15	3	−	骨片
194	SK−281	M−15	1	ウマ	上腕骨
195	SK−332	O−15		ウシ？	歯
196	SK−285	M−15	3	ウマ	脚部骨格
197	SK−285	M−15		ウマ	脚部骨格
198	SK−286	M−15	1	ウマ	脚部骨格
199	SK−485	W−20		−	骨片
200	SJ−20	D−24 E−24	1	−	歯
201	SJ−20	D−24 E−24	3	−	骨片
202	SK−438	S−16 T−16	1	ウマ	上顎歯1
203	SK−434	S−16	4	ウマ	骨片
204	SK−434	S−16	5	ウマ	骨片
205	SK−434	S−16	6	−	骨片
206	SK−434	S−16	7	−	骨片
207	SK−434	S−16	8	−	骨片
208	SK−434	S−16	9	−	骨片
209	SK−434	S−16	10	ウシ	歯
210	SK−434	S−16	29	−	骨片
211	SK−434	S−16		−	骨片
212	SK−200	K−17	2	−	骨片
213	SK−200	K−17	3	ウマ	上腕骨
214	SK−200	K−17	4	−	骨片
215	SK−200	K−17	5	ウマ	骨片
216	SK−200	K−17−c	5	ウシ	上顎歯1
217	SK−200	K−17	6	−	骨片
218	SK−200	K−17	7	−	骨片
219	SK−200	K−17	8	ウシ	歯
220	SK−200	K−17	9	ウマ	上腕骨
221	SK−200	K−17	10	ウシ	上顎歯1
222	SK−200	K−17	11	ウマ	上腕骨
223	SK−200	K−17	12	−	骨片
224	SK−200	L−17	16	−	骨片か
225	SK−200		17	−	骨片
226	SK−200	K−17−a	18	ウシ	上顎歯1
227	SK−200	K−17	19	ウマ	腓骨？
228	SK−200	K−17	24	−	完存骨格（部位不明）
229	SK−200	K−17		−	骨片
230	SK−240	M−16		ウマ	脚部骨格
231	SK−339	O−16		−	骨片
232	SK−042	E−19	11	ヒト	歯（分析試料）
233	SK−083	H−14	3	ウマ	下顎歯1
234	SK−269	M−14.15		ウマ	大腿骨

第113表　獣骨他（7）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
235	SK−191	K−14		ウマ？	大腿骨？
236	SK−219	L−14	1	イノシシ or シカ	焼骨（分析試料）
237	和鏡出土土壙	H−25	4	ヒト？	歯（分析試料）
238	和鏡出土土壙	H−25	5	ヒト？	歯（分析試料）
239	和鏡出土土壙	H−25	7	ヒト？	歯（分析試料）
240	和鏡出土土壙	H−25		ヒト？	歯（分析試料）
241	土器集中出土地点	I−21	19	ウマ	下顎歯
242	土器集中出土地点	I−21	37	ウマ	中足骨
243	土器集中出土地点	J−21		獣	骨片
244	グリッドピット			−	焼骨
245	グリッドピット		1	−	骨片
246	グリッドピット	M−15		獣	脚部骨格
247	グリッドピット			獣	骨片
248	グリッドピット			獣	歯
249	グリッドピット			獣	脚部骨格
250	グリッドピット			ウマ	中足骨
251	グリッドピット			ウマ	歯1
252	グリッドピット			ウマ	歯3以上
253	グリッドピット			ウマ	中足骨
254	グリッドピット			ウマ	歯
255	グリッド	S−16	1	−	骨片
256	グリッド	Q−16	1	ウマ	歯
257	グリッド	S−16	2	ウマ	上顎歯
258	グリッド	S−16	3	ウマ	上顎歯
259	グリッド	S−16	4	獣	骨片
260	グリッド	R−16	5	ウシ	上顎歯
261	グリッド	Q−16−b	6	獣	骨片
262	グリッド	R−16	6	獣	脚部骨格
263	グリッド	S−16	11	ウシ	上顎歯
264	グリッド	O−25	11	ウマ	上顎歯4以上（老齢）
265	グリッド	P−22	29	ウマ	歯
266	グリッド	P−22	30	ウマ	上顎歯1
267	グリッド	P−22	39	ウマ	歯
268	グリッド	P−22	40	ウマ	歯
269	グリッド	P−22	42	ウマ	下顎歯
270	グリッド	I−20	58	−	骨片
271	グリッド	P−15		ウシ	上顎歯
272	グリッド	Q−22−7		ウシ	上顎歯
273	グリッド	R−15		ウシ	上顎歯
274	グリッド	R−16−99		−	骨片
275	グリッド	R−16−b		−	骨片
276	グリッド	S−15		ウマ	上顎歯
277	グリッド	S−15−b		ウマ	上顎歯
278	グリッド	P−16		ウマ	右下顎骨
279	グリッド	E−14−b		獣	焼骨
280	グリッド	G−15−a		獣	骨片
281	グリッド	H−18−a		ウマ	歯
282	グリッド	I−24		ウマ or ウシ	歯

第114表　獣骨他（8）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
283	グリッド	J−15−b		ウマ	上顎歯1
284	グリッド	K−15−a		ウマ	上顎歯1
285	グリッド	K−15−a		ウマ	歯
286	グリッド	K−16−c		ウマ	頚骨
287	グリッド	K−17		ウマ or ウシ	肩甲骨
288	グリッド	K−17		獣	焼骨
289	グリッド	K−17		ウシ？	歯
290	グリッド	K−17−d		ウマ	歯
291	グリッド	L−15−d		ウマ or ウシ	脚部骨格
292	グリッド	L−16		−	骨片
293	グリッド	L−17−a		獣	骨片
294	グリッド	L−18−a		ウシ	歯
295	グリッド	L−21−a		ウマ	歯
296	グリッド	M−13−d		ウマ or ウシ	脚部骨格
297	グリッド	M−14		ウマ	中足骨
298	グリッド	M−16		−	骨片
299	グリッド	M−16		−	骨片
300	グリッド	M−16−a		−	骨片
301	グリッド	M−16−c		シカ	歯
302	グリッド	M−18−c		−	人歯か？
303	グリッド	N−14−d		イノシシ or シカ	骨片
304	グリッド	N−15−d		−	焼骨
305	グリッド	N−16		−	骨片
306	グリッド	N−16		獣	歯
307	グリッド	N−16−b		ウマ・シカ	歯
308	グリッド	N−16−c		−	焼骨
309	グリッド	N−17−a		ウマ	下顎骨1
310	グリッド	N−18−b		シカ	歯
311	グリッド	O−15−d		−	歯
312	グリッド	O−16		−	骨片
313	グリッド	O−16−b		−	骨片
314	グリッド	O−16−c		−	焼骨
315	グリッド	P−14		ウマ	下顎歯1
316	グリッド	P−14−a		ウマ	切歯1
317	グリッド	P−15		獣	骨片
318	グリッド	P−15−a		ウマ	上顎歯1
319	グリッド	P−15−b		シカ	歯1
320	グリッド	P−15−d		獣	歯（牙？）
321	グリッド	P−15−d		獣	骨片
322	グリッド	P−16−b		−	骨片
323	グリッド	P−17−c		獣	骨片
324	グリッド	P−22−95		ウマ	歯
325	グリッド	Q−14−c		ウマ or ウシ	脚部骨格
326	グリッド	Q−15		ウシ	歯1
327	グリッド	Q−15−c		ウシ	歯1
328	グリッド	Q−15−d		獣	骨片
329	グリッド	Q−17−c		−	骨片
330	グリッド	R−14		イノシシ or シカ	骨片

第115表　獣骨他（9）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
331	グリッド	R−14−a		ウマ	歯
332	グリッド	R−15−a		ウシ	歯
333	グリッド	R−16−a		−	焼骨
334	グリッド	S−13−b		ウマ	上顎骨1
335	表土中	−		−	歯
336	表土中	−		−	骨片

第116表　獣骨他（10）

整理番号	報告遺構名	グリッド	No	種別	部位
337	表土中	−		獣	骨片
338	表土中	−		−	焼骨片
339	表土中	−		シカ	下顎骨
340	表土中	−		ウマ	歯
341	表土中	−		イノシシ？	牙
342	表土中	−		−	焼骨

V　結語

1．北島遺跡の変遷と周辺集落の動態

北島遺跡は、弥生時代中期・古墳時代前期、古墳時代後期から11世紀、そして中世・近世に続く希有な遺跡である。ここでは古代の北島遺跡について、これまでの調査成果を踏まえ、周辺の一般的な集落の動向とともに北島遺跡を位置づけていくこととしたい。

（1）北島遺跡の変遷

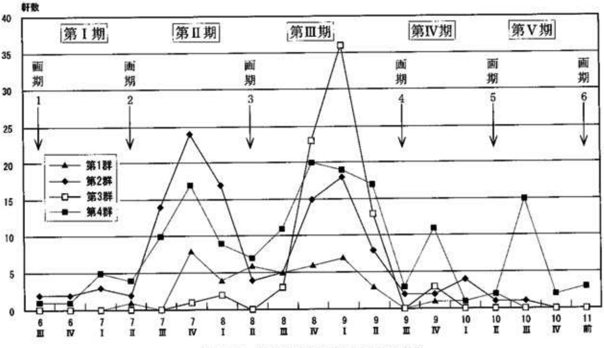
まず、集落の変遷を確認するため、これまでの土器の編年的研究に基づいて、竪穴住居跡の構築年代を便宜的に四半世紀区分した。そして四半世紀ごとに竪穴住居の構築数を集計した。そして各調査地点ごとに竪穴住居跡の構築数をグラフで示したのが、第314図である。

ところで北島遺跡の調査区と竪穴住居跡の分布は、大きく四群にまとまる。第1群は、第1地点東部の緩い谷水田から西に展開した集落である。第1・6地点が該当する。熊谷市教育委員会が調査した天神遺跡もこのグループに含めても良いであろう。7世紀第Ⅱ四半期からスタートし、10世紀第Ⅱ四半期まで続く。

第2群は、南と東を旧河川（現在の久保島用水）で限り、西を第1群東の谷水田で限る。北島遺跡の中心的な集落である。現在の久保島用水は、6世紀から8世紀にかけて埋没した河川と、ほぼ同じルートをたどる用水路である（以降、「旧久保島川」と表記する）。第2～5・7・8地点が該当する。6世紀第Ⅲ四半期から10世紀第Ⅲ四半期まで続く。

第3群は、星川の左岸に接近した集落である。北を旧久保島川で限り、東と南を星川の低地帯で限る。第9・10・14～16地点が該当する。7世紀第Ⅳ四半期に登場し、9世紀第Ⅳ四半期まで続く。

第4群は、今回報告した第19地点の集落である。南と北・西を河川跡で限り、東に中央河川跡をはさ



第314図　**北島遺跡の竪穴住居跡数の変化**

み、中条古墳群が展開する。南には第3群、西には第2群が展開していた。6世紀第Ⅲ四半期から11世紀前半まで続く。

なお、第4群の東（第17地点）には、8世紀を中心とした小規模な集落が形成されたが、未報告のためここでは取り上げない。

この四群は、第314図によると、いくつかの画期をみることができる。出現や展開に小差はあるが、全体的な集落の消長は共通する。これは竪穴住居跡群の消長が、各群を跨いで同時に進行していたことを示し、また各群の増減を集落間相互で補完しなかったことを示す。

竪穴住居跡数の増加や減少の契機となった時期を画期とすると、北島遺跡には、出現から消滅まで六つの画期を設定できる。第314図に従うと、第一の画期は、古墳時代後期の集落が始まる6世紀第Ⅲ四半期。第二の画期は、古代的な集落が開始される7世紀第Ⅲ四半期。第三の画期は、7世紀に編成された奈良時代の集落が、急速に解体する8世紀第Ⅲ四半期。第四の画期は、奈良時代末に再編成された集落が衰退する9世紀第Ⅲ四半期。第五の画期は、第4群で区画施設が衰退する10世紀中葉。第六の画期は、北島遺跡で古代的な集落が消滅する11世紀前半である。

この六つの画期に挟まれた五つの段階が集落の変遷である。つまり北島遺跡は、［第Ⅰ期］6世紀後半から7世紀第Ⅱ四半期、［第Ⅱ期］7世紀第Ⅳ四半期から8世紀第Ⅱ四半期、［第Ⅲ期］8世紀第Ⅳ四半期から9世紀第Ⅱ四半期、［第Ⅳ期］9世紀第Ⅲ四半期から10世紀前半、［第Ⅴ期］10世紀後半から11世紀前半の変遷をたどることとなる。

なお、第4群では、区画施設が登場する第Ⅲ期の後半に大きな画期が存在するが、竪穴住居跡群の推移では、時期を分けず前半と後半に分けて記述することとした。以下、この変遷にそって集落の動態をやや詳しくみていく。

（2）北島遺跡の集落誕生

第Ⅰ期の集落は、竪穴住居跡のみで構成される。

北島遺跡の北には中条古墳群、東には中条大塚古墳などが形成された。中条大塚古墳は、角閃石安山岩の截石をドーム状に積み上げて横穴式石室とした古墳である。胴張り複室型石室の前庭部には、群馬県から埼玉県北部に分布する須恵器の補強帯大甕が、据え置かれていた。

北島遺跡は、第19地点の中央河川跡を境に墓域と集落域が明瞭に分断されていた。中央河川跡の東側から田谷遺跡にかけては、いわゆる中条古墳群と考えたい。なお、中条古墳群と北島遺跡については、第292集『北島遺跡Ⅷ』に詳しい。

ともかく北島遺跡は、古墳時代前期（4世紀）から一世紀半の空白をおいて、再び集落が営まれた。集落は小規模で第2群と第4群で竪穴住居跡を3軒確認できるだけである。竪穴住居跡が少ないのは、出現当初から第2の画期まで続く傾向である。

この集落は、中条古墳群の墓域に進出した新興集落という景観であった。ところが、集落の成立当初から第7地点の南側や第19地点の中央河川跡には、土器集中出土地点が、早くも形成され始めていた。

この点からも第2群と第4群は、互いに連携しつつも別の集落として編成されていたと考えたい。第2群が、女塚古墳群などを含む中条古墳群の今井支群に近く、また、第4群は、熊谷大塚古墳を含む大塚支群に近い。両者は、別の自然堤防上に形成された集落跡である。

ともかく北島遺跡が、5世紀から形成された中条古墳群よりも1世紀以上遅れて開始したことを考えると、集落と古墳は、併行的に営まれていたとは云えない。つまり中条古墳群を営んだ人々は、北島遺跡とは別の集団であり、中条古墳群の北部や東部に展開した別の集落が、造営主体と考えざるを得ない。

むしろ北島遺跡は、形成途上の墓域の隙間へ新たに進出した集落であった。おそらく北島遺跡は、荒川扇状地の扇端部に湧水点を確保し、積極的に耕地

の拡大を図るため、また妻沼低地に広く展開した集落と埼玉古墳群を結ぶ拠点的集落として誕生した集落であろう。

（3）評の編成と北島遺跡

集落の変遷

第Ⅱ期（7世紀第Ⅳ四半期～8世紀第Ⅲ四半期）には、掘立柱建物が、集落の一部を構成するようになる。

とくに竪穴住居跡は、飛躍的に増加する。なかでも第Ⅰ期に小規模ながら集落を形成した第2・4群が、飛躍的な発展を遂げる。ピークは、8世紀第Ⅰ四半期でその後急速に落ち込み、8世紀第Ⅲ四半期が底となる。

第1・3群も8世紀第Ⅰ四半期には、集落が形成され始まる。ことに第1群は、8軒というやや大きな単位で進出した集落である。

道路跡と河川跡

第4群（第19地点）では、集落の南端に4条の道路跡を確認した。古代に遡る第2～4号道路跡は、道路幅も広い。第3号道路跡は問題をやや残すが、とくに第4号道路跡は、幅6mを測り、いわゆる「傳路」に相当する。

第3号道路跡は、南河川跡に沿って斜めに走り、

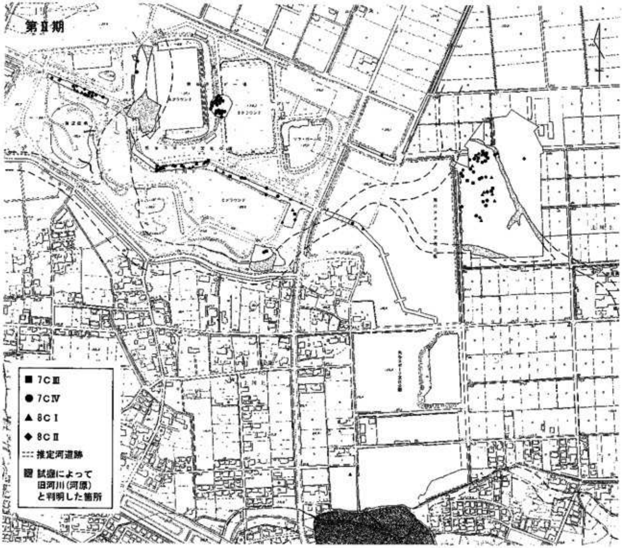
第315図　第Ⅰ期の竪穴住居跡の分布

調査区南辺中央で南に折れる。おそらく調査区外には、橋が架かっていたと考えたい。そして橋の南は、第17地点の西端に確認した条里型地割の境界である大畦畔に続き、さらに南に延びていくと考えた。

一方、西に第3号道路跡を延伸すると、第7地点や第9・21地点の河川跡（旧久保島川）を横切るため、ここにも橋が架けられていたと考えたい。仮に第3号道路跡が、同一走行方位で西に延びていたとすると、第1・2・5地点を通過することとなる。このうち第5地点では、調査区の北側に二条の平行する溝跡を確認し、第2地点では、調査区を横切る一条の溝跡を確認した。

第5地点の第2号溝と第3号溝は、東西方向の溝である。両溝は、出土遺物が無いが、第24号住居跡（7世紀第Ⅳ四半期）、第30号住居跡（7世紀第Ⅲ四半期）、第31号住居跡（7世紀第Ⅰ四半期）、第25号住居跡（9世紀第Ⅰ四半期）よりも新しく、第22号住居跡（9世紀第Ⅱ四半期）よりも古い。ただし第2号溝は、掘り直されたため、本来、第25号住居跡よりも古い。

つまり第2・3号溝は、溝の間に第4・5号溝などの小溝が直行すること、溝間は、幅4ｍであることなど、第19地点の道路状遺構と共通することから、7世紀末から8世紀末の道路と考えたい。



第316図　第Ⅱ期の竪穴住居跡の分布

また、第2地点では、第6号溝がこれと並行した溝である。第6号溝は、第1号掘立柱建物跡よりも古い。第1号掘立柱建物跡は、柱穴内から8世紀後半から9世紀前半の遺物を含む二面八間の大形建物である。身舎の南桁行三間分は、床束穴があり、床張りとなっていた。これだけの大形建物で梁間が二間の建物は、9世紀以降の可能性が高い。

第1号掘立柱建物跡と第6号溝との重複関係は不明だが、道路跡を第6号溝と直行する小規模な溝が構成していたとすると、第2地点、第19地点に連続する可能性が高い。もとより第19地点でも道路跡は、緩く湾曲しており、これまでの調査区を直線的に横断しない可能性も残る。

さらに道路跡が、第5地点の北を掠め西に向かうと第1地点となる。第1地点には、共通の溝はなく第1地点の手前で北に曲がるか、方向を変更したと考えたい。同一方向の溝は、きわめて浅く細い第10号溝が、中央やや北側に存在する。しかしこの溝に連続する可能性はきわめて低い。

まとめると、この道路は、西、あるいは北から北島遺跡に入り、遺跡内を横断し条里型地割の大畦畔上を南下して星川を渡る。そのまま延長すると諏訪木遺跡の西を掠め熊谷市久下に到達する。久下は、大里郡家の遺称地とされている。

逆に北、あるいは西に向かうと、熊谷市小曽根・奈良などの自然堤防上を横断し、別府の幡羅郡家へ向かう。こう考えると、この道路跡は、幅6m前後であること、使用期間は7世紀末～8世紀末であること、大里郡家と幡羅郡家を結ぶ可能性があることなどから、「郡傳」にかかわる道路跡と考えたい（佐々木1984）。

ところで武蔵国は、宝亀2（772）年に東山道から東海道への所管替えが行われ、駅の置廃が進められた。東山道新田駅から「五箇駅」を経て武蔵国府へ至る路線（いわゆる「武蔵路」）が、東海道を通る路線に変更となった。「五箇駅」とは、五個の駅とも地名ともされるが、新田駅から五駅を経て武蔵国府に至ると解釈し、武蔵国府に最終の駅家を併設させる考えが有力である（木本1992・酒井1993）。

詳しい説明は省略するが、これまでに所沢市東の上遺跡（根本2002a）や川越市若宮・八幡前遺跡（田中2000）が、駅家を含む有力な遺跡とされてきた。また二条大路木簡に「策箪郡宅□駅」とあり、策箪郡を埼玉郡とすると、埼玉郡内に宅□駅が存在することとなる（館野1991）。仮に利根川の渡河点付近に駅家を考えると、若宮・八幡前遺跡との間に宅□駅は、存在することとなる。

また、武蔵国府から東の上遺跡や若宮・八幡前遺跡は、一直線に北に向かうことが想定されており、いくつかの地点で幅12mの道路跡も確認されている。この駅路をさらに北に延長すると、坂戸市勝呂廃寺や東松山市古凍付近を通過し、熊谷市久下や行田市小敷田遺跡・池上遺跡付近を通過することとなる。池上遺跡の西には、諏訪木遺跡や北島遺跡が広がる。

第19地点で確認した道路跡が、幅6mであることから郡傳の道とすると、東山道武蔵路、あるいは宅□駅と合流していた可能性もある。さらに星川に川津を想定することも可能であろう。星川を下ると、埼玉古墳群の北の「小崎沼」、さらに下れば、元荒川と合流し下総国府へと向かう。ちなみに宅□駅を「ヤケ□」駅と読むと、行田市池守・池上などの「イケ」と発音が近い。

集落と郡（評）の編成

ところで、第Ⅱ期の始まりは、国造の「クニ」から「評」に編成される段階である。土地や戸籍によって地域の枠組みが、編成されたばかりではなく、実態の集落までもが、再編成されたのである。

ところで、評制の成立期に北島遺跡は、どこの評に編成されたのであろうか。想定できるのは、幡羅郡・埼玉郡・大里郡の前身となった評（ここでは仮に幡羅評・大里評・埼玉評と表記する）である。時代は下るが、10世紀に成立した『倭名類聚抄』によると、幡羅郡は、「上秦・下秦・広沢・荏原・幡羅

・那珂・霜見」の七郷からなる中郡、埼玉郡は、「大田・笠原・萱原・埼玉・余部」の五郷からなる下郡、大里郡は、「郡家・楊井・市田・余部」の四郷からなる下郡であった。『大日本地名辞書』や『大日本地理史料』などをはじめとするこれまでの研究では、熊谷市上川上の北島遺跡付近は、比定された郷の空白帯にあたり、最も近い郷名は、幡羅郡の上秦・下秦郷である。

明治10年の大里郡（幡羅郡）と埼玉郡の郡境は、熊谷市と行田市の市境にあたる。「迅速図」で確認すると市境は、ジグザグの南北線である（第2図）。これは市境が、条里型地割の坪割と一致するための現象である。

ところで、幡羅郡の西部と埼玉郡の東部は、原島礼二氏が指摘するように現存する条里地割が連続すること、共通した7世紀後半の土器を消費すること、古墳の横穴式石室には、共通した石材が用いられること等から地域を分割する自然的要因は無く、両地域は不可分の関係にあった。そこで建郡にあたっては、両郡を南北に分割する東山道武蔵路が郡（評）の境となったことは充分考えられる。

元来、立評は、『常陸国風土記』にみるように7世紀前半以来の地域を前提とし、複数の在地の有力者が、総領に立評を申請する形で行われた。北島遺跡を含む幡羅郡は、榛沢郡に近い幡羅郡西部（広沢・住原・幡羅・霜見）と、埼玉郡や大里郡に近い幡羅郡東部（上秦・下秦・那珂）からなり、立評にあたって整理されたと考えたい。

おそらく7世紀第Ⅲ四半期以降、足立郡や比企郡・入間郡・横見郡を抱えた広大な埼玉領域は、中郡以下のいくつかの評に編成されたのであろう。なお、奈良県明日香村日高山瓦窯跡から出土した文字瓦には、「埼玉評　大里評」という箆書があり、同瓦窯跡が、藤原京の朱雀大路で破壊されていること（木下2002）から、両評は、藤原京以前に存在していたことを確認できる。

北島遺跡の遺構の特徴

ところで、第Ⅱ期になると古墳の築造が停止し、国・評（郡）・郷などの単位に地域が編成され、地域を行政的に管理する官衙が新たに造営された。いわゆる評家の成立である。評家は、古代国家が、地方行政の運営の要とした施設であり、様々な末端支配システムを評内に形成していた。

評家にどのような建物群が存在したか、あるいはどの建物をもって評家とするかは、議論の分かれるところだが、評家を継承した郡家が、郡庁・正倉・館・厨・厩などで構成されていたことから同等と考えられている。

とくに「コ」の字形配置の政庁や正倉の成立が、近年では7世紀第Ⅳ四半期まで遡ることが明らかである。また郡家の建物に先行して豪族の居宅が営まれる場合もしばしばあった。

郡庁や正倉、館・厨・厩などは、『上野国交替実録帳』に明らかなように建物が官舎として登録され、国司交替にあたっては、毀損や無実の有無が報告される仕組みになっていた。しかし官舎として登録された建物以外にも古代国家の地方支配、あるいは地方豪族の地域支配にあたって、郡内には様々な施設が設けられた。

その中には、政庁の至近に営まれた曹司と呼ばれる雑舎群や郡雑人の居宅、本貫を離れた郡司の館（宅）などの建物の他に郡内各地に郡家の出先的施設が設けられた。

また、評家（郡家）・国府と都城を結ぶ交通路は、評家の成立と前後して急速に整備された。いわゆる駅路・郡傳の成立である。さらに陸上交通路と河川の交差する地点には、川津が設置され、地域の流通に大きな役割を果たした。しかし、これら古代交通にかかわる諸施設が、どのような遺構や遺跡と一致するかは、必ずしも明らかとはなっていない。

ところで、第Ⅱ期の北島遺跡第19地点では、第3号道路跡や中央河川跡が、建物の棟行方向の基準や遺跡内の境界として機能していた。とくに7世紀後半には、第163号溝や第199号溝が、中央河川跡と南

河川跡を繋ぐように走り、この区画溝の北側に竪穴住居跡や掘立柱建物跡が展開した。

ただし大形の竪穴住居跡や大形の掘立柱建物跡は含まれず、倉庫跡も小規模な二間総柱建物であった。側柱建物には、四間屋もみられるが、概して小規模の建物群である。しかし土器集中出土地点には、遠隔地の静岡県湖西窯跡群や群馬県秋間窯跡群の須恵器などが、在地の土師器とともに集積された。

8世紀前半になると、中央河川跡と南河川跡を繋ぐ区画溝は消滅し、建物群の棟方向の基準は、中央河川跡、第3号道路跡に編成された。竪穴住居跡と掘立柱建物跡群が、規則的な配置となる点は、重視する必要がある。複数の建物が、東の柱通りを第183号溝に接して建てられた。

以上から第19地点では、まず旧久保島川に臨む半島状の地点を区画溝で分断し、ここに集落を形成した。その後、第3号道路の敷設によって、道路にかかわる建物群が登場した。この集落をどのように評価するか。

郡家を構成する建物と考えた場合、建物群の構成から政庁や正倉は除外できるとして、館や厨家・厩家はどうであろう。館は、『上野国交替実録帳』によると一から四館があり、それぞれ主屋・副屋・雑舎・厨家などから構成された宿泊施設である。また館は、国司の部内巡行や本貫（主たる経営拠点）から離れる郡司の居留に用いられたとすると、居住・給食機能に長けた建物や施設といえよう。

つまり、給食のための井戸や馬を供給する厩舎などが備わっている必要がある。第19地点には、8世紀前半に遡る井戸は無く、食器や煮沸具を保管した竪穴住居跡、大甕をすえた建物などもみられないことから館や厨家などは、除外できよう。

ところで幡羅郡家として最も蓋然性が高いのは、深谷市の幡羅遺跡である。幡羅遺跡では、7世紀末から8世紀にかけての大形倉庫群が確認され、隣接地には、6世紀水源祭祀の湯殿神社祭祀遺跡が続き、初期寺院の西別府廃寺が建立されている。このことから北島遺跡は、幡羅郡内に営まれた郡家を補完する施設を視野に入れるべきである。

郡家の補完的施設とは、①郡内に別置された正倉（正倉別院）、②郡内の館、③駅路に取り付く駅家、④郷の拠点的施設である郷家などである。大形倉庫群がないこと、給食施設が不完全なことから①・②の可能性は低く、いわゆる駅路（東山道武蔵路）との関係は明らかにできないことから③とも考え難く、儀式空間（政庁）にあたる施設がないこととことから④も低い。

むしろ恣意的かもしれないが、第19地点では、やや大形の三間屋に二間倉が付帯した3～4グループが、第4群として一つのまとまりを構成していた。居住空間として三間屋と動産所有の象徴である二間倉、居住・調理などの機能を兼ね備えた竪穴住居、そして構成員の住宅である小形竪穴住居群が、一定の規範をもって構成されていたことから、北島遺跡には、より地域に根ざした「宅」や地域開発の拠点である「庄」が妥当かもしれない。

（4）成長する集落と地域支配

集落の変遷

北島遺跡では、竪穴住居跡の構築数が、8世紀第Ⅲ四半期に一端落ち込むが、8世紀第Ⅳ四半期になると再び上昇を始める。とくに第3群の成長は著しく、9世紀第Ⅰ・Ⅱ四半期にピークを向える。

第Ⅲ期は、第Ⅱ期の延長にあった前半と、象徴的な遺構群が作られた後半に分けて考えられる。本来ならば、第Ⅲ期を二分し、第19地点に大形方形区画が登場する9世紀以降と、それ以前を区別すべきだが、ここでは竪穴住居跡数の増減から一括して述べることとする。

大形井戸と建物群

8世紀後半になると第19地点では、中央河川跡に臨んだ建物群と、第183号溝に囲われた建物跡群が、前代から継続して営まれた。まず中央河川跡に臨む建物群は、土器集中出土地点を継承し、西集落域の

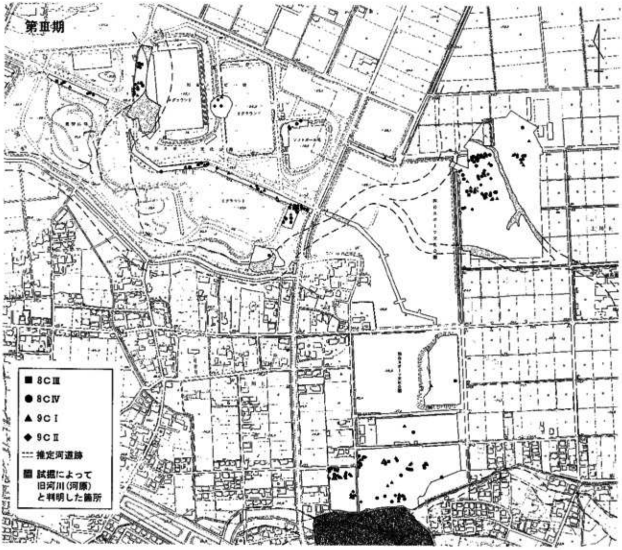
中央に大形井戸（第42号井戸跡）を構築した。

この井戸は、丸太の半截材を井籠組みした巨大な井戸でこの建物群の核となる構造物である。その井戸から習書木簡が出土し、北島遺跡第19地点を象徴する事実となった。この木簡は、一次的に書かれた文字の一部を削り残し、これを手本として習書を行った木簡である。書かれた文字は大きさも不揃い、筆の運びも稚拙である。とくに「有」などは、「十」と「月」を分解して書く有様である。

この木簡に習書を行った人物は、文字を書き慣れた人物ではなく、文字を習ったばかりの子供を連想させる。８世紀後半、地方の国府や郡家以外で、文字を習書しなければならなかった人物、しかも子供とすれば、焦点は、郡司層の子弟に絞ることができる。

また、第85号井戸跡（９世紀前半）の水溜部の部材として用いられた「案」は、脚部こそ欠損するが、文書事務に欠かせない文机である。おそらく蓮子窓状の長脚が付くことが予測でき、正倉院に残る「二十六机」のような案と考えたい。このような案を常備した施設、あるいは使用した人物も郡家や寺院にかかわる人々に限定できる。

さらに北島遺跡からは、これまでの調査を含め17点の陶硯が出土しており、この数値は、岡部町熊野



第317図　第Ⅲ期の竪穴住居跡の分布

第318図　**北島遺跡出土の陶硯**

遺跡や坂戸市若葉台遺跡に次いで破格の数値である。第318図は、北島遺跡から出土した陶硯である。8世紀の円面硯から9世紀の風字硯まで確認できる。おそらくこの円面硯を用いた人物も木簡・案とともに、文書実務を頻繁に行った郡司や郡雑任、出挙経営にかかわった庄長、交通関連の実務を担った駅長などを考えることができる。

そこで人物像をさらに明確にするため、第19地点の土器集中出土地点から出土した大量の墨書土器に目を向けたい。

北島遺跡の墨書土器

北島遺跡からは、622点に及ぶ多量の墨書土器が出土した。なかでも人名や家号・職掌、あるいは地名などの字句が目立つ。とくに土器集中出土地点から出土した墨書土器が豊富である。第19地点の西集落域の墨書土器と共通する字句も少なくない。

なかでも家号を直接示す「○○家」には、「後家」・「林家」第10地点の「南家」があり、集落内で後・林・南などの名で呼び分けられた単位集団が存在していた。

また、人名と考えたい「丸人」・「中人」・「第成」・「浄成」・「安成」・「土万」・「国万」・「佃万」・「家刀自」・「人君」「少君」「荒男」などの二字の墨書土器もみられた。墨書土器の分析で明らかにしたようにこれらの人名墨書土器は、8世紀後半から9世紀初頭に集中し、同時代に併行して存在した人物群とも考えられる。

とくに名前に一字を共有する「丸人」と「中人」（人グループ）、「第成」と「浄成」「安成」（成グループ）、「土万」と「国万」・「佃万」（万グループ）、「人君」と「少君」・「中人君」（君グループ）などは、親族関係を窺わせる字句である。字句の単純な関連だが、第319図のような連鎖を指摘できる。なかでも人グループと君グループは、「中人君」によって結ばれる。

また、北島遺跡の墨書土器は、同一字句でも長期にわたり使用されたり、異なる運筆のグループが存

第319図　**人名墨書土器のグループ**

在した。例え人名でも自ら書いた場合と、別人が書いた可能性も指摘できた。人名の人物が実在したか否かは別にして、彼らは、土器集中出土地点で行われた祭祀にかかわった人物と評価すべきである。

さらに土器集中出土地点からは、「横見郡」、「荏」（幡羅郡荏原郷）、「西秦」（幡羅郡上秦郷）、「榛」（榛沢郡）、「鞘田」（大里郡佐谷田）、「楊井」（大里郡楊井郷）など北島遺跡の周辺に散見する地名の墨書土器も出土した。これらの地名の書かれた墨書土器は、北島遺跡が当該郡郷の所属であったことや、当該郡郷所属の食器が移動したことを示してはいない。

土器集中出土地点から出土したことを考えると、その祭祀に当たって北島遺跡周辺の郡郷から物資が調達されたか、人物が参集した可能性を考えておきたい。土器集中出土地点が、7世紀前半から8世紀後半の墨書土器まで継続したことは、同一氏族による祭祀の連続を意味する。

ところで土器集中出土地点の土器は、集落の土器と共通し、入手経路も同一であったと考えたい。7世紀は、利根川水系の原土を用いた土師器を用い、8世紀後半には、南比企窯群の製品を消費し、土器の獲得手段や交流の相手に変化があった。この消費動向は、北島遺跡やまして土器集中出土地点に限った傾向ではない。武蔵国北部一般の現象であった。

土器集中出土地点の祭祀のテーマは、明確にできないが、桃の種や貝類を用いた祭祀であること、木片が残るが、斎串や人形などが全く伴出しなかったこと、水源や「淀み」ではないことなど、木製祭祀具を出土した熊谷市諏訪木遺跡とは、異なっていた。

また集落が大形井戸や大形建物で構成されていることから、郡家の出先に営まれた厨家や駅家に付帯した厨家なども考慮すべきである。しかし郡家や駅家に関連する文字資料が1点も出土しないこと、調理や饗宴にかかわる大形の竪穴住居跡が存在しないことなど、厨家機能の一部を補完しても、北島遺跡の第一義的な役割ではないと考えたい。

第19地点の西集落域は、7世紀以来成長し続け、大形井戸を中心に建物群を編成し、文字を習う郡司層の子弟などを抱え、同一地点に祭祀を連続し続けた。以上から北島遺跡は、幡羅郡内に営まれた郡司層の居宅、または開発拠点としての「宅」と考えたい。

また第3群の集落が、急成長するのもこの段階である。急成長を促したのは、旧久保島川と星川を結ぶ大形水路を開鑿したことである。この水路によって北島遺跡の東側には、広大な耕地が生まれた。第3群の集落は、この耕地を背景に竪穴住居跡を三間屋や二間倉が、取り囲んで営まれた複数の単位集団を形成した集落である。この集団は、耕地の開発と星川の河川交通にかかわり編成された「新宅（家）」だったのである。

「新宅」ならば、第10地点から出土した「南家」は、象徴的な墨書土器といる。つまり「南家」は、本貫(「本家」)に対して「南」の家である。竪穴住居跡群の第1・2・4群を第3群を生み出した母集団（本家）とする南家と考えたい。

「南家」を生み出した母集団は、おそらく「林家」や「後家」などの家号で呼ばれた集団（グループ）であろう。また最も大量で長期に亘る「綱」グループをどのように解釈するか問題も残るが、ここではひとまず北島遺跡の第4群（第19地点）を象徴する集団と考えておきたい。

大形区画施設の登場

第19地点の西集落では、9世紀第Ⅱ四半期になると、8世紀後半にみられた建物群を全て撤去し、一辺90mの方形区画溝（築地）で囲い、内部に五間四面屋（第36号掘立柱建物跡）が建てられた。この建物の東には、築地が途切れ、四脚門が建てられた。なお、第36号掘立柱建物跡は、第42号井戸を埋め立てて構築しているため、柱のあたりには、礎盤として木材が入れられていた。

竪穴住居跡は、東門と中央河川跡を結んだライン以南には無く、区画の東や北、東側台地の古墳群の

北に集中した。竪穴住居跡の棟方向が、南北方向に変更することなど、遺跡全体に高い規格性（編成原理）が働いていた。

さて、この区画施設は、どのような役割を果たしたのであろうか。地方官衙か、寺院か、居宅か、にわかに判断できないが、以下の理由からここでは、豪族の居宅と考えたい。

まず、瓦をはじめ仏器、灯明皿などの遺物が、出土しなかったこと、寺名や仏にかかわる墨書土器が出土しなかったこと、第36号掘立柱建物跡が、西面の建物であることなどから寺院は、否定的な要素が強い。

次に官衙であるが、9世紀に入ると郡家の政庁は、「コ」の字形配置が崩れ、不明瞭となってくるため、郡家政庁とは言い難い。郡家としては、同時期の掘立柱建物跡が少ないことも不自然である。また前述のように幡羅郡家は、深谷市幡羅遺跡に継続していたと考えたい。

駅家の駅館もまた院を構成するが、武蔵国が、宝亀二年（772）に東山道から東海道へ所管替えとなったため、東山道新田駅家から武蔵国府へ向かう「武蔵路」は、廃止された。宝亀二年以降の駅家はこの地域に存在しないため駅館とは考えがたい。

残るは、豪族の居宅である。9世紀以降、関東地方では、このような方形区画の遺跡がいくつか確認されている。詳細は別稿に譲るが、埼玉県妻沼町飯塚北遺跡、さいたま市C108遺跡、東京都板橋区城山遺跡などである。これらの遺跡には、方形の大形区画溝や柵列が伴う場合があり、しばしば四脚門や入り口が付帯する。

また多量の施釉陶器が出土する場合がしばしばあり、私富の蓄積が積極的に行われていたことが分かる。とくに緑釉陶器の集中的な消費は、群を抜く。また硯や仏具が、出土する場合もあり、文書事務や仏教をはじめ宗教的な行為も行われていた。しかし、瓦の出土は至って少ない。ただし富の蓄積の象徴である倉は、この方形区画遺構に伴う場合は少ない。別置されていたと考えておきたい。

さらに9世紀前半には、第2地点に大形の二面八間屋が登場したことや、北島遺跡の北に隣接する熊谷市女塚遺跡で、区画施設と「大倉寺」と書かれた墨書土器が出土したことは、第Ⅲ期を象徴する出来事といえよう。北島遺跡では、これらの大形建物群が、それぞれの役割を担い、職掌ごとに大規模な区画(「院」)を構成し、「院」の集合体が、一つの経営体として機能していたと考えたい。

しかし急速に展開した北島遺跡は、9世紀第Ⅲ四半期を境に大きく転換する。

（5）集落の低迷と奢侈的な消費生活

集落の変遷

北島遺跡では、竪穴住居跡数が、9世紀第Ⅱ四半期に頂点となった後、9世紀第Ⅲ四半期には激減する。その後第4群を除き第Ⅳ・Ⅴ期を通じて横這いとなり、集落が登場した6世紀後半に近い数値となる。ただ第4群のみが、再び二つのピークをもって11世紀前半まで集落を営み続けた。

区画施設と奢侈的な消費生活

第Ⅳ・Ⅴ期の第4群を象徴するのは、第Ⅲ期後半に出現した大形区画施設である。9世紀後半には、各辺の延長上に三間三面屋を築く。区画の東南が、とくに意識された遺構の配置である。第Ⅳ期に入ると、土器集中出土地点への土器の集積が停止し、祭祀の場は、中央河川跡をやや南に下った西支谷の斜面に移動し、集石遺構が形成された。

集石と集石の間には、緑釉陶器の稜埦が置かれた。また集石遺構は、区画南辺の延長上に形成されたことを考えると、区画の形成と集石遺構の形成が併行して進んだことを示している。なお、この集石からは、馬骨や馬歯が出土し、集石は、犠牲獣を用いた祭祀といえる。

ところで区画施設は、第Ⅴ期に30m南に移動するが、区画の基本的な構成は継続したようである。また、第3号道路跡は、東山道武蔵路の路線変更後

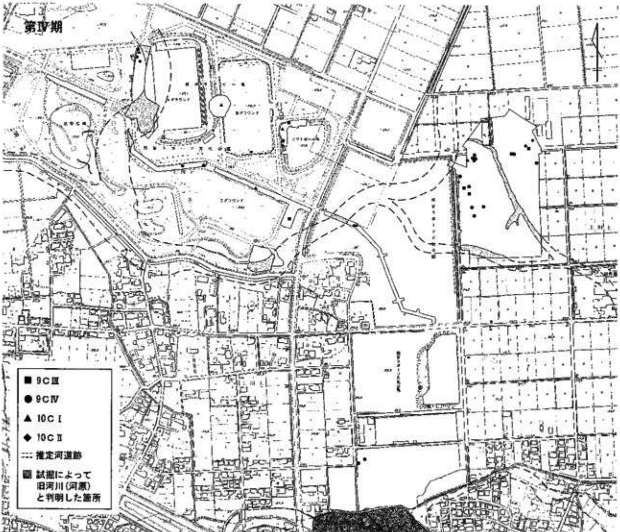
も継続したようである。しかし第Ⅲ期以降、調査区の西への展開は明らかにできないが、道路跡が、区画施設の編成にあたって重要な役割を担っていたことは明らかである。

前述したが、緑釉陶器の出土が、この区画の内部に留まっていたことは、大形建物の住人が緑釉陶器を消費していたことを示す。また、灰釉陶器もこの区画を大きく逸脱しなかった。北島遺跡では、第19地点のこの区画が、施釉陶器の主体的な消費の場であった。

一方、竪穴住居跡では、施釉陶器、とくに緑釉陶器の消費がほとんどみられない。唯一、第3群では、第Ｖ期に東濃産の緑釉陶器の埦や段皿などが出土し、小規模ながら集落が存続していた。

また、第19地点の道路の側溝から「篁」と書かれた緑釉陶器の出土も、注目すべき事実である。中世以降の器では、箆書によって銘を入れることはしばしばみられるが、古代のしかも緑釉陶器ではきわめて稀である。ことに「篁」を小野篁などの人名の一部とすると、発注元か作者の氏名の一部であろう。口縁部に書かれていたことを考慮して、ここでは発注元と考えておきたい。

以上が、発掘調査に基づく情報から復元した北島遺跡の古代集落である。6世紀後半、古墳群の西に



第320図　第Ⅳ期の竪穴住居跡の分布

進出した集落が、7世紀第Ⅲ四半期以降、古代国家の交通路の整備や地域編成の進展によって、急速に整備され、9世紀には、大形建物群で構成した複数の院で編成した集落に展開する。

おそらく北島遺跡には、衰退期にあった郡家を補完する機能を備え、国衙在庁や国司の直接的経営にかかわる「庄」などの経営体、あるいは王臣家とかかわる留住国司などの「館」として発展したと考えたい。一辺90mにも及ぶ築地を巡らした広大な区画は、防御的施設でもある。9世紀前半は、勅旨田と親王任国制に基づいた坂東の開発施策によって派遣された国司が、在地の人々を再編成し、荒廃田の再開発に臨んだ時期である。彼らは、留住化することで自らの活路を開いたわけであるが、当然、在地との摩擦も発生した。そうした歴史的背景が、一辺90mにもおよぶ大形の区画施設を誕生させたのであろう。

少なくとも北島遺跡は、幡羅郡内の小豪族を軸に展開した遺跡である。いわゆる「中条条里」を潤す水路を縦横に開鑿した班田集落であり、また古代の交通路や河川を巧みに利用し、流通によって私富を蓄え成長した集落であったのである。

第321図　第Ⅴ期の竪穴住居跡の分布

2．井戸構造の変遷と構築について

熊谷市北島遺跡では、古代から中近世まで166基の井戸跡を検出した。このうち板組・礫組・竹組・容器組等の構造をもつ井戸は、33基（水溜に曲物を設置する素掘り井戸11基を含む）で、全体の20％にすぎない。

熊谷市北島遺跡の井戸構造は、すでに鈴木孝之氏により分類がなされている（鈴木　1989）。鈴木氏は、井戸構造の用語及び構造分類の視点を整理し、北島遺跡の27基の井戸について分類を行った（註１）。分類は、素掘り・木組・石組・その他、という井戸側の四分類を基礎に、規模・断面形・水溜の有無を加えた四分類十三種である。そして、分類を行うと共に井戸と周囲の遺構との関係を検証し、各井戸の時期を求めた。また、井戸の底面レベルの差は、時期差ではないことを明らかにした。

鈴木氏は、北島遺跡の分類を踏まえ、埼玉県内の構造分類を行った（鈴木　1990）。分類は、木組・石組を細分したものであり、四分類四十九種である。また、井戸の廃棄と埋井についても言及し、自然的要因・人為的要因・両要因の３種があるとした。

本稿では鈴木氏の論を踏まえ、近年の事例を含めて埼玉県内の井戸側構造・水溜の変遷をみていきたい。なお井戸構造の名称については、北陸中世考古学研究会（北陸中世考古学研究会　2001）の分類した呼称を用いた。

また、井戸の径・構造・枠材など、井戸を作る際に重要な要素についても考察を行った。まず、井戸跡の開口部・水溜部の径に注目した。水溜部の径は、水をどれだけ溜めるかを決定する井戸の重要な要素である。開口部の径は、自然堤防・台地・高地等の立地によって差があるのではないかという前提のもとに、検討を行った（註２）。さらに径と構造の関係、井戸の構造と立地の関係も検証した。

ところで北島遺跡では、井戸側に転用材が多く使用されていた。そこで転用材を使用した井戸、使用しない井戸を比較した。

（1）埼玉県内の井戸構造の変遷

井戸側の変遷

埼玉県内で検出した井戸構造は、板組・竹組・容器組・石組・素掘りの井戸である。第322図では、構造をもつ井戸を検出した遺跡を示している。いずれも荒川低地・妻沼低地および周辺の台地に確認できた（註３）。

各構造を列挙すると、板組には、縦板組横桟留・縦板組無支持・横板井籠組・横板組隅柱留がある。竹組には、竹を杭状に刺し正方形の井戸側を作る構造や「しがらみ」の構造がある。容器組には、桶積・曲物積・丸太刳り貫きがある。素掘りの井戸には井戸側はないが、水溜に板材・曲物・桶を設置するもの・石を敷くものがある。

以下、構造別の調査事例を列挙する。

①縦板組無支持または縦板組横桟留と考えられる井戸には、坂戸市稲荷前遺跡（富田1991・1994）の７世紀末～８世紀初頭・８世紀初頭・８世紀末・９世紀後半の井戸跡、熊谷市北島遺跡（浅野1988、中村1989、大谷1990、鈴木1997、田中2002）の８世紀・中世の井戸跡がある。

②縦板組横桟留には、坂戸市金井遺跡（昼間1989・木戸1999）の14世紀～15世紀の井戸跡がある。

③縦板組無支持には、鶴ヶ島市北権現遺跡（斎藤・関口2002）の中近世の井戸跡がある。

④横板井籠組には、行田市築道下遺跡（吉田1996、大屋・栗岡1997、劔持1999、山本1999）の８世紀の井戸跡、北島遺跡の８世紀前半・平安時代の井戸跡、岡部町大寄遺跡（富山2002、福田2001）の10世紀前半の井戸跡がある。

⑤横板組隅柱留には、坂戸市稲荷前遺跡の８世紀末の井戸跡がある。

⑥隅柱を持たない横板組には、坂戸市稲荷前遺跡の９世紀後半の井戸跡がある。

⑦竹を杭状に刺し正方形の井戸側を作る構造は、北島遺跡の中世の井戸跡、稲荷前遺跡の14～15世紀

・中世の井戸跡、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡（西口1986）の近世の井戸跡がある。深谷市原遺跡（磯崎1989）では上部が竹・下部が杉という近世以降の井戸跡がある。

⑧しがらみ構造には、北島遺跡の中世・中近世の井戸跡がある。

⑨曲物積には、北島遺跡の中世の井戸跡がある。

⑩桶積には、鍛冶谷・新田口遺跡の近世の井戸跡がある。

⑪丸太刳り貫きには、坂戸市足洗遺跡（馬橋1993）の7世紀末の井戸跡、坂戸市附島遺跡（加藤1988）の平安の井戸跡がある。

⑫石組には、北島遺跡の中世・中近世の井戸跡、毛呂山町堂山下遺跡（宮瀧1990）の15世紀後半及び中近世、深谷市ウツギ内遺跡（劔持1992）の14世紀後半～15世紀前半、熊谷市前中西遺跡（吉野2003）の中世、熊谷市出口下遺跡（松田2001）の中世後半の井戸跡がある。

⑬素掘りの井戸跡は、古墳時代から近世までみられる。

以上、構造ごとに事例を列記したが、時期を追って並べると第323図のようになる。

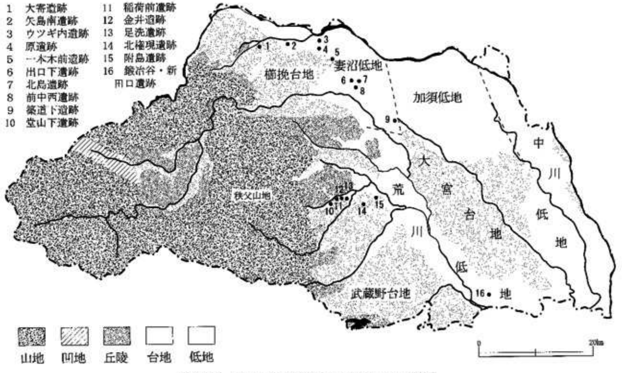
県内事例で古い井戸の構造は、古墳時代の素掘りの井戸跡である。同じ時期に木組の井戸はみられない。
古代になると木組の井戸側がみられるようになる。すでに7世紀末に縦板組が出現し、9世紀中頃まで見られる。その後は再び中世に採用される。

7世紀末に丸太刳り貫きの井戸が出現し、平安時代にもみられる。

8世紀に入ると横板井籠組が出現し、古代以降は途絶える。

8世紀末に横板組隅柱留がみられ、9世紀後半にもみられる。

中世では、木組に加えて新しい構造が出現する。井戸側に竹を使用する井戸、礫を使用する井戸、曲物を使用した容器組の井戸である。鈴木氏によると、礫を使用する井戸は、県内では15世紀に出現し、16



第322図　**埼玉県内の主な井戸枠の出土した遺跡**

世紀に普及したとされる（鈴木　1992)。中世は、構造が最も多様な時期である。

近世で構造の分かる井戸について、報告事例は少ないが、桶を井戸側に使用する桶組が使用されるようになる。

全国的にみると、木組井戸はすでに弥生時代中期からみられ、古墳時代には広く用いられ始めるが、県内ではみられず、７世紀以降に使用される。

また、中世に多くみられる結桶井戸は、県内では近世にのみ使用されている。

そして中近世では、井戸側に竹を使用する井戸が多いことが特徴的である。県内の中近世の井戸254基中、何らかの構造をもつ井戸は20基、そのうち竹組が６基あり、構造をもつ井戸の30％を占める。一方、竹を使用する井戸は、県外ではほとんどみられず、地域的特徴と言えるであろう。

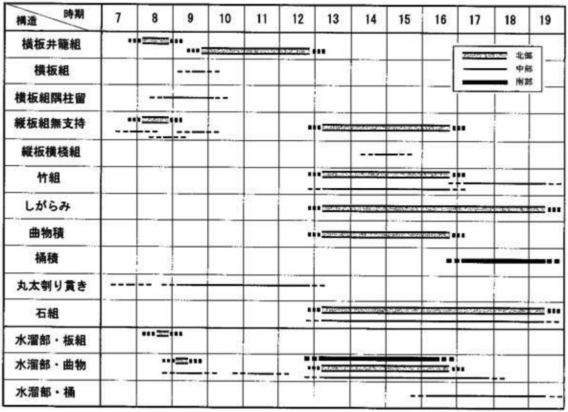
水溜の変遷

水溜部では、使用する材の変化を確認できた。県内での、板や曲物を水溜に設置する事例は、素掘りの井戸である。木組や石組に設置する例はほとんどない。

水溜に板材を組む構造が、北島遺跡の、８世紀前半の横板井籠組の井戸でみられた。一基は、曲物を囲むように長さ708㎜、幅427㎜の板材を縦長に差し込み、一辺427㎜の正方形に組む。一基は、長さ770㎜、幅474㎜の板材を一辺770㎜の正方形に組み水溜とする。水溜部に板材の箱組を設置する井戸はこの二例のみで、９世紀以降はみられない。

板組みにやや遅れて水溜に使用されるのは、曲物である。水溜に曲物を使用する最古例は、坂戸市稲荷前遺跡の井戸跡（９世紀）・熊谷市北島遺跡の井戸跡（９世紀前半）である。武蔵国における円形曲物の普及は、７世紀以降（飯塚　1994）とされており、それを遡らない。曲物の水溜への使用は、近世まで続く。

曲物に続いて使用されるのは、桶である。桶を用



第323図　埼玉県内の井戸構造の変遷模式図

いた事例は、鍛冶谷・新田口遺跡で確認できる。時期は不明だが、県外の使用例から15世紀後半以降と考えたい。

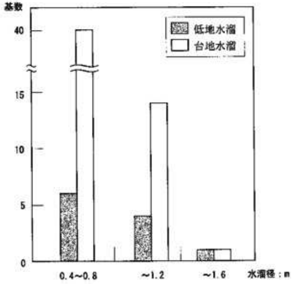
水溜部底面に礫を敷く井戸は、県内で石組井戸の出現した15世紀後半よりも後の事である（註4）。

（2）井戸の規模と立地の関係

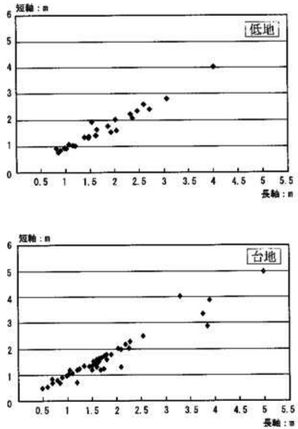
水溜部の規模を決定する要素は、湧水量と生活用水・工業用水・灌漑用水・祭祀の象徴などの使用目的（使用量）による。

湧水量の少ない場所では、水が溜まり易いように規模は小さく、湧水量の多い場所では規模も大きくなる。また、工業用水・灌漑用水など、水を多量に必要とする場所では、規模の大きな井戸で水を溜める必要があった。

水脈のある場所であれば水が得られるとはいえ、立地によって水を得易い、得にくいという差があると考えた。低地、特に自然堤防・扇状地など水の豊かなところでは、可能であれば大きな井戸を掘っておき、台地・丘陵など、水と縁の少ないところでは、水を溜める部分の面積が必然的に狭くなったと仮定し、検証を行った。



第324図　**立地と水溜の規模**



第325図　**立地と開口部の規模**

なお、ここでは、古代（8～12世紀）の井戸に限定し、開口部と水溜部の径について立地ごとの比較を行った。ただし丘陵の井戸は、数値のみ掲載した。

まずは、水溜部の径と立地条件を検証する。水溜部のない井戸は、井戸最下部の径で補った。

水溜部径は、0.4～1.53mである。0.4m～0.8mを小形、0.8～1.2mを中形、1.2～1.6mまでを大形とし、第324図に示した。

低地では、径0.8m以下（小形）のものは、22基中12基（54.5%）であった。台地では、径0.8m以下（小形）のものは55基中40基（72.7%）であった。

水溜部の径は、台地・低地とも最小は径0.36m、最大は径1.53mである。最大径・最小径に立地の差はない。ちなみに丘陵の水溜部径では0.5mと1.66mの二例がある。

台地・低地とも、径が0.8m以下（小形）の井戸が最も多く、1.2m以下（中形）、1.6m以下（大形）と水溜径が大きくなるほど数は減少する傾向にある。

このように水溜部の規模は、低地よりも台地で、小形が多いことが分かった。やはり湧水量の差であろう。

次に、立地ごとの開口部径を第325図に示した。

低地の井戸では、開口部径が、長軸0.84m×短軸0.75m～2.7m×2.39mに収まり、それ以外は3.05m×2.79mと4.0×4.0mである。この二例はいずれも横板井籠組の構造をもつ井戸である。台地の井戸では、開口部径が0.5m～2.28mにほぼ収まる。それ以上の井戸跡は5例ある。素掘りの井戸4基と縦板組の井戸1基である。丘陵上の井戸では開口部径が、1.53mと2.2mであった。

台地の開口部径は、全体的に小さい数値にまとまっている。この傾向は、台地上では径を大きくする必要性がなかったと考えるべきであろうか。

平均的な井戸を仮に基準値とすると、この値を大きく逸脱する井戸は、立地以外の要素が関係したとするべきである。坂戸市附島遺跡の井戸は、崩落のため開口部径が大きくなっている。熊谷市北島遺跡の井戸は、横板井籠組構造の上部を作り変えているため径が大きくなったと考えた。坂戸市稲荷前遺跡、東松山市代正寺遺跡の井戸については、径が大きい理由を判断できなかった。

（3）井戸の構造と立地の関係

古代の井戸で選択された構造は、圧倒的に素掘りが多い（註5）。井戸の構造には、木組、石組、容器組など、50種類近くがある。

選択基準の一つには立地条件がある。

まず、横板井籠組構造は、低地のみで作られる。また、曲物積・桶積も低地のみで作られている。さらに、水溜部に板状の箱組・曲物・桶を使用する井戸は、低地・自然堤防上に確認できる。

一方、縦板横桟組・縦板組無支持は、台地のみに確認できる。

水溜に何らかの材を使用する井戸が、低地のみであるのは興味深い。しかしこれ以外は、特定の立地と結びつかない（註6）。

（4）北島遺跡の転用井戸枠材について

井戸枠の素材は「他の用途で使用されていた部材からの転用品である」（鐘方　2003）と鐘方正樹氏が述べているように、井戸枠材に転用材を使用する例は枚挙にいとまがない。

例えば、奈良県奈良市西隆寺では、扉を切断した材を枠材として使用していた（山崎　1993）。

また、平城宮では、校倉の材が使用されており、枠材の方位・段数が墨書で記された（町田　1982）。

新潟県柿崎町新保遺跡（石川・高橋・会田　2001）では、建物の壁板とされる板材を枠材として使用していた。

石川県加賀市猫橋遺跡（本多　2002）では、船の構造材を使用した弥生時代後期末の井戸もある。

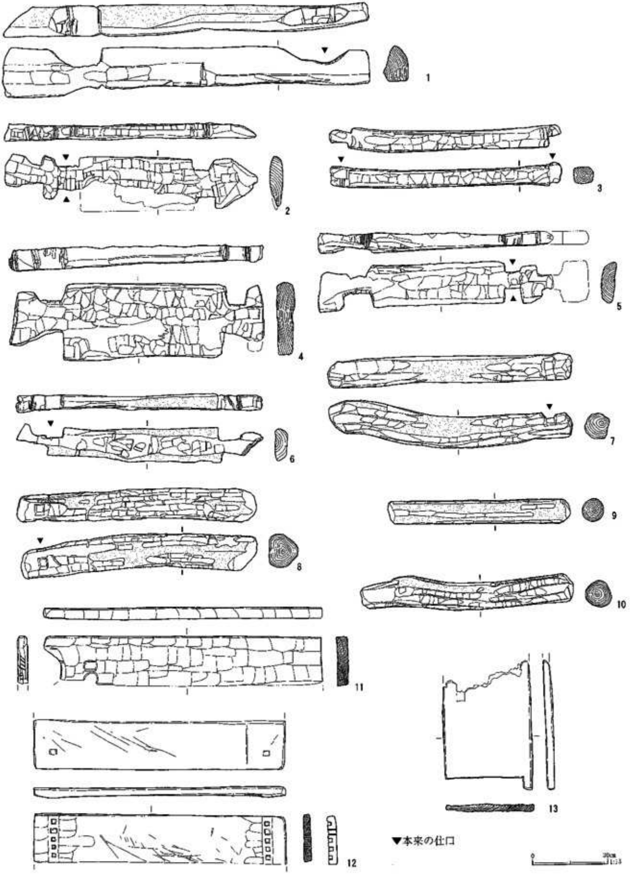
長野県長野市春山B遺跡（長野県立埋蔵文化財センター　1999）では、舟が一艘分井戸側に使用された弥生時代後期の事例がある。

これらは本来、井戸枠以外の目的で加工された材を井戸枠材として転用した例だが、井戸枠材を他の井戸枠材として再利用する例もある。

なお、埼玉県内では、熊谷市北島遺跡以外に転用例を見出せなかった。北島遺跡では、第1地点・第19地点で枠材に転用材を使用した井戸を検出した。建築材、とくに柱・横架材の転用、曲物の転用が多く、一部では扉・建物入り口に設置する蹴放し・案が用いられていた。

第326図は、北島遺跡の井戸側に使用され転用材の一部である。第326図1～6の枠材は、仕口の形状・枘・枘穴から転用材と考えた枠材である。黒矢印は、転用前の仕口である。2・5は、もとの仕口と枠材のための仕口がつくられた材である。6は、元の仕口を拡張している材である。7～13は、水溜部に使用した材である。もとは、横架材・蹴放し・扉・案である。

転用材の使用状況をみると、まず、第1地点の第



第326図　北島遺跡の井戸枠に用いられた転用材

４号井戸跡では、長さ1500㎜の一枚板を縦板として二面に設置し、他二面には割材を積み上げる。板材には50×20㎜の枘穴が穿たれる。建築材と考えた。

そして、第19地点の第42号井戸跡・第85号井戸跡の枠材は、多くが転用材である。

まず第42号井戸跡は、多様な木取りの材を使用し、つくりが荒い。第１～５段は、半截材・板目材が混在し、第６～８段では、芯持ち材を使用し、第９～12段では、半截材・板目材・割材などが混在し、各所に転用材を使用する。また、枠材の長さは1000～1600㎜、内法は600～1000㎜と、規模に大きなばらつきが見られ、全体として堅強な組み方とは言えない。

次に、第85号井戸跡では、上部三段が非常に粗いつくりで、それ以下は丁寧に表面を加工した材である。本文中でも記述したとおり、作り変えの可能性があると考えた。第42号井戸跡とは異なり、ある程度の規格を持つ井戸である。枠材の長さは900～1050㎜、内法は600～680㎜に収まる。

何に使用されていた材かは断定できないが、第１～９段の枠材の多くは、井戸用に作られたとは考えがたいものである。この転用材の中でも、加工の程度から二種類の材に分けられる。全面に加工を施し丁寧に作るものと、粗く作るものである。これは、元々使用していた場所が二箇所以上あることを示している。

逆に、同じ構造でも、転用材を一切使用しない井戸もある。北島遺跡第19地点の第21号井戸跡である。上記二例と同じ横板井籠組の井戸である。枠材は、規模・木取り・加工の荒さ・仕口の形状に共通する点が多く、一度に同じ要領で作られた事が分かる。井戸跡は、枠材の全長が900㎜、内法600㎜程度の小規模な井戸であり、その場で材を作っても、時間・労働力を使わずに済んだと思われる。

転用材を使用した第42号井戸跡・第85号井戸跡は、枠材の内法1000㎜、枠材の全長1100～1600㎜の大規模な井戸である。第21号井戸跡と比較すれば、1000㎜超の板材を約五十本作り出すのは、大変な時間・労働力を要することになる。このことから、材転用の理由の一つとして、労力を最小限に抑えることが考えられる。

また、第42号井戸跡のように、井戸構造に転用材を交えるなどして緻密に作らない理由は、井戸構造が崩壊しやすかったことが考えられる。第85号井戸も枠材上部を作り変えており、井戸側に耐久性があるとは言いがたい。何度も作り変えることを考えれば、転用材の使用は十分理解できる。

また、転用の理由には、作り変えや、長大な枠材を使用するために、材を作り出す労力を省くという理由以外に、枠材に使用できる資材の不足も考えられる。

なお、枠材の中には、火を受けて黒く硬化したものがあり、これは焼失した建物の材と考えた。このような不要になった板材を、いつ何があってもいいように溜めておく資材置場のような場所があったのかもしれない。そこから井戸などへ転用したと考えたい。

まとめ

本文では、まず、県内の井戸構造の変遷を概観し、他域の変遷と比べたところ、木組の出現が遅いこと、桶組の出現が中世ではなく近世であること、中近世では竹使用の井戸が多いことが分かった。
次に、構造選択の要因・立地と規模の関係・転用材の使用について考えた。これを井戸の構築順序に従ってまとめたい。

井戸を構築する手順としてはまず、立地・使用用途により適切な規模を決定する。その後、規模・土地の条件に合わせて構造を選択する。また、井戸壁に脆さがあれば、求める強度により適切な井戸の構造を選択する。

枠材は、他の井戸や建築材等の転用や新しく伐採することで調達する。材の調達後、仕口の加工や長さの調整を行う。

そして、構造にあわせた方法で井戸の掘削、枠材の組立てを行い、井戸が完成する。

ただ、井戸の構造を決定する要因と社会的背景、構築形式の伝播などについては、明らかに出来なかった。今後の課題としたい。

註

（1）　井戸構造については、日色四郎氏（日色　1967）や宇野隆夫氏（宇野　1982）、あるいは北陸中世考古学研究会による素材・素材の組み合わせ方に重点を置いた分類（北陸中世考古学研究会　2001）が一般的である。近年では、鐘方正樹氏による枠の据え方に重点をおいた分類が提示されている（鐘方　2003）。

そして、全国を対象とした井戸構造の変遷については、宇野隆夫氏により基礎が、近年では岩本正二氏（北陸中世考古学研究会　2001）により変遷の概要が提示されている。

（2）　井戸の開口部は、井戸の埋没過程で崩れ、変化する可能性があるため、ここでは、地形と開口部径の一般的傾向を求めるに留めた。

（3）　埼玉県内の地域区分については、第322図の１～９を北部、10～15を中部、16を南部とした。

（4）　岡部町熊野遺跡（鳥羽・平田　1997)）では７世紀の石組井戸がみられるが、古代を通じて連続せず、石組井戸が井戸の型式として連続するのは、15世紀以降である。

（5）　遺跡の立地条件によって、地下に埋設された井戸枠は残存率が異なる。つまり、常時水位の変化によって木質が腐朽してしまう場合があるので、井戸枠の有無を論じるのは難しいが、ここでは一般的傾向として、素掘り井戸が多いことを指摘しておきたい。

（6）　平城京では井戸の構造の使い分けがあったとされる（黒崎　1976）。

3．上川上村水路構造物遺構について

[redacted]

[redacted]

[redacted]

[redacted]

参考文献

青木和夫　1974『古代豪族』日本の歴史５　小学館
赤熊浩一　1988『将軍塚・古井戸－古墳・歴史時代Ⅱ－』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
秋田城跡調査事務所　2000『秋田城出土文字資料集』Ⅲ
浅香年木　1971『日本古代手工業史の研究』塙書房
浅野晴樹　1988『北島遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
穴水町教育委員会　1987「西川島－能登における中世村落の調査－」
阿部　猛　1979「広がる都と地方の交易」『図説　日本文化の歴史』４平安　小学館
阿部正行他　1980『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』（財）福島県文化センター
新井端・森田安彦　1993『千代遺跡群』江南町教育委員会
荒井秀規　2003「鬼の墨書土器」『帝京大学山梨文化財研究所報』第47号　帝京大学山梨文化財研究所
荒木志伸　1988「墨書土器からみた郡家遺跡－その成立、展開と変容－」『史学研究集録』23
飯塚武司　1994「古代多摩丘陵の木工生産」『研究論集』ⅩⅢ　東京都埋蔵文化財センター
飯塚武司　1996「関東・甲信の木製容器の推移と生産」『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』埋蔵文化財研究集会
飯塚武司　1999「東日本における古墳集団出現期の木工集団（上）・（下）」『古代文化』第51巻第５・６号　古代学協会
生田周治　1988「調布市下石原遺跡で発見された古代の井戸について」『東京考古』６　東京考古談話会
（社）石川県埋蔵文化財保存協会　1998『古代北陸と出土文字資料』
石川智紀・高橋洋一・会田哲郎　2001『新保遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
石塚和則　1997『宮地遺跡（第５次調査）』狭山市教育委員会
石母田正　1970『日本の古代国家』岩波書店
磯崎　一　1989『新田裏・明戸東・原遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
市田弘昭　1985「王朝国家期の地方支配と荘園整理令」『日本歴史』445号　吉川弘文館
市　大樹　1996「律令交通体系における駅路と伝路」『史学雑誌』105－３
泉谷康夫　1972『律令制度崩壊過程の研究』鳴鳳社
伊藤　晃　1995「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会
稲田健一　2003『ぼんぼり山遺跡・狢谷津遺跡』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
井西貴子・広瀬雅信　1992『萱振遺跡』大阪府教育委員会
井上喜久夫他　1998『日本の三彩と緑釉陶器』五島美術館・愛知県立陶磁資料館
井上尚明　1986『将軍塚・古井戸－古墳・歴史時代Ⅰ－』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上尚明　1989「古代集落遺跡の再検討」『研究紀要』第５号　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上尚明　1991「郷家に関する一私論」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上尚明　1994「コップ形須恵器の考察－奈良時代の計量器について－」『考古学雑誌』第79巻第４号　日本考古学会
井上満郎　1968「押領使の研究」『日本史研究』101号　日本史研究会
（財）茨城県教育財団奈良・平安時代研究班　1995～98「茨城県域における施釉陶器の検討（１）～（４）」『研究ノート』第４～７号（財）茨城県教育財団
岩崎しのぶ・望月由佳子　1996『瀬名遺跡Ⅴ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
岩本正二　2001「中世の井戸」『中世北陸の井戸』北陸中世土器研究会
植木　久　1998「発掘遺構からみた倉庫建築の構造とその変遷－飛鳥・奈良時代を中心に－」『古代の稲倉と村落、郷土の支配』奈良国立文化財研究所
上田正昭編　1975『日本古代文化の探求－文字－』社会思想社
宇野隆夫　1982「井戸考」『史林』第65巻第５号　京都大学史学研究会
宇野隆夫　1990「北陸古代手工業生産の成立と変容－日本手工業史における意義をめぐって－」『日本史研究』330号　日本史研究会
宇野隆夫　1996「北陸における律令制的生産システム」『官営工房研究会会報』４
馬橋泰男　1993『足洗遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
大石直正　1973「平安時代の郡郷の収納所・検田所について」『日本古代・中世史の地方的展開』吉川弘文館
大谷　徹　1990『北島遺跡Ⅲ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
大野康男　1991『白幡前遺跡』（財）千葉県文化財センター
大町　健　1986『日本古代の国家と在地首長制』校倉書房
大熊道則・渠岡潤　1997『築道下遺跡Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
岡崎市教育委員会　1983「矢作川河床遺跡出土品展」
岡本武憲　1989「近江出土の墨書土器について」『紀要』３　滋賀県埋蔵文化財センター
荻　能幸　1994「兵庫県落池遺跡」『季刊考古学』第46号　雄山閣

小口雅史・吉田孝　1991「律令国家と荘園」『講座　日本荘園史』２－荘園の成立と領有－　吉川弘文館
小都　隆　1977「草戸千軒町遺跡の井戸Ⅱ－製作方法を中心として－」『草戸千軒』第49号　草戸千軒町遺跡調査研究所
小都　隆　1979「草戸千軒の井戸」『考古学研究』第26巻第３号　考古学研究会
笠倉義邦　1997「第４巻　墨書・刻書資料」「南鍛冶山遺跡発掘調査報告書」藤沢市教育委員会
加藤友康　1995「初期荘園」『岩波講座　日本通史』第５巻古代４　岩波書店
加藤友康　1998「国府・国分寺と交通路」『国府　国分寺　武蔵路』武蔵国シンポジュウム実行委員会
加藤恭朗　1988『附島遺跡Ⅲ』坂戸市教育委員会
鐘方正樹　2003『井戸の考古学』ものが語る歴史８　同成社
金子章裕　1985『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂
神谷佳明　1998「下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について」『下東西清水上遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
神谷佳明　1999「出土施釉陶器について」『下芝五反田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
神谷佳明　1999「施釉陶器について」『上西原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
神谷佳明　2001「緑釉陶器にみる古代上野国」『研究紀要』19（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
亀田隆之　1973『日本古代用水史の研究』吉川弘文館
河内祥輔　1984「勅旨田について」『日本政治社会史研究』上田直鎮先生還暦記念会　吉川弘文館
河野一也・真理子　2001『古代東国出土の施釉陶器』窯業史博物館
岸本道昭　1992「古代山陽道と布勢駅家－礎石瓦葺駅館院」『古代交通研究』創刊号　古代交通研究会
北野博司　1993『戸水Ｃ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
北野博司　1996「初期荘園と土地開発」『研究報告』第７集　帝京大学山梨文化財研究所
木津町教育委員会　1980『上津遺跡』
鬼頭清明　1979『律令国家と農民』塙書房
鬼頭清明　1995「古代のおける津の都市的様相」『研究報告』第63集　国立歴史民俗博物館
鬼頭清明　1995『日本古代国家の展開』思文閣出版
木戸春夫　1999『金井遺跡Ｂ区Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
木下正史　2003『藤原京』中央公論新社
木本雅弘　1992「宝亀２年以前の東山道武蔵路について」『古代交通研究』創刊号
國平健三・服部実喜　1986「南武蔵南部・相模国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号　神奈川考古同人会
熊田清彦　1990「塚越遺跡と墨書土器」『峰考古』第８号　宇都宮考古学研究会
熊本市　1996『新熊本市史』史料編１考古資料
栗田則久　1993「古代村落と墨書土器」『月刊文化財』362号　第一法規株式会社
栗原和彦　1977「湯納遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会
黒崎　直　1976「平城宮の井戸」『月刊文化財』第151号　第一法規株式会社
黒崎　直　1997「掘立塀と築地塀－藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって－」『立命館大学考古学論集』Ⅰ
黒済和彦　1999『前田宇六反畑第１遺跡』鳩ヶ谷市教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999「－人々の生活と井戸－」『遺跡に学ぶ』第12号　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
劔持和夫　1992『ウツギ内・砂田・柳町遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
劔持和夫　1999『築道下遺跡Ⅲ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
郷堀英司　2003「東国集落と墨書土器」『古代官衙・集落と墨書土器』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
国士舘大学考古学研究室　1970『仮屋上遺跡』
小西昌志　1993『金沢市上荒屋遺跡－東大寺領横江荘推定地－』２　奈良・平安時代（１）
小林　茂　1982「古代の吉田」『吉田町史』吉田町
小松市教育委員会　2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
駒見和夫　1993「井戸をめぐる祭祀－地域的事例の検討から－」『考古学雑誌』第77巻４号　日本考古学会
小西昌志　2003「北陸庄園と墨書土器－横江庄の調査成果から－」『古代官衙・集落と墨書土器』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
小宮恒雄　1995『古梅谷遺跡』横浜市教育委員会
小宮俊久　2002「上（毛）野国の古代交通網と官衙」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
斎藤孝正　1982「猿投窯における灰釉陶器の変遷」『考古学ジャーナル』第211号　ニュー・サイエンス社
斎藤孝正　1987「施釉陶器年代論」『論争・学説　日本の考古学』６歴史時代　雄山閣出版
斉藤利男　1987「古代・中世の交通と国家」『日本の社会史』第２巻－境界領域と交通－　岩波書店
斉藤稔・関口陽子　2002『北権現遺跡１・２次調査発掘調査報告書』鶴ヶ島市教育委員会
斉木秀雄　1997「中世の木製品・漆製品」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第８集　帝京大学山梨文化財研究所
酒井清治　1993「武蔵国内の東山道について－とくに古代遺跡との関連から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　国立歴史民

俗博物館
坂井秀弥　1994「庁と館、集落と屋敷－東国古代遺跡にみる館の形成－」『城と館を掘る・読む－古代から中世へ－』山川出版社
栄原永遠男　1992『奈良時代流通経済史の研究』塙書房
佐々木虔一　1984「律令駅伝制の再検討」『律令制と古代社会』上巻　東京堂
桜岡正信　1987「古墳時代（中期）～奈良・平安時代の遺物」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』1（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
桜岡正信　1989「群馬県内出土の暗文土師器について」『群馬県史研究』第30号　群馬県史編さん室
佐々木義則　2003「古代常陸の食」『婆良岐考古』25号　婆良岐考古同人
佐藤興治編　1981『平城京発掘調査報告Ⅹ』奈良国立文化財研究所
佐藤宗諄　1997『平安時代前期政治史序説』東京大学出版会
佐原　真　2001「大工道具の日本化」『先史時代の生活と文化』国立歴史民俗博物館
沢村仁・森郁夫編　1978『平城京発掘調査報告Ⅸ』奈良国立文化財研究所
清水みき　1987「墨書土器の機能について－都城（長岡京）の墨書土器を中心に－」『研究紀要』2　向日市文化資料館
清水みき　1991「食料供給官司名を記す墨書土器に関する一考察」『京都考古』59
清水みき・山中章　1993「長岡京跡の墨書土器」『月刊文化財』362号　文化庁
寺社下博　2002『北島遺跡』熊谷市教育委員会
七田忠昭他　1993『吉野ケ里―神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』佐賀県教育委員会
篠崎　潔　1990・91・92『侯樹原・檜下遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』奈良・平安時代編1・2・3　侯樹原・檜下遺跡調査会
正倉院事務所　1978『正倉院の木工』日本経済新聞社
佐藤　信編　2002『日本の時代史』4－律令国家と天平文化－　吉川弘文館
鈴木孝之　1989「北島遺跡において検出された井戸跡について」『北島遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之　1990「古代～中近世の井戸跡について（1）」『研究紀要』第7号　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之　1991「石組みの井戸跡について－古代～中近世の井戸跡について（2）」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之　1997『北島遺跡Ⅳ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木正貴　1991「清洲城下町遺跡出土の井戸桶に関する考察」『年報』昭和63年度　（財）愛知県埋蔵文化財センター
鈴木三男・能城修一　1999「池子遺跡群出土の木製品および自然木の樹種」『池子遺跡群Ⅹ』（財）かながわ考古学財団
鈴木靖民　2003「古代地域社会像の復元に向けて」『古代武蔵国を考える』古代武蔵国研究会
鈴木靖民　2003「高座郡家の世界－郡家の成立と郡家域の景観－」（財）かながわ考古学財団
須藤　護　1991「木地屋の軌跡」『考古学ジャーナル』第355号　ニューサイエンス社
須原祥二　1996「八世紀の郡司制度と在地」『史学雑誌』第105巻7号
千田剛道編　1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
高島英之　1998「古代集落と稲倉－関東地方の遺跡を中心に－」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
高島英之　2000『古代文字史料の研究』東京堂出版
高橋　敦　1996「群馬県から出土した鍬・鋤の用材」『群馬考古学手帳』6　群馬県土器観会
高橋一夫　1983「草加市の遺跡（1）」『草加市史研究』2号　草加市史編纂委員会
高橋一夫　1979「計画村落について」『古代を考える』20－東国集落遺跡の研究－　古代を考える会
高橋　誠　1993・95『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅱ・Ⅲ』（財）印旛郡市文化財センター
高橋千晶・佐々木千鶴子　1997『水沢遺跡群範囲確認調査平成8年度発掘調査概報』水沢市教育委員会
高橋照彦　1994「東国の施釉陶器」『古代の土器研究』3　古代の土器研究会
高橋美久二　1995『古代交通の考古地理』大明堂
高橋美久二　1997「律令制支配と交通体系の整備」『交易と交通』考古学による日本歴史
田口昭二　1982「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』第211号　ニューサイエンス社
舘野和己　1998『日本古代の交通と社会』塙書房
舘野和己　1991「平城京出土の武蔵の荷札木簡－長屋王家と二条大路－」『新編　埼玉県史だより』別編4
田中　信　2000「東山道武蔵路の駅家」『埼玉の遺跡』さきたま出版会
田中哲雄編　1986『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所
田中広明　1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向－群馬・埼玉を中心として－」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会
田中広明　1995「関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会」『研究紀要』第11号　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明・末木啓介　1997　『中堀遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明　2000「緑釉陶器の流通と武蔵国北部の古代社会」『埼玉考古』35号　埼玉考古学会
田中広明　2002『北島遺跡Ⅴ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中琢・佐原真編　1976『平城京発掘調査報告　Ⅶ』奈良国立文化財研究所

玉口時雄　1987「墨書土器」『季刊考古学』18－考古学と出土文字－　雄山閣出版
谷旬・郷堀英司・小林信一　1993「生産遺跡の研究　3　－須恵器－」『研究紀要』第14号　（財）千葉県文化財センター
谷口　榮他　1989『本郷遺跡Ⅱ』葛飾区遺跡調査会
千葉敏朗　1999『下宅部遺跡－1998年度発掘調査概報－』東村山市遺跡調査会
（財）千葉県文化財センター　1999『今古代史がおもしろい－出土文字から探る房総の古代－』
津野　仁　1993「地方官衙の墨書土器」『月刊文化財』362号　文化庁
坪田幹夫　1987『東部遺跡群Ⅶ』大井町教育委員会
東国土器研究会　1990「黒色土器－展開と終焉」『東国土器研究』第3号
遠野市教育委員会　1992『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』
戸田芳実　1975「九世紀東国荘園とその交通形態－上総国藻原荘をめぐって－」『政治経済史学』110号　日本経済史学研究所
富田和夫　1991『稲荷前遺跡A区』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫　1994『稲荷前遺跡（B・C区）』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫　2000『大寄遺跡Ⅰ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫　2001『熊野遺跡（A・C・D区）』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鳥越浩・中島俊一・湯尻修正　1988『白江梯川遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
鳥羽正之・平田重之　1978『熊野遺跡発掘調査概要報告書』岡部町遺跡調査会
直木孝次郎　1965「古代国家と村落－計画村落の視角から－」『ヒストリア』第42号　大阪歴史学会
中井　均　1991「木製農工具」『考古学ジャーナル』第355号　ニューサイエンス社
中島哲郎　1985『国指定史跡薩摩国分寺跡環境整備事業報告書』鹿児島県教育委員会
中島広顕　1997「武蔵国豊島郡と豊島駅」『古代交通研究』第7号
中島　宏他　1984『池守・池上』埼玉県教育委員会
（財）長野県埋蔵文化財センター　1999『春山遺跡・春山B遺跡』
永田英明　1996「律令国家の駅制運用」『史学雑誌』105－3
永原慶二・山口啓二　1983『講座・日本技術の社会史』第7巻－建築－　日本評論社
永原慶二・山口啓二　1984『講座・日本技術の社会史』第6巻－土木－　日本評論社
中村倉司　1988『小山ノ上遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中村倉司　1989『北島遺跡Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中村太一　1996『古代国家と計画道路』吉川弘文館
中村太一　1998「武蔵国の道と役所」『国府　国分寺　武蔵路』武蔵国シンポジュウム実行委員会
中村太一　2000『日本の古代道路を探す』平凡社
仲山英樹　1995「墨書土器と集落遺跡」『歴史評論』第538号　歴史科学協議会編　校倉書房
仲山英樹　1995・96「墨書土器研究の視点（上）・（下）」『太平臺史窓』13・14
中山正典・中鉢賢治　1994『瀬名遺跡Ⅲ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
並木　隆　1998「東の上遺跡」『武蔵国シンポジウム　国府　国分寺　武蔵路』
奈良国立文化財研究所　1983『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ
奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所　1993『西隆寺発掘調査報告書』
奈良国立文化財研究所　1995『山田寺出土建築部材集成』
奈良国立文化財研究所　1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
楢崎彰一　1969「瓷器の道（一）－信濃における灰釉陶器の分布－」『名古屋大学文学部20周年記念論集』名古屋大学
贄　元洋　1996「二川窯における緑釉陶器生産の展開」『三河考古』第9号　三河考古学談話会
西川制・斎藤稔　1981『脚折遺跡群発掘調査報告書』鶴ヶ島町教育委員会
西口正純　1986『鍛冶谷・新田口遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
西口正純　1994『矢島南遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
西本安秀他　1996『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書－南吹田下水処理場増設に伴う発掘調査報告書－』吹田市教育委員会
西山良平　1982「「郡雑任」の機能と性格」『日本史研究』234号　日本史研究会
根本　靖　2001「武蔵路の通る集落－所沢市東の上遺跡－」『多摩のあゆみ』第103号
根本　靖　2002a「所沢市東の上遺跡の性格について」『埼玉考古』第37号
根本　靖　2002b「東山道武蔵路と交通施設」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
野口雅美　1999「道場Ⅰ遺跡出土の井戸祭祀に関わる遺物」『紀要－富山考古学研究－』第2号（財）富山県文化振興財団
羽咋市教育委員会　1990『四柳白山下遺跡』Ⅰ
白田正子　2001『中原遺跡』（財）茨城県教育財団
長谷川厚　1985「古代東国における土器生産」『古代探叢』Ⅱ　早稲田大学考古学会

長谷川厚　1996「古代前半期における関東地方の煮炊具の様相」『古代土器研究』－律令的土器様式の西・東－4　煮炊具　古代の土器研究会
長谷川厚　1999『池子遺跡Ⅷ』かながわ考古学財団
畑中英二　1995『日置前遺跡Ⅰ』滋賀県教育委員会
馬場　基　1997「駅制の基本的性格と成立について」『古代交通研究』第7号
濱修・中川正人・芝池信幸・田井中洋介・阿刀弘史他　1998『赤野井湾遺跡』（財）滋賀県文化財保護協会
浜松市博物館　2002『伊場遺跡遺物編8』木製品Ⅱ・金属器・骨角器　浜松市教育委員会
早川　泉　1998「武蔵路」『国府　国分寺　武蔵路』武蔵国シンポジュウム実行委員会
原　明芳　1988「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『紀要』2　（財）長野県埋蔵文化財センター
原　明芳　1994「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究』3　古代の土器研究会
原　明芳　1996「信濃における奈良・平安時代の集落展開」『研究報告』第7集　帝京大学山梨文化財研究所
原島礼二　1978『東松山市と周辺の古代』東松山市史編さん委員会
原秀三郎　1983「坂尻遺跡第3次調査出土の土器墨書について」『昭和57年度一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報』袋井市教育委員会
原秀三郎　1988「土器に書かれた文字－土器墨書－」『日本の古代』14　中央公論社
日色四郎　1967『日本上代井の研究』日色先生遺稿出版会
平川　南　1988「石川県徳久・荒屋遺跡出土墨書土器」『辰口西部遺跡群』Ⅰ石川県立埋蔵文化財センター
平川　南　1995『律令国家の地方支配』
平川　南　2000『墨書土器の研究』
平野　修　1990『大原遺跡発掘調査概報』一宮町教育委員会
平野　修　1996「古代仏教と土地開発」『研究報告』第7集　帝京大学山梨文化財研究所
平野　卓　1994「日本古代の駅家－文献史学から－」『古代交通研究』第3号　古代交通研究会
昼間孝志　1989『金井遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
昼間孝志　1998『新屋敷遺跡D区』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田　聖　1993『大沼遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田　聖　2001『大寄遺跡Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田健司　1978「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻3号　日本考古学会
福田健司　1996「多摩川中流域における沖積地の開発」『研究報告』第7集　帝京大学山梨文化財研究所
福田健司　1996『落川遺跡』日野市落川遺跡調査会
福田敏一　1999『東京都埋蔵文化財センター調査報告』64－多摩ニュータウン遺跡No107遺跡・古代編－　東京都埋蔵文化財センター
藤井一二　1986『初期庄園史の研究』塙書房
藤岡孝司　1996「古代東国村落の構造」『古代』第101号　早稲田大学考古学会
藤田有宣　1984『道伝遺跡発掘調査報告書』川西町教育委員会
北陸中世考古学研究会　2001『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
北陸中世土器研究会　1995『中世北陸の木製容品』北陸中世土器研究会
保立道久　1979「律令制支配と都鄙交通」『歴史学研究』468号　歴史学研究会
保立道久　1988「古代末期の東国と留住貴族」『中世東国史の研究』東京大学出版会
穂積裕昌　1991「高賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』3　三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌　2001「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について－三重県内の木器出土遺跡からの素描－」『研究紀要』第9号　三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌　2002『六大A遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会
穂積裕昌・宮本長二郎・金原正明・金原正子　2003『六大A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
堀沢祐一　1997『富山市考古資料館館報』32「富山市の古代文字－富山市内遺跡出土墨書土器－」発掘速報展96　富山市考古資料館
本田秀生　2002『猫橋遺跡』石川県埋蔵文化財センター
前川　要　1989「平安時代における施釉陶器の様式論的研究（上・下）」『古代文化』第41巻8・10号　（財）古代学協会
桝渕規彰・新開基史　1996『池子遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団
松田　哲　2001『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』熊谷市教育委員会
松任市教育委員会・石川考古学研究会　1983『東大寺領横江庄遺跡』
松任市教育委員会　1996『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』
松村恵司　1983「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』国立奈良文化財研究所
町田　章編　1975『平城京発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所
町田　章編　1982『平城京発掘調査報告ＸⅠ』奈良国立文化財研究所
町田賢一　2003「木の家－柱根の樹種鑑定から建物を考える－」『紀要－富山考古学研究－』第6号　富山県文化振興財団

松井一明　1989「平安時代の灰釉陶器と山茶碗」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
三浦京子　1988「群馬県における平安時代後期の土器様相－灰釉陶器を中心にして－」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団
三浦純夫・久田正弘　1987『米光萬福寺遺跡』（財）石川県立埋蔵文化財センター
三浦ゆかり・本田秀生　1992『飯田町遺跡』（財）石川県立埋蔵文化財センター
水澤幸一　2002「北陸における中世後半期の井戸－水溜・石組側・桶－」『地域考古学の展開』村田文夫先生還暦記念論文集刊行会
三友国五郎　1959「関東地方の条里」『埼玉大学紀要』第８巻　埼玉大学
南　博史　1987「曲物の形態と用途」『文化史論叢』（下）　創元社
南　博史　1991「曲物研究と課題」『月刊考古学ジャーナル』第355号　ニューサイエンス社
峰沢巧輝　1989『中里遺跡』５　東北新幹線中里遺跡調査会
宮崎美和子　1992『御座ノ内遺跡』（財）香取郡市文化財センター
宮沢智一・小笠原好彦編　1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
宮瀧交二　1990『堂山下遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮瀧交二　2002「埼玉県における郡家研究の現状と課題」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会シンポジウム発表要旨　埼玉考古学会
宮原晋一　1988「石斧、鉄斧のどちらで加工したか－弥生時代の木製品に残る加工痕について－」『弥生文化の研究』10　雄山閣
三好町立歴史資料館編　1988『文様陶器の流れ』
向坂鋼二　1994『伊場遺跡遺物編』（６）浜松市教育委員会
村上由美子　1996「杵と臼の変遷について」『滋賀考古』15　滋賀考古学研究会
村上由美子　2002「木製榎の基礎的論考」『史林』第85巻第４号　京都大学史学研究会
村上好文　1985『平賀』平賀遺跡調査団
村田和弘　2000「発掘調査によって検出された四脚門の検討－平安京右京一条三坊九町検出の四脚門について－」『京都府埋蔵文化財情報』75号
村田六郎太他　1984『谷津遺跡』千葉市教育委員会
宮本敬一　1994「上総国分寺の成立」『東海道の国分寺－その成立と変遷－』市原市教育委員会
森　隆　1996「古代居宅建物に関する覚書」『土曜考古』第20号　土曜考古学研究会
森田　悌　1988『古代の武蔵』吉川弘文館
守山市教育委員会　1980『服部遺跡発掘調査概報』
八木勝行　1986『静岡県藤枝市郡遺跡発掘調査報告書Ⅲ』藤枝市教育委員会
八木勝行・磯部武男　1981『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』３－志太郡衙跡（御子ヶ谷遺跡・秋合遺跡）－　藤枝市教育委員会
安永真一　2001『上神主・茂原　茂原向原　北原東』（財）とちぎ生涯学習文化財団
梁木誠・深谷昇　2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
柳田敏司　1962「本県における条里制的開拓について」『埼玉史談』第９巻第１号　埼玉県郷土文化会
山口　充　1982『薮生田遺跡調査概報』福井県教育委員会
山崎信二編　1993『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所
山田昌久　2001「木製品の製作技術　木器－木を利用した人々の知恵－」『ものづくりの考古学－原始・古代の人々の知恵と工夫－』大田区立郷土博物館
山田昌久編　2003『考古資料大観』第８巻　小学館
山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
山中敏史・石毛彩子　1998「古代豪族の居宅と稲倉」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』国立奈良文化財研究所
山中敏史編　2003『古代の官衙遺跡』Ⅰ－遺構編－　独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
山中敏史　2003「郡衙による食器管理と供給」『古代官衙・集落と墨書土器』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
山本忠尚編　1985『平城京発掘調査報告ＸⅡ』奈良国立文化財研究所
山本　靖　1999『築道下遺跡Ⅳ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山口英男　1991「墨書土器と官衙遺跡」『藤沢市史研究』24　藤沢市文書館
山口博之　2003「遊佐荘大楯遺跡の成立」『研究紀要』創刊号　（財）山形県埋蔵文化財センター
横田賢次郎　1977「大宰府検出の井戸－特に形態分類を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』３　九州歴史資料館
吉田恵二　1980「猿投窯の姿器生産をめぐって」『考古学雑誌』第66巻第３号　日本考古学会
吉田恵二　1983「灰釉陶器の系譜」『土曜考古』第７号　土曜考古学研究会
吉田　孝　1965「律令時代の交易」『日本経済史体系』東京大学出版会
吉田　稔　1991『小敷田遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　稔　1996『築道下遺跡Ⅰ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉野　健　2003『前中西遺跡Ⅱ』熊谷市教育委員会

吉野　健　2001「諏訪木遺跡」熊谷市教育委員会
吉野　武　2000「市川橋遺跡－県道泉塩釜線関連調査報告書－」3　宮城県教育委員会
依田亮一　1998「神奈川県出土緑釉陶器の諸様相」『神奈川考古』34号　神奈川考古同人会
若林邦彦　2001「弥生～古墳時代における製作途上木器の出土傾向～鉄器普及との関連～」『大阪文化財研究』第20号　大阪文化財調査研究センター
脇田晴子　1969「日本中世商業発達史の研究」御茶の水書房
渡辺　昇　1983「集落ごとの木器保有形態」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
渡辺　一　1995「武蔵国の須恵器生産の各段階」『王朝の考古学』雄山閣出版
渡辺　一　1997「関東地方の土器生産－土器生産における二つの重層構造－」「古代の土師器生産と焼成遺構」窯跡研究会
渡辺　一他　1989～92『鳩山窯跡群Ⅰ～Ⅳ』鳩山窯跡群遺跡調査会
渡辺　誠　1991「木製品の民具学的研究」『考古学ジャーナル』第355号　ニューサイエンス社
綿貫邦夫・神谷佳明・桜岡正信1992「群馬県における灰釉陶器の様相について（1）」『研究紀要』第9号　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

附編

北島遺跡では、弥生時代から近世までの様々な遺構や遺物が発見され、埼玉県北部の中核的な遺跡であることが明らかとなった。とくに本編では、古代の集落について明らかにしてきたが、なかでも建物を構成する柱や壁・床材などが、柱穴や井戸枠として転用され残っていた。

そこでこれらの建築部材について、どのような樹種が用いられたのかを明らかにし、あわせて遺跡周辺の古環境との比較から、建築部材を調達した地域の特定や伐採から運搬・建築に至るプロセスを復元することを目的とする。

また、井戸跡や大形の土壙から出土した柄杓・紡錘車などの木製品について樹種同定を行い、これらの木製品についても遺跡周辺の古環境との比較をすることで製品の移動や樹種による選択等を復元したい。

さらに、山吹双鳥鏡を出土した中世の第1号墓から出土した歯、および平安時代の土壙墓から出土した歯について、年齢や性別・体格などを明らかにした。被葬者の情報を蓄積することで、鏡や刀を副葬した人物の姿に積極的に迫りたい。

これらの自然科学分析の成果は、北島遺跡の古代から中世にかけての自然環境や社会を復元する材料として、大きな役割を果たした。

なお、例言でも示したが、自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、（1）の建築材及び井戸枠材は、高橋敦、（2）の人骨及び歯は、金子浩昌が分析を行った。

また弥生時代・古墳時代前期の人骨・獣骨・木製品の樹種同定等の成果については、別編に収録した。

第117表　樹種同定一覧

番号	本文挿図番号	遺構	時期	種類	器種	部位	樹種
1	第96図4	第42号井戸跡	古代	井戸枠	井戸枠材	−	エノキ属
2	第97図3	第42号井戸跡	古代	井戸枠	井戸枠材	−	エノキ属
3	第97図4	第42号井戸跡	古代	井戸枠	井戸枠材	−	エノキ属
4	第100図1	第42号井戸跡	古代	建築材	梁	−	エノキ属
5	第112図3	第85号井戸跡	古代	井戸枠	井戸枠材	−	スギ
6	第112図7	第85号井戸跡	古代	井戸枠	井戸枠材	−	ヤマグワ
7	第113図5	第85号井戸跡	古代	井戸枠	井戸枠材	−	ヤマグワ
8	第113図6	第85号井戸跡	古代	建築材	柱	−	キハダ
9	第121図8	第12号井戸跡	古代	建築材	扉	−	モミ属
10	第120図12	第85号井戸跡	古代	容器	曲物側板	−	ヒノキ属
11	第270図3	第42号井戸跡	古代	容器	曲物側板	−	ヒノキ属
12	第270図4	第42号井戸跡	古代	容器	曲物底板	−	スギ
13	第270図7	第42号井戸跡	古代	容器	曲物底板	−	ヒノキ
14	第270図9	第37号溝跡	古代	紡織具	糸巻き	−	ヒノキ
15	第271図6	第85号井戸跡	古代	家具	案	本体	ヒノキ
15	第271図6	第85号井戸跡	古代	家具	案	ホゾ内	ヒノキ
16	第287図14	第85号井戸跡	中世	容器	柄杓	側板	ヒノキ
16	第287図14	第85号井戸跡	中世	容器	柄杓	底板	ヒノキ
16	第287図14	第85号井戸跡	中世	容器	柄杓	柄	広葉樹（散孔材）

（1）建築材及び井戸枠材

はじめに

北島遺跡は、荒川左岸と利根川右岸に挟まれた沖積低地から微高地にかけて位置し、縄文時代晩期から近世にかけて長期的に営まれた大規模な集落である。地形的には、荒川が形成した新扇状地の扇端部付近に位置し、微高地は扇状地上に形成された自然堤防とされる（籠瀬 1990）。

北島遺跡では、これまで弥生時代中期を中心に花粉分析による古植生復元や樹種同定による木材利用状況の調査を行った（パリノ・サーヴェイ株式会社 1998・2003）。花粉分析の結果では、コナラ属、アカガシ亜属の木本花粉とともに、イネ科や水生植物の花粉化石の多い結果が得られている。

ここでは、古代の木製品についての樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得ることを目的とした。

1．試料

試料は、各遺構から出土した木製品16点（試料番号1－16）である。このうち、試料番号15は、案の部材であるが、枘穴内に差し込んだ別部材が残存していたため、本体と枘穴内からそれぞれ試料を採取した。試料番号16の柄杓は、曲物部分が側板・底板ともほぼ完形で残り、柄も装着された状態であったため、底板、側板、柄から試料を採取した。樹種同定結果と共に表（1）に記した。

2．分析方法

各試料の接合面または破損面を利用して、5㎜～10㎜角程度の木片を採取した。なお、試料番号16の側板と底板、試料番号15の本体、試料番号12・13の5点については、破損が少なく、木片を採取すると傷が目立つことから、製品から直接切片を作製した。

なお、試料番号16の側板については、木取りの関係から木口面の切片は作製できなかった。切片は水を入れたフィルムケースに保管した。

木片試料については、カミソリの刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の三断面の徒手切片を作製する。得られた切片はスライドガラス上に載せ、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

同定結果は、植物分類に従い、科・亜科・属・亜属・節・種で表示する。種は、組織的に種単位に分類できる種類と、日本に1種のみ自生し、過去に他種が自生したと考えられていない種類については「種」と同定する。

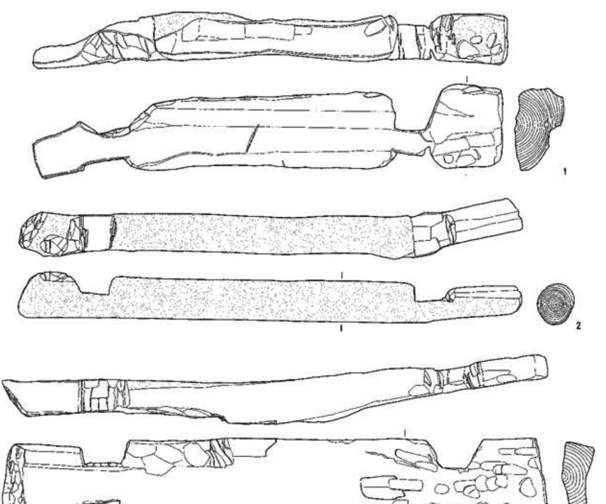
同じグループ内に複数種があり、木材組織から種類間の区別が困難な場合には、科・亜科・属・亜属・節のグループ名で同定する。この際、分類群や木材組織の特徴、保存状況により、同定できるグループの単位が異なる。

3．結果

樹種同定結果を表（1）に示す。試料番号16の柄については、小径の当年枝で年輪が観察できなかった。道管を有することから広葉樹であるが、種類の同定には至らなかった。　その他の試料は、針葉樹5種類（モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ属・カヤ）と広葉樹7種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・ムクノキ・エノキ属・ヤマグワ・キハダ・ヌルデ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）　　　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、数珠状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。



第327図　**木器分析試料（1）**

日本に生育するモミ属には、ウラジロモミ・トドマツ・モミ・シラビソ・オオシラビソの５種類がある。埼玉県内にはトドマツを除く４種類が生育するが、ウラジロモミ、オオシラビソ、シラビソの３種は奥秩父の山地に生育しており、平野部周辺ではモミ１種のみが生育する（高橋　1998a)。

・**スギ**（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

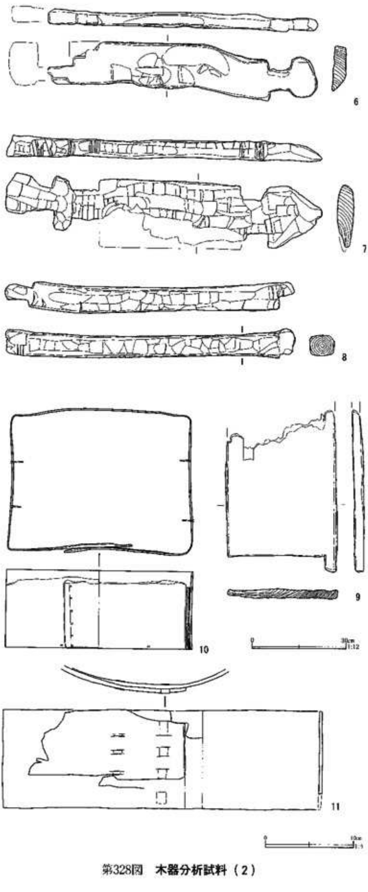
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・**ヒノキ**（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

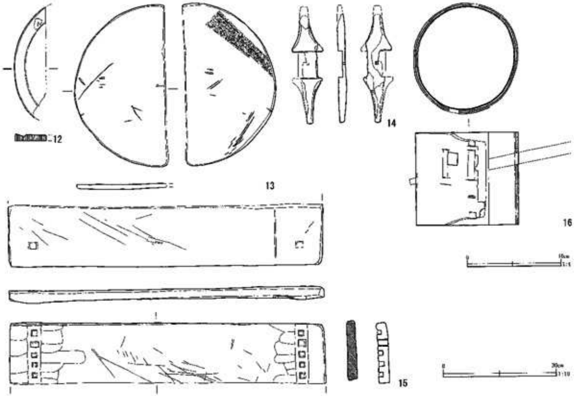
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は、緩やかからやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型からトウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・**ヒノキ属**（Chamaecyparis）　ヒノキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかからやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１－15細胞高。



第328図　**木器分析試料（２）**



第329図　**木器分析試料（3）**

今回の樹種同定結果を考慮すれば、上記ヒノキの可能性が高いが、分野壁孔が観察できなかったため、同属のサワラとの区別ができなかったため、ヒノキ属とした。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にかすかにらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型からヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・エノキ属（Celtis）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～10細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

エノキ属には、エゾエノキ・エノキ・コバノチョウセンエノキ・クワノハエノキの4種類がある。埼玉県内では、エノキが県内に広く生育するが、エゾエノキも山地を中心に生育している。

・ヤマグワ（Morus australis Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1～5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・キハダ（Phellodendron amurense Ruprecht）　ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は2～5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

4．考察

出土した木製品は、井戸枠・家具・建築材・容器・紡織具である。木製品の時期別・器種別種類構成を第118表に示す。

古代の木製品では、針葉樹5種類（モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ属・カヤ）、広葉樹4種類（エノキ属・ヤマグワ・キハダ・散孔材）が確認された。モミ属については、周辺の斜面地等に生育しており、周辺地域で入手可能な種類であったと考えられる。

カヤについても柱材に使用されていることから、同様に比較的周辺に生育していた種類を利用したことが推定される。なお、カヤは、耐水性や強度が高いことから、選択的に柱に利用した可能性がある。

一方、スギについては、植栽されたものは県内に広く見られるが、もともと自生していたかは不明である。また、ヒノキ属（ヒノキ・サワラ）も山地などに自生が見られるが、植林が広くみられ、本来の自生範囲などは不明である。

これらの木材がどのような場所から入手されていたのかは、現時点では不明である。いずれも大木になり、耐水性も高いことから、井戸枠、柱材、曲物類（柄杓・曲物側板・底板）への利用は、材質を考慮した木材利用と考えられる。なお、ヒノキについては、案と曲物類に集中しているため、製品が持ち込まれた可能性もある。

一方、広葉樹については、関東地方の低地や自然堤防上によく見られる種類であり、遺跡の地形的な立地条件を考慮すれば、これらの木材は、遺跡周辺に生育していた種類を利用したことが推定される。

本地域における木材利用については、時期別・用途別の利用傾向を把握するために、今後さらに資料を蓄積すると共に、木製品の形態、木取り、利用状況等も含めて木材利用を検討したい。

第118表　時期別・器種別種類構成

時期	種類	器種		モミ属	スギ	ヒノキ	ヒノキ属	カヤ	エノキ属	ヤマグワ	キハダ	散孔材	合計
古代	井戸枠	井戸枠材			1				3	2			6
	家具	机				2							2
	建築材	扉		1									1
		柱					1	1			1		3
		梁							1				1
		曲物	側板				2						2
			底板		1	1							2
	紡織具	糸巻き				1							1
中世	容器	柄杓	側板			1							1
			底板			1							1
			柄									1	1
合計				1	2	6	3	1	4	2	1	1	21

（2）出土人骨・歯

北島遺跡第19地点から出土した人骨・歯について、年齢・性別・体躯といった被葬者の情報を得ることを目的に自然科学分析を行った。

なお、弥生時代、古墳時代前期、古代、中世の遺構などから出土した人骨・歯12点、および動物遺体13点について自然科学分析を行ったが、ここでは、古代・中世の人骨・歯7点について掲載することとし、弥生時代・古墳時代前期の資料及び分析結果については、別編で報告を掲載することとする。

1．試料

試料は、古代・中世の人骨及び骨の7試料である。標本類は、20～30％メタノール溶液で保存していた。なお、試料の詳細は結果とともに表示する。

2．分析方法

試料を20～30％のメタノール溶液から取り出し、水洗して試料に付着した泥分を除去する。その後、標本を補強するために、4倍に希釈したバインダー17に漬け、自然乾燥させる。また、一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。これらの処理を施した後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。

第119表　骨同定結果

出土遺構	時期	試料番号	種類	分類群	左　右	部位	部分	数量	計測値	年齢性別	備考
第75号掘立柱建物跡掘方	古代	人骨1	ほ乳類	ヒト	右	大腿骨	骨体	1		成人女性	
第85号井戸跡	古代	人骨2	ほ乳類	ヒト	右	大腿骨	遠位端部	1		成人	
第249号土壙	古代	人骨3	ほ乳類	ヒト	左	上顎歯牙	C	1	別表記載	30歳前後男性	
					左	上顎歯牙	P1	1			
					左	上顎歯牙	P2	1			
					左	上顎歯牙	M1	1			
					左	上顎歯牙	M2	1			
					左	上顎歯牙	M3	1			
					左	上顎歯牙	P1	1		成人男性	
					左	上顎歯牙	M1	1			
					右	上顎歯牙	M1	1			
第1号墓	中世	人骨4	ほ乳類	ヒト		歯牙	臼歯片	2			
	中世	人骨5	ほ乳類	ヒト	右	上顎歯牙	C	1	別表記載	成人男性	
	中世	人骨6	ほ乳類	ヒト	右	上顎歯牙	I2	1	別表記載	成人男性	
	中世					歯牙	破片	3			
	中世	人骨7	ほ乳類	ヒト		歯牙	P片	6			

凡例）　I：切歯　C：犬歯　P：小臼歯　M：大臼歯（永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記）
B：幅　Bp：近位端幅　Bd：遠位端幅　Dd：遠位端前後径　BT：（上腕骨）滑車幅　GL：最大長
全て被熱は見られない

3．結果

今回、検出された分類群は、ヒトである。分類群は、脊椎動物門 Phylum Vertebrata 哺乳綱 Class Mammalia サル目（霊長目） Order Primates ヒト科 Family Hominidae ヒト Homo sapiens の一種である。

各試料の同定結果を第119表に示す。また、出土した人骨歯牙の計測値を第120表に示す。以下、各試料の結果を記載する。

人骨1

ヒトの右大腿骨骨体である。両骨端が欠損する。骨体短く、細く、後面のピラステルの発達が弱く華奢であることから、女性と考えられる。推定復元された大腿骨全長からみると、ピアソンを参考にすると推定体長が女性として145cmである。大腿骨の形質から成人と思われるが、この身長は低いと言える。西日本弥生人が150cm前後であるが、関東人であるので多少低いと思われる。

人骨2

ヒトの右大腿骨の破片である。遠位端が小片として確認される程度である。成人と判断されるが、詳細は不明である。

人骨3

ヒトの上顎歯牙である。左側の犬歯から第3大臼歯までが確認される。後臼歯の咬耗がエナメル質のみにとどまるが、第3後臼歯が萌出している。これらの状況および計測値から、30歳前後の男性と推定される。

また、これらと別個体とみられる、左第1小臼歯、左第1大臼歯、右第1大臼歯の破片がみられる。これらの臼歯の咬耗状態はほぼ類似する。破損しており、詳細が不明であるが、これらの臼歯も成人男性と見られるが、上記の歯牙と別個体と考えられる。

人骨4

ヒトの臼歯の断片2点確認されたのみである。

人骨5

ヒトの右上顎犬歯である。咬頭に摩滅痕をみる。計測値から、成人男性と推定される。

人骨6

ヒトの右上顎第二切歯である。計測値から、成人男性と推定される。

人骨7

第120表　出土人骨歯牙計測値

試料	部位	計測箇所	右								左							
人骨3	上顎歯牙		M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
		近遠心径	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	7.48	7.30	6.60	10.14	9.20	7.81
		頬舌径	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8.31	9.68	×	11.75	10.43	10.70
	上顎歯牙		M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
		近遠心径	−	−	11.24	−	−	−	−	−	−	−	−	×	−	×	−	−
		頬舌径	−	−	×	−	−	−	−	−	−	−	−	×	−	×	−	−
人骨5	上顎歯牙		M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
		近遠心径	−	−	−	−	−	8.44	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
		頬舌径	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
人骨6	上顎歯牙		M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
		近遠心径	−	−	−	−	−	−	7.77	−	−	−	−	−	−	−	−	−
		頬舌径	−	−	−	−	−	−	6.73	−	−	−	−	−	−	−	−	−

凡例)　I：切歯　C：犬歯　P：小臼歯　M：大臼歯（永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記）
○：未計測　×：計測不可　−：遊離／未萌出

ヒトの小臼歯の破片である。細片となっており、詳細不明である。

4.考察

古代に帰属する人骨の内、大腿骨は、いずれも成人とみられる。第75掘立柱建物跡で検出された大腿骨は、女性の特徴を示す。また、第249号土壙（人骨3）では、30歳前後の男性の歯牙が検出されたが、これと異なる歯牙も含まれていることから、複数個体の人骨が埋納されていると考えられる。

中世の第1号墓では、上顎の犬歯と第2切歯、および臼歯破片が検出されている。成人男性が埋葬されていたと考えられるが、いずれも破片であり、標本数も少ないことから、複数個体が埋納されていたか不明である。

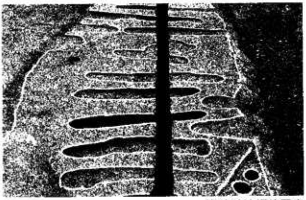
なお、以上の他にも破損した臼歯片があることから、埋葬された個体数が増えることも予想される。しかし、臼歯片の接合を試みたが、十分に接合ができず、部位を確認することができないため、詳細不明である。

引用文献

平井　信二　1979『木の事典』第2巻　かなえ書房.
籠瀬　良明　1990『自然堤防の諸類型－河岸平野と水害－』古今書院　202p.
奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録』近畿原始編　410p.
西本　豊弘・姉崎　智子　1999　「池子遺跡群の哺乳類遺体」『池子遺跡群X　No.1－A地点池子米軍家族住宅建設にともなう調査－』別編・自然科学分析編　財団法人かながわ考古学財団　287－296p.
パリノ・サーヴェイ株式会社　1998「北島遺跡の古環境変遷」『北島遺跡Ⅳ』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　485－503p.
パリノ・サーヴェイ株式会社　2003「北島遺跡から出土した木材の樹種同定分析について」『北島遺跡Ⅵ』　埼玉県・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　521－524p
島地　謙・伊東　隆夫（編）　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣　296p.
鈴木　三男・能城　修　・　1991「小敷田遺跡の木材化石群集」『小敷田遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　268－318p.

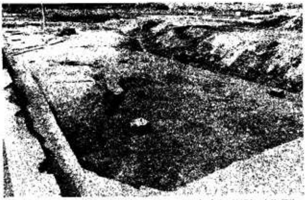
写 真 図 版

道路跡


道路跡波板状圧痕

南河川跡

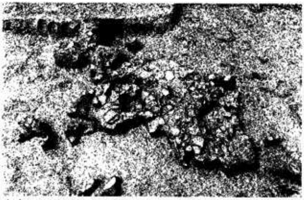
南河川跡土層断面


中央河川跡（北側）

中央河川跡土層断面

中央河川跡（南側）

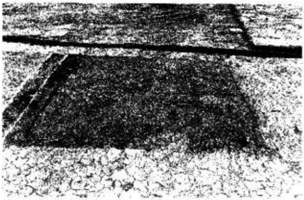
中央河川跡遺物出土状態（１）

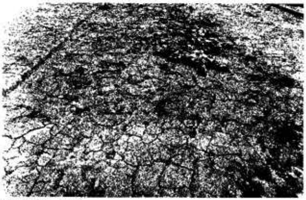

中央河川跡遺物出土状態（2）

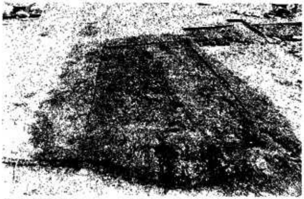
平瓶出土状態

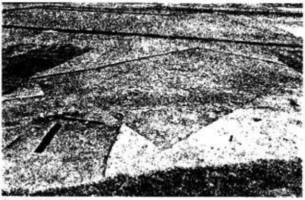
集石遺構（1）

集石遺構（2）


集石遺構（3）


集石遺構（4）


集石遺構（5）

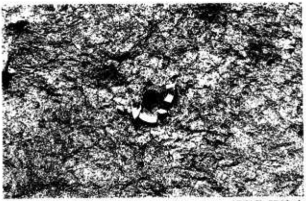

集石遺構（6）

集石遺構（7）

集石遺構（8）

集石遺構（9）

集石遺構（10）



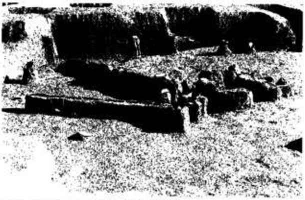
緑釉陶器稜埦

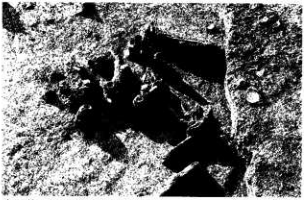
集石遺構（11）

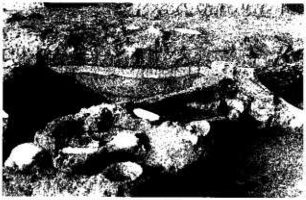
土器集中出土地点

土器集中出土地点堆積状況

土器集中出土地点出土状況（1）


土器集中出土地点出土状況（2）


土器集中出土地点出土状況（3）


土器集中出土地点出土状況（4）

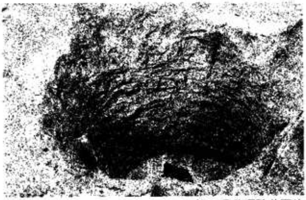
土器集中出土地点出土状況（5）

土器集中出土地点出土状況（6）

土器集中出土地点出土状況（7）

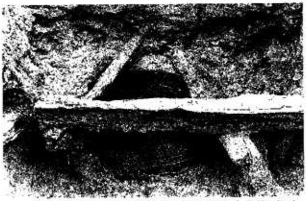
土器集中出土地点炭化物（8）

第12号井戸跡出土曲物



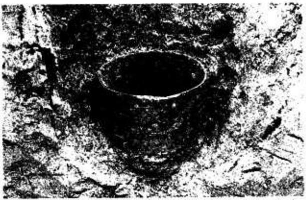
第18号井戸跡井戸枠

第20号井戸跡出土曲物（1）



第20号井戸跡出土曲物（2）

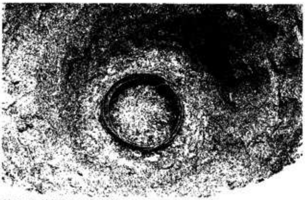
第20号井戸跡出土曲物（3）



第20号井戸跡出土曲物（4）

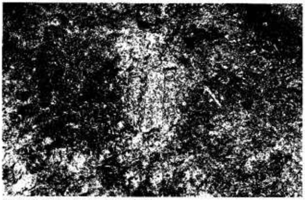
第20号井戸跡出土曲物（5）

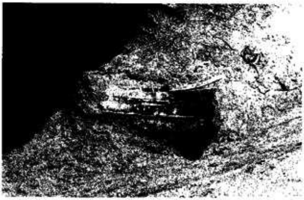
第21号井戸跡出土土器


第38号井戸跡出土曲物

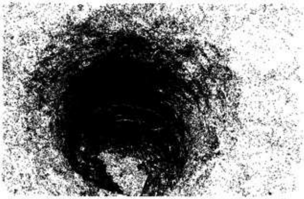
第42号井戸跡井戸枠

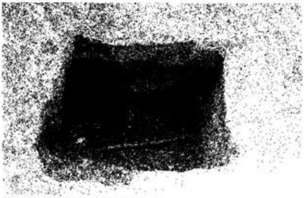
第42号井戸跡出土木簡（1）

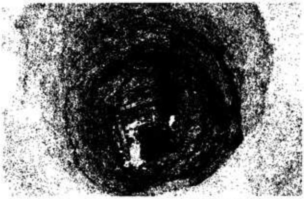

第42号井戸跡出土木簡（2）


第42号井戸跡出土曲物

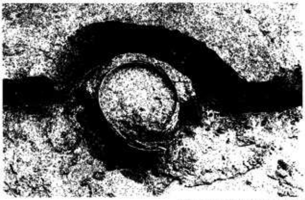
第42号井戸跡井戸枠

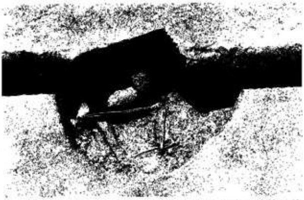

第45号井戸跡鹿角

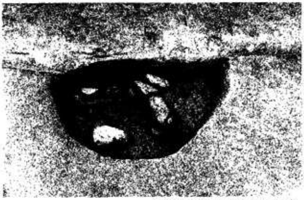

第55号井戸跡出土木製品


第60号井戸跡井戸枠

第61号井戸跡出土木器

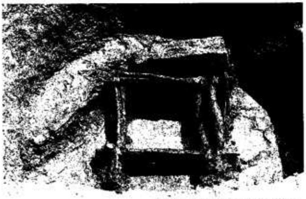

第80号井戸跡出土曲物


第85号井戸跡井戸枠

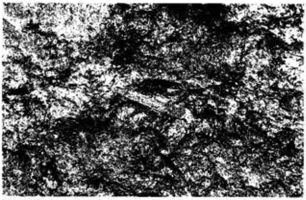

第85号井戸跡井戸枠（1）

第85号井戸跡井戸枠（2）

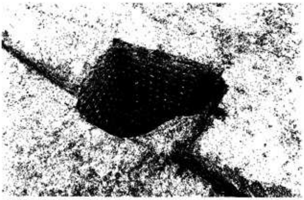
第85号井戸跡井戸枠（3）

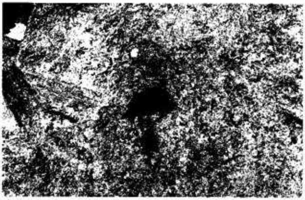

第85号井戸跡井戸枠（4）

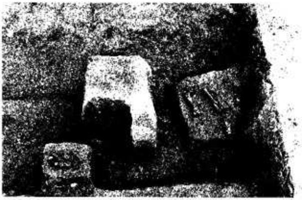
第87号井戸跡曲物

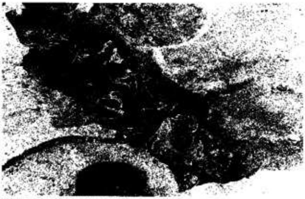

第160号土壙出土木札

山吹双鳥鏡出土状態


山吹双鳥鏡出土地点の分析調査


木製品と歯の出土状態


第87号溝獣骨出土状態


第239号溝獣骨出土状態

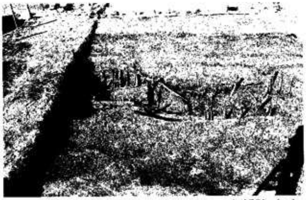
馬歯出土状態

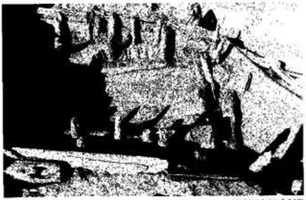
圦樋跡遺物出土状態（1）

圦樋跡遺物出土状態（2）

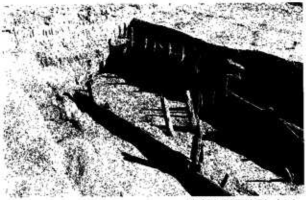
圦樋跡（1）

圦樋跡（2）

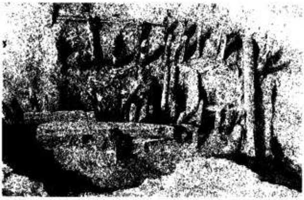

圦樋跡（3）


圦樋跡傾斜板

圦樋跡前面杭列（1）


圦樋跡前面杭列（2）

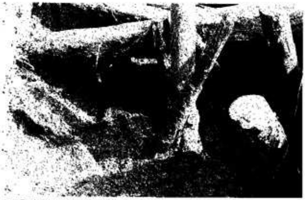
圦樋跡傾斜板撤去状態（1）



圦樋跡傾斜板撤去状態（2）

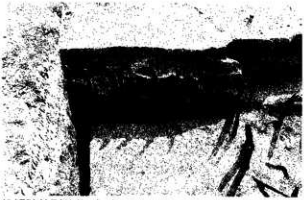
圦樋跡傾斜板撤去状態（3）

圦樋跡木組み状態



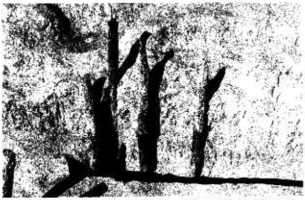
圦樋跡杭列状態（1）

圦樋跡杭列状態（2）



圦樋跡杭列状態（3）

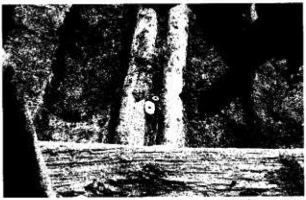
圦樋跡杭列状態（4）



圦樋跡杭列状態（5）

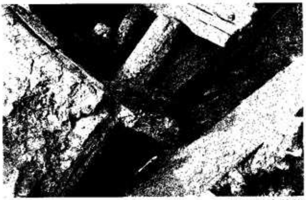
圦樋跡杭列状態（6）

圦樋跡杭列状態（7）



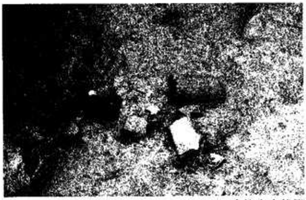
天保通寳出土状態

圦樋跡傾斜板支え板列



下駄出土状態

下駄出土状態



土管出土状態

V　第324図　7

V　第324図　10

V　第324図　15

V　第324図　16

V　第324図　21

V　第324図　22

V　第324図　24

V　第324図　25

V　第324図　39

V　第325図　7

V　第325図　17

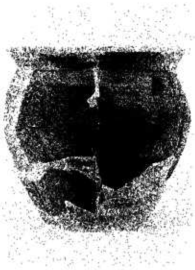
V　第325図　22

V　第325図　23

V　第325図　24

V　第325図　26

V　第325図　28


V　第326図　1

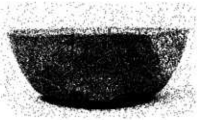
V　第325図　29

V　第326図　3

V　第326図　14

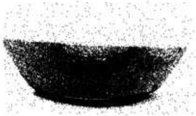
V　第326図　16

V　第326図　17


V　第326図　24

V　第326図　25

V　第327図　1


V　第327図　10

V　第327図　18

V　第327図　19

V　第327図　20

V　第327図　21

V　第327図　23

V　第327図　31

V　第328図　1

V　第328図　3

V　第328図　5

V　第328図　6

V　第328図　29

V　第328図　30

V　第329図　7

V　第329図　18

V　第329図　19

V　第329図　20

V　第329図　28

V　第329図　29

V　第329図　30

V　第329図　35

V　第329図　37

V　第330図　5

V　第330図　6

V　第330図　7

V　第330図　8

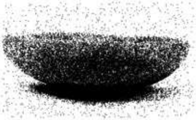
V　第330図　9

V　第330図　10

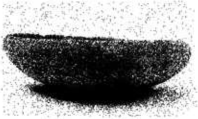
V　第330図　11

V　第330図　13

V　第330図　14

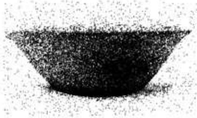

V　第330図　20

V　第330図　23

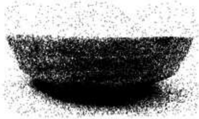

V　第330図　21

V　第330図　22

V　第331図　1


V　第331図　27

V　第332図　1


V　第332図　11

V　第331図　11

V　第332図　12

V　第332図　15

V　第332図　13

V　第332図　16

V　第332図　14

V　第332図　17

V　第333図　5

V　第332図　18

V　第332図　20

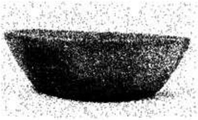
V　第333図　8

V　第333図　16

V　第333図　17

V　第333図　19

V　第333図　23


V　第333図　25

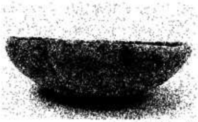
V　第333図　26

V　第334図　5

V　第334図　6

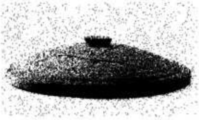
V　第334図　8

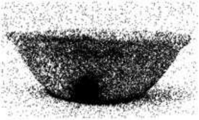
V　第334図　12


V　第334図　22

V　第334図　23

V　第334図　26


V　第335図　6



V　第335図　19

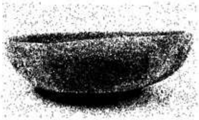
V　第335図　24

V　第335図　31

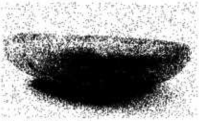
V　第336図　1

V　第335図　27

V　第336図　26



V　第337図　1



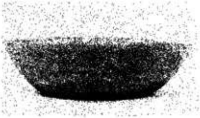
V　第337図　2

V　第337図　6

V　第337図　14

V　第337図　22

V　第337図　34

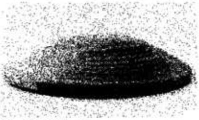


V　第338図　5

V　第338図　8

V　第338図　9

V　第338図　19



V　第338図　28